

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	佐近 優太
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 340 号
学位授与の日付	2023 年 1 月 11 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	コーパスに基づくインドネシア語の接頭辞 <i>ter-</i> の研究

Name	Sakon, Yuta
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no.340
Date	January 11,2023
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A corpus-based study of the prefix <i>ter-</i> in Indonesian

コーパスに基づくインドネシア語の接頭辞 ter-の研究

佐近優太

目次

1	序論	9
1.1	研究の目的と対象	9
1.2	本稿で使用するデータ	14
1.3	インドネシア語の形態統語論と本稿で用いる術語	15
1.3.1	態	15
1.3.2	語根・語基	16
1.3.3	自動詞・他動詞	16
1.4	本稿の構成	18
2	接頭辞 ter-の意味	20
2.1	完了	21
2.2	非意図	23
2.3	非意図と認識との相違	26
2.3.1	先行研究の問題点	26
2.3.2	調査	28
2.3.3	接頭辞 ter-受身文への適用	32
2.3.4	完了との関係	34
2.4	自発	37
2.5	可能	41
2.6	判断	47
2.6.1	判断用法の特徴	47
2.6.2	可能と判断の差異	48
2.7	第二章のまとめ	53
3	事象構造と接頭辞 ter-	55
3.1	はじめに	55
3.2	事象構造と行為連鎖モデル	55
3.3	ter-派生動詞の意味の関係	59
3.3.1	「なる」的表現	60
3.3.1.1	「なる」的表現の先行研究	60
3.3.1.2	「なる」的表現と接頭辞 ter-	61
3.3.2	意味表出のメカニズム	64
3.3.2.1	接頭辞 ter-のスキーマ	64
3.3.2.2	事象構造の合成から見た各意味の表出過程	66
3.3.2.3	複数の意味の表出と意味表出の制限	77
3.3.3	接頭辞 meN-と接頭辞 di-について	80

3.4	接頭辞 ter-と構造変化	82
3.5	接尾辞との関係	90
3.5.1	先行研究	90
3.5.1.1	接尾辞の機能と概略	90
3.5.1.2	接頭辞 ter-との関係	93
3.5.2	接尾辞の有無による意味表出の違い	94
3.6	3章のまとめと今後の課題	103
4	動作主の標示	107
4.1	はじめに	107
4.2	動詞の意味と動作主標示	109
4.2.1	調査方法	109
4.2.1.1	データ	109
4.2.1.2	動詞の意味	112
4.2.1.3	意味分類の手法	112
4.2.2	調査結果	118
4.2.3	考察	121
4.2.3.1	クラスター分析の解釈	121
4.2.3.2	動作主標示の選択要因	125
4.2.4	問題点	131
4.3	動詞の意味以外の要因の検討	131
4.3.1	調査方法	131
4.3.1.1	データ	131
4.3.1.2	要因	132
4.3.1.3	分析手法	134
4.3.2	調査結果	137
4.3.2.1	個々の要因の検討	137
4.3.2.2	ロジスティック回帰分析	140
4.3.2.3	個別要因について	143
4.4	4章のまとめと今後の課題	148
5	最上級用法について	152
5.1	はじめに	152
5.2	動詞を形成する接頭辞 ter-との関係	152
5.2.1	調査	153
5.2.1.1	通時コーパスにおける接頭辞 ter-の特徴	153
5.2.1.2	考察	156
5.3	接頭辞 ter-と paling の差異	161
5.3.1	先行研究	161

5.3.2	調査	163
5.3.3	考察	166
5.4	5章のまとめと今後の課題	172
6	結論	176
6.1	各章のまとめ	176
6.2	本研究の意義と今後の展望	179
	使用コード	182
	出典一覧	184
	謝辞	195

表目次

1.1	MALINCO Conc のデータサイズ (Shiohara, Sakon & Nomoto 2019: 82)	15
2.1	Sneddon et al. (2010: 118) による接頭辞 ter-+ 自動詞語基のリスト	28
2.2	ter-派生自動詞の頻度	29
2.3	状態変化の le のスキーマ表示	37
2.4	認識との相違の le のスキーマ表示	37
2.5	先行研究における感情・認識系動詞の扱い	38
2.6	実現系可能用法と判断用法が取り得る形式の違い	52
2.7	接頭辞 ter-の各意味とその性質	53
3.1	能動文を作る ter-派生動詞の容認度 (Nomoto & Kartini (2011: 124) を基に筆者が作成)	87
3.2	接尾辞-kan の機能と語基	91
3.3	接頭辞 ter-によって表出する意味の違いとその要因	104
4.1	接頭辞 ter-の動詞的用法の総数	110
4.2	接頭辞 ter-受身文における動作主標示の頻度	111
4.3	Collexeme analysis に用いる分布表	113
4.4	Distinct collexeme analysis に用いる分布表	113
4.5	Distinct collexeme analysis(Stefanowitsch & Gries (2009: 944-945) を基に筆者が作成)	114
4.6	oleh と結びつきやすい動詞	119
4.7	zero と結びつきやすい動詞	119
4.8	階層的クラスター分析に基づく動詞の分類	121
4.9	クラスターの意味的傾向	125
4.10	MALINDO Conc における tertutup の意味	129
4.11	動作主標示の説明変数	134
4.12	動作主標示と動作主の有生性の関係	137
4.13	動作主標示と動作対象の有生性の関係	138
4.14	動作主標示と動詞の持つ働きかけの関係	140
4.15	ロジスティック回帰分析の結果 1	141
4.16	ロジスティック回帰分析の結果 2	142
4.17	VIF 値 (多重共線性の確認)	143
4.18	動作主の有生性の動作主標示に対する影響の傾き (正の値)	144
4.19	動作主の有生性の動作主標示に対する影響の傾き (極端な正の値)	144
4.20	動作主の有生性の動作主標示に対する影響の傾き (負の値)	144
4.21	terancam における動作主名詞の種類	145
4.22	terbakar における動作主名詞の種類	145

4.23	terbawa における動作主名詞の種類	145
4.24	terikat における動作主名詞の種類	146
4.25	terjebak における動作主名詞の種類	146
4.26	tertangkap における動作主名詞の種類	148
4.27	terjangkau における動作主名詞の種類	148
4.28	Optional な形式の 4 分類 (McGregor 2013: 1159)	149
5.1	接頭辞 ter- の用法	154
5.2	MALINDO Conc と MPC における出現数	154
5.3	通時的な terbaik の使用法の推移	155
5.4	通時的な terbanyak の使用法の推移	155
5.5	通時的な terbesar の使用法の推移	156
5.6	paling の用法	162
5.7	接頭辞 ter- と paling の生産性	163
5.8	接頭辞 ter- と共起する形容詞 (表 5.2 から MCP の数を除いたもの)	164
5.9	paling と共起する形容詞	164
5.10	接頭辞 ter- と結びつきやすい語	165
5.11	paling と結びつきやすい語	166
5.12	接頭辞 ter- と結びつきやすい語と接頭辞 meN-	168
5.13	paling と結びつきやすい語と接頭辞 meN-	169
5.14	形容詞的用法と副詞的用法の頻度	171
5.15	英語の比較級形式選択におけるタグ付けの一例 (Hilpert 2008: 404)	174
6.1	接頭辞 ter- の各意味とその性質 (=表 2.7)	176

図目次

2.1	完了・認識との相違・非意図の体系	34
2.2	可能構文の分類 (志波 (2020: 97) を基に筆者が作成)	41
2.3	接頭辞 ter-の用法の体系	53
3.1	Semantic Structure	55
3.2	Phonological Structure	55
3.3	Symbolic Structure	55
3.4	Symbolic Assemblies (=Expression)	55
3.5	他動詞の事象構造	56
3.6	自動詞の事象構造	56
3.7	the book on the table の合成 (テイラー・瀬戸 (2008: 127) を基に筆者が作成)	57
3.8	throw 「投げる」の意味構造	58
3.9	(a) rock 「岩」の意味構造	58
3.10	into (the) pond 「池の中へ」の意味構造	58
3.11	throw (a) rock into (the) pond の意味構造の形成	59
3.12	接頭辞 ter-の事象構造	64
3.13	buka 「開ける」(左)と injak 「踏む」(右)の事象構造	65
3.14	ter-+buka の合成	66
3.15	ter-+injak の合成	66
3.16	接頭辞 ter-の用法の体系 (=図 2.3)	67
3.17	terbuka の合成 (例 (3-7))	68
3.18	terinjak の合成 (例 (3-8))	69
3.19	ter-+injak の合成 (明示的動作主あり)	71
3.20	terinjak の合成と潜在系可能への派生	73
3.21	知覚動詞の事象構造 (cf. 町田他 2022: 192)	74
3.22	「見る」の事象構造 (cf. 町田他 2022: 192)	74
3.23	「見える」の事象構造 (cf. 町田他 2022: 192)	74
3.24	terdengar の合成	75
3.25	terlihat の合成と判断への派生	76
3.26	terinjak の合成 (明示的動作主あり)(図 3.19 の再掲)	79
3.27	ter-+jatuh の合成	80
3.28	佐々木 (1982: 302) による接頭辞 ter-の事象構造	81
3.29	接頭辞 di-の事象構造	81
3.30	接頭辞 meN-の事象構造	82
3.31	能動文の事象構造	83
3.32	受身文の事象構造	83

3.33	tidur「寝る」の事象構造	84
3.34	tertudur の事象構造の合成 (構造変化が生じない場合)	84
3.35	(meN-)bawa「持っていく」の事象構造	85
3.36	terbawa の事象構造の合成 (構造変化が生じる場合)	85
3.37	予想される ter-+nonton の合成	88
3.38	実際の (能動文の場合の)ter-+nonton の合成 (例 (3-29))	89
3.39	hindar(左) と hindarkan(右) の事象構造	95
3.40	ter+hindar の合成 (例 (3-40))	96
3.41	terhindarkan の合成 (例 (3-41))	97
3.42	pikir(左) と pikirkan(右) の事象構造	99
3.43	ter+pikir の合成 (例 (3-46))	100
3.44	ter+pikirkan の合成 (例 (3-47))	101
4.1	二重目的語構文と to-dative における Distinct collexeme analysis(Stefanowitsch & Gries 2009: 45)	115
4.2	into-causative 構文における頻度上位動詞のデンドログラム (Gries & Stefanowitsch 2010: 84)	116
4.3	生徒の国語と英語の成績の分布 (吉原・平蔵 (2014: 11) を基に筆者が作成)	117
4.4	oleh と結びつく動詞のクラスター分析	120
4.5	zero と結びつく動詞のクラスター分析	120
4.6	線形モデル (個体差を考慮しないモデル) の例 (Gries 2015: 108)	135
4.7	一般化線形混合モデル (個体差を考慮するモデル) の例 (Gries 2015: 109)	136
4.8	動作主標示と動作主の有生性の関係	137
4.9	動作主標示と動作対象の有生性の関係	138
4.10	動作主標示と動作主及び動作対象の有生性の関係	139
4.11	動作主標示と動作主の語数の関係	139
4.12	動作主標示と動詞の持つ働きかけの関係	140
5.1	接頭辞 ter-の事象構造 (=図 3.12)	158
5.2	ter+besar の合成	159
5.3	形容詞の事象構造 (Langacker (2003: 14) を基に筆者が作成)	159
5.4	動詞の局面 (仲本 (1999: 89) を基に筆者が作成)	160
5.5	形容詞の局面 (仲本 (1999: 90) を基に筆者が作成)	160
5.6	「大きくなる」のイベントとその局面	160
6.1	接頭辞 ter-の用法の体系 (=図 2.3)	176
6.2	接頭辞 ter-の事象構造 (=図 3.12)	177

Abbreviations

1	first person	MEN	prefix <i>meN-</i>
2	second person	NEG	negative
3	third person	NMLZ	nominalizer
AGT	agentive	PL	plural
APPL	applicative	POSS	possessive
ART	article	PRF	perfect
ASP	aspect marker	PROG	progressive
AV	actor voice	PTC	particle
BEN	benefactive	PV	passive voice
CAUS	causative	Q	question particle
CLF	classifier	RED	reduplication
COP	copula	REFL	reflexive
EXCL	exclusive	REL	relative
INC	inclusive	SG	singular
INS	instrumental	TER	prefix <i>ter-</i>
KAN	suffix <i>-kan</i>	UV	undergoer voice
LE	particle <i>le</i>		

1 序論

1.1 研究の目的と対象

インドネシア語はオーストロネシア語族マレー・ポリネシア語派に属するマレー語を基盤とし、インドネシアの国語・公用語として広く用いられている。基本的語順は SVO、形態的に一般に膠着語と分類される言語にみられる特徴を多く持ち、接辞による派生が比較的多く観察される。

本稿はそうした接辞のうち、接頭辞 *ter-*¹ に焦点を当て、その統語的特徴と意味的特徴の包括的な分析を行うことを目的とする。本節では最初にインドネシア語の参照文法である Sneddon et al. (2010) に中心に、接頭辞 *ter-* の基本的な特徴を概観する。ただし、これらの記述・分析がどの程度妥当であるかについては次章以降で検討を行う。接頭辞 *ter-* は以下の機能を持つ。

- (他動詞的意味を持つ語基について) 受身文標識となる
- (自動詞的意味を持つ語基について) 非意図の意味の付与
- 最上級表現の形成
- イディオムの形成

まず受身文標識となる場合について、統語的特徴を見る。(1-1) は能動文であり、そこでは能動文標識である接頭辞 *meN-* が付接した動詞が述部の主要部として現れている。ここでは動作主を表す一人称代名詞 *Saya* 「私」が主語として述部の前に、動作の対象を表す要素 *buku saudara* 「あなたの本」が目的語として述部の後に現れている。一方で (1-2) は受動文であり、そこでは接頭辞 *ter-* が付接した動詞が述部の主要部として現れている。この文では、(1-1) で主語として現れていた *saya* 「私」が *oleh* を伴って斜格に置かれ、目的語の位置に置かれていた *buku saudara* 「あなたの本」が主語位置に移動している。

¹接頭辞 *ter-* は基本的に語基に対してそのまま接続するが、語基が *r* で始まる語に対しては *te-* という形をとる。

- (i) *te-rasa*
TER-feel
「感じられる」

加えて CerC (C:子音) の形から始まる語基に対しても *te-* の形で接続する (Sneddon et al. 2010: 13; Moeliono et al. 2017: 126)。

- (ii) *te-percaya*
TER-believe
「信じられる」 (Sneddon et al. 2010: 13)

他にも例外的に *te-* の形で接続する語が存在する。

- (iii) *te-lanjur*
TER-dragged
「～してしまった」 (Sneddon et al. 2010: 13)

(1-1) *Saya mem-bawa buku saudara.*
1SG AV-take book 2SG
「私はあなたの本を持って行った」 (作例)

(1-2) *Maaf, buku saudara ter-bawa oleh saya.*
sorry book 2SG TER-take by 1SG
「すみません、あなたの本は私が持って行ってしまいました」
(Sneddon et al. 2010: 118)

このとき、斜格を導いている前置詞 *oleh* は通常省略できないとされる (Jeoung & Biggs 2017: 85; Jeoung 2020: 31)。

(1-3) *Pintu itu ter-buka *(oleh) angin.*
door that TER-open by wind
「そのドアは風で開いた」 (Jeoung & Biggs 2017: 85)

一般的に接頭辞 *ter-*による受身文は「結果状態」「非意図」「可能」の3つの意味を帯びるとされる (Grangé 2013; Sneddon et al. 2010; Tampubolon 1983)。加えて「自発」の意味を区別する場合もある (cf. Kridalaksana 1989; 湯浅 2002; 原・森山・降幡 2017)。(1-4)は「書く」という動作が完了し、その結果状態を表している文である。(1-5)は行為者である私が意図せずペンを使ってしまったという非意図の意味を表している。(1-6)は可能の例であるが、この場合「聞こえない」というように否定辞がついて不可能の意味が現れている。(1-7)では小さな頃の思い出が「ひとりでに」立ち現れているという点で自発と呼べるような意味が表れている (湯浅 2002: 10)。

(1-4) *Surat itu ter-tulis dalam bahasa Inggris.*
letter that TER-write in language English
「その手紙は英語で書かれている」 (Sneddon et al. 2010: 117)

(1-5) *Maaf, pena=mu ter-pakai oleh saya.*
sorry pen=2SG TER-use by 1SG
「すみません、あなたのペンは私が使ってしまいました」 (Sneddon et al. 2010: 119)

(1-6) *Suara dosen tidak ter-dengar dari sini.*
voice teacher NEG TER-hear from here
「先生の声はここから聞こえなかった」 (Sneddon et al. 2010: 121)

(1-7) *Pada waktu sendirian, pengalaman masa kecil kembali ter-ingat.*
on time alone experience age small again TER-remember
「一人でいると、小さな頃のことを思い出される」 (湯浅 2002: 10)

さらに接頭辞 *ter-*は知覚動詞を語基にとる場合に、補語句を伴うことが出来る (原・森山・降幡 2017; 佐近 2019)。

(1-8) *Dia ter-lihat sakit.*

3SG TER-see sick

「彼は具合が悪く見える」

(原・森山・降幡 2017: 22)

この場合基本的に「XがYに見える」という判断の意味を表す。上の(1-8)の場合は *dia* 「彼」を見ることで「病気である」と判断したことを表わしている。分類としては原・森山・降幡(2017)のように「自発」と呼ぶ場合や佐近(2019)のように「判断」と呼ぶ場合がある。

次に接頭辞 *ter-*は自動詞的意味を持つ語基に付く場合もある。この場合は上記のような構造変化は起こらない。次の(1-9a)と(1-9b)を見ると、両方において眠るという行為の主体である *Latif* を表す要素は主語の位置を占めている。つまり *ter-*派生動詞²と語基の動詞とは同じ構文をとる。

(1-9) a. *Latif tidur di kelas.*

Latif sleep in class

「*Latif* は授業中に寝た」

(作例)

b. *Latif ter-tidur di kelas.*

Latif TER-sleep in class

「*Latif* は授業中に寝てしまった」

(Sneddon et al. 2010: 118)

自動詞語基の場合は、上記に挙げた *ter-*派生動詞が表しうる意味のうち、非意図の意味のみが生じるとされる。(1-9a)では *Latif* が授業中に寝たという事実が示されている一方、(1-9b)は行為の非意図性を読み込むことができる。

接頭辞 *ter-*のもう一つの主要な機能は最上級表現の形成である。(1-10)は *panas* 「暑い」に接頭辞 *ter-*が付いたことによって *terpanas* 「最も暑い」という最上級表現が作られている例である。

(1-10) *Suhu ter-panas di Jakarta tahun ini 37°C.*

temperature TER-hot in Jakarta year this 37°C

「今年のジャカルタの最高気温は37度だ」

(Kridalaksana 1989: 61)

ここまで接頭辞 *ter-*の機能の中でも、比較的生産的な3つの用法を確認した。しかし接頭辞 *ter-*はこの他にも特定の語基にのみ接続する用法がある。まず語基が表す動作の結果状態に由来する *ter-*派生形容詞を見る。

(1-11) *Dia tidak mem-punyai banyak teman karena sifat=nya yang ter-tutup.*

3SG NEG AV-have many friend because attitude=3 REL TER-close

「彼は内向的な性格のせいで、友達が多くない」

(Kridalaksana 1989: 61)

ここでは *tertutup* が「閉鎖的な/内向的な」という意味を表している。語基は *tutup* 「閉める/閉まる」である。動詞に接頭辞 *ter-*が付いた場合「閉められている」などの動作の結果状態を

²以下では接頭辞 *ter-*によって形成された語が動詞として用いられる場合、その語を *ter-*派生動詞と呼ぶ。名詞を修飾するなど形容詞として用いられる場合であれば *ter-*派生形容詞となる。

表すことができるが (cf. (1-4))、ここから恒常的な状態へと意味変化が生じ「閉鎖的な/内向的な」という意味が生まれている。ただしこのパターンの派生は *terbuka* (ter+ 開ける)「外向的な/公然とした」など一部の語に限られる。これには語基が名詞の場合も存在する。(1-12) では *nama*「名前」という名詞に接頭辞 *ter-*が付いたことによって *ternama*「著名な」という形容詞が派生されている。

- (1-12) *Kali ini kesedihan menimpa aktor muda ter-nama, Ming Dao.*
 times this sadness AV.strike actor young TER-name Ming Dao
 「今回、著名な若い俳優である Ming Dao を悲しみが襲った」 [Tribunnews]

次に名詞派生および機能語派生を見る。(1-13) と (1-14) はそれぞれ名詞派生、前置詞に近い働きをする機能語派生の例である。名詞派生・機能語派生の場合も語基の種類は限られる。

- (1-13) *ter-sangka* (ter-疑う)「容疑者」
ter-dakwa (ter+ 訴え)「被告」
ter-gugat (ter+ 訴える)「被告」
ter-tuduh (ter+ 告発する)「被告」
ter-mohon (ter+ 請う)「被告」 (Moeliono et al. 2017: 132)

- (1-14) *ter-hadap* 「～に対して」
ter-kait 「～と関係して」
ter-masuk 「～を含めて」
ter-lepas 「～とは別に」 (cf. Moeliono et al. 2017: 134)

以上、接頭辞 *ter-*は多岐に渡る機能を持つことを確認した。本稿が接頭辞 *ter-*に焦点をあてる理由は、接頭辞 *ter-*がこうした多様な機能を持つにも関わらずこれまでのインドネシア語研究において主要なテーマとなっていなかったためである。インドネシア語の受身文の研究は盛んに行われているが、その中心は接頭辞 *di-*であった。接頭辞 *di-*は接頭辞 *ter-*と同じように、一般的に受身標識として機能する。(1-15) では、被動作主を表わす *buku saudara* が主語となり、動作主を表す *Sato* が *oleh* を伴う斜格をとっている。ここから (1-1) のような文と比較すると、接頭辞 *di-*は受身文の標識であることが確認できる。

- (1-15) *Maaf, buku saudara di-bawa oleh Sato.*
 sorry book 2SG UV-take by Sato
 「あなたの本は Sato が持っていきました (あなたの本は Sato に持っていかれました)」
 (作例)

接頭辞 *ter-*による受身文と接頭辞 *di-*による受身文の違いはその意味に現れる。接頭辞 *ter-*が付接した動詞による受身文は、上述の「結果状態」「非意図」「可能」などの意味を伴うと捉えられてきたのに対し、接頭辞 *di-*による受身文は上記の意味に関しては中立であり、もっぱら情報構造と連動した派生構文とみなされる³。このことから、意味的に中立な接頭辞 *di-*が

³接頭辞 *di-*は特定の意味役割を持つ項をフォーカスする焦点体系の一つとして位置付けられると考える場合もある

付接した動詞の構文に関しては生成文法の側面からの統語的操作の研究や類型論的側面から *symmetrical voice* として捉え、印欧語における受身との区別を行う研究、そして情報構造に注目する研究などの成果が多く挙げられてきた (Arka & Manning 1998; Arka & Ross 2005; Cole, Hermon & Yanti 2008; Zúñiga & Kittilä 2019; Kaswanti Purwo 1988; Sneddon et al. 2010)。一方で接頭辞 *ter-* は接頭辞 *di-* の意味的に有標な形式として捉えられることが多く、接頭辞 *ter-* に焦点を当てた研究は少ない。結果として、接頭辞 *ter-* に関して基本的な記述の検討が進んでいないという問題が生じている。統語面では、接頭辞 *ter-* においては前述のように斜格項を導く前置詞 *oleh* が義務的であると主張されている。しかし実例を観察してみると、次の (1-16) のように多くの接頭辞 *ter-* の例で前置詞 *oleh* が省略されていることが分かる。

(1-16) *Se-banyak 198 anak di Jawa Barat ter-infeksi Covid-19.*

one-many 198 child in Jawa west TER-infect Covid-19

「西ジャワの 198 人もの子供がコロナウィルスに感染した」

[kompas.id]

つまり、接頭辞 *ter-* と前置詞 *oleh* との関係を捉える際には実例の検討から始めることが必要になる。他にも構造変化に関する問題もある。前述のように接頭辞 *ter-* が接頭辞 *di-* の有標な形として捉えられてきたために、これまでの接頭辞 *ter-* の研究は主に受身標識としての機能が中心であり (cf. 湯浅 2002)、能動文と受動文という構造変化が関与しない自動詞に付く場合は補足的に別個に扱われることが多かった。そのため中心的機能とされる受身標識としての機能が自動詞に付く場合とどのように関係するかについては、不明なままである。

意味面に関して、これまでの接頭辞 *ter-* 研究の主な関心は意味・機能の一般化であった。前述のように接頭辞 *ter-* は「結果状態」「可能」「非意図」などの意味を付与する。こうした複数の意味を捉える際には、どれか一つの意味をプロトタイプとして設定し、そこから他の意味が派生すると考えたり、抽象的な上位概念がスキーマ的に存在するなど考えることで、多義の一般化が試みられてきた。しかしその前提となる「結果状態」といった意味の定義については定義があいまいで、必ずしも「結果状態」と言えないような例もそのカテゴリーに入れる形での記述が行われてきた。結果として先行研究によってその定義が異なるという事態も生じている (cf. 2 章)。さらに、自動詞語基の場合と他動詞語基の場合の意味的な関係性についても十分な説明がされてきているとはいえない。(1-4) から (1-7) にあるように、他動詞的語基の場合は様々な意味が表出することが確認されているが、自動詞語基の場合には (1-9b) のように非意図の意味に限られる。従来一般化の分析では、なぜこのような意味表出の差が生じるかを説明することができない。

さらに接頭辞 *ter-* の全体像を捉えにくくしている要因に、最上級の表現を形成する機能がある。この最上級を形成する機能は、共時的に動詞語基についた場合との関係性が見出しにくく、独立した機能と見做されることが多い。Winstedt (1913) や佐々木 (1982) がその関連の可能性へ言及は行っているものの、具体的な検証はされていない (cf. 5 章)。

る (cf. Zúñiga & Kittilä 2019)。そうした立場では *meN-* という接頭辞は動作主焦点標示 (Actor Voice) として扱われ、一方 (1-15) などの接頭辞 *di-* は動作対象焦点標示 (Undergoer Voice) として扱われる。本稿は接頭辞 *ter-* に焦点を当てるものであるため、議論の簡略化のため基本的に能動文・受身文という用語を用いる。例文にグロスを与える際は、AV (Actor Voice) と UV (Undergoer Voice) とする。

以上より、これまでのインドネシア語の接頭辞 *ter-*の研究では以下の点が問題となっているとまとめられる。

- 実例に基づいた接頭辞 *ter-*の記述の検討や、機能の定義がなされていない
- 代表的とされる意味・機能の考察は行われているが、その他の機能との関係性が議論されていない

こうした問題を受け、本稿ではコーパスデータに基づいた分析により以下の5点を目的とする。

- 先行研究の記述を検討した上で、実例に基づいて接頭辞 *ter-*が表す意味を明確な基準によって分類する(2章)
- 接頭辞 *ter-*が付与する複数の意味を統一的に捉える(3章: 3.3節)
- 受身文に現れる接頭辞 *ter-*に対して与えられた分析が自動詞語基の表出の制限や、構造変化との関係を説明できることを示す(3章: 3.4節・3.5節)
- 動作主を標示する前置詞 *oleh* との関係を実例に基づいて記述し、標示方法の選択要因を明らかにする(4章)
- 3章で行った分析を基に、動詞用法の接頭辞 *ter-*と最上級用法の接頭辞 *ter-*の関係を説明する(5章)

詳細は1.4節で改めて述べる。

1.2 本稿で使用するデータ

本稿で使用する言語データは(i)筆者が作成し、コンサルタントのネイティブチェックを受けたもの、(ii)ウェブ上のニュース等の記事から引用したもの、(iii)先行研究から引用したもの、(iv)マレー・インドネシア語ウェブコンコーダンスシステム MALINDOConc⁴から引用したもの、(v) Malay Concordance Project から引用したもの、(vi)辞書からの引用、から構成される。(i)は作例であることを各例文の末尾に示す。(ii)に関しては出典を例文ごとに示した後、巻末に出典一覧としてウェブページタイトル及びURLを明記する。(iii)は参考文献一覧と対応可能な形で出典を示す。(iv)のMALINDO Concから引用した場合は、各例文の下部にコンコーダンスシステム内で表示される引用元のURLを掲載する。(v)は5章で詳しく説明を行う。(vi)についてはインドネシアの国定辞書である Kamus Besar Bahasa Indonesia「インドネシア語大辞典」(以下KBBI)及び、小学館から発行されているプログレッシブインドネシア語辞典(初版: 舟田・高殿・左藤 2018)を用いる。KBBIの最新の版はオンライン⁵での提供が主でありページ数の表記がないため、引用の際は[KBBI]とのみ表記する。

ここでは本稿全体を通して使用する MALINDO Conc について説明する。MALINDO

⁴<https://malindo.aa-ken.jp/conc/>

⁵<https://kbbi.kemdikbud.go.id/>

Conc とはマレー語・インドネシア語のコーパスを検索するためのシステムであり、Nomoto, Akasegawa & Shiohara (2018) によって構築が行われた。データは Leipzig Corpora Collection (Goldhahn, Eckart & Quasthoff 2012) 内のサブコーパスである ind_mixed_2012、ind_web_2012、ind_wikipedia_2016 を基としている。ind_mixed_2012 はブログなどを中心とした Web 上の記事、ind_web_2012 はニュースを中心とした記事、ind_wikipedia_2016 は wikipedia の記事から引用されている。それぞれのサブコーパスのサイズは以下の通りである。

表 1.1 MALINCO Conc のデータサイズ (Shiohara, Sakon & Nomoto 2019: 82)

Subcorpus	ind_mixed_2012	ind_web_2012	ind_wikipedia_2016
Data	mixed (e.g. blog)	mostly online news	Wikipedia articles
Size (sentence)	300,000	300,000	300,000
(token)	5,428,067	5,540,573	5,634,138

MALINDO Conc のデータの大きな特徴の一つは、形態的な情報が付与されていることである。これにより、接辞の種類や語基の種類からの例文検索が可能となっている。例えば、“ter-”という接頭辞で検索を行えば、接頭辞 ter-が付加されている語を含む例文の一覧が検索可能である。ただし、エクセルデータにダウンロードする際には制限があり、大規模なデータを使用して分析を行う場合は適宜 Leipzig Corpora Collection の元データをテキストファイル形式でダウンロードし、正規表現などを用いて整形している (cf. 4 章、5 章)。

1.3 インドネシア語の形態統語論と本稿で用いる術語

1.3.1 態

ここでは 1.1 節で触れたインドネシア語の態について改めて定義を行う。インドネシア語では、接頭辞 meN-が付接された動詞が能動文を、接頭辞 di-が付接された動詞が受身文を形成することが一般的である (Sneddon et al. 2010: 72)。次の例はそれぞれ meN-能動文 (1-17a)、di-受身文 (1-17b) の例である⁶。

⁶接頭辞 meN-の N-の部分は語基の冒頭音に応じて m-, n-, ng-, ny-, nge-, Ø-の形で現れる。これらは語基に直接接続する場合と、冒頭音と置き換わる場合がある。本稿では前者は (i) のように形態素境界を設け、後者は (ii) のように表記する。

- (i) *mem-bawa*
AV-take
「持っていく」
- (ii) *memukul* [meN-+(pukul)]
AV.hit
「叩く」

- (1-17) a. *Mereka sudah men-jemput Tomo.*
 3PL already AV-pick.up Tomo
 「彼らはもう Tomo を迎えに来た」 (Sneddon et al. 2010: 255)
- b. *Tomo sudah di-jemput oleh mereka.*
 Tomo already UV-pick.up by 3PL
 「Tomo は彼にもう迎えられた」 (Sneddon et al. 2010: 255)

能動文 (1-17a) では動作主を表す *mereka* が主語の位置、被動作主を表す *Tomo* が目的語の位置に置かれている。一方で、(1-17b) では被動作主を表す *Tomo* が主語の位置を占め、動作主を表す *mereka* は前置詞 *oleh* 「～によって」を伴って斜格をとっている。このように被動作主を表す要素が主語の位置に置かれ、動作主を表す要素が斜格となる、または省略される文を本稿では受身文と呼ぶこととする。

1.3.2 語根・語基

本稿では形態的説明に、語根・語基という用語を用いる。語根は他の形態的な付加を一切受けていない状態の形態素を指す。例えば *bawa* 「持っていく」はこれ以上形態素を分けることが出来ないため、語根である。一方で語基は接辞との関連で、接辞を付加する対象を指し、「*membawa* 「持っていく」の語基は *bawa* である」というように用いる。

さらに、語根は自由語根と拘束語根に分かれる (Verhaar 1984: 2)。自由語根とは他の形態素を伴わない語根の状態でも用いることができるものを指す。例えば *bawa* 「持っていく」は接頭辞 *meN-*が付加されない場合でも文中に現れることができるので自由語根である。一方で、*mengunjungi*[*meN-kunjung-i*] 「訪れる」といった形で用いられる *kunjung* は、単体で現れることができないため、拘束語根である⁷。

本稿ではこうした語根はそれ自体が意味を内包するという立場を取る。これは Arka et al. (2009) などの分析に基づく。例えば語根 *jatuh* を例にとると、‘fell (on)to X’ という意味を持ち、義務的な参与者である「落ちる物」と非義務的な参与者である「落ちる場所」を含む動詞として定義される (Arka et al. 2009: 93–94)。このように語根に意味を認めるのは拘束語根の場合でも同様である。上の例での *kunjung* は拘束語根であるためそのままの形式で文中に現れる事はない。しかし *kunjung* 自体が「訪れる」という意味を持っており、「訪れる参与者」と「訪れる」場所の二つの参与者を想定すると見做す。

各語根の詳しい意味の設定については 2 章以降その都度行う。

1.3.3 自動詞・他動詞

本稿では原則として自動詞・他動詞をその統語的ふるまいによって区別する。具体的には (A) 能動文の場合に目的語を取りかつ、(B) 接頭辞 *di-*による受身文形成が可能である場合、その派生動詞を他動詞と呼ぶ (cf. Sneddon et al. 2010: 275)。まず条件 A についてのみ考えると、

⁷Verhaar (1984) は自由語根と拘束語根に対してそれぞれ *stem* と *root* という用語を用いている。一般的な言語学の用語法との混乱を避けるため、本稿では語根の種類に関してこのような用語の使い分けは行わない。

(1-18) の *berhenti* 「止まる」は目的語を取らないため自動詞、(1-19) の *memandikan* 「～をお風呂に入れる」は目的語を必要とするため他動詞である。

(1-18) *Bis berhenti di depan gedung sekolah.*
bus stop in front building school
「バスは学校の建物の前で止まった」 (Sneddon et al. 2010: 253)

(1-19) *Dia me-mandi-kan anak=nya.*
3SG AV-shower-CAUS child=3
「彼は子供をお風呂に入れた」 (Sneddon et al. 2010: 253)

次に条件 B について確認する。条件 A にのみ照らし合わせると、(1-20a) の *belajar* 「勉強する」は動詞の直後に項がある。しかしこの動詞は接頭辞 *di-*による受身文を形成できない(1-20b)。つまりこの項は目的語項ではなく、それゆえ、この動詞は自動詞であると考える。

(1-20) a. *Banyak siswa belajar bahasa Perancis.*
many student study language France
「多くの生徒がフランス語を勉強している」 (Sneddon et al. 2010: 275)

b. **Bahasa Perancis di-belajar oleh banyak siswa.*
language France UV-study by many student

なお、インドネシア語ではある特定の単語が一对一で自動詞・他動詞という分類と結びついているわけではない。*memadai* という動詞は(1-21a)は「十分である」という自動詞であるが、(1-21b)では目的語を取り、「～を満たす」という他動詞として使用されている。

(1-21) a. *Gaji mereka tidak memadai.*
salary 3PL NEG AV.sufficient
「彼らの給料は十分ではない」 (Sneddon et al. 2010: 255)

b. *Gaji itu tidak memadai kebutuhan mereka.*
salary that NEG AV.sufficient necessity 3PL
「その給料は彼らの需要を満たしていない」 (Sneddon et al. 2010: 255)

そのため本稿では便宜上(1-21b)の *memadai* を説明する際に、「他動詞 *memadai* は」という用語法を用いるが、これは *memadai* という形式がすべて他動詞であることを意図しているわけではない。

以上、本稿における自動詞・他動詞という用語の定義を確認したが、語基に関してはこうした統語的な区別ができない。そのため自動詞語基・他動詞語基と呼ぶ場合その区別は意味的なものとする。想定する意味の中に義務的な参加者が二つ以上含まれていれば他動詞語基、一つだけであれば自動詞語基と呼ぶ。例えば *jatuh* 「落ちる」は義務的な参加者が一つなので自動詞語基、一方で *bawa* 「持っていく」は持っていく人と持っていかれる物の二つの参加者を義務的に含むと想定されるので、他動詞語基である。

1.4 本稿の構成

本章では本稿の研究対象である接頭辞 *ter-*に関する一般的な記述を示した。続く2章から5章までは1.1節の最後に示した問題について順に検討していく。6章は本稿のまとめと今後の課題である。

以下、それぞれの章の概要を述べる。

2章では、接頭辞 *ter-*が付与する意味の検討を行う。従来接頭辞 *ter-*の表す意味は定義の検討などが不足しており、意味間の明確な差異は議論されてこなかった。こうした問題意識から、コーパスなどの例文を基にして先行研究で挙げられている意味の内実の検討を行い、必要であれば新たな意味を定義することで、接頭辞 *ter-*が付与する意味を明確な基準をもって分類することを目的とする。

3章では意味同士の関係性と構造変化に着目する。まず意味同士の関係性に関して、従来は抽象的なスキーマを設定し、接頭辞 *ter-*が付与する意味を包括的に捉える試みが行われてきた。しかし抽象的なスキーマを設定するだけでは、語基による意味表出の制限を説明できないという問題点があった。そこで2章で検討する接頭辞 *ter-*の意味分類を基にして、語基の動詞の意味的成分に応じて接頭辞 *ter-*が表す意味に差が生じることを指摘する。具体的には語基の動詞の意味が接頭辞 *ter-*が持つ事象構造と相互に作用することで、様々な接頭辞 *ter-*の意味が表れていると主張する。次に構文面について、本章で述べたように他動詞に接頭辞 *ter-*が付いた場合は、そうでない場合と比較して、同じ意味役割を持つ項の統語的性質が異なる構造変化がみられる。しかし自動詞と一部の他動詞の場合はこうした構造変化は見られない。この理由はこれまで動詞に紐づいたイディオムの性質であるとされ、考察は行われてこなかった。これに対し本稿では意味表出の際に主張した語基の動詞と接頭辞 *ter-*の相互作用が構造変化の有無を説明可能であることを示す。ここから構造変化が無い場合を例外とせずに一貫した説明が可能であることを主張する。さらに3.5節では接尾辞と共起する場合の接頭辞 *ter-*のふるまいについて考察を行う。これまで接頭辞 *ter-*は使役の接尾辞が付いた場合に特に意味表出や構造変化の有無に関して特殊なふるまいをすると記述され、例外的に扱われてきた。対して本稿では語基の動詞と接頭辞 *ter-*の相互作用という考え方をここでも用いることで、統一的な説明が可能であることを示す。

4章では接頭辞 *ter-*が用いられる受身文における動作主標示の選択について考察を行う。インドネシア語の受身文では、(1-2)や(1-15)のように動作主の斜格標示として前置詞 *oleh* を用いることが一般的である。ただし、接頭辞 *di-*による受身文においては前置詞 *oleh* は比較的自由に省略可能とされてきた。一方でこれまで接頭辞 *ter-*が用いられる受身文において、動作主標示の有無について論じたものは少ない。前述のように Jeung & Biggs (2017) は接頭辞 *ter-*受身文における前置詞 *oleh* の用法について触れた数少ない研究であるが、主な分析対象が接頭辞 *di-*であるため、実例に基づいた記述が不足しているという問題点がある。この問題に対し、接頭辞 *ter-*の受身文において *oleh* による標示とその省略 (zero 標示) が実際にどの程度用いられるかを確認したうえで、語基の意味という点に着目し、語基の持つ意味が動作主標示の選択に大きくかわることを明らかにする。加えて、語基の意味だけで説明できない部分に

関しては、他の要因を考慮した上で統計的分析により検討を行う。

5章では最上級表現について考察を行う。1.1節で述べたように、接頭辞 *ter-*は受身文で用いられる他に、最上級表現を形成する機能がある。しかし、最上級を形成する接頭辞 *ter-*は受身文での接頭辞 *ter-*との共時的な関係が見出しにくいために別個に扱われ、その関係性が議論されることも少なかった。そこで、通時コーパスの例文を検討することで通時的な分析を試みた。結果として、古典マレー語では形容詞的意味を持つ語基について最上級の意味を持つことは少なく、「語基の表す状態になる」という意味で用いられることが多かったことを指摘する。そして、この結果を受けて3章で扱うような事象構造の考え方を適用することで、最上級と受身文の接頭辞 *ter-*を統一的に説明できることを主張する。さらに後半では通時的に「語基の表す状態への変化」という変化過程を認めることで、類義形式である *paling* との差異を説明できることを示す。両者の意味的な差異は主観的に判断することは難しく、これまで詳細な分析は行われてこなかった。本稿では接頭辞 *ter-*と結びつきやすい形容詞語基は、現代インドネシア語の「状態変化」を表す接辞 *meN-*に接続可能であるのに対し、*paling* と結びつきやすい語基はそうした傾向が見られないことを提示する。結果として、接頭辞 *ter-*は *paling* と異なり「語基の表す状態への変化」という古典マレー語の影響によって結びつきやすい語基の種類が限られていると主張する。

最後に本稿の大きな特色の一つとして、接頭辞 *ter-*を包括的に捉えるために様々な手法を用いているという点がある。3章では、意味のネットワークを捉えるために認知言語学の枠組みで事象構造と行為連鎖モデルの考え方を採用する。4章では、いくつかの統計的手法を用いる。動詞の意味を分類する際に単語のベクトル化に基づくクラスター分析を用いたり、複数の要因を同時に検討する回帰分析を用いたりすることで、数値によって客観的な結果を提示する。5章では共時的な関係性を見出しにくい対象について、歴史コーパスを利用して通時的な分析を試みる。特に認知言語学的手法やクラスター分析・回帰分析などの統計手法は英語などの研究では盛んに用いられている手法であるものの、インドネシア語研究では発展していない (cf. Rajeg, Denistia & Musgrave 2019)。そのためインドネシア語研究における新しい分析手法の提案を行う研究としても位置付けられる。

2 接頭辞 ter-の意味

本章では接頭辞 ter-が付与する意味について考える。前章で確認したように、動詞語基に付いた場合、接頭辞 ter-は複数の意味を付与することが認められている。特に 1.1 節で述べた Sneddon et al. (2010) の「結果状態」「非意図」「可能」という 3 分類は、その他の多くの先行研究が採用している分類であり、最も基本的な意味であると言える。しかし前述のように「自発」や「判断」などこれら 3 つ以外の分類を認める先行研究も存在する。加えて分類に関する記述が一致している場合でもニュアンスの違いにより異なる分類名を用いている場合がある。

最初期の接頭辞 ter-の意味分類の研究には、Winstedt (1913: 88–89)⁸がある。そこでは“perfect act, the realized condition”, “a result-absolutely complete, sometimes sudden and ... due but to external compulsion or accident”, “possible” というように、接頭辞 ter-によって派生された動詞に付与される意味として 3 つが認められている。これはおおよそ日本語の「結果状態(完了)」「非意図」「可能」に対応する。その一方で、Kridalaksana (1989: 48–49) では“sudah di, perfektif”「完了」、「spontan」「自発」、「sanggup, dapat di」「可能」、「menyatakan arah/tempat」「方向」、「menyatakan kena (menderita)」「被害」、「kontinuatif」「継続」、「tak sengaja」「非意図」と 7 種類の分類が提示されている。実際にはこうした多くの分類を設定する先行研究は少なく、この Winstedt (1913) や Sneddon et al. (2010) に代表される 3 種類の分類が最も多くみられる。しかし前述のように、一部には Kridalaksana (1989: 48–49) のような細分類を行わないまでも「自発」というカテゴリーを設ける先行研究があり(湯浅 2002: 10; Wouk 1980: 86; Leow 2001: 292)、先行研究全体として分類に揺れが存在することは確かである。ただし、ここで問題となるのは分類数を増やすこと自体ではなく、分類を増やす際に、その分類をすでに一般的に認められている用法から切り離す根拠が示されていないことである。

加えて以下の例は Sneddon et al. (2010) で“stative”、つまり「(結果)状態」と解釈される例であるが、前述のように Kridalaksana (1989) の分類であれば“sudah di, perfektif”、つまり「完了」に分類される。

(2-1) *Surat itu ter-tulis dalam bahasa Inggris.*

letter that TER-write in language English

「その手紙は英語で書かれている」

(=(1-4))

このような名称の違いは、それぞれの用法に対する説明を明確にしないまま研究が行われてきたことに由来すると考えられる。意味分類の科学的妥当性を検討した守田 (2013) は言語研究一般において、意味による分類は客観的に行うことは難しく、常に曖昧性や恣意性をはらんでいと述べる。インドネシア語研究においても見られるように、意味分類には分類者の主観によって分類の数が大きく変化してしまうという問題点があり、そうした主観的分類は再検証が難しいことから、正確な言語記述に繋がらないとされる場合がある。しかしこのことは意味

⁸Winstedt (1913) は正確にはマレー語の研究である。マレー語とインドネシア語の接頭辞 ter-にはいくつかの共時的な統語的差異が見られるが、大きな意味的な差異は見られない。そのため、本稿ではマレー語についての研究も検討の対象とする。ただしマレー語とインドネシア語で差異が見られる場合は、その都度言及を行う。

分類が不必要とあることを必ずしも意味しない。こうした問題に対して、守田 (2013) は以下のように一定の条件を満たすことができれば意味分析の妥当性は維持されることを主張した。

いくら意味を基準とする分類であっても、カテゴリのメンバーの間に確かな類似性があり、分類自体を他の研究者と難なく共有することができ、さらに、その分類を設定することによって当該の現象がよりよく説明され、他の現象に対しても一定の説明力を発揮するのであれば、必ずしも恣意的、技巧的あるいは人為的な分類とは言えないだろう。むしろ、その分類は言語の何らかの姿を反映していると考えられることができる。

(守田 2013: 38)

そこで本章では先行研究の接頭辞 *ter*-の分類に関する記述の検討をし、場合によって新たな分類を設ける妥当性について考察を行うことを目的とする⁹。検討にあたってはまず完了と非意図という用法について 2.1 節と 2.2 節で先行研究を概観する。その後 2.3 節で完了と非意図の区別に関する問題を指摘し、動作の非意図性を表す非意図用法とは別に、新しく「認識との相違」用法を設けるべきであることを主張する。続く 2.4 節では、これまで分類に揺れのあった自発のカテゴリについて確認し、完了用法の一部と見做すことを述べる。2.5 節では実現系可能と潜在系可能という観点から、これまで「可能」と一括りにされてきた例が分類可能であることを指摘する。そしてそのうち実現系可能は認識との相違用法の一種であることを主張する。最後にこれまで可能の一部とみなされてきた判断用法を分離すべきであるという主張を 2.6 節で行う。2.7 節はまとめとして、議論を整理するとともに、接頭辞 *ter*-が付与する意味の体系化を行う。

2.1 完了

本節ではまず、完了用法ないしは結果状態用法についての先行研究の検討および言語現象の記述を行う。先行研究では次のような文を完了用法と呼んできた。

(2-2) *Sayur-sayuran ini ter-potong.*

vegetable-RED this TER-cut

「この野菜類はカットされている」

(Krafft 2010: 2)

(2-3) *Pintu itu ter-buka.*

door that TER-open

「そのドアは開いている」

(cf. Soh 1994: 40; ルシアナワティ 1998: 101)

⁹長屋 (2019) と川村 (2012) は接頭辞 *ter*-と似た用法・機能をもつタガログ語の接辞 *ma*-と日本語のラル形の意味分類を行った研究である。前者は意味分類を行う基準として意図性と現実性という素性を設けたという点で、後者は子細に用例を検討することで互いに明確に区別を行うことができる分類を行ったという点で、上記の共有可能性を満たしている。本章で用いる分析手法もこれらの先行研究を大いに参考にしている

(2-4) *Dalam surat perjanjian itu ter-tulis nama=ku dan nama=mu.*
 in letter promise that TER-write name=1SG and name=2SG

「その誓約書には、僕の名と君の名が記されている」 (湯浅 2002: 40)

(2-2) は野菜を切るという行為が完了して、野菜がバラバラの状態にあることを、(2-3) はドアが開くという事態が完了して、ドアが開いた状態にあることを表している。同様に (2-4) では書くという行為が完了して、誓約書に名前が書いてあるという状態を表す文である。こうした例を受けて、先行研究では以下のような性質を持つ文を完了用法と分類してきた。英文の後の括弧内の訳は筆者によるものである

- Perfect act, the realized condition (Winstedt 1913: 86–87)

「完了した行為。実現済みの状態」

- These verbs refer to a state of affairs. As there is no action involved there cannot be an actor. They thus contrast with *di-* passive verbs which refer to an action.

(Sneddon et al. 2010: 116)

「これらの動詞は状態や出来事を表す。動作が含意されないので、動作主も存在しない。そのため、それらは動作を言及する接頭辞 *di-* と対照される」

- *ter-* constructions have an adjectival passive reading and are perfective (i.e. the event is completed) (Soh 1994: 41)

「接頭辞 *ter-* 構文は形容詞的受身の読みを持ち、完了形である (そのイベントが完了している)」

- The verb with *ter-* affixed represents the state of the prominent NP (Wouk 1980: 84)

「接頭辞 *ter-* が付加された動詞は卓越した名詞句の状態を表す」

- ある動作が終わったということを表す文ではなく、ある事柄の結果に注目し、(...) 結果状態を表す文である。 (ルシアナワティ 1998: 100)

- ‘*ter-*’ によるこのタイプの受動文は、その動作がすでに完了し「～である」状態にあることを示している。つまりこのタイプは動作の結果を表わしており、日本語の「既に～されている (である)」という表現にあたるものである。 (湯浅 2002: 9)

カテゴリーの名称として「完了」や「(結果) 状態」、「形容詞的用法」など様々な表現があるものの、総じてこの分類に属する文は「動作を受けた結果の主語の状態を表す文」であると認識されている。具体的に先行研究では以下のような特徴を持つとされている。まず、*sedang* 「～している」と共起し、そのプロセスが進行中であることを表すことができない (Krafft 2010: 1; Grangé 2013: 70)¹⁰。

¹⁰ただし、状態継続を表す場合は *sedang* と共起可能である。次の例は「置いて行かれている」という状態が継続していることを表している。

Dibanding Jerman, industri Prancis sedang ter-tinggal jauh.

compare German industry France PROG TER-stay far

「ドイツと比べて、フランスの産業ははるかに置いて行かれている」

(Grangé 2013: 70)

- (2-5) * *Sayur-sayuran sedang ter-potong.*
 vegetable-RED PROG TER-cut
 「野菜類はカットされているところである。」 (Krafft 2010: 2)

次に (2-6)、(2-7) が示すように、完了解釈の場合は動作主を標示することができないと言われている (ルシアナワティ 1998: 101; Krafft 2010: 1)¹¹。

- (2-6) *Pintu itu ter-buka (*oleh Ahmad).*
 door that TER-open by Ahmad
 「そのドアは、(Ahmad によって) 開けられた状態になっている」
 (cf. Soh 1994: 40; ルシアナワティ 1998: 101)

- (2-7) *Komputer itu te-rosak (*oleh seseorang).*
 computer that TER-broken by someone
 「そのコンピューターは (誰かによって) 壊れた状態になっている」 (Krafft 2010: 2)

こうした性質に関して、完了に分類される文とはいわゆる *stative passive* に対応するものと言える。一般に受身文の解釈において、*stative* と *eventive* が存在する (cf. Kratzer 2000: 385; Embick 2004: 356–358; Valenzuela et al. 2015: 270–271)。例えば英語では、形式は同じものの (2-8a) は夕食が用意されたという一回の事態を表しているのに対し、(2-8b) はすでに用意されているという状態を表しているという違いがある。

- (2-8) a. The dinner is prepared by Teo. (eventive passive)
 「夕食が Teo によって用意された」
 b. The dinner is already prepared (*by Teo). (stative passive)
 「夕食は Teo によってもう用意されている」 (Valenzuela et al. 2015: 270)

結果状態用法や *stative* という分類名を用いる先行研究も多く存在することは、こうした観察を受けてのものであると考えられる。

以上従来完了用法とされてきたものを概観した。

2.2 非意図

前節で、完了・結果状態用法は受身文の一般的解釈のうち *stative passive* という解釈に当たるものであったことを確認した。つまりある動作の結果状態に注目する文を指す分類であった。一方以下の (2-9)-(2-11) ような事態の生起を表す *eventive* な解釈を持つ文には非意図というラベルを与えてきた。

- (2-9) *Kaki saya ter-injak oleh ayah.*
 foot 1SG TER-step by father
 「私の足は父に踏まれた (私の父は無意識のうちに私の足を踏んでしまった)」
 (ルシアナワティ 1998: 98)

¹¹terusak 「壊れる」はマレー語における一般的な表記であり、インドネシア語では基本的に *terusak* と綴る。

(2-10) *Maaf, pena=mu ter-pakai oleh saya.*
 sorry pen=2SG TER-use by 1SG
 「すみません、あなたのペンは私が使ってしまいました」 (= (1-5))

(2-11) *Buku saya ter-bawa oleh Taro.*
 book 1SG TER-take by Taro
 「私の本を太郎が偶然持って行ってしまった」 (湯浅 2002: 11)

同じ様に非意図の意味が認められるのは、語基が自動詞である (2-12) や (2-13) といった文である。

(2-12) *Latif ter-tidur di kelas.*
 Latif TER-sleep in class
 「Latif は授業中に寝てしまった」 (= (1-9b))

(2-13) *Tadi pagi saya ter-bangun jam lima.*
 some.time.ago morning 1SG TER-wake hour five
 「今朝私は 5 時にハッと起きた」 (Sneddon et al. 2010: 118)

このような例は先行研究では意味的に次のように定義されている。英文の後の括弧内の訳は筆者によるものである¹²。

- (...) it has been performed unintentionally or accidentally. (Tampubolon 1983: 129)
 「それ (=接頭辞 ter-のついた動詞が表す行為) は非意図的にまたは偶然行われた」
- (...) involuntary action : happened without any will or effort on the part of the agent.
 (Wolff 1986: 184)
 「非意図的な動作: 動作主側の意思や努力なしで引き起こされたもの」
- In accidental *ter*-construction, the agent has no intention or volition over the occurrence of the event. (Soh 1994: 40)
 「偶発的 *ter*-構文では、動作主は出来事の発生に対する意図や意志を持っていない」
- (...) they explicitly state that the subject undergoes something unintended, the action often occurring suddenly and unexpectedly. (Sneddon et al. 2010: 118)
 「それら (=非意図を表す接頭辞 *ter*-) は主語が意図しない何かを経験したり、その動作がしばしば突然で予期しないものであったことを明確化する」
- Any action that can be viewed as accidental can fit in this construction(=accidental). *Ter*-functions as a sort of morphological apology for socially unacceptable, inappropriate, or inadvertent behavior. (Wouk 1980: 83)
 「偶然であると見做される動作は、この構文 (=非意図の文) に属する。接頭辞 *ter*-は社会

¹²先行研究間で「主語」と「動作主」のように表記に揺れがある。他動詞の意味を持つ語基の場合は、(2-10) のように斜格項に置かれている動作主の非意図性を問題とするため、本来であれば「動作主」という用語を用いる方が正確である。主語という用語を用いる先行研究が多いのは、非意図の意味が現れる文の多くが自動詞語基に接頭辞 *ter*-が付いた場合であることを反映していると考えられる。本稿では非意図性は意味役割としての動作主に帰属するものであるという立場をとる。

的に受け入れられなかったり、不適切であったり、意図しない行為を行ったことへの弁明を示す形態的要素の一種である」

- It (= prefix *ter-*) emphasizes (...) a result - absolutely complete, sometimes sudden and due not to conscious activity on the part of the subject but to external compulsion or accident.

(Winstedt 1913: 87)

「それ(=接頭辞 *ter-*)は (...) 明らかに完了している結果を表す。それはしばしば突然であり、主語側の意識的な動作ではなく、外的強制や事故によるものである」

加えてルシアナワティ (1998: 99) は非意図の意味を表す *ter-*派生動詞が日本語の「～してしまう」と重なる部分があることを指摘している。「～してしまう」は完了のアスペクトの意味を持つ表現であるが、転じて「元の状態には戻れない」や「好ましくない結果になって残念だ」という話者の感情・評価を表す。つまりインドネシア語の *ter-*派生動詞が表す「非意図」とは、単なる主語の意図性に言及するだけではなく、話者の感情・評価にも関わるモダリティ表現であることを示唆している。また明確な説明は与えられていないが、上記の Wouk (1980: 83) の “socially unacceptable, inappropriate, or inadvertent behavior” という記述は、認識主体の存在の可能性を示している。ただしこうしたモダリティの意味は単独で現れるのではなく、動作が非意図的に行われたことを前提とする。ルシアナワティ (1998: 98) はこうした場合の接頭辞 *ter-*を接頭辞 *meN-*を用いた文に変える場合は、*tidak sengaja* 「わざとではない」という語句を使用しなければならないと述べている。同様に Wouk (1980: 83) も *accidental* という訳語をあてており、ある動作が非意図的に行われ、それによって感情や評価が現れると考えていると言える。以上から先行研究に共通した「非意図」という用語の捉え方は以下の様にまとめられる。

- 動作主が意図しない動作を行った
- その動作の生起の多くは突然であり、予期しなかったものである

こうした説明を踏まえて上記の例を解釈すると、(2-9)-(2-11) は他動詞が用いられている例であり、(2-9) では *oleh* 句にある *ayah* 「父」が誤って私の足を踏んだこと、(2-10) では *saya* 「私」が誤ってペンを使ってしまったこと、(2-11) では、Taro が誤って本を持って行ってしまったことという動作主の非意図性が現れている。一方 (2-12) は自動詞の例で、その主語である Latif が本人の意図に反して授業中に寝てしまったことを表している。同じように (2-13) も主語である *saya* 「私」が起きる意図がなかったにもかかわらず 5 時に起きてしまったことを表す。

こうした非意図性は接頭辞 *di-*と比較することで一層明らかとなる。

(2-14) *Dia di-tembak atau ter-tembak polisi.*

3SG UV-shoot or TER-shoot police

「彼は警察官に故意に、または偶然撃たれた」 (Sneddon et al. 2010: 119)

(2-14) は接頭辞 *di-*との対比によって動作の非意図性が顕在化している例である。ここでは *tembak* 「撃つ」に接頭辞 *di-*が付いた形 *ditembak* と接頭辞 *ter-*が付いた形 *tertembak* が並列されている。この場合、*polisi* 「警察官」が *dia* 「彼」を撃ったことが意図的かどうかという点が問題であり、その違いが接頭辞の違いによって現れている。接頭辞 *di-*の場合は故意に、接頭辞

ter-の場合は偶然撃ってしまったことを表す。

ただし、受身文におけるこのような説明は動作主が明示されている場合にしか適用できない。そのため動作主が明示されていない場合に問題が生じる。(2-15)-(2-17)のような例は動作主が明示されていないために動作の非意図性を表しているとは言えない。しかし eventive 解釈が求められるため、完了に含めることはできず、分類に困ることになる。

- (2-15) *Waktu tabrakan terjadi sopir ter-lempar dari taksi.*
when collision occur driver TER-throw from taxi
「衝突が起こった時、ドライバーはタクシーから投げ出された」
(Sneddon et al. 2010: 119)
- (2-16) *Dia ter-sabet dengan senjata tajam.*
3SG TER-slash with weapon sharp
「彼は鋭い武器で切り付けられた」
(Sneddon et al. 2010: 119)
- (2-17) *Ter-tipu=lah kamu!*
TER-trick=PTC 2SG
「あなたは騙されたんだ」
(Sneddon et al. 2010: 119)

こうした例は “An agent is not necessarily expressed and sometimes the situation is agentless, or is perceived as such, or the agent is of no importance to the event being related.”(Sneddon et al. 2010: 119) 「動作主は必ずしも明示される必要はなく、ある状況が動作主が含意されないものであったり、そのように動作主が含意されないと認識されたり、出来事の発生に動作主が重要でない場合がしばしばある」(筆者訳) というように、「動作主性の不在」のような概念を非意図の下位分類とすることで意味的妥当性を担保している。

以上定義の拡張は見られるものの、非意図用法とはある動作が非意図的に行われ、そのことが予期しないことであったことを表す用法であることを確認した。

2.3 非意図と認識との相違¹³

2.3.1 先行研究の問題点

前節では非意図用法が先行研究内でどのように扱われているかを概観した。本節では先行研究の問題点を指摘し、その解決を試みる。結果として、上記の「動作主が意図しない動作を行った」と「その動作の生起の多くは突然であり、予期しなかった」という非意図用法の意味は、それぞれ別個の分類とするべきであることを主張する。

まず先行研究の記述における問題点を指摘する。多くの先行研究では完了・結果状態の解釈を持つ接頭辞 *ter-*による受身文では、動作主を標示することが出来ないという分析を行っている。つまりこの分析に則れば動作主が表示される場合は eventive 解釈をとり、接頭辞 *ter-*が表す意味も非意図に限定されることになる。しかし、動作主が標示されていても動作が必ずしも

¹³2.3.1 節と 2.3.2 節は佐近 (2020b) の内容に基づいている。

非意図的に行われていない場合がある。実際、Wee (1995) は oleh によって示されている項の意図性は義務的ではないことを指摘している。

(2-18) *John ter-pukul oleh Ali.*

John TER-hit by Ali

「John は Ali に殴られた」

(Wee 1995: 127)

そのため (2-18) では、Ali の殴るという動作は必ずしも非意図的ではない (Wee 1995: 127–128)。この例において、特に文脈が与えられていない場合は Ali が本人の意図に反して殴ってしまったという解釈と、Ali が意図的に殴ったという解釈の両方が可能である。さらに明らかに動作が意図的に行われている例もある。次の (2-19) はマンガの描写であり、Big Mom というキャラクターの船が Marco というキャラクターによって蹴られ、海へ落とされたという事態を表している。文脈は Marco は Big Mom の船が領地に上陸するのを阻止する目的があったというものであり、蹴るという行為は意図的であったと見做せる¹⁴。

(2-19) *Terakhir kali ter-lihat, kapal Big Mom ter-tendang oleh Marco ke lautan*

last times TER-see ship Big Mom TER-kick by Marco to sea

Wano.

Wano

「前回見たように、Big Mom の船は Marco によって Wano(ワノ国) の海に落とされた」

[duniaku.com]

こうした問題は自動詞語基の場合も同様である。(2-20) の場合、主語は木材であるため意図性は無関係である。つまりもともと主語が無生物であるために、非意図という概念は適用できない。次の (2-21) は、見舞いの客を迎えるために、仰向けに寝ていたところから起き上がろうとする文脈であり、この起き上がるという行為は明確に意図的に行っていると解釈できる¹⁵。

(2-20) *Saat kejadian, rantai penahan kayu putus, dan batang-batang kayu ter-jatuh.*

when incident chain barrier wood cut and stick-RED wood TER-fall

「それが起こったとき、木材を抑えておくチェーンが切れ、木材が落ちてしまった」

http://id.wikipedia.org/wiki/Final_Destination_2

(2-21) *Dengan se-kuat tenaga men-coba ter-bangun meski di-bantu oleh berbagai*

with one-strong power AV-try TER-wake though UV-help by several

peralatan medis.

equipment medical

「種々の医療機器に助けられてはいたが、精一杯起き上がろうと試みた」 [Brainly]

¹⁴stative 解釈のみを完了用法とするという分析を変更し、eventive 解釈でも非意図的な意味に関しては中立である場合があり、(2-19) のような例は完了の一種とみなすという方策も考えられる。しかし 2.5 節で説明するが、eventive 解釈かつ非意図の意味が認められない場合は「認識との相違」という素性が義務的となる。つまり単なる動作の完了の解釈は接頭辞 ter-では容認度が低い。さらに、ルシアナワティ (1998) が述べる様に、動作の完了は接頭辞 di-によっても表しうるので、接辞の差異が曖昧になってしまうという問題もある。

¹⁵ただしこの文をコンサルタントに見せたところ、全員が自然であると判断するわけではなかった。この容認度の差の要因は今後調査する必要がある。

さらに前節の最後で述べたように、動作主が明示されていない eventive 解釈をする例について、「非意図」の定義を拡張してしまっているという点も問題である。以上より先行研究における分類上の問題点は、他動詞語基において eventive 解釈を取るにも関わらず動作主が明示されていなかったり、自動詞語基の場合も含めて明示されている動作主が意図的に動作を行う解釈が求められる場合に、分類を行うことが出来ない点であるとまとめられる。

そこで本節はこの問題に対して、先行研究の非意図に関する記述である「突然であり、予期しなかった」という点に注目し、この性質は動作の非意図性に付随するものでなく独立したものであると考えることで、問題が解決できると主張する。具体的に以下ではこのように非意図の2つの性質を独立したものであると仮定することによって、自動詞語基においてこれまで非意図と分類されてきたものは厳密には「予期しなかった事態」を表していることを示す。なお後で説明するように「予期しなかった事態」であるという用法は厳密な意味での「予期」とは異なるため、「認識との相違」用法と呼ぶ (cf. (2-32))。次にこの議論を他動詞語基に適用することで、他動詞語基において非意図と呼ばれてきた用法は動作が非意図的に行われたという狭い意味での「非意図」と、ある事態が話者の予測に反して生じたという「認識との相違」に分けられることを主張する。

本節の構成は以下の通りである。2.3.2 節では調査対象となる接頭辞 ter+ 自動詞語基を確認し、その後実例を観察する。2.3.3 節では観察によって得られた接頭辞 ter-が「認識との相違」を表すという分析を他動詞語基の接頭辞 ter-文に適用することによって、上に挙げた問題を解決できることを示す。最後に 2.3.4 節では、新しく定義した認識との相違用法と完了用法との関係を考える。

2.3.2 調査

調査対象の選出に当たって、表 2.1 は Sneddon et al. (2010: 118) の挙げている接頭辞 ter+ 自動詞語基をリスト化したものである。

表 2.1 Sneddon et al. (2010: 118) による接頭辞 ter+ 自動詞語基のリスト

Indonesian ter-Verb	English translation
tertidur	fall asleep
tergelincir	slip
terbangun	wake suddenly
terdiam	fall silent
terkejut	be startled
tertegun	stop suddenly
terlompat	jump suddenly
terbakar	catch fire
terpekik	scream suddenly
tersandung	stumble

ここから頻度を基に調査対象を決める。次の表 2.2 は MALINDO Conc 内の頻度順に表 2.1 の動詞を並び替えたものである。

表 2.2 ter-派生自動詞の頻度

Indonesian ter-Verb	token size
terkejut	686
terbakar	508
terbangun	360
tertidur	337
terjatuh	271
terdiam	180
tertegun	77
tergelincir	73
tersandung	40
terduduk	38
terpekik	12
terlompat	0

このうち *terkejut* 「驚く」と *terbakar* 「燃やされる」は頻度の高さにかかわらず調査対象外としている。まず *terkejut* は *kejut* が拘束語根であり、また感情動詞 (cf. 2.4 節) であるために代表的な自動詞とはみなしにくく、対象から除外した。次に *terbakar* であるが、これは語基の *bakar* が他動詞ともみなすことが出来るためである。(2-22) では動詞 *bakar* は *Pemrotes di Irak* 「イラクの抗議者」を主語に、*rumah tiga anggota Parlemen* 「三人の国会議員の家」を目的語にとっているため、*bakar* は他動詞である。そのため *terbakar* は必ずしも *ter-*派生自動詞には属するとはいえず、本節の対象からは外す。

(2-22) *Pemrotes di Irak bakar rumah tiga anggota Parlemen.*
 protester in Irak burn house three member parliament

「イラクの抗議者は三人の国会議員の家を燃やした」 [ANTARANEWS]

以上より調査対象として *terbangun* 「起きてしまう」、*tertidur* 「寝てしまう」、*terjatuh* 「落ちてしまう」を選択した。

これより実際に自動詞語基でありながら非意図と見做すことが難しい例を検討していく。(2-23) は *tertidur* の例である。ここでは語り手である *aku* 「私」は、*dia* 「彼」によって行われた寝るという動作が意図的に行ったものかどうかを正確に知ることができない。そこでこの場合の接頭辞 *ter-* は彼が非意図的に寝たという描写を行うためではなく、彼が寝るべき時ではないにも関わらず寝てしまったという話者の認識との相違を表現していると解釈することによって接頭辞の使用の動機を与えることが出来ると思う。

(2-23) (*Aku nggak tahan lagi, aku putuskan untuk menghadapinya*)

dan menyatakan soal sebelum=nya, tapi dia langsung ter-tidur.

and AV.ask problem before=3 but 3SG immediately TER-sleep

「(私はもう耐えられなくなって、彼と向かい合うことに決めた)。そして本当の問題について尋ねたのだが、彼はすぐに寝てしまった」

<http://adbmcadangan.wordpress.com/buku-IV-10/>

こうした話者の認識の入り込みは主語が無生物、つまり非意図性を動作主に還元できない例の場合に一層明らかになる。以下は *terjatuh*, *terbangun* の例である。

(2-24) *Kejadian bayi ter-bangun setelah di-nyatakan meninggal dunia sempat event baby TER-wake after UV-declare AV.leave world chance meng-hebohkan publik India.*

AV-upset public India

「すでに死亡宣告を受けた赤ちゃんが目を覚ました出来事は、インド民衆を騒然とさせた」

[Tribunnews]

(2-25) *(Burke melihat tepat pada waktunya untuk menyaksikan)*

sebuah batang kayu yang ter-jatuh melalui kaca depan mobil=nya.

CLF stick wood REL TER-fall through glass front car=3

「(Burke が見たちょうどその時)、車のフロントガラスを通して、木材が落ちてしまったのをみた」

http://id.wikipedia.org/wiki/Final_Destination_2

これらの例では主語がそもそも意志性を持たない。(2-24) の場合はすでに死んだものとされているために意志性を持たないと見做すことが出来ると思う。そのため主語がある行為を非意図的に行ったことを表すために接頭辞 *ter-*が使われているという説明は適切ではない。本稿ではこれらの例において顕在化している意味は通常起こらないことが起こったという認識との相違であると主張する。(2-24) では起き上がるはずのない赤ちゃんが起きたという認識との相違が現れている。(2-25) であれば本来落ちるべきではない木材が落ちてしまったという点で、認識との相違の意味が表れていると言える。

最後に、動作主が意図的に動作を行っている場合でも接頭辞 *ter-*が使われている例も存在する。(2-26) は (2-21) の再掲であるが、*mencoba* 「試す」という語があることから起きるといふ動作は意図的に行われていると判断できる。

(2-26) *Dengan se-kuat tenaga men-coba ter-bangun meski di-bantu oleh berbagai with one-strong power AV-try TER-wake though UV-help by several peralatan medis.*

equipment medical

「種々の医療機器に助けられてはいたが、精一杯起きようと試みた」 (= (2-21))

接頭辞 *ter-*が使われている場合でも意図的に行為を行ったという解釈が出来ることは *berani* 「勇敢にも」や *sengaja* 「わざと」など、意図的の行為を表す語と接頭辞 *ter-*が共起できることが

らもわかる。(2-27) は子供の鳥が飛べるようになるためには、落ちるように何度も飛ぶ練習をしなければならぬことを受けて、人間も鳥を見習う必要があることを述べた文である。そのためこの場合の落ちるという行為は鳥が能動的に行っていると解釈できる。

(2-27) *Kita harus lebih hebat daripada se-ekor burung yang berani*
IPL.INC have.to more wonderful than one-tail bird REL courageous
ter-jatuh ke permukaan lalu men-coba berada lebih tinggi dari permukaan.
TER-fall to surface then AV-try exist more high than surface
「私たちは、勇気をもって地表へ飛び下りて地表よりも高いところにしようとする鳥よりも、立派でいなければならない」 [Pisang Kuning]

同じように、(2-28) の場合接頭辞 *ter-*と *sengaja* 「わざと」が共起しており、ある選手がサッカーの試合中に PK を獲得するためにペナルティエリア内で故意に転んだという意図的な動作を表している。

(2-28) *Pada laga kemarin, dia sengaja ter-jatuh di area penalti.*
on league yesterday 3SG on.purpose TER-fall in area penalty
「昨日のリーグ戦で、彼はペナルティエリアの中でわざと転んだ」 [Okezone]

これらの例のように、動作が意図的に行われているにも関わらず接頭辞 *ter-*が使用されている例は従来の非意図用法という分析では説明できない。しかし本稿で主張するように自動詞語基に接頭辞 *ter-*が付いた場合に顕在化する意味を「認識との相違」とであると想定することで説明が可能になる。例えば、(2-26) は病院のベッドで息の切れた状態で寝ていたところに訪れた見舞いの友人に対応するために起きようとする、という文脈である。例文でも明示されているように、医療機器につながれているという状態であり、通常であれば起き上がるのが難しいといえる。つまりそのような状況であるにも関わらず起き上がったという認識との相違を表わすために接頭辞 *ter-*が使用されていると考える。同じように次の (2-27) では、子供の鳥が巣から落ちようすることは人間の慣習には反することである。(2-28) は前述のようにサッカーの試合中の出来事で、故意に転ぶことは反則とされるので、基本的には避けられる行為である。これらの文もそうした認識と反する事態が起こってしまったために、接頭辞 *ter-*が使用されていると解釈できる。

以上、自動詞語基に接頭辞 *ter-*が付いた場合その主語は無生物であったり、有性物であっても動作が意図的に行われる例があることを確認し、動作の意図性を問題とするのではなく、接頭辞 *ter-*が「認識との相違」を表すと考えることで一貫した現象の説明ができることを主張した。

最後に主語が一人称である場合を確認する。主語が一人称の場合、一見接頭辞 *ter-*が動作の非意図性を表しているように見える。しかし上記の観察を踏まえれば、一人称の場合は話者としての「私」と動作主としての「私」が重なり、話者の認識という側面が見えにくくなっていると分析することができる。つまり一人称の場合は意図的だが認識と違うという事態を想定しにくいため、自動的に解釈が非意図的行為に限定される。(2-29) は *tertidur* の例であり、本来は意図性に関しては中立であるが、実質的に「私」が意図しないにもかかわらず寝てしまったことを表している。

(2-29) *Karena kelelahan aku ter-tidur di muka komputer.*
because tired 1SG TER-sleep in surface computer

「疲れから、私はパソコンの前で寝てしまった。」

<http://aangantengxxx.blogspot.com/>

terbangun, terjatuh についても同じことがいえる。(2-30) では 10 分という短い時間で起きていることから、起きるといふ行為が意図しないものであったことがわかる。(2-31) もカブがあまりにも大きかったために、勢い余って意図に反して転んでしまったことが読み取れる。

(2-30) *Kurang lebih sepuluh menit kemudian aku ter-bangun.*
less more ten minute then 1SG TER-wake

「それからだいたい 10 分で私は起きてしまった」

<http://adikine.wordpress.com/2009/03/20/cerita-asik/>

(2-31) *Saya berusaha keras meng-ambil lobak itu tapi lobak itu terlalu besar dan saya ter-jatuh.*
1SG manage hard AV-take turnip that bur turnip that too big and

1SG TER-fall

「私はそのカブを抜こうとしたが、そのカブはあまりにも大きくて、私は転んでしまった」

<http://atamalaubanget.blogspot.com/>

以上自動詞語基の場合の接頭辞 ter-の機能を「認識との相違」とすることで「非意図」とするだけでは捉える事のできない例に対して説明が可能であることを見た。

最後に、2.3.1 節では「予期しなかった」と「認識との相違」を区別する旨を述べた。これは予測を示す語と接頭辞 ter-が両立可能であるためである。次の文では pasti 「きっと」という予測を表わす語と terjatuh 「落ちてしまう」が共起している。この文はモーターレース中にバイクから落ちること避けられないと述べる文脈である。

(2-32) *Cepat atau lambat Anda pasti ter-jatuh.*

fast or slow 2SG certain TER-fall

「遅かれ早かれ、あなたはきっと落ちる」

[CNN Indonesia]

通常バイクから落ちることは望まれないことであり、バイクから落ちることはこの点で「認識との相違」があるため接頭辞 ter-が使われている。しかし一方でそうした望まない事態が起こってしまうことを「予期」することは可能である。以上より、本稿では先行研究において「予期」という用語が使われていた部分に対し、「認識との相違」という用語を用いることとする。

2.3.3 接頭辞 ter-受身文への適用

ここまで、自動詞語基に接頭辞 ter-が付いた場合に現れる意味を「認識との相違」と捉え直すことで、用例に対してより正確な説明を与えられることを見た。本節ではこの分析を他動詞語基の場合にも適用可能であることを示す。他動詞語基の場合、先行研究では「非意図」は動

作主、つまり斜格項に置かれる名詞の指示対象の非意図性を表すとされてきた。(2-33) を例にとるとこの例は文脈上動作主の蹴るという行為は意図的に行われたと考えられるため、従来の「非意図」という考え方では説明ができない例であった。

(2-33) *Terakhir kali ter-lihat, kapal Big Mom ter-tendang oleh Marco ke lautan*
last times TER-see ship Big Mom TER-kick by Marco to sea
Wano.
Wano

「前回見たように、Big Mom の船は Marco によって Wano(ワノ国) の海に落とされた」
(=2-19))

しかしここでの接頭辞 *ter-*が「認識との相違」を表すと考えれば、説明が可能になる。この例にある Big Mom というキャラクターは非常に強い力を持っており、通常であれば目的地に船が上陸するのは容易い行為である。しかしそこに同程度の強さを持つ Marco というキャラクターが突然現れ、その上陸を阻止する。ここから Big Mom の船が蹴落とされたことは話し手にとっては想定外のことで、そこから接頭辞 *ter-*が使用されているとすることができる。このように他動詞語基に「認識との相違」用法を適用することで、動作主が意図的に動作を行った場合を説明することができるようになる。他にも例えば (2-34) では *ayah* 「父」が誤って足を踏んだという点で非意図的行為を表すという説明が与えられてきた。

(2-34) *Kaki saya ter-injak oleh ayah.*
foot 1SG TER-step by father

「私の足は父に踏まれた (私の父は無意識のうちに私の足を踏んでしまった)」
(=2-9))

しかし *oleh* で示される動作主が動作を意図的に行った場合もあり (Wee 1995: 127–128)、その説明をすることは先行研究の動作の意図性を中心に考える分析では難しかった。しかし本稿では他動詞語基の場合は、動作主の非意図性を表す非意図用法と、事態の生起が想定に反して生じたという認識との相違用法の二つの用法が別個に存在すると見做すことで説明を与える。つまり、(2-34) では従来のような *ayah* 「父」の非意図的行為を表すとする解釈と、*kaki saya* 「私の足」が蹴られたことが予測に反する行為であったという事態を表している解釈があると考えられる。後者の場合動作主の意図性に関しては中立である。同様に (2-35) は、Taro が間違っ
て私の本を持って行ってしまったことを表す場合が多い。しかし Taro が悪意を持って故意に本を持って行った可能性も存在する。この場合私の本が持っていかれたという事態は話者、つまり *saya* 「私」の予測に反する行為を表していると分析できる。

(2-35) *Buku saya ter-bawa oleh Taro.*
book 1SG TER-take by Taro

「私の本を太郎が偶然持って行ってしまった」
(=2-11))

なお自動詞語基の場合と同様、動作主が一人称である場合は非意図用法と認識との相違用法の境界が曖昧になる。(2-36) では動作主は *saya* 「私」である。この場合は認識との相違用法、

つまり「ペンを私が使う」という認識がなかった場合そのことが直ちに私の非意図的動作を表すため、非意図用法と認識との相違用法の違いが不明瞭になっている。

- (2-36) *Maaf, pena=mu ter-pakai oleh saya.*
 sprry pen=2SG TER-use by 1SG
 「すみません、あなたのペンは私が使ってしまった」 (=1-5)

さらにこのように認識との相違用法を非意図用法と分けることには、動作主が明示されていない例に対して定義を拡張する必要性がなくなるという利点がある。(2-37)のような例は先行研究において動作主性の不在というように非意図意味を拡張することで説明を行っていた (cf. 2.2 節)。しかし本稿ではこの例は「タクシーから投げ出されること」は通常起こらないと考えられており、そうした事態が生じることは認識と異なるものであったためと説明する。

- (2-37) *Waktu tabrakan terjadi sopir ter-lempar dari taksi.*
 when collision occur driver TER-throw from taxi
 「衝突が起こった時、ドライバーはタクシーから投げ出された」 (=2-15)

ここまで前節の自動詞語基における接頭辞 *ter-*の「認識との相違」用法の分析を受け、他動詞語基に分析の適用を行うことで、より一貫した説明が可能となることを見た。

2.3.4 完了との関係

前節では認識との相違用法と非意図用法は異なる分類であることを論じた。本節では両用法と完了用法との関係を考える。本稿では、以下の図 2.1 のような関係性を設定する。まず大きく完了と非意図に分け、完了の下に単純な結果の状態継続を表す結果状態用法と認識との相違を位置づける。結果状態用法は先行研究における完了用法と同義であるが、状態を表していることをより明瞭に表すために結果状態という用語を採用した。

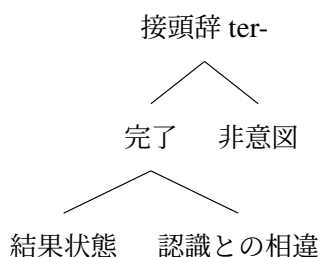


図 2.1 完了・認識との相違・非意図の体系

最初の分岐である完了と非意図の選択は、事態の生起・変化に注目するのか、動作の非意図性に注目するのかで変化する。この変化の要因については、3.3.2 節で詳しく説明を行う。ここではそれぞれの意味が具体的に文の中でどう反映されるかを確認する。一つ目の分類である完了は、この時点では必ずしも状態的解釈であるとは限らない。つまり、stative 解釈である (2-38) や eventive 解釈である (2-39) ような文は両方とも完了用法の一部とみなす。

(2-38) *Sayur-sayuran ini ter-potong.*
 vegetable.RED this TER-cut
 「この野菜類はカットされている」 (=(2-2))

(2-39) *Waktu tabrakan terjadi sopir ter-lempar dari taksi.*
 when collision occur driver TER-throw from taxi
 「衝突が起こった時、ドライバーはタクシーから投げ出された」 (=(2-15))

そして完了は「結果状態」と「認識との相違」と細分類を持つ。結果状態とは前述のように、ある動作の結果が継続していることを表し、(2-38) がそれにあたる。一方で、認識との相違は(2-39) のような文である。ここでは「ドライバーがタクシーから投げ出されることは予想していない事態であった」という前提を読み込むことになる。

一方、非意図用法は「動作主が非意図的に行為を行った」ことを表す。そのため非意図用法は(2-40) のように動作主が明示されている場合に限られる。(2-40) では ayah 「父」が oleh によって標示されているため、非意図的に踏むという動作を行ったという解釈が可能になる。

(2-40) *Kaki saya ter-injak oleh ayah.*
 foot 1SG TER-step by father
 「私の足は父に踏まれた (私の父は無意識のうちに私の足を踏んでしまった)」 (=(2-9))

補足として、本稿は接頭辞 *ter-* が使用されている文があった場合にその文の用法が一義的に決まることを主張するわけではない。例えば(2-40) では前節で見たように非意図と認識との相違の両方の解釈が考えられる。「父が非意図的に私の足を踏んでしまう」という非意図的解釈と、父の意図性とは無関係に「話者である私の予測に反して足を踏まれるという事態が起こった」という認識との相違の解釈がある。詳しくは3章の3.3.2節で説明するが、両者は事象構造内の認知的に際立つ場所の違いで生じる。簡潔に述べれば動作主の非意図性が際立つ場合には非意図の意味、事態の生起・変化が際立つ場合には認識との相違の意味が生じる。

次に、結果状態用法と認識との相違用法を同じカテゴリに含める妥当性について検討する。様々な言語において、状態変化や結果状態を表す標識が同時に認識との相違ないしは意外性 (mirativity) の意味をも表す場合があることが指摘されている。例えば、英語の *get* 受動文はその一つである。

(2-41) “I couldn’t help it, Mickie. My car got stolen.”
 “Your car got stolen?” She gave an exasperated sigh. “There’s hardly anybody left in the city. How the hell did your car get stolen?”
 “I parked it at Jabril’s muffler shop while we were up at the hospital. Somebody must have needed a way out of town.” (志澤 2016: 21–22)

上の(2-41)において、*get* 受動文は「車が盗まれること」は通常であれば想定しない事態であるため、そうした意外性を表すために使用されているとされる。志澤 (2016: 28) は *get* がコ

ピュラとして機能する場合に状態変化を表すことから¹⁶、「get 受け身文は、主語の状態変化に焦点を当てると同時に、主語に対する話し手/聞き手の知識の変化を前景化する」と結論付けた。Soh (2009) は同じように認識との相違という意味は状態変化という意味と表裏一体であることを北京語の文末詞 *le* を観察することで示した。重要な点は、こうした北京語の分析が他の言語における認識との相違と状態変化の両方を表す標識へ分析が拡張できる可能性を示した点である (Soh 2009: 654)。実際に野元 (2011) はマレー語への適用可能性を示唆している。

北京語の完了の aspekts 的意味を持つ文末詞 *le* は「状態変化」と「予測に反する」という意味を表すことができる (Soh 2009: 629–637)。Soh (2009) はこうした二つの意味に関して、文末詞 *le* が使われることである命題 *p* の否定 $\neg p$ が前提として想起され、その前提を発話者が受け入れるか却下するかで表出する意味が分かると主張した。(2-42) は「状態変化」が、(2-43) は「予測に反する」が表出した例である。

(2-42) *Ta xiang-∅ ta de baba le.*
 he resemble-ASP he POSS father LE
 「(以前は似ていなかったが、) 彼は父に似ている」 (Soh 2009: 645)

(2-43) *Zhe-pian xigua hen tian le. Bu bi jia tang le.*
 this-slice watermelon very sweet LE no need add suger LE
 「そのスイカはとても甘いです (想定と違って)。砂糖を加える必要はありません (想定と違って)」 (Soh 2009: 646)

こうした状態変化ないしは結果状態と、認識との相違の関係性について、Soh (2009) の分析を確認する。まず Soh (2009: 642–643) は文末詞 *le* を「変化」を表す標識と定義した。そして文末詞 *le* を使用する場合には以下のプロセスを踏んでいるとする。

- 「発話時には *p* ではない」という前提を想定する
- 発言後の前提において、発話前の前提を取り込むか排除するを選択する
- 命題 *p* を発する (cf. Soh 2009: 642)

このうち二番目のプロセスが重要であり、前提の取り込みの有無によって文末詞 *le* の持つ「変化」の場所が移動する。そしてその変化の場所の違いが二つの意味への分化を引き起こしていることを論じている。具体的には以下のように説明される。まず、ある時間を t と表すとし、発話の時間を t_s とし、それより前の時間を t_i 、後の時間を t_j と定める。そして $t_{i/j}$ におけるそれぞれの談話の共通基盤を *common ground_{i/j}* とする。この設定を基に、状態変化と認識との相違の差を説明したものが表 2.3 と表 2.4 である。両者は発話以前 t_i に $\neg p$ という前提が存在し、 t_s でそれと反対の *p* という発話がなされるという点では同じである。異なる点は以下の表において「変化」がどこで生じているかである。状態変化を表す表 2.3 では、P2 から P3 の間で変化が起こっている。ここで (2-42) を例にとり、「発話以前は彼は父と似ていなかった」という前提がある場合に、「彼は父と似ている」という命題を発話することを考える。この場合、

¹⁶志澤 (2016: 28) によればロングマン現代英英辞典において *get* のコンピュータ的な意味として ‘to reach a particular state or condition’ という意味が挙げられている。

「彼は父と似ていない」という前提は話し手と聞き手で共有されている正しいものであり、「彼は父と似ている」と発することは実際に $\neg p$ という状態から p という状態に変化したことを表していると思倣することができる。

表 2.3 状態変化の *le* のスキーマ表示

common ground _i at t _i	common ground _j at t _j
P1: $\neg p$ before t _s [presupposition]	P2: $\neg p$ before t _s [acceptance of presupposition]
	P3: p at t _s [assertion]

一方で認識との相違を表す *le* の場合は、前提の間で変化が生じることになる(表 2.4)。この場合、発話をする際にはその後の前提に変化が生じることが含意される。(2-43) を例にとると、発話以前の「スイカは甘くない」前提から「スイカは甘い」という前提に変化している。その後「スイカは甘い」という発話をしている。つまり、前提と命題が異なるのは実際に変化が起こっているわけではなく、前提が変化しているためである。このように話者が P1 における元々の前提を否定し、それと反対の命題を述べる場合、発話前の前提 (P2) と命題 (P3) は一致しているため、状態変化を話者が意図しているわけではない。ここで意図しているのは、前提の変化、つまり話者間で共有されている認識が変化したということであり、ここから認識との相違の意味が表出することになる。

表 2.4 認識との相違の *le* のスキーマ表示

common ground _i at t _i	common ground _j at t _j
P1: $\neg p$ before t _s [presupposition]	P2: p before t _s [rejection of presupposition]
	P3: p at t _s [assertion]

野元 (2011) はこうした Soh (2009) の分析はマレー語の接頭辞 *ter-*にも適用可能であると述べた。同じように、インドネシア語にもこの分析が当てはまると考えることで、接頭辞 *ter-*における結果状態と認識との相違を同列に扱うことができる。

以上本節では完了、認識との相違、非意図という3つの意味の関係を整理した。

2.4 自発

ここでは *teringat* 「思い出される」といった、具体的には感情・認識などを表す動詞の分類について考える。1.1 節でも述べたように、これらの語は自発などといった名称で、一つの独立した分類をなすと思倣される場合がある (cf. (2-44))。

- (2-44) *Pada waktu sendirian, pengalaman masa kecil kembali ter-ingat.*
 on time alone experience age small again TER-remember
 「一人でいると、小さな頃のことが思い出される」 (= (1-7))

しかし先行研究によって異なった分類がされており、(i) 別カテゴリーを設ける立場と (ii) 非意図の下位分類と見做す立場が存在する。次の表 2.5 は感情・認識などを表す動詞の分類方法毎に先行研究を分けたものである。なお表内で用いている「非意図」は動作の非意図性と認識との相違を合わせた、先行研究で定義されている広い意味での非意図用法を指す。

表 2.5 先行研究における感情・認識系動詞の扱い

(i) 別カテゴリーを設ける	(ii) 自発を非意図の下位分類とする
Kridalaksana (1989)	ルシアナワティ (1998)
Leow (2001)	Sneddon et al. (2010)
湯浅 (2002)	Tampubolon (1983)
Goddard (2003)	Wee (1995)
Wouk (1980)	Winstedt (1913)

まず、(i) の立場をとるものは以下のような例を、独立したカテゴリーを形成するものとして認めている。

- (2-45) *Sering aku ter-kenang akan nenek=ku yang telah meninggal.*
 frequently 1SG TER-recollect about grandmother=1SG REL already die
 「よく、私は亡くなったおばあちゃんのことをふと思い出す」
 (Kridalaksana 1989: 48)

- (2-46) *Ia sangat ter-kejut men-dengar berita kematian paman=nya.*
 3SG very TER-surprise AV-hear news death uncle=3
 「彼はおじさんの訃報を聞いてとても驚いた」 (Kridalaksana 1989: 48)

- (2-47) *Saya sangat ter-tarik pada kebudayaan Jawa.*
 1SG very TER-pull on culture Jawa
 「私はジャワの文化にとっても引かれる」 (湯浅 2002: 10)

その他、*tertawa* 「笑う」などの固定化した表現も同様に自発という独立したカテゴリーに分類されている。これらは語基の動詞の意味によって分類が行われており、感情や認識などを表す動詞が語基の場合に自発と分類される (Wouk 1980: 86)。例えば (2-44) や (2-45) にある *teringat* 「思い出される」、*terkenang* 「ふと思い出す」などの動詞は認識動詞、(2-46) や (2-47) の *terkejut* 「驚く」、*tertarik* 「引かれる、惹かれる」は感情動詞である。どれも文全体としては、「主語の関与し得ないある状況があり、それによって主語がひとりでに何らかの心象的影響を受ける」(湯浅 2002: 10)、“states induced by outside influences which come into a man’s head”(Winstedt 1913: 87)「各人の頭に浮かぶ外的影響によって誘発された状態」(筆者訳)、“involuntary reaction

to outside stimuli on the part of an experiencer”(Wouk 1980: 86)「経験者に対する刺激への無意識の反応」(筆者訳)といった意味を表すとされる。またそうした意味から分類名を「自発」ないしは“spontaneous”と呼ぶことが多い(湯浅 2002; Kridalaksana 1989)。ほかにも突然の動作(Leow 2001: 292)や、“Momentary perceptual / cognitive experience”(Goddard 2003: 290)のように別の呼び方をする場合もあるが、いずれも分類の際には上記の意味的な性質を重視している。

一方(ii)の立場は、(2-45)-(2-47)のような例に対して独立した分類を設けることなく、非意図の下位分類とするか、もしくは区別を行っていない。この立場は以下の Sneddon et al. (2010)の記述に代表される。

The word ‘accidental’ is a cover term for a variety of uncontrolled actions and it is not appropriate in all cases; depending on the particular verb and the context other terms may be more appropriate, such as ‘unintended’, ‘agentless’, ‘involuntary’, ‘sudden’.

(Sneddon et al. 2010: 117)

「偶然」という語は制御できない種々の動作に対する汎用的な語であるが、あらゆる場合に適切であるわけではない。特定の動詞や状況に応じて、「非意図」「動作主不在」「無意識」「突然」などといった他の用語が適切となる」(筆者訳)

つまり「非意図」に当たる accidental というラベルを用いつつ、「自発」に相当するような involuntary や sudden という意味がその中に存在すると述べる。事実、teringat「思い出される」のような動詞はこの accidental に分類されている(Sneddon et al. 2010: 120)。同様に Tampubolon (1983: 133)は、teringat 及び terkenang「ふと思い出す」を accidental と呼ぶ。ルシアナワティ(1998)も非意図¹⁷と自発を同じカテゴリーに分類する立場をとる。teringat や terkejut のような動詞には触れられていないが、(2-9)のような例を指し「自発文」という名称を用いていること、加えて「誰かによって無関係に、無意識的にある出来事がいつの間にか起こった」(ルシアナワティ 1998: 99)と非意図用法を説明していることからおおよそ自発と非意図を同じ意味で捉えていることがわかる。

以上先行研究の記述を概観した。本稿ではこのうち自発用法という分類を別立てしない(ii)の立場をとる。ただし先行研究では自発用法は非意図用法と同じとされていたが、本稿では完了用法の下位分類であると考え。まず非意図用法と異なる分類とする理由は、本稿での非意図用法は「動作主の非意図的行為」という従来より狭い定義を用いているためである。例えば(2-48)は驚かすという行為の動作主が無生物であるため、「3つのことは(その意志に反して)彼を驚かせてしまった」というような非意図用法としては解釈できない。

(2-48) *Ia ter-kejut oleh tiga hal.*

3SG TER-surprise by three thing

「彼は3つのことに驚かされた」

http://id.wikipedia.org/wiki/Garis_waktu_agama_Buddha

¹⁷ルシアナワティ(1998)は「不作為」という用語を用いている。

次に完了用法の一部とする理由について考える。先行研究では自発用法は「主語がひとりでに何らかの心理的影響を受ける」(湯淺 2002: 10) などの意味を表す用法とされた。こうした動詞が表す事態とは、全体として経験者の知識の変化や感情の変化を表していると言い換えることができる。ここから自発用法は、ある事態の変化・生起に着目したうえで、その事態が話者の想定と異なることを表す認識との相違用法と近い性質をもっていると考えられる。ただし認識・感情動詞は必ずしも認識との相違の意味を含意するわけではない。(2-49) は経験者を表わす要素である *para pecinta* 「愛好家たち」は想定と違って覚えていることを必ずしも意味せず、用法としては結果状態であると言える。

- (2-49) *Salah satu karya John Lennon, yang masih ter-ingat oleh para pecinta musik dunia ialah lagu berjudul Imagine.*
 one.of one work John Lennon REL still TER-remember by PL lover
music dunia ialah lagu berjudul Imagine.
 music world COP song entitled Imagine
 「未だ世界の音楽愛好家が覚えている John Lennon の作品の一つに、Imagine というタイトルの曲がある。」 [Journal Soreang]

つまりこれまで見た他の動詞と同じように前提の取り込みの有無 (cf. 2.3.4 節) で結果状態か認識との相違用法とが交替する。そのため特別に自発という分類を建てる必要はなく、完了用法の一部であると思えば良いと考える。

ただし自発用法とされてきた例は、構造変化に関する制約が緩いという点で特異な統語的特徴を持つことも指摘されている。1.1 節で述べたように、接頭辞 *ter-*が自動詞的意味を持つ語基に付いた場合は統語的变化が起こらない一方で、他動詞的意味を持つ語基の場合は受身文を形成する。しかしこれら認識を表す動詞は、どちらの場合も存在する。つまり動作主が主語に置かれる場合と、*oleh* によって標示される場合の両方が確認できる。

- (2-50) a. *Saya ter-ingat akan keluarga.*
 1SG TER-remember about family
 「私は家族のことをふと思い出した」 (Sneddon et al. 2010: 120)
- b. *Keluarga itu ter-ingat oleh saya.*
 family that TER-remember by 1SG
 「私はその家族のことをふと思い出した」 (Sneddon et al. 2010: 120)
- (2-51) a. *Sering aku ter-kenang akan nenek=ku yang telah meninggal.*
 frequently 1SG TER-recollect about grandmother=1SG REL already
 die
 「よく、私は亡くなったおばあちゃんのことをふと思い出す」 (=2-45)
- b. *Ini adalah momen yang akan selalu ter-kenang oleh saya.*
 this be moment REL will always TER-recollect by 1SG
 「これは私がいつも思い起こすことになるであろう瞬間です」 [REPUBLIKA.ID]

(2-50a) と (2-51a) は経験者が主語になっている一方で、(2-50b) と (2-51b) は対象が主語になっている。

しかし、こうした点は自発を別立てする理由とはならない。これはこの構造変化に関するふるまいは実際には感情・認識動詞以外にも見られる一般的特徴であるためである。この点の詳細な考察は 3.4 節で行う。

2.5 可能¹⁸

ここでは可能用法を扱う。結論として二点のことを主張する。第一にインドネシア語の先行研究において可能と扱われてきたものには潜在系可能と実現系可能が存在する。第二に分類を別立てする必要があるのは潜在系可能のみであり、実現系可能は前述の「認識との相違」用法の一種であると見做す方がよいことを確認する。

先行研究においては以下のような文が可能の例として挙げられている。

(2-52) *Mobil se-mahal itu tidak ter-beli oleh saya.*
 car one-expensive that NEG TER-buy by 1SG
 「そんな高い車は私には買う余裕がない」 (Sneddon et al. 2010: 121)

(2-53) *Beban yang berat itu akhirnya ter-angkat juga.*
 burden REL heavy that finally TER-lift also
 「その重い荷物をやっと持ち上げられた」 (Kridalaksana 1989: 49)

(2-54) *Suara dosen tidak ter-dengar dari sini.*
 voice teacher NEG TER-hear from here
 「先生の声はここから聞こえなかった」 (Sneddon et al. 2010: 121)

一般に「可能」というカテゴリーは下位分類が想定される。例えば志波 (2020: 97) は日本語学における伝統的な可能の下位分類を以下の図 2.2 のようにまとめた。

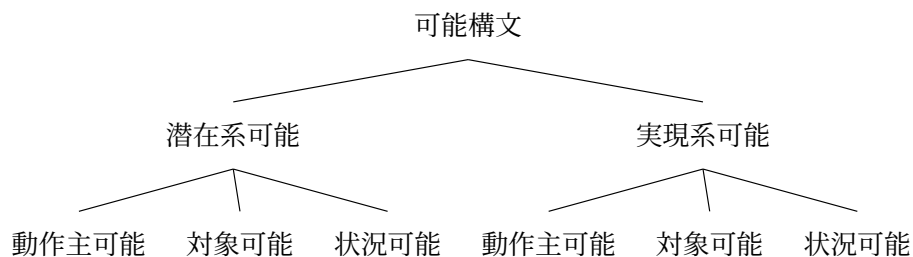


図 2.2 可能構文の分類 (志波 (2020: 97) を基に筆者が作成)

潜在系可能とは「時間軸に位置づけられずに、時間を超えて行為が実現する許容性があることを述べる可能」(志波 2020: 97)、実現系可能は「個別具体的な出来事として時間軸に位置づけられる可能で、事態が動作主の意図・期待通り実現すること」(志波 2020: 97)を表す。つま

¹⁸本節の一部は佐近 (2020c) の内容に基づいている。

り両者はある出来事が現実には生起しているか否かという「現実性 (factuality)」によって区別されると捉えることができる¹⁹。またその下位にあたる動作主・対象・状況可能は、ある状況が可能にさせる条件の所在により分類される。例えば動作主可能の「花子は部下の名前が覚えられない」であれば、可能/不可能の原因の所在は動作主である花子の能力である。

問題はインドネシア語研究において、「可能」という用語が潜在系可能と実現系可能の区別なく用いられてきた点である。例えば上記の (2-52) は原著訳が “I can’t afford to buy a car as expensive as that.” とされているように、潜在系可能と捉えられている。一方で (2-53) と (2-54) は、それぞれ持ち上げるという行為が実現したこと、聞こえるという行為が実現しなかったことを表している。つまり用例を見る限りでは潜在系可能と実現系可能の両方を可能として認めていることが分かる。

しかし、先行研究における可能という用語の説明を参照すると、基本的に接頭辞 *ter*-の可能用法を潜在系可能であると見做していることが確認できる。まとめると、可能用法とは「動作主の能力」に焦点があてられた用法であると考えられている。英文の後の括弧内の訳は筆者によるものである。

- These verbs indicate that the agent has the ability to perform the action.
(Sneddon et al. 2010: 120)
「これらの動詞 (= 可能用法の動詞) は動作主が動作を行う能力を持っていることを示す」
- One could say that there is an underlying concept of possibility, or a hidden modal in these sentences.
(Wouk 1980: 84–85)
「これらの文 (= 接頭辞 *ter*-の文) には、可能性の概念の内在や、潜在的なモードがあると言ったことが出来る」
- Abilitative *ter*-constructions express the notion that someone is able to do something. Unlike the perfective reading of the accidental constructions, we get an imperfective reading in abilitative *ter*-constructions.
(Soh 1994: 41)
「可能を表す *ter*-構文は誰かが何かをできるという概念を表す。偶然を表す *ter*-構文の完了読みとは異なり、可能を表す *ter*-構文では未完了の読みを得る」
- It has been claimed that *ter*- can indicate the Initiator’s ability to perform a particular action, (...).
(Wee 1995: 173)
「*ter*-は Initiator(cf. 4 章) の特定の動作を行う能力を指すと主張されている」

以下ではこうした用例と説明の齟齬について検討を行う。結果として二点を指摘する。一点目は実際に潜在的可能の用いられる範囲は極めて限られる点、二点目は接頭辞 *ter*-における「可能」は動作主の能力を表しているわけではない点である。

一点目について、潜在的可能が出示するのは否定の場合と、総称の場合に限られることを確認する²⁰。例えば否定辞を伴う (2-52) は買うことができないという潜在的可能の読みが可能で

¹⁹接頭辞 *ter*-と非常に似た機能を持つタガログ語の接辞 *ma*-においても、この現実性という概念を用いた分析の有用性が指摘されている (長屋 2019: 28)。

²⁰多くの言語で潜在的可能の読みは否定文に限定されることが指摘されている (Shibatani 1985: 828)。その理由については、3.3.2.2 節にある川村 (2012) の可能の意味表出の記述を参照されたい。

ある。他には以下のような文が挙げられる。(2-55)はDNAの損傷が避けられないという性質を持っていることを表す、潜在系可能の例である。

(2-55) *Kerusakan DNA oksidatif adalah salah satu hal yang tidak collapse DNA oxidative COP one.of one thing REL NEG ter-hindar-kan dari kehidupan sehari-hari.*
TER-avoid-CAUS from life daily

「酸化によるDNAの損傷というのは日々の生活において避けることのできないことの一つである」 [Brilio.net]

しかし一方で肯定文においてはすべての場合において潜在系可能の読みができるわけではない。これは文脈を整えるとより明瞭になる。terbunuh [ter+ 殺す]は通常結果状態の読み、つまり殺すという行為はすでに行われたという解釈しか許容されない。そのため(2-56)ではterbunuhを「殺すことができる」と潜在系可能の読みを行い、「失敗してしまった」という文を後続させることはできない。同じように、(2-57)では尻尾を踏んでしまったという行為が実現したという解釈しか許容されず、実際はその行為が完了していないといった文脈を続けることはできない。ここから肯定文の場合、接頭辞ter-における可能用法はある行為の実現を含意することが要求されるため、潜在的可能の解釈はされにくいと言える(cf. Alexiadou & Anagnostopoulou 2008: 34)²¹。

(2-56) * *Penjahat itu mudah ter-bunuh, tapi saya gagal.*
criminal that easy TER-kill but 1SG fail

「(意図した意味) その悪人は簡単に殺せる。しかし、失敗してしまった」 (作例)

(2-57) * *Ekor kucing itu mudah ter-injak karena ekor=nya panjang, tapi kali ini tail cat that easy TER-step because tail=3 long but time this tidak bisa di-injak.*
NEG can UV-step

「(意図した意味) その猫の尻尾は長いので、簡単に踏める。しかし今回は踏めなかった」 (作例)

ただし、本稿は肯定文に潜在系可能の読みが認められることを完全に否定するものではない。同じ動詞でも総称文と認められる文は、容認可能となる。

²¹ 「Xは～するのが難しい」という主語の属性を表す文も容認されない。次の例では猫が素早かったり、猫の尻尾が小さかったりするなどの要因でその猫の尻尾が踏みにくいという性質をもつという意味を表すことができないのに加え、mudah「簡単な」の場合と異なり、「難しかったが、踏めた」という動作の完了の解釈を行うこともできない。この問題は3.6節の今後の課題の箇所でも触れる。

* *Ekor kucing itu sulit ter-injak.*
tail cat that difficult TER-step

「(意図した意味) その猫の尻尾は踏むのが難しかった」 (作例)

(2-58) *Serangga mudah ter-injak.*

insect easy TER-step

「虫(というもの)は簡単に踏める」

(作例)

以上から、接頭辞 *ter-*が付与する「可能」の意味は以下のようにまとめられる。まず肯定文の場合は基本的に実現系可能のみが認められる。潜在系可能が認められるのは否定辞を伴う場合と、総称用法のみである。

次に二点目の問題である動作主の能力という点について考える。本稿ではインドネシア語における接頭辞 *ter-*によって表される可能は、動作主の能力を表していないと主張する。例えば接頭辞 *ter-*が能動文と受身文の両方を形成できるマレー語では(不)可能の理由が明示される場合には、その理由が「主語」に関して動作を(未)完結にさせるのに十分であるかどうかで容認度が異なる(野元 2011: 173–174)。

(2-59) a. **Saya tidak ter-baca apa yang di-tulis di sini kerana gelap.*

1SG NEG TER-read what REL UV-write in here because dark

b. *Apa yang di-tulis di sini tidak ter-baca oleh saya kerana gelap.*

what REL UV-write in here NEG TER-read oleh 1SG because dark

「暗くて、ここになんて書いてあるのか読めない」

(野元 2011: 173)

「暗くて」という理由は、(2-59a)では主語である「私」が行う行為を未完結にするには十分でないのに対し、(2-59b)では主語である「ここに書いてあること」を読まれない状態にするには十分である(野元 2011: 173)。そのため容認度の差が生じる。一方で人を主語にする(2-59a)も、主語の性質が事態の未完結性に影響を与えるように文脈を整えることで容認可能となる。(2-60)では、(2-59a)の「暗くて」という環境的要因の代わりに、「読むべきものがたくさんあって」といういわば動作主に付帯する要因を述べており、結果として動作主が主語である場合に容認可能となっている。

(2-60) *Saya tidak ter-baca apa yang di-tulis di sini kerana saya ada banyak*

1SG NEG TER-read what REL UV-write in here because 1SG exist many

lagi benda untuk di-baca.

more thing to UV-read

「私は、他に読むべきものがたくさんあって、ここに書いてあるものを読めない」

(野元 2011: 173)

以上のことは通常受身文のみをとるインドネシア語にも当てはまる。(2-61a)では理由「イタリア語を勉強したことがない」が主語である *tulisan ini* 「この文」を読まれない状態にすることは直接関係ないため容認度が(2-61b)に比べて低くなる。

(2-61) a. ?*Tulisan ini tidak ter-baca oleh saya karena saya tidak pernah*

writings this NEG TER-read by 1SG because 1SG NEG PRF

belajar bahasa Italia.

study language Italy

「イタリア語を勉強したことが無いので、私にはその文は読めない」 (作例)

b. *Tulisan ini tidak ter-baca oleh saya karena kamar=nya gelap.*

writings this NEG TER-read by 1SG because room=3 dark

「部屋が暗くて、私にはその文は読めない」 (作例)

ここからインドネシア語の接頭辞 *ter-*が表す可能とは、動作主の能力に起因するというよりも、主語に置かれている動作対象の性質が影響すると考えた方が適切であると言える。

最後に、実現系可能の位置づけを検討する。本稿では実現系可能の用法は認識との相違用法の下位に位置付けられると考える。これは実現系可能が「事態成立の困難さ」の含意を規定する場合が多いためである(川村 2012: 187)²²。事実、他言語において可能の意味を表すことのできる文法標識を記述する際に、こうした困難さの想定が使用の条件として課されている。韓国語の *-eci* ではその機能の一つとして可能表現を作ることができるが、その正確な意味は「当該事象の成立が予想外に容易あるいは困難だったとき、または当該事象が予想に反して成立しなかったときに用いられ、予想に反する事象展開の原因となる対象の属性を語るものである」(鄭 2020: 87) とされる。これはマレー語でも一部指摘されているところである。2.3.4 節でも触れたように、野元 (2011: 171–172) はマレー語の接頭辞 *ter-*は「断定内容 (assertion) となる *ter-*なしの文の表す命題 *p* の否定であるような前提 (presupposition) $\neg p$ 」を誘発させると述べた。次の (2-62) はこのように接頭辞 *ter-*の使用には困難さという想定が伴うことを表している。

(2-62) *Sungguhpun usia=nya sudah lanjut, dia masih ter-angkat kerusi yang*
although age=3 already advanced 3SG still TER-raise chair REL
berat itu.

heavy that

「彼はもう年だが、まだその重い椅子を持ち上げられる」

(シャイク オマー・山崎 1997: 170)

この例では接頭辞 *ter-*の使用によって「彼は重い椅子を持ち上げられない」という前提が想起され、そうした前提が否定されている。つまり能力/可能の意味を持つ場合でも「椅子が重いために持ち上げられないと思われたが、実際には持ち上げられた」というような意外性を伴う。そのため、*sungguhpun usianya sudah lanjut* 「彼はもう年だが」の部分がないと、そうした前提が想起されにくくなり容認度が落ちる(野元 2011: 171)。

インドネシア語においても、野元 (2011) のマレー語の分析が当てはまることを確認する。例えば、次の (2-63) は実現系可能の解釈を意図しているが、容認度は低い。

(2-63) ? *Kecoak itu mudah ter-injak. Kecoak itu langsung mati.*

cockroach that easy TER-step cockroach that immediately die

「そのゴキブリは簡単に踏めた。そのゴキブリはすぐに死んだ」 (作例)

この容認度の低さは、*mudah* 「簡単に」という単語が接頭辞 *ter-*の実現系可能の読みに伴う「命題の否定の前提」ないしは事態成立の困難さの想定と合致しないためである。そのため、次

²²川村 (2012) は日本語のラル形の使用には事態成立の困難さの含意が必ずしも伴わないことも指摘している。

のように「簡単に」という語を使用しなかったり、使用した場合でも文脈をさらに整えることで容認される文が作られる。(2-64)は *akhirnya* 「やっと」という語が挿入されており、「なかなか踏むことができない」という前提が想起される。同じように (2-65) では *tidak diduga* 「思っていたのとは異なる」と述べることで「命題の否定の前提」を想起させ、接頭辞 *ter-*が表す内容との合致が行われている。

(2-64) *Kecoak itu akhirnya ter-injak.*
cockroach that finally TER-step
「そのゴキブリはやっと踏むことができた」 (作例)

(2-65) *Tidak di-duga, kecoak itu mudah ter-injak.*
NEG UV-guess cockroach that easy TER-step
「思っていたのとは異なり、そのゴキブリは簡単に踏めた」 (作例)

以上のように実現系可能を「命題の否定の前提」の想起と捉えると、2.3 節で述べた「認識との相違」用法の一部であると考えることが出来る。ただし本稿では、単に話者の認識と異なる事態が起きたことと、ある動作を意図的にしようとした結果として事態が成立したことを区別し、前者を「偶発」、後者を「実現系可能」と呼ぶこととする。具体例を確認する。日本語訳で示されているように、(2-66) は実現系可能読みと偶発読みの二つの読みが可能である。

(2-66) *Kecoak itu ter-injak.*
cockroach that TER-step
「(実現系可能読み) そのゴキブリを踏むことができた」
「(偶発読み) そのゴキブリを踏んでしまった」 (作例)

この二つの読みは「話者の想定と異なる」事態を表すという点で共通している。両者の違いは意図性の有無である。実現系可能読みであれば、すでに確認したように実現の意外性を含意するのであり、踏むという意図があるが「なかなか踏めそうにはないだろう」という想定が存在し、そうした想定を否定という形で行為実現が描かれる。偶発読みでは「踏むとは思っていなかった」という想定に反してゴキブリを踏んでしまったことが表されている。このように実現系可能の場合は動作主の意図性が含意される必要がある。一方で、偶発の読みでは話者に行為を起こす意図があったかどうかに関しては中立である。「踏む意図はなかったが踏んでしまった」という場合にも、「ゴキブリがいることに気づいておらずそもそも踏むという行為を意識していなかった」場合にも使われる。

以上本節では従来「可能」という分類の下でまとめられてきた文例について検討を行った。要点は以下の三点である。

- 従来インドネシア語研究において可能と広く呼ばれてきたものは実現系可能と潜在系可能に区別される
- 潜在系可能は否定文、総称文の場合のみにしか認められず、肯定文の場合は基本的に実現系可能の解釈のみが容認される
- 実現系可能は「認識との相違」の中に含めることができる

2.6 判断

2.6.1 判断用法の特徴

最後に判断用法について記述を行う。判断用法を認めている先行研究は他の分類に比べると少なく、原・森山・降幡 (2017) 及び佐近 (2019) に限られる。

一般的に以下の (2-67) のような知覚動詞に付く接頭辞 *ter-*は「可能」の意味を付与すると分類されてきた。ここでいう可能は、本稿の分析では実現系可能にあたる。

(2-67) *Suara dosen tidak ter-dengar dari sini.*
voice teacher NEG TER-hear from here
「先生の声はここから聞こえなかった」 (=(2-54))

一方で上記の原・森山・降幡 (2017) 及び佐近 (2019) は動詞の後ろに補語的要素を伴う場合の接頭辞 *ter-*を実現系可能から分離すべきだと主張する。

(2-68) *Dia ter-lihat sakit.*
3SG TER-see sick
「彼は具合が悪く見える」 (=(1-8))

(2-68) は、例えば身なりから *dia* 「彼」の具合が悪いであろうという判断を話者が行っている文である。佐近 (2019) は叙実性という観点から、(2-67) と (2-68) は異なるふるまいを見せることを明らかにし、またその意味的性質から証拠性判断と呼び、実現系可能用法と区別すべきことを主張した²³。

ここでは、基本的に佐近 (2019) に沿う形で概要を述べる。まず以下で判断用法の意味に関する佐近 (2019) の記述の概観し、次節ではこうした判断用法がいわゆる可能用法と分離されるべきであるとする主張を確認する。

判断用法は大きく属性表示用法、直接判断用法、間接判断用法に分けることができる。まず属性表示用法とは (2-68) のような例を指す。他にも (2-69) や (2-70) の例が挙げられる。これは眼前のものや事象を見たとうえで、その属性や状態を記述する場合を指す。(2-69) は *dia* 「彼女」の顔などが青白いという視覚情報を描写した文である。(2-70) も同様に、*wajahnya* 「彼女の顔」が腫れていることを描写した文となる。

(2-69) *Dia ter-lihat pucat.*
3SG TER-see pale
「彼は青白く見える」 (佐近 2019: 22)

(2-70) *Wajah=nya yang tak berbalut makeup ter-lihat bengkak.*
face=3 REL NEG cover makeup TER-see swell
「化粧をしていない彼女の顔は腫れて見えた」 (佐近 2019: 22)

²³原・森山・降幡 (2017: 22) は (2-68) を「自発」と呼んでいる。しかし後述するように、「ある認知対象がひとりでに現れた」という状況を喚起する「自発」という用語よりも、「判断」という用語を用いた方がこうした用例を適切に説明可能であると考えられる。そのため本稿では佐近 (2019) に則る形で、こうした例を判断用法と呼ぶことにする

これらの知覚的印象を述べる文は厳密な意味での判断を行っているわけではない。しかし、以下で述べるように判断用法と形式的・文法的なふるまいに類似点があることから判断用法と連続した用法であると見做し、本稿では広義の判断用法と分類する。

次に直接判断用法は、視覚的な情報から話者が判断を行っている文を指す。(2-71)は dia 「彼」の身なりなどからハワイから帰ってきたのであろうと話者が判断を行っている文、同じく(2-72)も dia 「彼」が見た目からおよそ 50 歳であろうという判断を行っていることを表わす文である。

(2-71) *Dia ter-lihat habis dari Hawaii.*
3SG TER-see finish from Hawaii.
「彼はハワイから帰ってきたように見える」 (佐近 2019: 23)

(2-72) *Dia ter-lihat umurnya 50 tahun.*
3SG TER-see age 50 years
「彼は 50 歳に見える」 (佐近 2019: 23)

最後に間接判断用法について述べる。それぞれ(2-73)は金融的な情報から政府の対応に関して予測を行っている文、(2-74)は経済成長に関する情報を受けて、中国政府の状況を推測している文である。

(2-73) *Dari hasil tersebut, pemerintah ter-lihat memenuhi permintaan.*
from result aforementioned government TER-see AV.fill request
「この結果から、政府は要求を呑むと見える」 (佐近 2019: 24)

(2-74) *Sejauh ini, perekonomian China ter-lihat lebih ter-sakiti oleh kebijakan as.far.as this economy China TER-see more TER-damage by policy tersebut.*
aforementioned
「これまでのところ中国経済はその政策によって被害を被っていると見られる」 (佐近 2019: 23)

これらの例においては実際に視覚から得られた情報以外も基にして判断を行っている。言い換えれば、知覚対象と判断の対象(文の主語)が一致していないことを特徴とし、この点で直接判断用法とは異なる。

ここまで、判断用法がどのような文を指すかを概観し、属性表示用法・直接判断用法・間接判断用法が認められることを確認した。次節では、こうした判断用法の例文を踏まえて実現系可能用法との差異について述べる。

2.6.2 可能と判断の差異

ここでの問題は判断用法というカテゴリーをあえて分離する動機である。確かに原・森山・降幡(2017)が述べるように補語的要素を伴うという形式の差異は重要な要因の一つであるが、それ以上の言及は行われていない。これに関して、佐近(2019)は以下の二点において、可能用法と判断用法が異なったふるまいを示すことを指摘した。

- 結果キャンセル構文の可否
- 否定辞繰り上げの可否

この二つのふるまいは文における叙実性の有無の判定に関わる。叙実性とは命題の内容が事実であることを前提としているか否かを表す際の基準である。一般的に叙実性があるものはその命題を否定するような節を後続できず、否定辞の繰り上げ行った場合に容認度が変化するか、異なった意味を帯びることが指摘されている (cf. 亘理 2003: 114–115; 河野 2013: 30–33)。加えて本稿では判断用法と可能用法が共起可能な前置詞の種類という点で異なることを追加で提示する。以上を踏まえてインドネシア語の *terlihat* の文を確認する。

まず (2-75a) の実現系可能の文では結果キャンセルが容認されないが、(2-75b) の判断の文では容認される。

- (2-75) a. ?*Ter-lihat dia habis dari Hawaii, tapi sebenarnya dia tidak habis dari*
 TER-see 3SG finish from Hawaii but in.fact 3SG NEG finish from
Hawaii.

Hawaii

「?彼がハワイから帰ってきたのが見えたが、実際には彼はハワイから帰ってきていない」 (佐近 2019: 29)

- b. *Dia ter-lihat habis dari Hawaii, tapi sebenarnya dia tidak habis dari*
 3SG TER-see finish from Hawaii but in.fact 3SG NEG finish from
Hawaii.

Hawaii

「彼がハワイから帰ってきたように見えたが、実際には彼はハワイから帰ってきていない」 (佐近 2019: 29)

これは (2-75a) では実際に「彼がハワイから帰ってきた」という事態が成立していることを含意するため、帰ってきたという結果をキャンセルするような文を後続させることはできない。一方で (2-75b) は帰ってきたという事実は含意せず、例えば彼が日焼けをするなどしていることから、予測ないしは判断を行っている文である。そのため必ずしもハワイから帰国したという事態は成立しておらず、結果キャンセルが可能となる。

次に (2-76a) と (2-76b) の組み合わせのように、実現系可能の解釈を行う文では否定辞の繰り上げによって容認度が変化、また意味が変化するのに対して、(2-77a) や (2-77b) のように判断の解釈を行う文では意味の変化はほとんど起こらない。(2-76) は実現系可能の文である。この例において、彼の姿が見えなかったことを表すために否定辞を置く場合は (2-76a) のように *terlihat* の前に置かれる必要がある。(2-76b) のように、*terlihat* 内の節に否定辞を置くことはできない。

- (2-76) a. *Tidak ter-lihat dia habis dari Hawaii.*

NEG TER-see 3SG finish from Hawaii

「彼がハワイから帰ってくるのは見えなかった」

(佐近 2019: 30)

b. **Ter-lihat dia tidak habis dari Hawaii.*

TER-see 3SG NEG finish from Hawaii

「彼がハワイから帰ってこなかったのが見えた」 (佐近 2019: 30)

一方で、(2-77) のように判断用法の *terlihat* の場合は否定辞の位置によって容認度の差は生じない。*terlihat* を否定することも (2-77a)、節内の述語を否定することもできる (2-77b)。

(2-77) a. *Makanan itu tidak ter-lihat kedaluwarsa.*

food that NEG TER-see expire

「その食べ物は失効しているように見えない」 (佐近 2019: 32)

b. *Makanan itu ter-lihat tidak kedaluwarsa.*

food that TER-see NEG expire

「食べ物は失効していないように見える」 (佐近 2019: 32)

(2-77a) と (2-77b) についてあえて違いを述べるとすれば、前者の場合は「失効している」ということに対して中立的な立場をとり、消極的な主張を行っている。一方で、後者では「失効していない」ということが頭の中に先に存在したうえで主張を行っているため、積極的な主張といえる (cf. 亘理 2003)。しかし基本的にはどちらも「食べ物は失効していない」という判断を行っているため、ほぼ同じ意味を表す文であるといえる。

加えて、実現系可能用法と判断用法では知覚者を標示する前置詞が異なる。判断用法では *oleh* 「～によって」の他に *bagi* 「～にとって」という前置詞を使用することができるが、実現系可能用法では *oleh* のみが容認される。

(2-78) *Gunung itu ter-lihat {oleh / *bagi} saya.*

mountain that TER-see by to 1SG

「その山は私には見える」 (作例)

(2-79) *Dia ter-lihat habis dari Hawaii {oleh / bagi} saya.*

3SG TER-see finish from Hawaii by to 1SG

「私には彼がハワイから帰ってきたように見える」 (作例)

以上 *terlihat* という語において、実現系可能用法と判断用法は結果キャンセル構文及び否定辞繰り上げの可否、そして前置詞の使用という点で異なるふるまいを見せることを確認した。このことから本稿では判断用法を実現系可能用法とは別の分類として扱う。

なお、視覚的印象を述べる属性標示用法の文は可能用法と判断用法の中間的な性質を持つ。(2-80) は *=nya* 「彼」の顔が青白いという知覚情報を述べた属性表示用法の文である。

(2-80) *Muka=nya ter-lihat pucat.*

face=3 TER-see pale

「彼女の顔は青白く見える」 (佐近 2019: 22)

こうした文は実際に知覚した事実を含むため、次のようにキャンセル節を後続させることはできない。

- (2-81) * *Muka=nya ter-lihat pucat, tapi muka=nya tidak pucat.*
 face=3 TER-see pale but face=3 NEG pale
 「?彼の顔は青白くみえたが青白くなかった」 (佐近 2019: 30)

ただしこのように視覚的印象を述べるような文は、否定辞繰り上げによる意味の変化は起こらない(佐近 2019: 30–31)。

- (2-82) a. *Muka=nya tidak ter-lihat pucat.*
 face=3 NEG TER-see pale
 「彼女の顔は青白く見えない」 (佐近 2019: 30)

- b. *Muka=nya ter-lihat tidak pucat.*
 face=3 TER-see NEG pale
 「彼女の顔は青白くなく見える」 (佐近 2019: 31)

ここから属性標示用法は判断用法と同一とは言えないが、少なくとも可能用法とは区別されるべきものであると言える。本節の目的は属性標示用法と判断用法が実現系可能用法と区別されることを主張するものであるため、属性標示用法と判断用法の区別は行わない。詳しい議論は佐近 (2019: 26–33) を参考されたい。

最後に佐近 (2019) が指摘する実現系可能用法と判断用法の取り得る統語的形式の違いについて補足する。まず *terlihat* が取り得る統語的形式について整理する。佐近 (2019: 18–20) は *terlihat* が以下の 3 つの形式を取り得ると述べた。

- (2-83) 「NP+*terlihat* (Terlihat+NP)」型
Menara itu ter-lihat dari sini.
 tower that TER-see from here
 「その塔はここから見える」 (湯浅 2002: 109)

- (2-84) 「Terlihat+Clause」型
 a. *Ter-lihat Jembatan Rialto di-genangi air yang menambah suasana*
 TER-see bridge Rialto UV-fill water REL AV.increase atmosphere
elegan.
elegant
 「Rialto 橋が優美な雰囲気盛り上げている水に満たされているのが見える」
 (佐近 2019: 19)

- b. *Ter-lihat ada roda pesawat.*
 TER-see exist wheel airplane
 「飛行機の車輪があるのが見える」 (佐近 2019: 19)

- (2-85) 「主語 +*terlihat*+ 補部」型
Turki pernah ter-lihat akan mem-bebaskan Pastor Brunson.
 Turkey already TER-see will AV-release Pastor Brunson

「トルコは Pastor Brunson を開放するとみられていた」 (佐近 2019: 19)

このうち判断用法は統語的に主語と補部を必須とするため「NP+terlihat (Terlihat+NP)」型を取ることが出来ない。加えて (2-86a) にあるように、「Terlihat+Clause」型は実際に視覚によって捉えられないものを節にとることはできない。判断用法の文を作る場合は (2-86b) にある「主語 +terlihat+ 補部」型に限られる。

(2-86) a. * *Ter-lihat dia umur=nya 50 tahun.*
 TER-see 3SG age=3 50 year
 「彼が 50 歳なのが見える」 (佐近 2019: 24)

b. *Dia ter-lihat umur=nya 50 tahun.*
 3SG TER-see age=3 50 year
 「彼は 50 歳に見える」 (=2-72)

一方実現系可能用法は (2-83) や (2-84a) のように「NP+terlihat (Terlihat+NP)」型及び「Terlihat+Clause」型を取る傾向がある。ただしこの意味と構文の関係はあくまで傾向であり、「主語 +terlihat+ 補部」型であっても、叙実性が認められるような場合もある。(2-87) では実際に Kendall という人物がサイクリングしているのを見たという状況でも、確信はないが推測でサイクリングしていると考えられる状況、つまり実現系可能の解釈をしても使用可能である。

(2-87) *Kendall Jenner ter-lihat bersepeda keliling Manhattan.*
 Kendall Jenner TER-lihat cycling around Manhattan.
 「Kendall Jenner がマンハッタンをサイクリングしているの見える」 (佐近 2019: 23)

以上は次の表 2.6 のようにまとめられる。

表 2.6 実現系可能用法と判断用法が取り得る形式の違い

	実現系可能用法	判断用法
「NP+terlihat (Terlihat+NP)」型	✓	-
terlihat+clause 型	✓	-
主語 +terlihat+ 補部型	✓	✓

このように必ずしも用法と構文の関係は一对一ではないものの、実現系可能用法と判断用法で取り得る構文の違いがあるのは明らかといえる。ここからも実現系可能用法と判断用法は区別されるべきものであることがわかる。

最後に、こうした判断用法は動作対象に注目しているという点で潜在系可能用法に近い。判断用法は主語に置かれている知覚対象について、その知覚的印象や性質の判断を行う用法である。潜在系可能もある動作対象の属性を表すという意味で、動作対象に注目する用法と言える (cf. 2.5 節)。以上より、事態の生起に着目する完了用法や動作の非意図性に着目する非意図用

法とは別個に扱う。ただし、判断用法と潜在系可能用法は本稿では同一とはみなさない。これは潜在系可能用法は否定辞を伴う場合と総称文に限られる、そして判断用法は知覚動詞に限られるという独自の特徴があるためである。

2.7 第二章のまとめ

本章では、先行研究の記述を出発点として、接頭辞 *ter-* が付与する意味の検討を行った。ここまでの議論は次の図 2.3 のようにまとめられる。

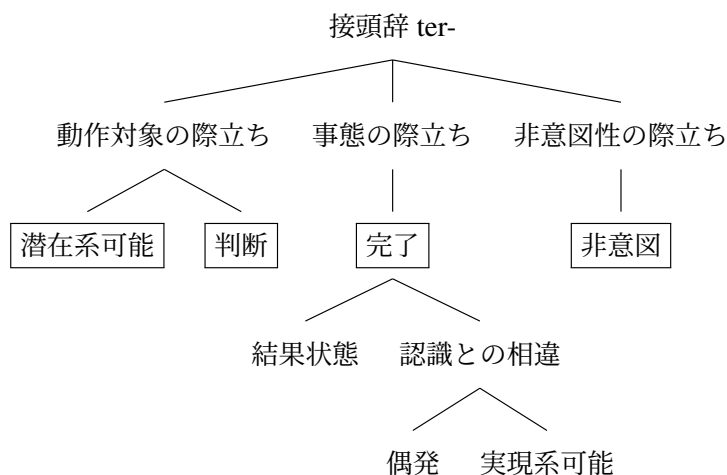


図 2.3 接頭辞 *ter-* の用法の体系

四角で囲まれているものが、接頭辞 *ter-* によって付与される意味である。つまり本稿が主張する接頭辞 *ter-* が付与する意味の分類である。四角で囲まれていないものは、文脈などによって生じる下位分類である。四角で囲まれた意味は認知的な際立ちの位置を基準に分けることができ、次の表のようにまとめられる。

表 2.7 接頭辞 *ter-* の各意味とその性質

認知的際立ちの位置	
完了	事態
非意図	非意図性
潜在系可能	動作対象
判断	動作対象 (動詞の制約あり)

2.1 節から 2.3 節では、先行研究において接頭辞 *ter-* が付いた動詞が *stative* 解釈の場合は完了用法、*eventive* 解釈であれば非意図用法に分類されていることをみた。そして特に非意図用法について、「動作主が意図しない動作を行った」と「動作の生起は予期しなかったものである」という二つの意味で使われていることを確認した。しかしこの記述では *eventive* 解釈

かつ意図性が認められない例を説明することができなかった (cf. (2-19))。そこで本稿では、自動詞語基に接頭辞 *ter-* が付いた場合の意味を検討し、従来非意図用法に認められてきた二つの意味のうち動作の非意図性の表す場合のみを非意図用法とし、非予測性の意味に関しては「認識との相違」用法として完了用法の下位に位置づけることでこの問題を解決できることを主張した。これにより、これまで用法の分類が難しかった例を説明することはもちろん、定義を拡張して説明を行っていた例に対しても一貫した説明をすることができるようになった。

2.4 節では自発という分類を別立てする是非について検討した。そして意味的には結果状態用法や認識との相違用法と類似点があることから自発を別個の分類として認めない立場を取った。ただし、認識動詞は接頭辞 *ter-* によって構造変化が起きる場合と起きない場合があることも確認した。このことが別個の分類として認めないことの反証とならない点は 3.4 節で確認する。

2.5 節では、可能用法の内実について検討を行った。多くの先行研究では可能用法とは動作主がある行為を遂行する能力の有無について述べるものと記述されていた。しかし例文を観察することで、このような潜在的能力を表わすのは否定文と総称文に限られ、多くの場合はいわゆる実現系可能に分類されるべきであること主張した。さらに実現系可能もその成立は「命題の否定の前提」の存在を条件とするため先に述べた「認識との相違」の中にまとめることができる。一方の潜在系可能用法は対象の属性を叙述しているという点で異なる。そのため、事象のどこに注目しているかという点で、完了や非意図用法とは異なると見做すことを提案した。

2.6 節では、知覚動詞が接頭辞 *ter-* と共起した場合のふるまいを佐近 (2019) に沿って確認した。接頭辞 *ter-* が知覚用法と共起した場合をこのように特別視することは先行研究では少なかった。しかし佐近 (2019) は結果キャンセルや否定辞繰り上げの可否といった違いや、語順の傾向といった点で他の用法とは異なるふるまいを見せることを提示し、判断用法という異なる分類であるとした。判断用法は知覚対象の性質やその判断を行っており、動作対象に着目している用法であると言える。ここから本章では潜在系可能と近い用法であると主張した。

最後に、本章では接頭辞 *ter-* の大きな分類として「動作対象の際立ち」「事態の際立ち」「非意図性の際立ち」という 3 つを認めることを主張した。しかしこの際立ちの変化が何によって生じるかについては詳しく触れなかった (cf. 例 (2-40))。この点については次章で扱う。

3 事象構造と接頭辞 ter-

3.1 はじめに

本章は接頭辞 ter-に関する意味的・統語的ふるまいを統一的に説明することを目的とする。その際には特に語基の意味に注目する。これは 3.3.1.2 節で述べるように、語基の動詞の意味によっては接頭辞 ter-が付与する意味に傾向や制限があるためである。そこで動詞の意味を捉えるために、事象構造の考え方を基にした行為連鎖モデルを用いる (Langacker 1990; Croft 1991)。この事象構造の考え方と行為連鎖モデルは、この動詞の意味や接頭辞 ter-のような抽象的な機能を視覚化できるため、接頭辞 ter-と動詞の相互作用を明示的に示すことができる。

本章の構成は以下の通りである。3.2 節では事象構造の考え方に基づいた行為連鎖モデルの概略及び、その前提となる認知言語学の記号的文法観の説明を行う。3.3 節では、2 章で説明したような接頭辞 ter-の様々な意味を事象構造の考え方をを用いて統一的に捉えることを試みる。次に 3.4 節で接頭辞 ter-の付加によって起こる構造変化の原因を考察する。最後に 3.5 節では接尾辞-kan との関係を考察する。具体的には接頭辞 ter-は接尾辞-kan を伴うときに例外的なふるまいを見せると分析されてきたが、3.3 節や 3.4 節での事象構造を用いた分析を適用することで例外として扱わずに一貫した説明を与えられることを示す。3.6 節はまとめと今後の課題である。

3.2 事象構造と行為連鎖モデル

認知文法の下では、記号的文法観に基づいて語彙や文法は意味構造と音韻構造のペアである記号 (symbolic structure) として記述される (Langacker 2003)。これは以下の図 3.1–図 3.4 のように図式化できる。図 3.1 では意味構造が S として、図 3.2 では音韻構造が P として表されている。図 3.3 はこの意味構造と音韻構造が組み合わせにより記号 (Σ) が形成される様子を示している。そして図 3.4 にあるように、この記号 (Σ) が形態や統語という様々レベルで結びつくことによって言語表現 (E) が作られていく。



図 3.1 Semantic Structure



図 3.2 Phonological Structure

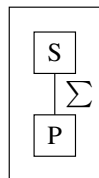


図 3.3 Symbolic Structure

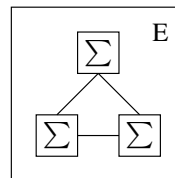


図 3.4 Symbolic Assemblies (=Expression)

図 3.4 において、より正確には意味構造と音韻構造がそれぞれ合成されるわけであるが、特

に意味構造の合成はしばしば抽象的な図式化 (イメージスキーマ (Lakoff 2008)) によって表される。この際動詞が持つ意味構造を表すために用いられる方法の一つが行為連鎖モデルである。行為連鎖 (action chain) とは、ある一つの事態はエネルギーの伝達が連鎖的に行われることで起こっているという考えを基にする。行為連鎖のモデル化には参与者及びエネルギーに関して様々な表示の仕方があるが、Langacker (1990) 及び谷口 (2005) が使用するモデルを合わせた形で説明を試みる。以下では概略を示すために典型的な他動詞と自動詞の行為連鎖について説明を行う。まず他動詞の事象構造を見ていく。(3-1) の事象構造は図 3.5 のように記述できる。動作主である Andrea が動作対象である door に働きかけ (CAUSE) を行い、その結果として開いているという結果状態が生じた (CHANGE) ことを表している。以下このように丸で表されている参与者を分節と呼ぶ。事態の中で太枠によって示されている分節は認知的に際立つ分節・行為を表している。一般的な他動詞能動文では動作主が認知的に際立つ、つまり行為全体の中で動作主が何をしたかという部分が注目されるため、図内の動作主の文節が太線が表されている。

(3-1) Andrea opened the door. (谷口 2005: 161)

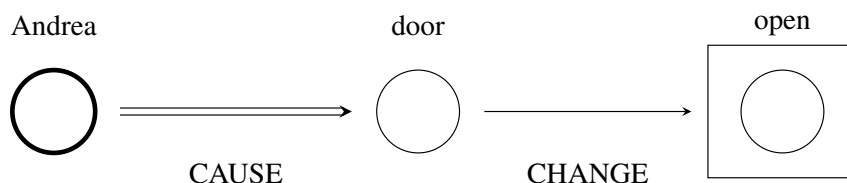


図 3.5 他動詞の事象構造

次に (3-2) のような自動詞文の事象構造は図 3.6 の様に表すことができる。自動詞文では事態成立局面のみ²⁴が現れると考えるため、働きかけを行う主体となる動作主の部分は表示されず、動作対象と結果状態のみがモデルの中に現れることになる。またこの場合唯一項である動作対象 (the door) が認知的な際立ちを持つ。

(3-2) The door opened.

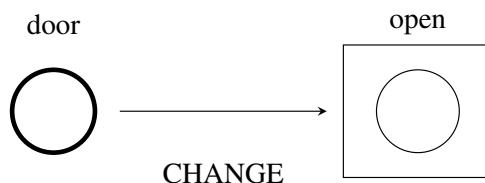


図 3.6 自動詞の事象構造

²⁴ここでいう事態成立局面は Langacker (1990) の thematic relation に相当する。thematic relation は動作主とその働きかけ (CAUSE) のエネルギー伝達部分に対して、動作対象とその変化 (CHANGE)、そして結果状態から構成される事態の中核部分とされる (谷口 2005: 120)。

次に実際の文がどのように組み上げられているか、つまり図 3.4 のような事象構造の合成の過程を見ていく。具体例として、“the book on the table” という例を考える。まず合成過程を図 3.7 に示す。下から上に合成が行われる。前提として on の事象構造はある物体 A の上にある物体 B が位置づけられる「関係」を典型的に表すため、それを丸を上下に配置することで表している。あくまで関係のみを表すため、このときの物体 AB は具体的に指定されていない空のスロットである (テイラー・瀬戸 2008: 126)。the book や the table などの物体の場合は丸を単一で表示する。

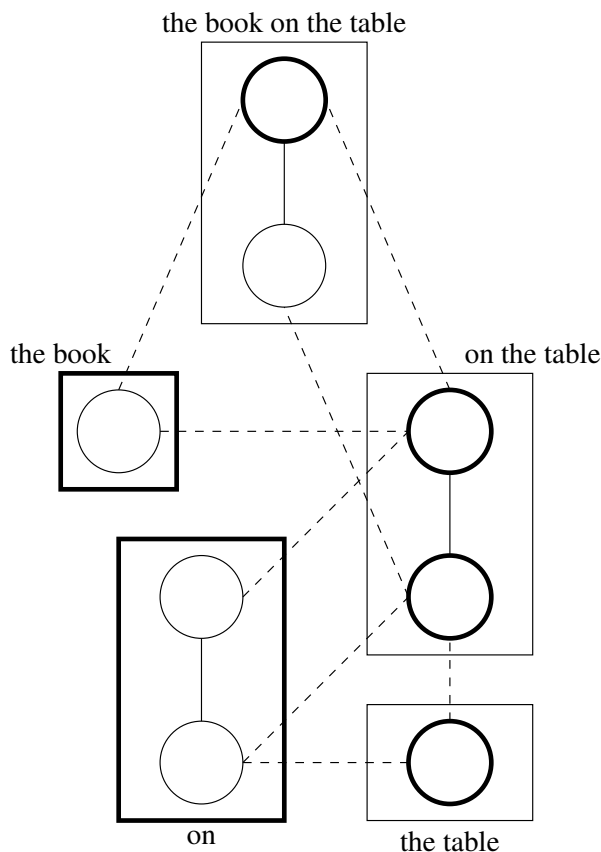


図 3.7 the book on the table の合成 (テイラー・瀬戸 (2008: 127) を基に筆者が作成)

上図において事象構造を囲む四角が太線になっている場合は、それがプロフィール決定子であることを表す。プロフィール決定子とは合成後の事象の性質を決める事象のことを指す。最初の on と the table の合成の場合、合成後の on the table の意味の重要な性質は on によって定められると言えるので、on がプロフィール決定子となる。同様に第二段階の合成である the book on the table は、the book の説明を on the table がしている、つまり the book が全体の意味として重要な部分とみなせるため、合成 the book と on the table では the book がプロフィール決定子である。そして合成物のうち、プロフィール決定子ではないものを精緻化サイトと呼ぶ (町田他 2022: 163)。一段階目の合成で考えると、on の事象構造の空のスロットを the table が指定している形となっている。言い換えれば、プロフィール決定子の内部の概念を精緻化し

ている²⁵。

次に本稿の焦点となる、動詞句の合成についても見ていく。ここでは“throw a rock into (the) pond”「岩を池に投げ入れる」という事態を考える (Langacker 2003: 73)。まず throw 「投げる」の意味構造は図 3.8 のように表される。ここでは投げる人が岩に働きかけ (実際には投げるといふ行為) を行い、岩がどこかに移動するという事象が描かれている。右側の矢印の先に場所などが示されていないのは、throw 「投げる」という動詞がどこに移動したかまでは含意しないことを表している。

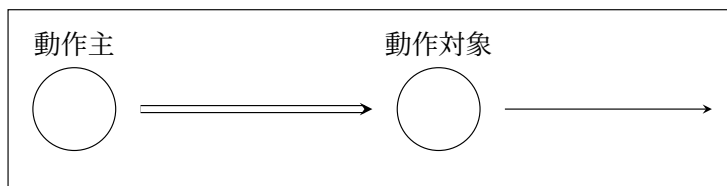


図 3.8 throw 「投げる」の意味構造

次の図 3.9 と図 3.10 はそれぞれ rock 「岩」と into (the) pond 「池の中へ」の意味構造である。into (the) pond 「池の中へ」はある物体が池の中へ移動する事象を表すものであるため、左の円で示される何らかの物体が、右の楕円で表される池の中へ移動したことが描かれている。

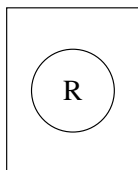


図 3.9 (a) rock 「岩」の意味構造

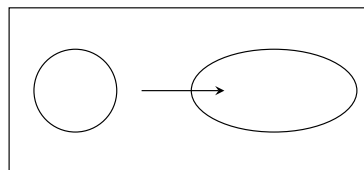
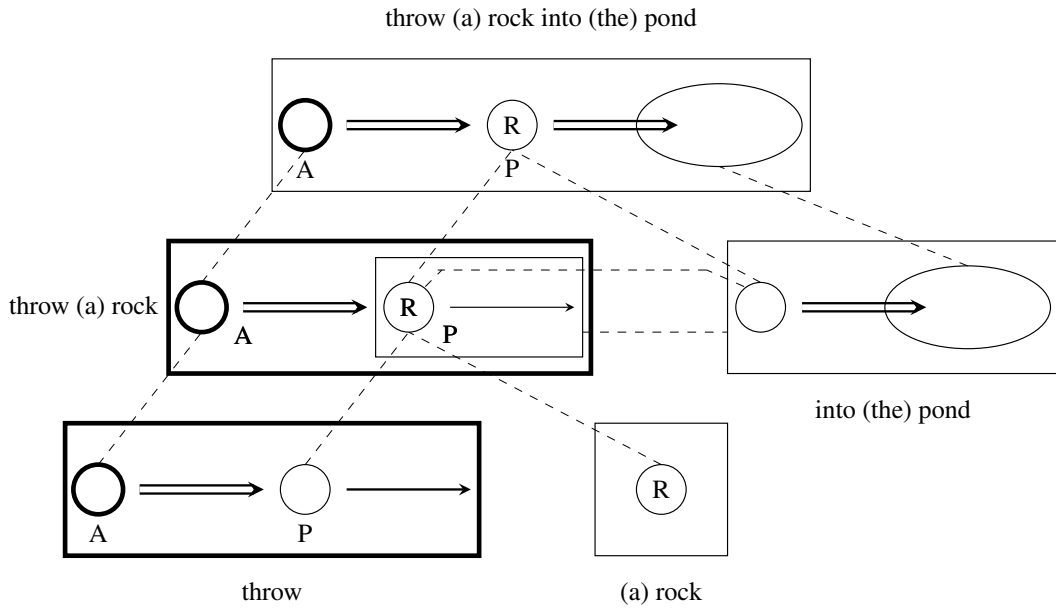


図 3.10 into (the) pond 「池の中へ」の意味構造

以上を踏まえ、throw (a) rock into (the) pond という文がどのように形成されるかを見る (図 3.11)。まず最も下に、上述の throw と (a) rock の意味構造が示されている。この二つが合成されることによって上の throw (a) rock が形成される。具体的には、throw 中の指定されていない「物体」の部分に、(a) rock が当てはまる形となる。斜めに伸びる破線は対応関係があることを示している。次にこの throw (a) rock と二行目の右列にある into (the) pond との合成が行われ、最上段の throw (a) rock into (the) pond が完成する。ここでは、throw (a) rock の段階では指定されていなかった移動の結果が具体的に与えられることになる。

²⁵こうした性質からプロファイル決定子と精緻化サイトはより一般的な用語でヘッド (head) と補部 (complement) ないしは修飾部 (modifier) と呼ばれることもある (テイラー・瀬戸 2008: 127)。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象

図 3.11 throw (a) rock into (the) pond の意味構造の形成

動詞と参加者の合成が行われる場合、プロフィール決定子は動詞である。そのため、throw が太線で表されている。そのプロフィール決定子の中の一部が精緻化サイト (a) rock によって精緻化されている。同じように、二段階目の合成の場合も、throw (a) rock というプロフィール決定子に対して into (the) pond が移動経路を指定する形で精緻化を行っている。なお、この例の場合は動作主が精緻化サイトによって指定されていない。図 3.11 では精緻化サイトによる指定の有無は描き分けられていないが、以降本稿では精緻化サイトの指定の有無が区別ができるように、指定されていない分節は点線で表すことにする (cf. 図 3.14)。以上が基本的な合成の仕組みである。

3.3 ter-派生動詞の意味の関係

2 章では接頭辞 ter-が付与する意味・機能について先行研究の記述を確認し、分類の整理を行った。こうした接頭辞 ter-による意味の付与について、多様な意味が認められる理由、言い換えればこれらの意味間の関係性について多くの議論がされてきた。このうち本稿ではスキーマを提示した分析に注目し、議論を行う。具体的には接頭辞 ter-の機能として「なる」的表現を作るといふ抽象的なスキーマを設定し、そこから具体的な意味が生じていると考えるものである。3.3.1 節では「なる」的表現の定義について確認する。そして「なる」的表現という説明がどのようにインドネシア語の接頭辞 ter-に適用されてきたかを確認する。その後、先行研究の問題点を指摘する。具体的には語基の意味によって接頭辞 ter-の意味が変化することが指摘されているが、そうした変化の理由及びメカニズムが説明できない点である。次に 3.3.2 節で行為連鎖モデルの考え方をを用いて、前章で認めた分類を含めた形で語基の種類に応じた意味発

生のメカニズムを検討し、先行研究の問題点を解決できることを示す。

3.3.1 「なる」的表現

3.3.1.1 「なる」的表現の先行研究

本節では、接頭辞 *ter-* に対して用いる「なる」的表現という用語について説明を行う。「なる」的という用語は池上 (1981) に代表される。池上 (1981) は「なる」的と「する」的という概念を提示することで、言語間の違い及び言語内の表現の違いを考察している。言語間の違いについて、「なる」的な言語とは出来事中心的な捉え方をし、動作主をなるべく覆い隠して表現しようとするものである (池上 1981: 285)。一方で「する」的な言語とはある事態に対して個体中心的な捉え方をし、動作主を際立たせて表現しようとする言語を指す。例えば同じ事態を表す場合でも日本語と英語では以下のような表現の違いがある。

(3-3) a. 私ニハ子供ガ二人イル。

b. I have two children.

(池上 1981: 70)

日本語の場合は (3-3a) のように、「いる」という表現を用いることで、存在状態を表す出来事中心的な捉え方を好む。一方で英語の場合は (3-3b) のように I have という表現を用いることで、主語である I 「私」に注目した表現が好まれる。

この概念の対立は、言語内の表現の違いについても適用可能である。英語の能動態と受動態の差異はこうした事態の捉え方に起因すると池上 (1981) は述べる。例えば (3-4a) の能動態は起こった事態の中から動作主を取り出しそれに焦点を当てる形式であるのに対し、(3-4b) の受動態は動作主の存在には何も触れなくて、事の成り行きだけに注目して起こったことだけを表現する (池上 1981: 223-224)。つまり、前者の能動態は「する」的表現であり、後者の受動態は「なる」的表現である。

(3-4) a. John hit the door.

b. The door was hit.

(池上 1981: 224)

池上 (1981) はこのような対立を英語の態に限って議論していたが、他の言語に対しても適用可能である。長谷川・西村 (2019) は日本語についても受動態が「なる」的表現であるとし、以下のように受動態の説明を行っている。

その事態を変化 (X に生じること) としてカテゴリー化する文のことであり、記述の対象となる事態を行為 (X が行うこと) としてカテゴリー化する-「する」的な捉え方を表す- 文と対立する。
(長谷川・西村 2019: 287-288)

「変化 (X に生じること) としてカテゴリー化する」こととは、言い換えれば前述のように「ある事態の生起に注目する」ことである。他にも尾上 (2003: 36) は日本語のラル形述語文を出来文と呼び、以下のようなスキーマを設定した。

出来文とは、事態をあえて個体の運動 (動作の変化) として語らず、場における事態全体の出来、生起として語るという事態認識の仕方を表す文である。
(尾上 2003: 36)

この定義は受動態を「事態の発生」に注目する形式と捉える点で、長谷川・西村 (2019) と同趣旨の主張を行っていると言える。さらに日本語、英語以外にも長屋 (2019) は日本語のラル形と似た機能を持つタガログ語の接辞 *ma-* について「*ma-*動詞は事態の成立局面のみをプロファイルし、動作主の意図決定行為は背景化される」(長屋 2019: 37) と述べており、こうした定義の一般化の妥当性が伺える。

本稿はこうした受身文に対する「なる」的という捉え方がインドネシア語の接頭辞 *ter-* の分析にも有効であるという立場をとる。しかしこの主張は新しいものではない。以下では接頭辞 *ter-* の機能を「なる」的表現の形成と分析する先行研究について、それぞれの用法が「なる」的というスキーマからどのように発生しているかに注目して概観する。その後先行研究が動詞による意味の表出の差異が説明できないという問題点を挙げ、この問題が事象構造の考え方をを用いることで解決できることを示す。

3.3.1.2 「なる」的表現と接頭辞 *ter-*

ルシアナワティ (1998) は接頭辞 *di-* との比較を行うことで、接頭辞 *ter-* の機能の特徴づけを行っている。そこではインドネシア語の接頭辞 *di-* は「トピックを変える」という機能を持ち、接頭辞 *ter-* は「<する²⁶的表現>を<なる²⁶的表現>に変える」という機能を持つと主張している (ルシアナワティ 1998: 91)。そしてこの「なる」的表現というスキーマから接頭辞 *ter-* の個々の具体的な意味が生じると考えている。ルシアナワティ (1998) では接頭辞 *ter-* が付与する意味として「不作為 (非意図)」「結果状態 (完了)」「可能」を認めており、ここではこの3つの意味の発生を概観する。まず不作為 (非意図) について見る。「なる」的とは前述のように対象に生じた変化に注目する表現である。そのため「する」的表現で注目されていた行為主体は背景化し、それに伴って行為の意図性も認知的際立ちが少なくなる。不作為 (非意図) の意味はそうした意図性の背景化から生じるとされる (cf. ルシアナワティ 1998: 91)。次に結果状態 (完了) について、「なる」的表現の説明である「対象がどう変化したかに注目する表現」とは言い換えればその変化の結果に注目する表現であり、ここからスキーマと結果状態 (完了) が結びついていることが導ける (cf. ルシアナワティ 1998: 100)。最後に可能の意味について、インドネシア語の可能を誰かの能力ではなくいつの間にか事態が実現したことを表すと捉えることで、結果状態 (完了) の場合と同じように変化ないしは事態の生起に注目するという「なる」的スキーマから意味の表出を説明している (cf. ルシアナワティ 1998: 102–103)。

湯浅 (2002: 118) も同様に、接頭辞 *ter-* の機能を「なる」的表現の作成と分析している。より具体的には「受動文の主語の関与しえない<動作>や<事態>があり、それによりその主語が何らかの責任を負う」(湯浅 2002: 11) と説明する²⁶。つまり結果状態用法では、ある動きが他者に

²⁶この「なる」的という用語を湯浅 (2002) は「非意図性の構造」と言い換えている。つまり結果状態用法・自発・可能用法では「意図性が考慮されていない」という点で、非意図用法では「動作の非意図性」という点で「非意図性」という概念に結びついている。しかしこうした非意図という用語は、一つのラベルに非意図性を表している文 (*loss of volitionality*) と意図性が考慮されていない文 (*lack of volitionality*) という二つの意味を含めてしまうという問題が起こっている (Wee 1995: 62)。そのため、あえて非意図という用語を用いるよりは、「なる」的表現という分析をした方が用語による不要な混乱を避けることができる。同じように Wouk (1980) も接頭辞 *ter-* が非意図を共通義としてもつとして、以下のように述べている。

よって(あるいは自然に)起こされ、それによって受動文の主語がその動きの結果を負う」(湯淺 2002: 9) という点で、自発用法では「主語の関与し得ないある状況があり、それによって主語がひとりでに何らかの心象的影響を受ける」(湯淺 2002: 10) という点で、可能用法では「誰かが故意にそうしようとしなくても、自然にそうなり得る可能性を示している」(湯淺 2002: 11) 点で「なる」的スキーマと結びついていると指摘する。以上より前述のルシアナワティ (1998) の説明とはやや異なっているものの、湯淺 (2002) も接頭辞 *ter-* の機能を、動作主の意志や動作ではなく自然とひとりでに発生した事態に注目する「なる」的表現として捉えていることがわかる²⁷。

ここまで、接頭辞 *ter-* が付与する意味を「なる」的表現というスキーマから説明する先行研究を概観した。特にすでに先行研究で認められている意味については、ルシアナワティ (1998)、湯淺 (2002) の分析を中心に、その発生メカニズムを見た。しかし問題となるのは、語基によって表出する意味が異なるという事実の説明ができない点である (ルシアナワティ 1998; Sneddon et al. 2010; Tampubolon 1983)。多くの語基の場合、判断用法や自発用法のように語基となる

The common meaning of *ter-* in all these uses is nonintentionality. It may be the accidental action of a sentence with an agent, the involuntary state of an acted-on subject or possible state of a subject to be acted on in sentences with no agent. It may be the response to a stimulus, action originally initiated or motivated by an outsider. It may be the totally inadvertent collision of two objects. But in all cases, the prominent NP is not responsible for the existing state of affairs or the faux pas under discussion. (Wouk 1980: 86–87)

つまり Wouk (1980) によれば、接頭辞 *ter-* はその根底に「非意図」という意味を有し、それぞれの意味がそこから派生する。動作主が文中に存在し、その動作主がある行為を偶然行った事態を表しているのであれば非意図として、何かの働きかけを受けた主語の非自発の状態を表しているのであれば結果状態あるいは自発として、動作主が存在せず、主語である動作対象の潜在的状態を表す文であれば可能としてそれぞれ解釈されることになる。しかしここでも同様に「意図性が考慮されていない」という消極的な非意図と「動作の非意図性」という積極的な非意図の混在という用語法の問題が存在している。

²⁷他にも明示的に「なる」的という用語は用いていないものの、ルシアナワティ (1998) や湯淺 (2002) と同趣旨の主張を行っている見做せる先行研究がある。これには Sneddon et al. (2010)、Winstedt (1913)、Rizki (2014) が挙げられる。これらは統語的に似た接頭辞である接頭辞 *di-* と比較することによって、接頭辞 *ter-* が結果状態の意味を付与すると分析する。まず Sneddon et al. (2010: 116) は接頭辞 *ter-* はその「結果状態」の継続に重点が置かれているのに対し、接頭辞 *di-* は主語に対する動作に言及しているとした。同じように Rizki (2014) は *ter-* 派生動詞が表す意味について、*di-* 派生動詞との比較から詳しい考察を行っている。次の例文では、接頭辞 *di-* では結び付けた動作に重点が置かれるのに対し、接頭辞 *ter-* では結び付いているという結果状態に重点が置かれるという分析をする。

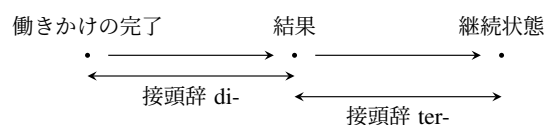
Titik A dan titik B {di/ter}-gabungkan dalam satu garis.

point A and point B {UV/TER}-tie in one line

「A 点と B 点を一つの線に結び付けた」

(Rizki 2014: 52)

つまり以下の図で表されるような関係性を想定している。*di-* 派生動詞は働きかけから結果までを表す一方で、*ter-* 派生動詞は継続状態を表すと Rizki (2014) は考える。そのため両接頭辞では同じ日本語訳が与えられているが、厳密には接頭辞 *ter-* は「結びつけられた状態である」ということを意味している ((Rizki 2014: 53) を基に筆者が作成)。



上図にあるように、結果状態を中心的用法であるとする分析は、動作対象がある状態に変化しある状態に注目する分析と言える。このように動作対象の変化およびその後の状態に注目するという点で、「なる」的表現分析と類似している見做すことができる。

動詞が限られているもの以外は、2章で示した意味をすべて帯びる可能性があるが、動詞によって意味の帯びやすさに差があることが指摘されている。Tampubolon (1983) は、buka 「開ける」・ikat 「結ぶ」・bayar 「払う」・jual 「売る」・hitung 「数える」・hibur 「慰める」などの動詞は完了的解釈になりやすいと述べており、動詞による表出する意味の差を認めている。同じ様にルシアナワティ (1998) は動詞によって意味表出の傾向があると主張している。

問題となるのは、接頭辞 *ter-*が自動詞の意味を持つ語基についての場合である。接頭辞 *ter-*が自動詞の意味を持つ語基についての場合、否定辞を伴うとしても (実現系) 可能の意味に解釈することはできず、単なる結果の否定を表す。Wee (1995) はそのような例として *tertawa* 「笑う」を挙げている。次の (3-5a) と (3-5b) はそれぞれ「Ali は笑うことができなかった」や「Ali は笑うことができた」のように可能の意味に解釈することはできない。

(3-5) a. *Ali tidak ter-tawa.*
Ali NEG TER-laugh
「Ali は笑わなかった」

b. *Ali ter-tawa.*
Ali TER-laugh
「Ali は笑った」

(Wee 1995: 168)

2.4 節で述べたように、*tertawa* 「笑う」は形態的に特殊な固定化した語であるため、典型例と扱う妥当性については疑問が生じるが、このように可能の解釈が妨げられることはより一般的な自動詞語基の場合にも当てはまる。以下のように *terjatuh* 「落ちてしまう」でも、否定辞の有無にかかわらず実現系可能に解釈されることはない。

(3-6) a. *Ali tidak ter-jatuh.*
Ali NEG TER-fall
「Ali は落ちなかった」

(作例)

b. *Ali ter-jatuh.*
Ali TER-fall
「Ali は落ちてしまった」

(作例)

接頭辞 *ter-*のスキーマとして「なる」的表現の形成を設定するのであれば、そのスキーマが自動詞語基の場合に可能の意味の表出が妨げられる理由を説明する必要がある。

次節ではこの問題の解決に加えて、2章で定めた意味がどのように説明可能かという点を明らかにする。先行研究ですでに認められていた意味に加え、非意図や可能など定義の見直しを行ったものや新たに定義した意味について考察を行う。特に焦点をあてるのは、非意図用法と認識との相違用法の違いである。2章で述べたように、本稿では非意図用法と認識との相違用法を区別した。そこでは動作主が明示されている場合は非意図用法と認識との相違用法の両方の解釈が存在することを明らかにした。この点について、両方の解釈が存在する場合にどちらかが選択される基準は何か、そしてなぜ動作主の有無が解釈の容認度に影響を与えるかについては明らかになっていなかった。そのため事象構造を用いて以上の問題を解決することが最終的な目的となる。

具体的な構成は以下の通りである。3.3.2.1 節では、「なる」的表現を形成する接頭辞 ter-について、行為連鎖モデルの枠組みで事象構造を規定する。3.3.2.2 節では、2 章で設定した意味が表出するメカニズムを事象構造の点から検討する。その後 3.3.2.3 節で事象構造の考え方をを用いることで、非意図用法と認識との相違用法の区別のされ方、そして自動詞語基の場合に接頭辞 ter-の意味に制限がある理由を考察する。

3.3.2 意味表出のメカニズム²⁸

3.3.2.1 接頭辞 ter-のスキーマ

3.1 節では認知文法における記号の文法観と行為連鎖モデルによる事象構造の図式化に関する説明を行った。この行為連鎖モデルを基盤として、本稿では接頭辞 ter-が持つ「なる」的表現というスキーマを具体的に次のように設定する。

ある動作主が存在し、動作対象に働きかけを行い、その働きかけによって動作対象が何らかの状態に変化するという事態を基に、その動作対象に生じる事態つまり事態成立局面、または行為の非意図性が認知的事実立ちを帯びる。

これを図式化したものが次の図 3.12 である²⁹。

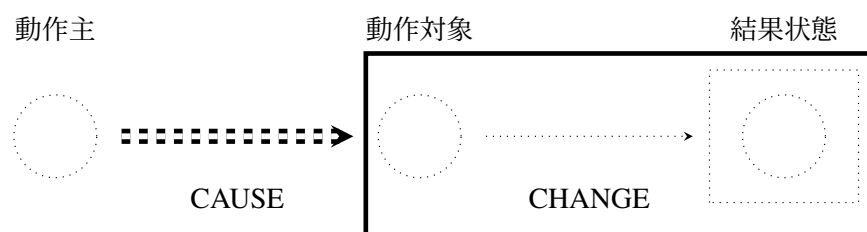


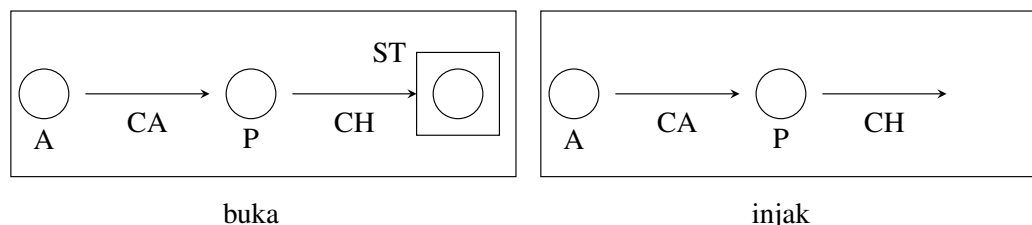
図 3.12 接頭辞 ter-の事象構造

この図において、事態成立局面または行為の非意図性が認知的事実立ちを帯びるという点は太線によって表されている。事態成立局面は大きな四角によって囲まれた部分、行為の非意図性は CAUSE というラベルが振られた二重矢印の部分である。CAUSE の矢印が破線になっているのは、行為の「非意図性」が際立つことを表現している。さらに接頭辞 ter-のような文法的要素は動詞に対してプロファイル決定子として機能するため、事象構造内の動作主と動作対象、そしてその変化の結果の状態という分節は空の状態であり、点線で表されている (cf. 3.2 節)。つまり、動作主や動作対象、結果状態の分節がこの位置に現れうるが、その有無が接頭辞 ter-によって指定されているわけではない。このことは ter-派生動詞の語彙アスペクト的解釈は語基の事象構造に依存することを意味する。例えば buka 「開ける」と injak 「踏む」を例にとる

²⁸本節の一部は佐近 (2020c) の内容に基づいている。

²⁹このモデル化は長屋 (2019) の分析を参考している。この研究はタガログ語の接辞 ma-を認知言語学の観点から、上記の行為連鎖モデルを用いて分析したものである。タガログ語の接頭辞 ma-は動詞に付加され、結果として形成された動詞は自発・意図成就・経験・可能の意味を持つ (Himmelman 2006: 494; 長屋 2019: 27-34)。これを踏まえ長屋 (2019: 37) は接頭辞 ma-が付加された動詞が持つ事態のスキーマを「ma-動詞は事態の成立局面のみをプロファイルし、動作主の意図決定行為は後景化される」と説明している。

と、これらの動詞は結果状態の分節が指定されているかどうかで違いがある。buka「開ける」であれば開けた後の状態が指定されている一方で、injak「踏む」の場合は図 3.8 の「投げる」と同様に踏んだ結果どのような状態になったかまでは事象の中に含まれない。この違いを図示すると次のようになる。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, ST(State): 結果状態
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ

図 3.13 buka「開ける」(左)と injak「踏む」(右)の事象構造

それぞれを接頭辞 ter-と合成すると図 3.14、図 3.15 となる。詳細な説明は後述するが、両者の違いは発生する事態への認知的際立ちを表す枠内の事象構造である。terbuka「開いている」の場合は buka「開く」の事象構造を反映して結果状態が指定されている一方で、terinjak「踏まれる」の場合は injak「踏む」の事象構造を反映して、結果状態が指定されていない³⁰。

³⁰このような結果状態の分節の有無による違いは、selama「～間」と共起した際に生じる意味解釈の違いによってわかる。(i)では、「開いている」という状態の継続の意味が優先されるのに対し、(ii)では、ずっと足を離すことなく踏むという状態が継続したという解釈は生じず、踏むという動作が繰り返し行われたという解釈に限定される。

- (i) *Pintu itu ter-buka selama 1 jam.*
 door that TER-open during 1 hour
 「そのドアは一時間開いている」 (作例)
- (ii) *Kaki saya ter-injak selama 1 jam.*
 foot 1SG TER-step during 1 hour
 「私の明日は一時間(何度も)踏まれ(続け)た」 (作例)

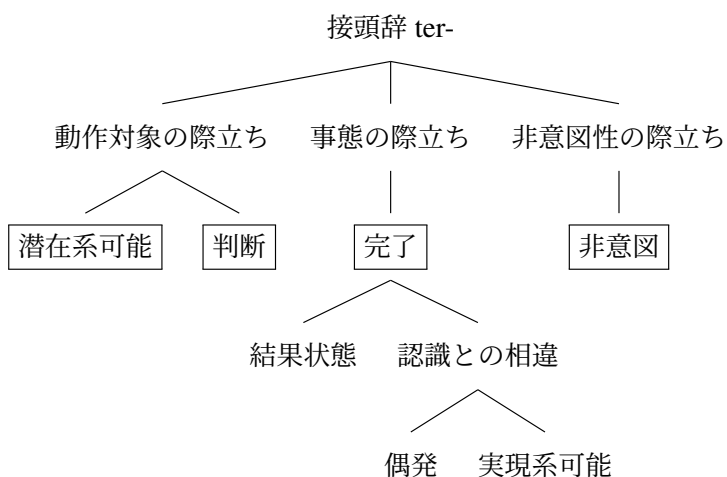


図 3.16 接頭辞 ter-の用法の体系 (=図 2.3)

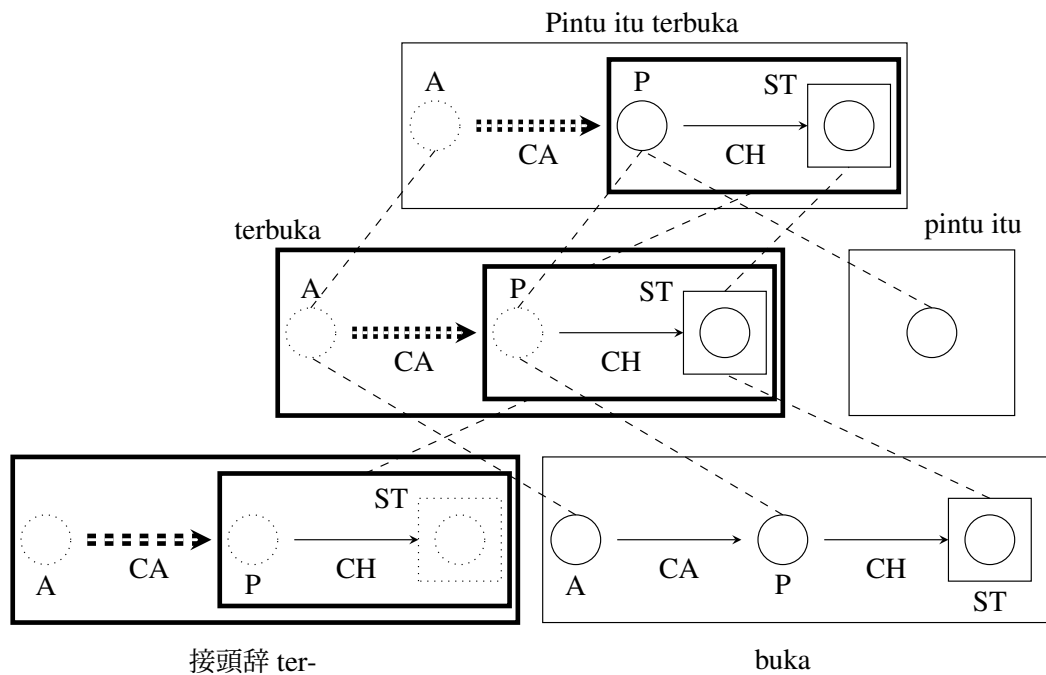
まず完了、その中でも結果状態の意味の表出から考える。ここでは buka 「開ける」を例にとる。図 3.17 は、図 3.14 に対して具体的な主語 *pintu itu* 「そのドア」を合成した (3-7) の例の合成過程である。

(3-7) *Pintu itu ter-buka.*

door that TER-open

「そのドアは開いている」

(= (2-3))



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, ST(State): 結果状態
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ

図 3.17 terbuka の合成 (例 (3-7))

図 3.14 と同じように左下は接頭辞 *ter-*、右下は *buka* 「開ける」、上部は *terbuka* の事象構造を示している。合成過程は以下の通りである。まず動作主について検討する。*buka* 「開ける」内にある動作主が接頭辞 *ter-*内の動作主の分節を精緻化し、*terbuka* の動作主として図に反映される。次に動作対象とその結果状態を見ると、*buka* における P から ST までの部分が、接頭辞 *ter-*と合成されることによって *terbuka* では太枠で囲まれる。この時、動作主と動作対象は点線によって示されている。これはそれぞれの分節が具体的な事物によって指定されていないことを表す。そのため、特に動作主が具体的に指定されるまではそれに伴う動作の非意図性が前景化するかは定まらない。それに伴って動作主から伸びる矢印も点線となっている。同じ様に、動作対象も点線になっている。一方で結果状態の分節が実線で表されているのは、具体的な事物によって指定されなければ明示化されない動作主や動作対象の分節とは違い、*buka* 「開ける」という意味の中に結果状態の分節がすでに含まれていることを意味する。第二段階目では *terbuka* と *pintu itu* の合成が行われる。具体的に動作対象が指定されるため、最終的な合成後の事象構造では動作対象が実線になっている。このとき動作主は指定されていないままであり、動作の非意図性が解釈されることもない。そのため動作対象にまつわる事態の成立局面が前景化し、完了の意味が表出する。

なお、*injak* 「踏む」の場合も同様の説明が可能である。*buka* 「開ける」との違いは踏むという行為が行われた後に踏まれた対象がどのような状態になったかまでは事象構造の中に含意しない点のみである。例えば、(3-8) は図 3.18 のように表される。最終的な合成結果の太線の四角の中は、*injak* 「踏む」の事象構造を反映している。

(3-8) *Kaki saya ter-injak.*
 foot 1SG TER-step
 「私の足は踏まれた」

(ルシアナワティ 1998: 98)

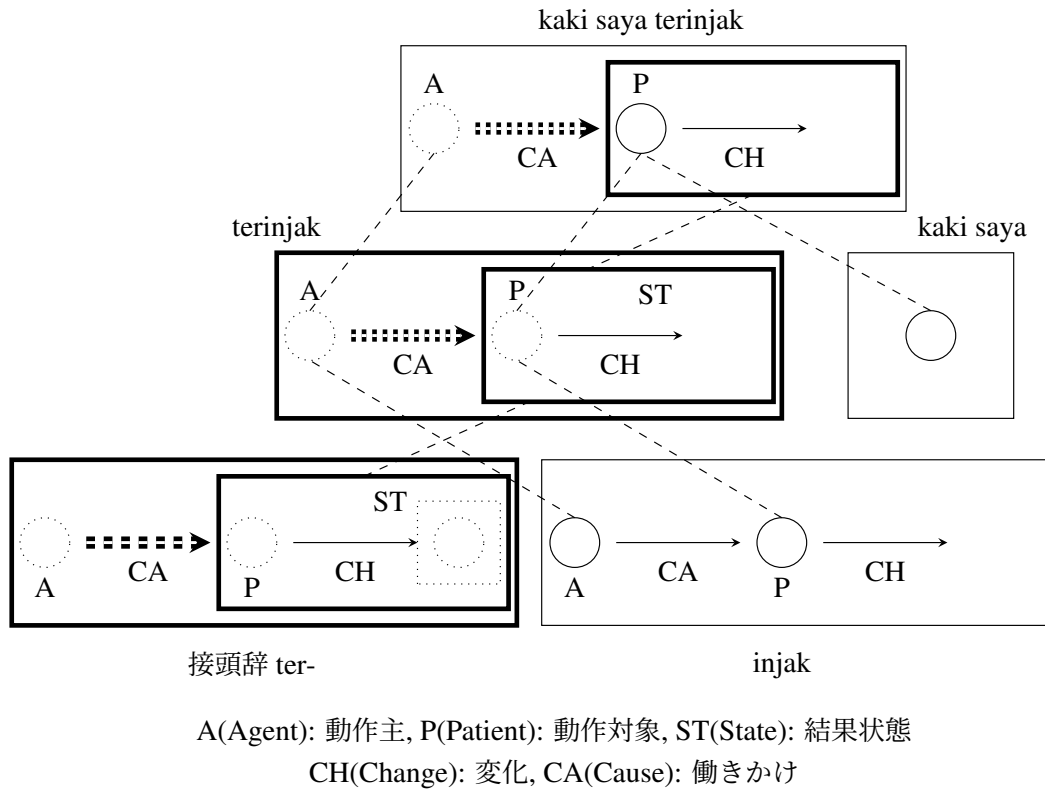


図 3.18 terinjak の合成 (例 (3-8))

次に認識との相違の意味が生じる仕組みを考える。2.3.3 節では、Soh (2009) を基に結果状態の意味が認識との相違という意味と密接に関係することを見た。簡単に述べれば、話し手と聞き手が共有している前提を取り込むか否定するかによって、含意する意味が異なるという説明が与えられていた。接頭辞 *ter-* の機能として「なる」的表現をつくることを認めたが、これは言い換えれば状態変化・結果状態に注目する表現をつくることであり、ここから Soh (2009) の議論が適用可能であると言える。そのため接頭辞 *ter-* を使用する際に、前提を取り込むのであれば結果状態の意味になり、前提を否定するのであれば認識との相違の意味に注目されると説明できる。

以上を前提とし、認識との相違用法の下位に位置づけられる、実現系可能と偶発の表出について考える。ここでは 2.5 節で上げた *terinjak* の例を用いる。次の例は「認識の相違用法」として (2-66) として挙げた例の再掲であり、解釈の仕方によって実現系可能と偶発の二種類の読みの可能性がある。

(3-9) *Kecoak itu ter-injak.*
 cockroach that TER-step
 「(実現系可能読み) そのゴキブリを踏むことができた」

「(偶発読み) そのゴキブリを踏んでしまった」

(=(2-66))

この場合「偶発」と「実現系可能」の読みは文脈の違いによってそれぞれ表出する。文脈とは2.3節、2.5節で論じたように具体的には話者の意図性を読み込むか否かという選択を指す。(3-9)について、認識との相違とは「ゴキブリを踏んだ」という結果が話者が想定していなかった事態であるということを表している。この時動作主に意図性が認められるような文脈であれば、「なかなか踏めそうにないと想定していたが結果的には踏めた」という意味を表すことができる³¹。一方で動作主に意図性が認められない文脈であれば「踏むという事態は起こらないと想定していたが結果的に踏んでしまった」という解釈となる。ここまでをまとめると以下のように説明できる。図3.15で表したように、接頭辞 *ter-*が動詞と合成することにより事態の発生局面が認知的に際立つ。そしてその際前提を否定する場合は認識との相違用法が現れる。最後に認識との相違用法の中で、文脈によって「偶発」なのか「実現系可能」なのかが確定する。

次に非意図の表出を見る。(3-10)は動作主が *oleh* によって標示されている非意図の例である。

(3-10) *Kaki=nya ter-injak oleh Sato.*

foot=3 TER-step by Sato

「彼の足を Sato は間違っって踏んでしまった」

(作例)

この場合の事象構造は以下の図3.19によって示される。ここでは *Sato* という参加者が追加されたことを、名詞と *ter-*派生動詞の事象構造との合成という形で表している。図3.17と比較すると、二段階目で動作主の合成が行われている点で異なる。これにより、最終的な合成後の事象構造では動作の非意図性が前景化している。このことは図の中の非意図性の矢印が点線から破線になることで表されている。

³¹実際の使用の際には、動作が意図的にある行為を行っており、かつ話者がその行為の結果としてある事態が成立しないと想定しているという局面で、ある事態が成立した場合に接頭辞 *ter-*が使用可能であると説明できる。

者の意志があれば)ある事態が生起する」または「(行為者の意志があっても)ある事態が生起しない」と述べることになるが、そのことは直ちに、その行為者または対象に関して「行為者がしようと思えばその行為が実現するだけの余地・許容性が、その状況の中にある」、または「行為者がしようと思ってもその行為が実現するだけの余地・許容性が、その状況の中にある」ということを表すことになる。それが、<可能><不可能>という意味にほかならない。(川村 2012: 268)

ただし、肯定文の場合には「実現済みの行為をめぐっては、当該行為が実現するだけの許容性が状況の中にあつたかどうか否かといったことは通常問題にならない」(川村 2012: 189)ため、潜在系可能の意味は現れにくい。一方で否定文の場合、『「ある行為を試みたが、意図どおりに実現しなかった」ということは、容易に「当該行為が実現するだけの許容性、萌芽がこの状況に欠けていた」』(川村 2012: 189)と見做すことが出来る。つまり本稿では否定辞の存在が動作対象に認知的際立ちを与える要因となり、潜在系可能の意味が表出すると考える。

次に肯定文の場合について考える。インドネシア語では肯定文の潜在系可能は総称文の場合にのみ認められることを確認した(cf. 2.5 節)。この理由は、総称文においては動作対象が認知的に際立ちやすいためであると主張する。以下は(2-58)の再掲である。

(3-11) *Serangga mudah ter-injak.*

insect easy TER-step

「虫(というものは)簡単に踏める」

(=(2-58))

インドネシア語では指示詞が付かない名詞句(以下ゼロ限定詞句(cf. 正保 1990: 151))が主語の位置に置かれる場合、非特定の解釈ないしは総称的解釈が義務的となる³³。次の文では、一人の泥棒は明示的ではないものの特定可能な人物であるので、ゼロ限定詞をつかうことができない³⁴。

(3-12) * *Pencuri di-temukan tewas di samping kamar mandi, pertengahan September*
thief UV-find killed in side room shower middle September
lalu.

pass

「(意図した意味)九月の中頃、一人の泥棒が水浴び場の傍で死んでいるのが発見された」

(正保 1990: 151)

不特定の解釈を促すような文脈であれば、主語のゼロ限定詞は容認される。(3-13)では *biasanya* 「通常の、普通の」という語があるために、「運転手」は特定の人物ではなく、不特定の運転手一般に言及することになるため、ゼロ限定詞が現れることができる。

(3-13) *Dan biasanya pula, sopir di-bawa mutar-mutar dulu, tak tentu tujuan.*
and normally also driver UV-take turn-RED previously NEG sure aim

「そして、これも又通常の手口だったのだが、先ず運転手に当てても無く、ぐるぐる走

³³主語以外の統語位置に置かれる場合は特定の解釈は容認される(正保 1990: 153)。

³⁴意図した意味を表したい場合は助数詞の *seorang* 「一人の」を用いて *seorang pencuri* 「一人の泥棒」とする。

らせるというものだった」

(正保 1990: 152)

この説明を踏まえれば、(3-11) の場合はゼロ限定詞の義務的な不特定解釈によって接頭辞 ter- の潜在系可能の解釈が誘発されていると考えることができる。不特定解釈は「その集合全体の観念を想起させる」(正保 1990: 155) ことになる。つまり、対象の属性や性質に焦点を当てることになると言える。以上の分析を図式化すると次の図 3.20 のようになる。

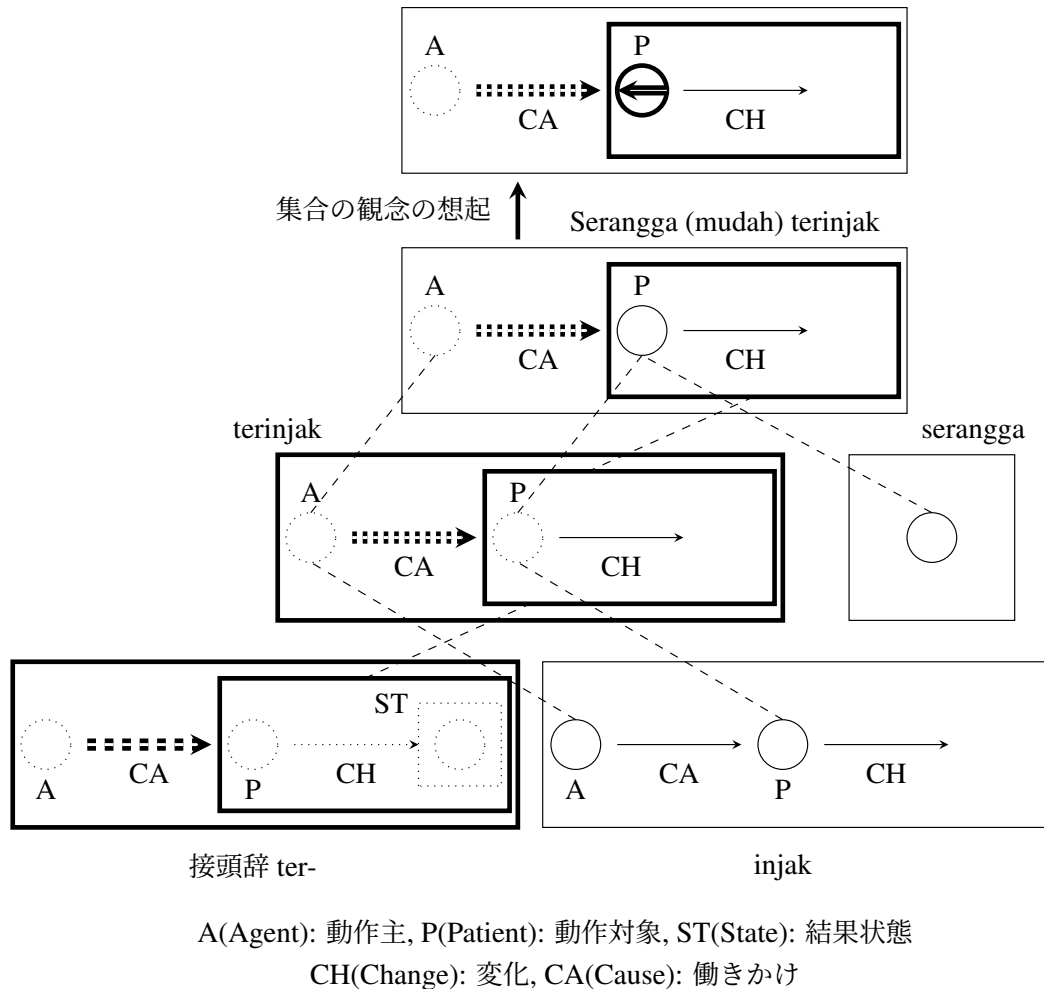


図 3.20 terinjak の合成と潜在系可能への派生

図 3.20 では下から二段目でゼロ限定詞の serangga 「虫」が合成されている。ここでインドネシア語のゼロ限定詞は不特定解釈を強制し、その名詞句が表すモノの性質に焦点があたることになるため、川村 (2012) が述べるような許容性への注目という変化が起こることになる。図式では、ある対象の属性が認知的に際立つことを逆向きの矢印によって表している³⁵。

最後に判断の意味の表出について考える。まず判断用法となる知覚動詞の事象構造について、新たに定義する。英語の see と look そして日本語の「見る」を参考にすれば、インドネシ

³⁵これは谷口 (1994, 2005) などの中間構文の図式化を参考にしている。これらの研究では英語の中間構文を動作対象 (原文では Mover/Patient) の特質による促進力・抵抗力を表す構文であるとし、そうした力を動作主の方節の丸内に矢印を描写することで表している。

ア語の lihat 「見る」は次の図 3.21 ように図式化が可能である。

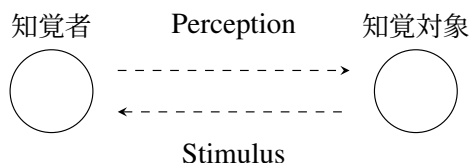


図 3.21 知覚動詞の事象構造 (cf. 町田他 2022: 192)

これまでの動詞と異なる点は、知覚者から知覚対象に向けた認知行為を示す矢印のほかに、知覚対象からの刺激を図式化する点である。これは知覚行為の双方向性を反映しており、知覚者は対象を知覚する主体であるのと同時に、知覚対象からの刺激を受け取る受け手でもあることを意味する (Croft 1991: 219; 町田他 2022: 191)。なお、両者は実際に双方に影響を与えるような行為ではないため、破線で表現される。

例えば日本語の「見る」と「見える」の違いはこの図式を用いて説明できる。町田他 (2022: 192) は日本語の「見る」「見える」の違いを認知的に際立つ場所が違うという点で区別している。図 3.22 と図 3.23 は「見る」の場合には Perception、つまり知覚者からの認知行為の部分が認知的に際立ち、「見える」の場合は Stimulus、つまり知覚対象からの刺激そして刺激の受容が認知的に際立っていることを表している。

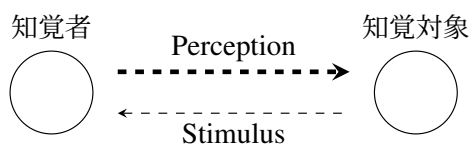


図 3.22 「見る」の事象構造 (cf. 町田他 2022: 192)

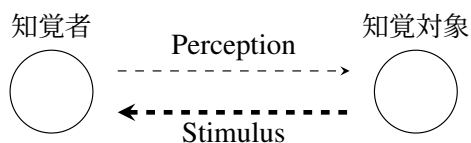


図 3.23 「見える」の事象構造 (cf. 町田他 2022: 192)

以上の議論を踏まえてインドネシア語の接頭辞 ter+ 知覚動詞を考えると、判断の場合には図 3.23 のような Stimulus が際立つ事象構造で表されると言える。具体的な判断用法の表出には実現系可能用法を経由すると考える。まず知覚動詞の実現系可能用法の表出を見たあと、判断用法の表出メカニズムを示す。

ここで、知覚動詞における実現系可能と判断の例文を再度以下に提示する。(3-14) は実現系可能、(3-15) は判断の例である。

(3-14) *Suara=nya ter-dengar.*

voice=3 TER-hear

「彼の声が聞こえた」

(作例)

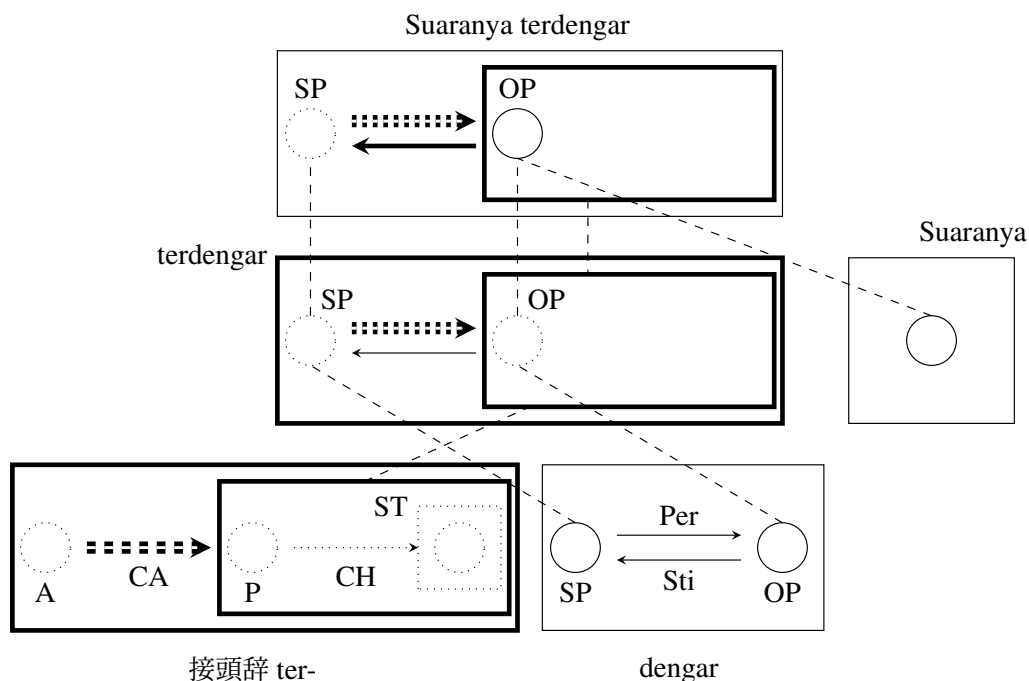
(3-15) *Dia ter-lihat sakit.*

3SG TER-see sick

「彼は具合が悪く見える」

(=1-8)

まず(3-14)の図は図3.24のようになる。これは図3.18における実現系可能の表出過程とほぼ同じである。異なる点は知覚動詞であるために知覚者からの矢印と知覚対象からの矢印が共存し、このうち知覚対象からの perception が接頭辞 ter-の非意図性の矢印と合成されている点である。最終的に知覚対象とその刺激が認知的際立ちを帯びることになり、完了ないしは実現系可能の意味が表出する。

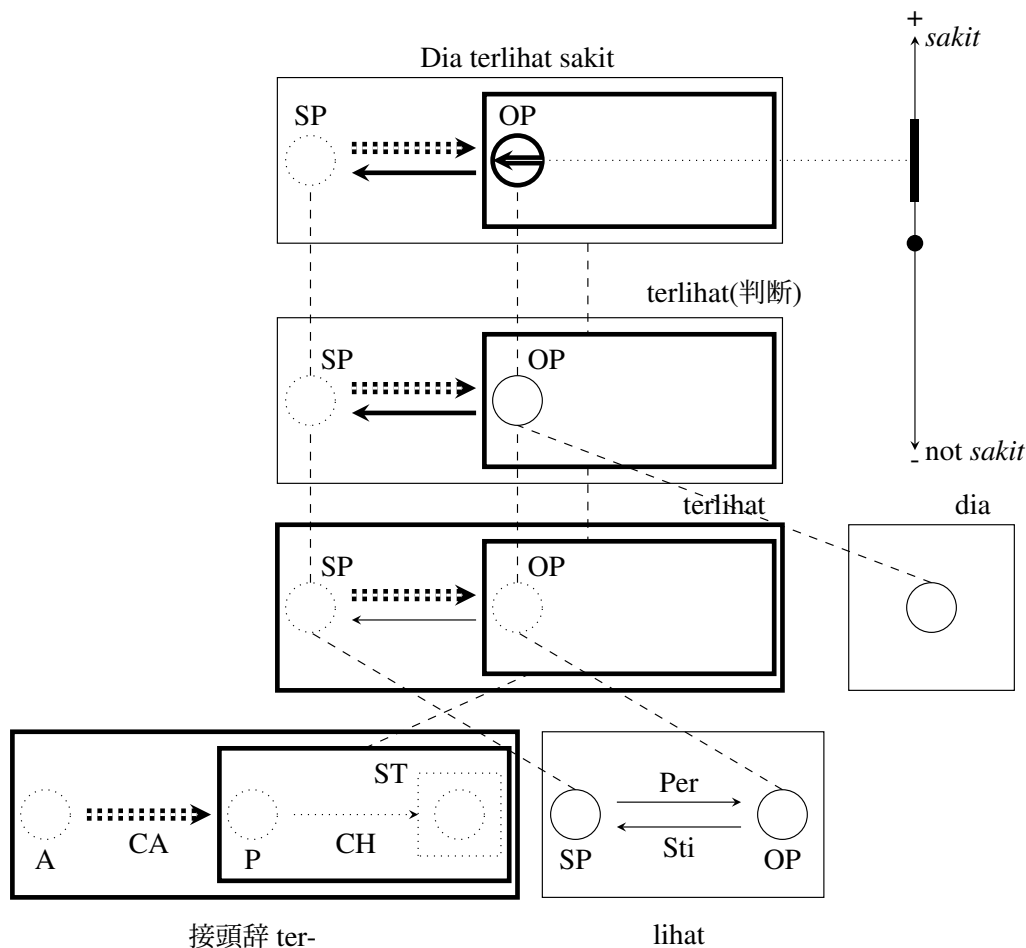


A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, ST(State): 結果状態,
CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ, Per(Perception): 知覚行為, Sti(Stimulus): 刺激
SP(Subject of Perception): 知覚者, OP(Object of Perception): 知覚対象

図 3.24 terdengar の合成

これを基に判断への派生を考える。(3-15)のような判断への派生は図3.25のように表すことができる。判断用法は補語的要素を伴う場合に限られる。つまり、この補語的要素が認知的に際立つ箇所に影響を与えていると考えられる。図3.25では上述の図3.24とは違い、sakitが表す「病気」の尺度が現れ、terlihatの中に含まれる知覚対象がその尺度上に位置づけられている。そしてこの補語的な要素が付随することによって、知覚対象の属性が認知的に際立つと考える。これは総称文において集合の観念の想起によって知覚対象の属性に焦点が当たったこと

と並行的である。そのため図 3.25 では、属性が認知的に際立つことを図 3.20 と同じように逆向きの矢印によって表している。以上本稿では判断用法は実現系可能用法を基として、補語的要素を伴うことによって認知的際立ちの位置が知覚行為全体から知覚対象の属性に移行することによって発生すると考える。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, ST(State): 結果状態,
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ, Per(Perception): 知覚行為, Sti(Stimulus): 刺激
 SP(Subject of Perception): 知覚者, OP(Object of Perception): 知覚対象

図 3.25 terlihat の合成と判断への派生

ただこうした補語的要素が容認される過程及び、補語的要素の存在が知覚対象の認知的際立ちに繋がる動機については今後の課題である。しかし現時点では谷口 (2005) の英語の連結的知覚動詞構文の議論が示唆的である。連結的知覚構文とは次のように知覚動詞の後に補語的要素が続いて「主語が補語的要素が表す属性を持ち、その属性を知覚する」という意味を表す文である。

- (3-16) a. He sounds foreign.
 b. He looks ill.

(河野 2013: 31)

谷口 (2005) はこのような文において、知覚対象からの刺激とその受容とは、知覚対象がそのような刺激を発する属性を持つことを必然的に内包しており、この内包関係が、刺激と受容全体から知覚対象の属性への認知的際立ちの変更を引き起こしているという仮説を立てている。

具体的には、まずこの連結的知覚構文では、本来 look などの後ろに来る要素は (3-17) のように副詞であったと想定されている。

(3-17) The flower smells sweetly. (谷口 2005: 224)

この例は The flower smells の部分が「花が匂う」という自発の意味を表し、そうした刺激とその受容の全体が sweetly という尺度上に位置付けられていると言える。次に、刺激と受容という事態全体から、対象の属性へと認知的に際立つ部分に変化する。これは、例えば (3-17) の場合であれば「花が甘く香る」という事態は「花 (の香り) が甘い」という対象の属性を必然的に含意するためである (谷口 2005: 226)。英語の連結的知覚構文はこのように対象の属性へと認知的な際立ちが移行する中で、smells に後続する要素が形容詞として解釈されるようになり、(3-18) のような文が形成されたと考えられている。

(3-18) The flower smells sweet. (谷口 2005: 224)

同じような知覚事象全体から属性への際立ちの変化の仮定が、インドネシア語の判断用法にも適用できると考える。インドネシア語の接頭辞 ter- のような判断用法は古典マレー語ではほとんど確認されないことに加え、現代マレー語においても一般的ではない。ここから terlihát という形式は当初は可能の用法が主であったが、上記の英語の連結的知覚構文のような認知的際立ちの移行により次第に判断用法としても認められるようになったと考えられる。

以上潜在系可能と判断用法の意味の表出について見たが、前章で述べたようにこの二つの用法の共通点は認知的際立ちが動作対象にあるという点である (cf. 2.6.2 節)。前章で提示した認知的際立ちという観点からの接頭辞 ter- の分類を踏まえると、これら二つの用法に関して「接頭辞 ter- の機能により事態成立局面が認知的に際立つが、何らかの要因によって際立ちが動作対象の性質へ移行した」と説明できる。否定の潜在系可能の場合は、川村 (2012) が述べるようにある事態が成立しないことは元々動作対象の性質として事態が成立する許容性が欠けていたことに繋がる。総称文の潜在系可能の場合はゼロ限定詞による総称読みの強制によって集合の観念の想起が行われ、動作対象の属性が認知的に際立つようになる (cf. 図 3.20)。判断用法では図 3.25 が示すように、補語句が尺度を喚起することで、知覚対象の属性に焦点が当たると説明できる。

3.3.2.3 複数の意味の表出と意味表出の制限

本節では前節のように事象構造の合成によって接頭辞 ter- の意味表出を捉えることで、同じ文でも複数の意味解釈が存在すること、そして語基による意味表出の制限を予測できることを示す。まず複数の意味表出について考える。2.3.4 節で述べたように、例えば (3-19) は「彼の足を Sato は間違っただんでしまった」という非意図の読みの他に「彼の足は Sato によって踏まれた」という必ずしも Sato の非意図性を含意しない認識との相違の読みが可能である。

(3-19) *Kaki=nya ter-injak oleh Sato.*

foot=3 TER-step by Sato

「彼の足を Sato は間違って踏んでしまった (彼の足は Sato によって踏まれた)」

(=3-10)

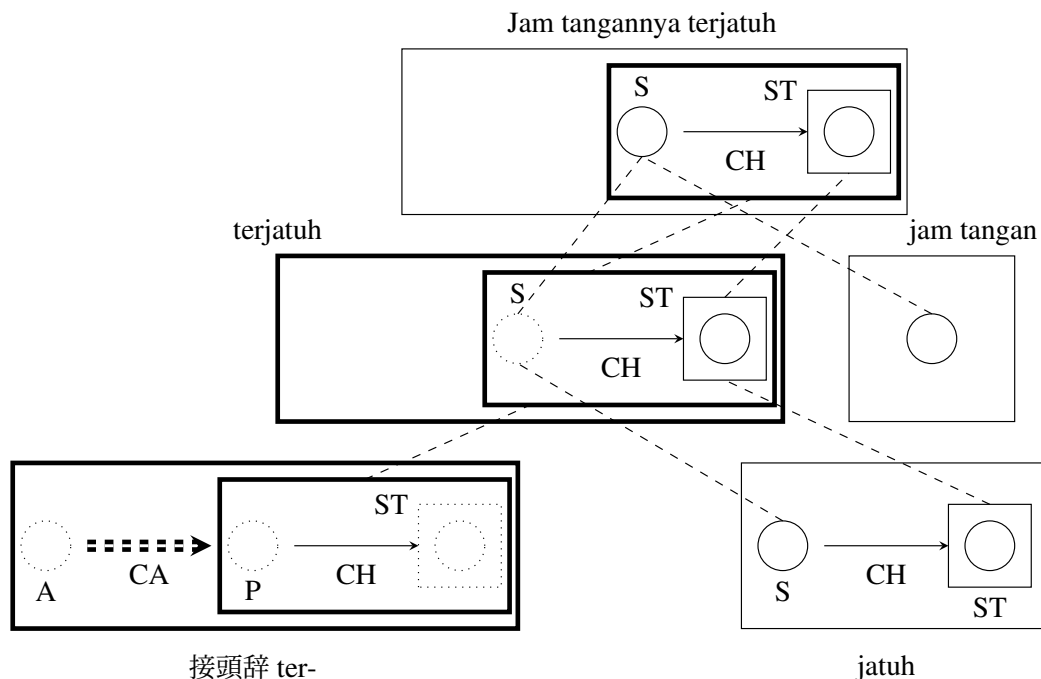
このように二つの読みが可能になるのは、動作主が明示的に現れている文の場合は、最終的に認知的際立ちが動作の非意図性と事態成立局面の両方にみられるためであると考えられる。具体的には非意図と認識との相違は下図 3.26 の最上段において、非意図性と事態の成立局面の認知的際立ちのどちらが優先されるかによって変化すると本稿では考える。破線で表されている動作の非意図性が優先的に解釈される場合は非意図の意味が表れる。一方で太枠の四角で表されている事態の成立局面が優先的に解釈される場合は認識との相違の意味が表出する。事態成立局面の認知的際立ちが選択されている場合、非意図性の際立ちは後景化するため、認識との相違用法の場合は Sato の動作の意図性に関しては中立となる³⁶。

³⁶(3-9) で述べたように、動作主が明示されていない場合は認識との相違用法の下位区分である実現系可能と偶発の二つの読みが認められる。しかし動作主が明示されている場合は、以下のように動作主の意図性を読み込むと容認度が下がる。

(i) ?*Kaki=nya ter-injak oleh Sato. Sato sengaja meng-injak=nya untuk meng-ganggu=nya.*
foot=3 TER-step by Sato Sato deliberately AV-step=3 to AV-bother=3

「彼の足は Sato に踏まれた。Sato は彼を邪魔するためにわざと踏んだのだ」 (作例)

このことは、認知的際立ちが事態成立局面に与えられた場合、動作の非意図性は相対的に後景化するが依然として話者の中には非意図性の認識が残存していることを示している。しかし非文とは判断されないため、どの程度非意図性の読み込みがなされるかについては今後詳しく調査する必要がある。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, S(Subject): 単一項
 ST(State): 結果状態, CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ

図 3.27 ter-+jatuh の合成

実現系可能の表出の条件は、完了用法が認められる際に動作主の意図性を読み込んだ場合であった (cf. 2.5 節)。つまり動作主が事態概念の中に存在しなければ実現系可能の読みが出来ないことになる。terjatuh の場合は buka 「開ける」や injak 「踏む」の場合と違い動作主 A が含意されない。そのため「落ちることができた」のような実現系可能の解釈は妨げられる。結果、語基が jatuh の場合は「S が落ちるという事態が話者の想定に反して生じた」という偶発の解釈に限定される。

以上本節では一つの文が複数の解釈を持つ場合にどのような要因で解釈の選択が行われるか、自動詞語基の場合に意味表出が制限される理由は何かという点について検討した。本節では一点目について、動作の非意図性か事態成立局面のどちらが認知的に際立つかで解釈の選択が行われていると主張する。二点目については、自動詞語基では事象構造に事態成立局面しか含まれないため、最終的な合成結果の中に動作主の分節が含まれず、結果として意図性の読み込みが行われなかったためであると主張する。

3.3.3 接頭辞 meN-と接頭辞 di-について

最後に補足として、接頭辞 di-が行為連鎖モデルでどのように表されうるかについて述べておく。これは 1.1 節で述べたように接頭辞 ter-は接頭辞 di-としばしば比較され、その違いが問題となるためである。例えば佐々木 (1982) は接頭辞 ter-の機能について、接頭辞 meN-と比較することで以下の様に述べている。

行為者側に現れる否定的効果を勘定して、(...) 出発点 α にマイナス記号 (-)、そして帰着点 β にプラス記号 (+) を加えた図 9(以下に示す図 3.28 を指す) によって、TER-動詞のプロセスを図示することにする。そして自ずから ME-³⁷動詞の場合は、両記号が入れ替わることになる。(佐々木 1982: 302)

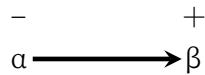


図 3.28 佐々木 (1982: 302) による接頭辞 ter-の事象構造

この分析は帰着点、つまり被動作主を前景化するという分析は本稿の事態成立局面に認知的際立ちを与えるという分析と類似している。しかし、単に帰着点を前景化するという分析だけでは接頭辞 di-との区別が難しい。次の文は接頭辞 ter-と接頭辞 di-が使用された例である。

- (3-21) a. *Maaf, buku saudara ter-bawa oleh Saya.*
 sorry book 2SG TER-take by 1SG
 「すみません、あなたの本は私が持って行ってしまいました」 (= (1-2))
- b. *Maaf, buku saudara di-bawa oleh Sato.*
 sorry book 2SG UV-take by Sato
 「すみません、あなたの本は Sato が持って行きました」 (= (1-15))

接頭辞 di-は基本的に動作対象を主題とする標識とされる (Sneddon et al. 2010: 255)³⁸。一方で接頭辞 ter-はすでに述べたように、事態成立局面及び動作の非意図性に認知的際立ちを与える。両接辞の違いは「対象」そのものに注目するか、事態成立などの「関係」に注目するかという点であり、本稿の分析を用いれば、その差異を明瞭化することができる。つまり、接頭辞 ter-の事象構造である図 3.12 に対して、接頭辞 di-の事象構造は次のように表すことができる。接頭辞 ter-の場合は動作対象が何らかの状態に変化するという事態・関係に認知的際立ちが与えられていたのに対して、図 3.29 では動作対象そのものに際立ちが与えられていることがわかる。

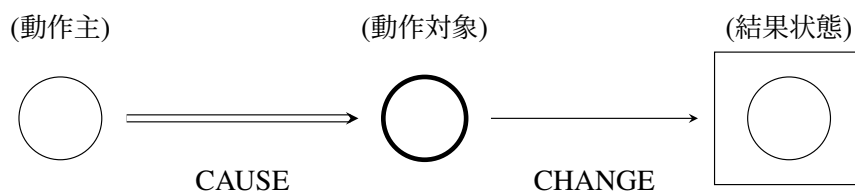


図 3.29 接頭辞 di-の事象構造

³⁷本稿での接頭辞 meN-と同義である。

³⁸ただし、接頭辞 di-は動作対象が主題ではない場合にも、談話上の要請からしばしば用いられることがある (Kaswanti Purwo 1988)。こうした場合は本稿での接頭辞 di-の分析が適用できない。しかし接頭辞 di-の議論とは本稿での主張とは直接関係しないため、包括的な接頭辞 di-の事象構造の表示の分析は今後の課題とする。本稿は接頭辞 ter-との差異に関わる範囲では事象構造の違いを利用して説明可能であると示したものである。

なお、接頭辞 meN-は次のように表すことができる。接頭辞 di-が動作対象を主題するのに対して、接頭辞 meN-は動作主を主題にする機能を持つことを、ここでは動作主を太線にすることによって表している。

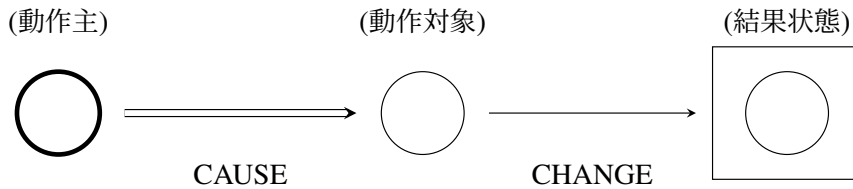


図 3.30 接頭辞 meN-の事象構造

以上、接頭辞 ter-の分析でしばしば問題となる接頭辞 di-との差異について、事象構造を用いて確認した。

3.4 接頭辞 ter-と構造変化

本節は、接頭辞 ter-が引き起こす構造変化の原因についての考察を行う。1.1 節で触れたように、接頭辞 ter-は統語的には主に受身文標識として働く。(3-22a) では主語に動作主が置かれているのに対し、(3-22b) では動作主が前置詞 oleh を伴って斜格を取っている。

- (3-22) a. *Saya mem-bawa buku saudara.*
 1SG AV-take book 2SG
 「私はあなたの本を持って行った」 (= (1-1))
- b. *Maaf, buku saudara ter-bawa oleh saya.*
 sorry book 2SG TER-take by 1SG
 「すみません、あなたの本は私が持って行ってしまいました」 (= (1-2))

一方、自動詞語基ではこうした構造変化が起こらない。以下の (3-23a) と (3-23b) を見ると、どちらも単一項である Latif が主語の位置にあることが確認できる。

- (3-23) a. *Latif tidur di kelas.*
 Latif sleep in class
 「Latif は授業中に寝た」 (= (1-9a))
- b. *Latif ter-tidur di kelas.*
 Latif TER-sleep in class
 「Latif は授業中に寝てしまった」 (= (1-9b))

さらに、動詞によっては構造変化が起こる場合と起こらない場合、つまり ter-派生動詞が能動文の中で使われる場合と受身文の中で使われる場合の両方がある。例えば認識動詞の場合、意味役割が思考者と思考対象の項の両方を主語に置くことが可能である。

- (3-24) a. *Saya ter-ingat akan keluarga.*
 1SG TER-remember about family
 「私は家族のことをふと思い出した」 (2-50a)
- b. *Keluarga itu ter-ingat oleh saya.*
 family that TER-remember by 1SG
 「私はその家族のことをふと思い出した」 (2-50b)

本節では、こうした構造変化の要因についても事象構造を用いて説明可能であることを示す。最初に一般的に能動文から受身文の構造変化が認知言語学の観点からどのように考えられているのかを説明する。次にインドネシア語の接頭辞 *ter-* にその考え方の適用を試みる。

まず事象構造を基にした認知言語学の文脈では、構造変化は認知的際立ちの変化であると捉える。例えば (3-25) は英語の能動文と受身文の対である。(3-25a) では *John* という動作主が主語である一方で、(3-25b) では *the window* という動作対象が主語である。

- (3-25) a. *John broke the window.*
 b. *The window was broken by John.* (谷口 2004: 66)

この主語の意味役割の差は、事象構造では認知的際立ちの位置の差として表される。つまり次の図 3.31 と図 3.32 の事象構造において、能動文 (3-25a) では動作主が、受身文 (3-25b) では動作対象が認知的に際立つ項として太線で示される。

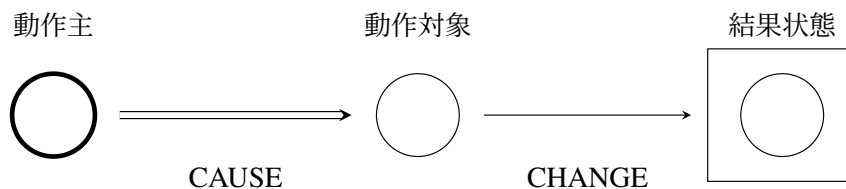


図 3.31 能動文の事象構造

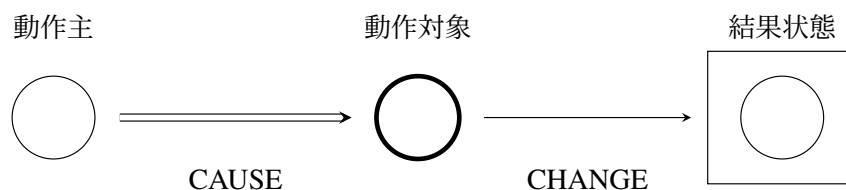
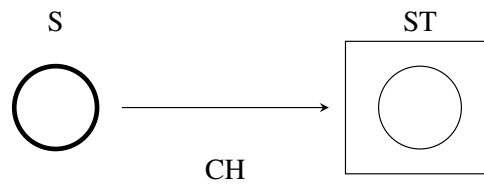


図 3.32 受身文の事象構造

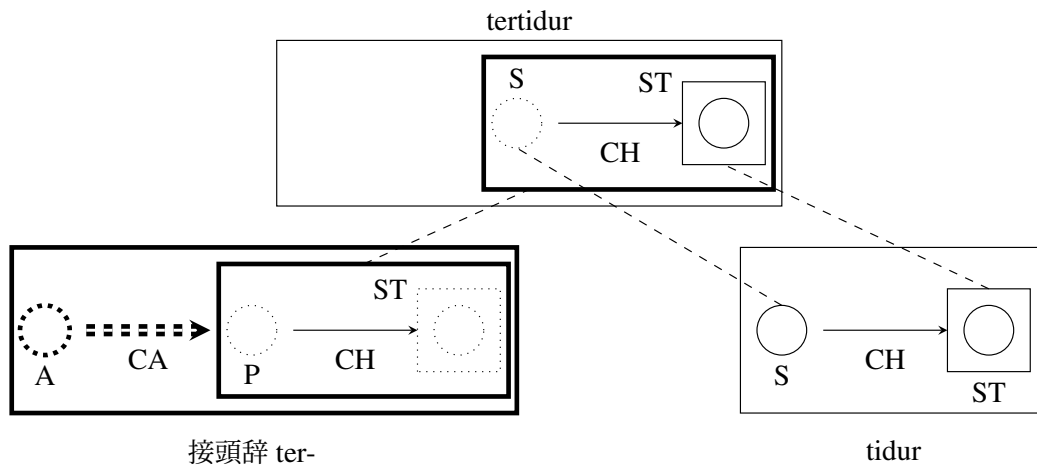
この考え方を基に構造変化が見られない *ter-* 派生動詞を確認すると、まず自動詞が語基の場合には単一項が認知的際立ちを表す太枠内に入るため、認知的際立ちの変化がないと分析出来る。(3-23) を例にとる。図 3.33 は自動詞が接頭辞 *ter-* を伴わず現れる (3-23a) を図式化したもの、図 3.34 は (3-23b) の例に関して接頭辞 *ter-* と語基の合成のみを切り取った図である。図 3.33 と図 3.34 を比較するとどちらも単一項である *Latif* が認知的際立ちを受ける、または認知

的際立ちを示す枠内に含まれており、このことが (3-23a) と (3-23b) を比較した際に構造変化が起こらないことを表している。



S(Subject): 単一項, ST(State): 結果状態, CH(Change): 変化

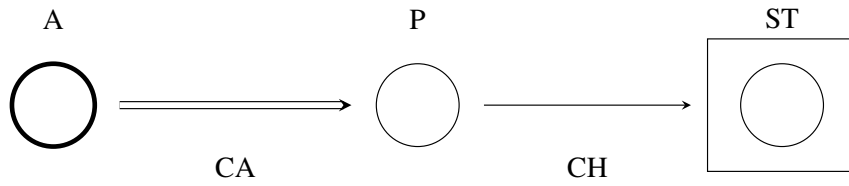
図 3.33 tidur 「寝る」の事象構造



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, S(Subject): 単一項
ST(State): 結果状態, CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ

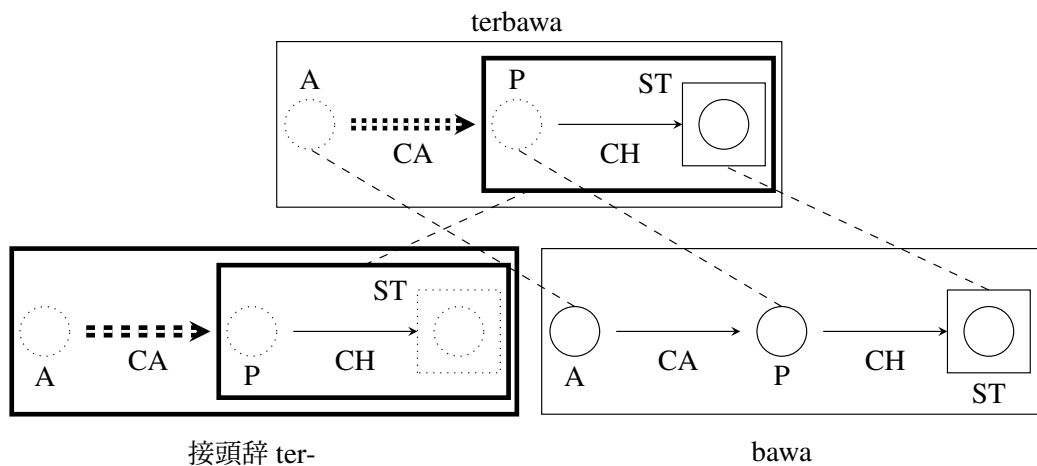
図 3.34 tertidur の事象構造の合成 (構造変化が生じない場合)

一方で他動詞では認知的際立ちの変化が確認できる。(3-22) を例にとると、図 3.35 と図 3.36 はそれぞれ (3-22a) と (3-22b) における (meN-)bawa 「持っていく」と terbawa 「持って行ってしまう」の事象構造をモデル化したものである。両図を比べると、図 3.35 では動作主が認知的際立ちを受けている。その一方で、図 3.36 では動作主は認知的際立ちを受けておらず、代わりに動作対象が事態成立局面の認知的際立ちを表す四角の中に入っている。ここから、(meN-)bawa と terbawa では認知的際立ちの位置が異なることが分かる。この差異が他動詞に接頭辞 ter-が付いた場合に構造変化が起きる要因であると本稿では考える。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, ST(State): 結果状態
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ

図 3.35 (meN-)bawa 「持っていく」の事象構造



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, ST(State): 結果状態
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ

図 3.36 terbawa の事象構造の合成 (構造変化が生じる場合)

最後に、認識動詞に関しても同様の説明が可能であることを示す。認識動詞の大きな特徴の一つとして、2.4 節で説明したように、主語に思考者が置かれる場合と思考対象が置かれる場合の両方がある。

- (3-26) a. *Saya ter-ingat akan keluarga.*
 1SG TER-remember about family
 「私は家族のことをふと思い出した」 (=2-50a)
- b. *Keluarga itu ter-ingat oleh saya.*
 family that TER-remember by 1SG
 「私はその家族のことをふと思い出した」 (=2-50b)

本節ではこのように構造変化が起こる場合と起こらない場合があるように見えるのは、ingat という認識動詞が自動詞に他動詞にもなるためであると考えられる。(3-27a) では前置詞 akan 「～

について」を伴って自動詞として用いられているのに対し、(3-27b)では *ingat* は直接 *kamu* 「君」という目的語を取っており、他動詞であると言える³⁹。

- (3-27) a. *Sudah lama memang, tapi aku selalu ingat akan kejadian itu dan*
already long really but 1SG always remember about incident that and
tak akan pernah aku me-lupakan satu nama : Cindy.
NEG will once 1SG AV-forget one name Cindy

「本当に長い時間がたったが、私は常にその出来事を覚えており、Cindy という名前を忘れることはないだろう」

<http://ambillagi.blogspot.com/>

- b. *Saat ku=cium bunga ini aku ingat kamu.*
when 1SG=smell flower this 1SG remember 2SG

「この花のにおいを嗅いだ時、私は君を思い出す」

<http://akuanakadam.multiply.com/journal>

つまり、ある話者が接頭辞 *ter-*を伴う *teringat* を発話する際に、*ingat* を自動詞として想定する場合と他動詞として想定する場合がある。このとき自動詞として捉える場合は構造変化が起らず、他動詞として捉える場合は構造変化が起きると説明できる。

ここまで、語基が他動詞か自動詞かによって構造変化の有無が変化するという主張を行ってきた。しかし動詞が持つ「働きかけ」という意味も同様に重要であると考えられる。これは他動詞であっても構造変化が起らない場合があるためである。本稿では働きかけが認められる動詞であれば構造変化の容認度が低くなり、反対に働きかけが認められない動詞であれば構造変化の容認度が高くなると主張する。例えば Nomoto & Kartini (2011) は (3-28) や (3-29) の用例を挙げている。

³⁹1.3 節で述べたように、インドネシア語において他動詞であるためには、(A) 能動文の場合に目的語を取りかつ、(B) 接頭辞 *di-*による受身文形成が可能であることが必要である。*ingat* は *diingat* という形式で使われ、(B) の条件も満たしている (cf.(i))。

- (i) *Password yang kuat harus mudah di-ingat oleh pemilik=nya.*
password REL strong should easy UV-remember by owner=3
「強力なパスワードは所有者が簡単に思い出せる必要がある」
<http://123jalansesama.blogspot.com/>

ただし、*diingat* という形式は慣用的に節を伴って (ii) のように用いられることが多い。

- (ii) *Perlu di-ingat bahwa teknik ini sudah tidak bisa di-gunakan saat ini.*
need UV-remember that technique this already NEG can UV-use when this
「その時にはもうその技術を利用できなかったことを覚えておく必要がある」
<http://amidhani.blogspot.com/>

ただし、このような (ii) の用法を受身文として見るべきかは議論の余地がある。頻度の面而言えば (ii) のような例の方が多く見られるため、*ingat* を他動詞であると一概に見做すことは慎重さが求められる。しかし本稿では (i) のような例が容認される点、そして議論の対象である構造変化に大きく関わる点が目的語の有無であるという点から便宜的に *ingat* を他動詞と呼ぶこととする。

(3-28) ..., *rupanya penyebab=nya adalah “si pemuda telah ter-minum susu
apparently cause=3 COP the youth already TER-drink milk
kadaluwarsa”*
expired

「その原因は『若者が期限切れの牛乳を飲んでしまったこと』のようだ」

(Nomoto & Kartini 2011: 123)

(3-29) *Kemarin gw sempat ter-nonton salah satu episod=nya oprah tentang
yesterday 1SG still.be.able.to TER-watch one.of one episode=3 Oprah about
umr
regional.minimum.wage*

「昨日私は地域の最低賃金についての Oprah のエピソードの一つを (たまたま) 見る
ことが出来た」

(Nomoto & Kartini 2011: 123)

(3-28) では動作主である *si pemuda* 「若者」が主語であり、他動詞語基にもかかわらず能動文であることが分かる。同じように (3-29) でも、認知主体を表す *gw* 「私」が主語位置に置かれており、能動文であると言える。このように他動詞語基にもかかわらず接頭辞 *ter-*が付加されているときに能動文で用いられる動詞には、他に *termakan* 「食べてしまう」、*tertelan* 「飲み込んでしまう」、*terciprat* 「浴びてしまう」、*terkena* 「当たってしまう」が挙げられている。能動文で用いられる接頭辞 *ter-* 他動詞語基に対する容認度は話者によって差があり、表 3.1 のようにまとめられている。‘?’ は文法的には正しいがあまり使われない、‘*?’ は理解できるが文法的に違和感があることを意味している。

表 3.1 能動文を作る *ter-*派生動詞の容認度 (Nomoto & Kartini (2011: 124) を基に筆者が作成)

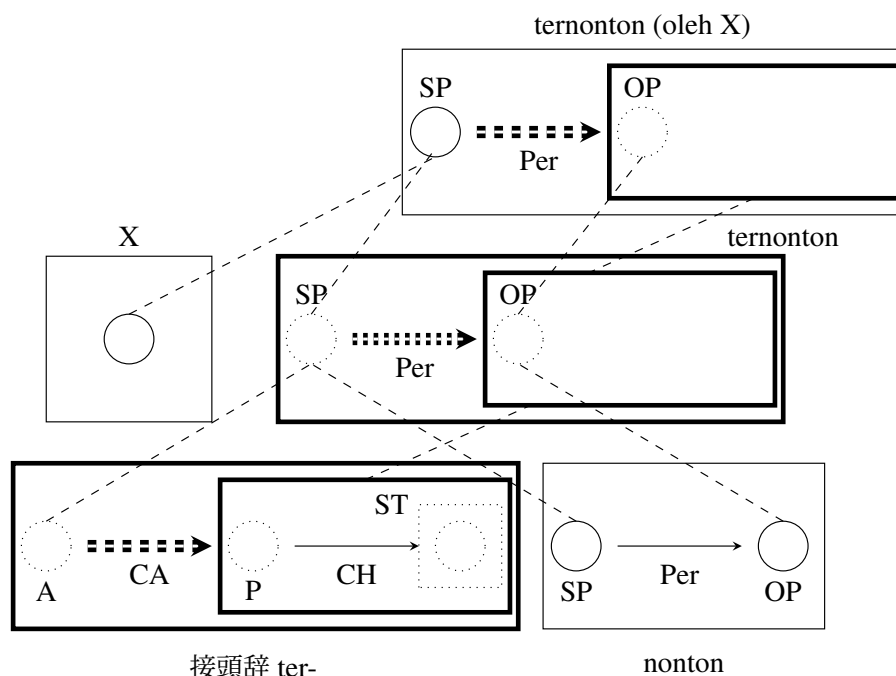
	話者 1	話者 2	話者 3	話者 4
<i>termakan</i> 「食べてしまう」	OK	?	?	*?
<i>terminum</i> 「飲んでしまう」	OK	*?	?	*?
<i>tertelan</i> 「飲み込んでしまう」	OK	?	*?	*?
<i>ternonton</i> 「見てしまう」	OK	OK	*?	OK
<i>terciprat</i> 「浴びてしまう」	OK	?	OK	?
<i>terkena</i> 「当たってしまう」	OK	OK	OK	*?

Nomoto & Kartini (2011) はこのように話者によっては能動文を作る場合を認めていることから、インドネシア語の接頭辞 *ter-* は能動文を作る用法も存在すると結論付けている。加えて、この表からは動詞によって容認度に差があることも読み取れる。例えば *ternonton*⁴⁰ は *terminum*

⁴⁰ インドネシア語では *tertonton* という形式の方が一般的であるが、*ternonton* という場合も確かに存在する。これは語基 *tonton* に接頭辞 *meN-* が付いた場合に *menonton*[*men-(t)onton*] となるが、異分析が起り、語基を *nonton* であると見做す場合があるためである。これらは日常的に用いられる語ではなく辞書にも記載がないことから正書法を定めることができないため、そのまま引用することにする。以下 *nonton* は *tonton* 「見る」と同義で用いる。

に比べると能動文の容認度が高い傾向にある。しかしこうした動詞による容認度の差異については言及しておらず、要因についても明らかになっていない。しかし本稿の考え方をういればこの容認度の差についても説明可能である。

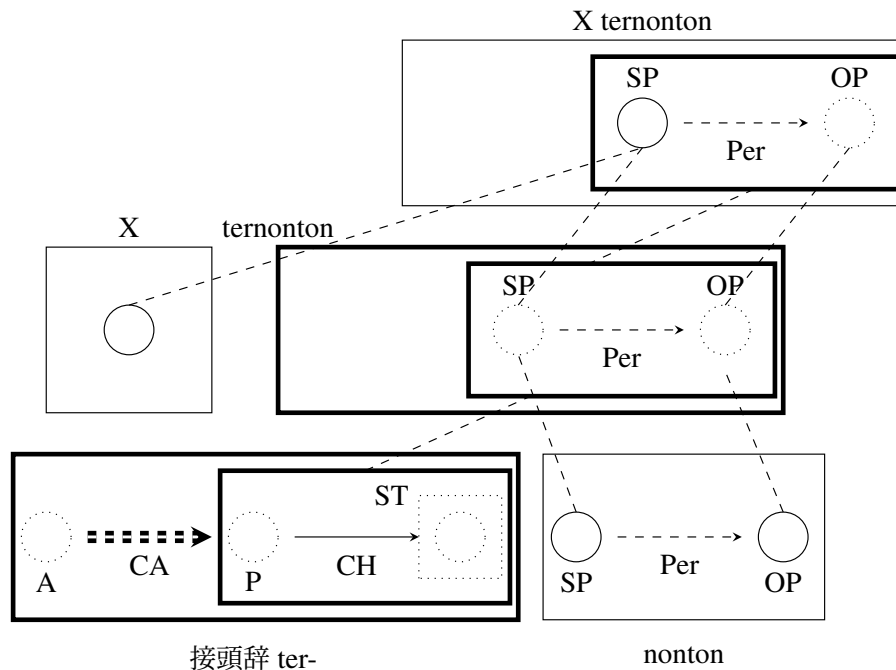
能動文の容認度が高い動詞の一つである ternonton 「見てしまう」と容認度が低い動詞の一つである terminum 「飲んでしまう」とを比べる。ternonton の語基 nonton 「観る」は他動詞であり通常あれば buka 「開ける」などと同様の合成が行われるはずである。つまり知覚者が接頭辞 ter-の動作主の分節に合成され、知覚対象が事態成立局面の中に入ることで認知的際立ちの位置が変化し、構造変化が起こる (図 3.37)。しかし nonton は知覚動詞であり、対象への働きかけが認められない⁴¹。そこでそうした働きかけが無いことが、働きかけを想定する際の語基の知覚者の分節と接頭辞 ter-の動作主の分節の合成を阻害し、自動詞などと同様に語基の事象構造内の動作主が接頭辞 ter-の事象構造内の事態成立局面に合成される場合があると考える (図 3.38)。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, ST(State): 結果状態
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ, Per(Perception): 知覚行為
 SP(Subject of Perception): 知覚者, OP(Object of Perception): 知覚対象

図 3.37 予想される ter-+nonton の合成

⁴¹nonton の事象構造については英語の watch の分析を参考にしている。本稿の 3.3.2.2 節でみたように、lihat 「見る」は perception と stimulus という双方向の関係を想定し、terlihat という形になった場合に stimulus のほうが認知的際立ちを帯びると分析した。しかし nonton は意味的には英語の watch と似ていると考えられる。英語の watch は知覚対象からの刺激の存在を含意せず、専ら知覚者の知覚行為に注目する語である (cf. 中野 1997: 41-42; Leech 2014: 28)。この意味を反映して nonton の事象構造には perception の矢印のみを含めることとした。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, ST(State): 結果状態
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ, Per(Perception): 知覚行為
 SP(Subject of Perception): 知覚者, OP(Object of Perception): 知覚対象

図 3.38 実際の (能動文の場合の)ter-+nonton の合成 (例 (3-29))

すると、接頭辞が付加されていない状態から認知的際立ちの位置が変化せず、nonton「観る」において構造変化が起こらないことになる。一方で terminum の語基 minum「飲む」は他動詞でありかつ、何かを飲んでなくしてしまうという意味である点で nonton「見る」に比べると動作対象への働きかけが認められやすい。そのため他の他動詞と同じく語基の事象構造内の動作主の分節が接頭辞 ter-の事象構造内の動作主の分節と合成され、認知的際立ちの変化が起こることが一般的となる。その結果、Nomoto & Kartini (2011) で挙げられていた動詞の中では能動文の容認度が低くなったと考えられる⁴²。

terciprat「浴びてしまう」と terkena「当たってしまう」に以下のような理由が考えられる。衝突を表す動詞は、積極的に働きかけを行っている場合とそうでない場合がある。これは意志性 (Malchukov 2006) の差である。例えば日本語の「僕の友達は先生にぶつかった」は意志性の有無によって「わざとぶつかった」か「ぶつかるうとは思っていなかったがぶつかった」の二通りの解釈が出来る。このとき、前者の「わざとぶつかった」の場合は意志性があることから働きかけが強く認められ、一方で後者の「ぶつかるうとは思っていなかったがぶつかった」の場合は意志性がないことから働きかけが認められないと考えられる⁴³。この考え方に基づけ

⁴²ここでの考察対象は語基による容認度の違いである。そのため通常インドネシア語では受動文を形成する語基において能動文を用いる言語使用上の動機については今後の課題とする。

⁴³森 (1997: 85) の「A から B への方向性が感じられないために、動作主イコール起点とは解釈されず」という分析と同趣旨である。

ば、インドネシア語の *terciprat* と *terkena* の語基である *ciprat* 「飛び散る」と *kena* 「当たる」は主語に意志性の認められない衝突動詞と言える。そのため動作対象への働きかけが認められにくく、事象構造の合成が *ternonton* のような動詞に近くなると捉えられ、接頭辞 *ter-* による構造変化が起こりにくいと考える。

以上本節では事象構造の考え方を基に、自動詞など動作対象への働きかけがない場合には構造変化が起こらず、他動詞など働きかけがある場合には構造変化が生じることを主張した。

3.5 接尾辞との関係⁴⁴

本節では、接頭辞 *ter-* を扱う際にしばしば問題になる接尾辞 *-kan* との関係について考察を行う。結果として、3.3 節で示した語基の事象構造の違いに由来する *ter-* 派生動詞の意味の違いは、接尾辞 *-kan* を伴う場合にも当てはまることを主張する。具体的には、接頭辞 *ter-* は特定の語根において接尾辞 *-kan* の有無により意味表出が変化することが指摘されているが、接尾辞の問題ではなく、あくまで語基の意味が意味表出に関係していることを示す。以下、3.5.1 節では先行研究を確認する。最初に 3.5.1.1 節で接尾辞に関する形式・意味的な概略を述べる。続いて 3.5.1.2 節で先行研究で接頭辞 *ter-* と接尾辞との関係が主に意味の面からどのように記述されてきたかを確認し、問題点を整理する。その後、3.5.2 節で導入した事象構造の考え方をを用いることで、その問題が解決できることを示す。

3.5.1 先行研究

3.5.1.1 接尾辞の機能と概略

ここでは、分析に入る前に接尾辞 *-kan* の概略を述べる⁴⁵。先行研究の記述に則ると、接尾辞 *-kan* の機能は語基の意味を基準に以下の表 3.2 ようにまとめることができる (cf. Sneddon et al. 2010; Shiohara 2012; Kroeger 2007)。

⁴⁴本節は佐近 (2020a) の内容に基づいている。

⁴⁵以下で説明するように動詞の項を増やす applicative の機能を持つ接尾辞には、接尾辞 *-kan* のほかに接尾辞 *-i* がある。接尾辞 *-i* は基本的に (A) 目的語交替、(B) ditransitive の形成、(C) 強調、(D) OPTIONAL、(E) 前置詞的役割、(F) 「X を [語基] の状態にする」、(G) 「X に [語基] を与える」という機能を持つと記述される (cf. Arka et al. 2009: 87–88; Shiohara 2012: 72–73; Sneddon et al. 2010: 89–98)。しかし、接尾辞 *-kan* とは異なり、接尾辞の有無による意味表出の差異は確認されない。そのため、本稿では接尾辞 *-kan* に絞って議論を行う。

表 3.2 接尾辞-kan の機能と語基

語基	機能
A 他動詞	BENEFACTIVE / INSTRUMENTAL OPTIONAL
B 自動詞	CAUSATIVE
C 形容詞	CAUSATIVE
D 名詞	put the object in [base] (「目的語を [語基] に置く」) cause the object to be [base] (「目的語を [語基] にする」) OTHER

以下では本稿に関わる動詞語基の場合の接尾辞-kan の機能を確認する。最初に語基が他動詞の意味を持つ場合、benefactive または instrumental の項を増やす applicative として機能する。(3-30a) は benefactive として機能する接尾辞-kan の例である。(3-30a) では (3-30b) では表示されていない受益者項 *anaknya* 「その子供」が、接尾辞-kan によって目的語として表れている。

- (3-30) a. *Dia men-jahit-kan anak=nya rok.*
 3SG AV-sew-BEN child=3 skirt
 「彼/彼女はその子供にスカートを縫ってあげた」 (Sneddon et al. 2010: 85)
- b. *Dia men-jahit rok.*
 3SG AV-sew skirt
 「彼/彼女はスカートを縫った」 (Sneddon et al. 2010: 85)

次の (3-31a) は instrumental の例である。(3-31b) では周辺項である *tongkat* 「棒」が、(3-31a) では接尾辞-kan によって目的語の位置に置かれている。

- (3-31) a. *Dia memukul-kan tongkat pada anjing.*
 3SG AV.hit-INS stick on dog.
 「彼/彼女は棒で犬を殴った」 (Sneddon et al. 2010: 83)
- b. *Dia memukul anjing dengan tongkat.*
 3SG AV.hit dog with stick
 「彼/彼女は棒で犬を殴った」 (Sneddon et al. 2010: 83)

しかし一方で接尾辞-kan の付与によって統語的変化が起こらない場合もある。本稿ではこのタイプの接尾辞-kan を [OPTIONAL] と呼ぶ。ここに分類される接尾辞-kan は、意味的差異を引き起こす場合とそうでない場合でさらに分かれる。(3-32) は意味的な差異が生じる場合の例である。(3-32a) の *melukis* は主に「～の絵を描く」という意味を表すが、*melukiskan* というように接尾辞-kan が伴う場合は (3-32b) のように「言い表す」といった意味に変化する。対して (3-33) では接尾辞-kan は意味的にも統語的にも影響しない。なお、このような機能の同定が難しい接尾辞-kan に関しては、例文内でのグロスに KAN と表示する。

- (3-32) a. *Ia biasa me-lukis bunga-bunga di taman bunga=nya sendiri.*
 3SG usually AV-paint flower-RED in garden flower=3 REFL
 「彼女はいつも自身のフラワーガーデンの花を絵に描いている」 [Grid.id]
- b. *Saya tak tahu bagaimana me-lukis-kan perasaan ini.*
 1SG NEG know how AV-paint-KAN emotion this
 「私はこの感情をどう言い表していいかわからない」 [Bisnis.com]
- (3-33) *Dia menanam(-kan) padi itu di sawah=nya.*
 3SG AV.plant(-KAN) rice that in rice.field=3
 「彼は自分の畑に稲を植えた」 (Kroeger 2007: 244)

ただし、より子細に観察するとニュアンスの違いが存在する。例えば、(meN-)tutup と (meN-)tutup-kan は統語的な差異はなく、さらにどちらも「閉める」という意味とされるが、接尾辞-kan が伴う場合は閉めるという行為がより強い力で行われることを含意する (Hopper & Thompson 1980: 260–261)。ここから Hopper & Thompson (1980) はこうした接尾辞-kan は他動性を強める標示の一つとして見做すことができると述べている。

次に、語基が自動詞的意味を持つ場合をみる。この場合は、接尾辞-kan が causative の標識として機能する。(3-34a) は自動詞的意味を持つ語基の例である。

- (3-34) a. *Ibu mem-bangun-kan Siti.*
 mother AV-wake-CAUS Siti
 「母は Siti を起こした」 (Sneddon et al. 2010: 78)
- b. *Siti bangun.*
 Siti wake
 「Siti は起きた」 (Sneddon et al. 2010: 78)

両文を比べると、(3-34a) では (3-34b) において主語である動作主 Siti が目的語の位置に置かれており、Ibu 「母」が新しい項として主語の位置を占めている。ここからこの場合の接尾辞-kan は典型的な使役のマーカであると言える (cf. Dixon & Aikhenvald 2000: 13) ⁴⁶。

⁴⁶その他の語基についての説明は以下の通りである。形容詞的意味を持つ語基の場合について、次の例では接尾辞-kan は使役標識として働き、bersih 「きれいな (清潔な)」を語基として、membersihkan 「きれいにする」という語が形成されている。

- (i) *Siti mem-bersih-kan kamar ini.*
 Siti AV-clean-CAUS room this
 「Siti はこの部屋をきれいにした」 (Sneddon et al. 2010: 74)

名詞が語基である場合は「目的語を [語基] に置く」と「目的語を [語基] にする」という意味を表す。(ii) は pasar 「市場」を語基とし、memasarkan 「～を市場に出す」という意味を表す動詞を形成している。一方で (iii) は calon 「候補者」を語基とする例であり、mencalonkan 「～を候補者にする」という語が派生される。

- (ii) *Pada tahun 1880-an, P&G mulai memasarkan produk baru.*
 on year 1880s P&G start AV.market-KAN product new
 「1880 年代に、P&G は新製品を市場に出した」 [Mata Indonesia News]
<https://www.minews.id/kisah/kisah-pg-perusahaan-yang-produknya-dipakai-di-seluruh-dunia>

3.5.1.2 接頭辞 ter-との関係

本節では接尾辞-kan が語基に含まれる場合の ter-派生動詞の意味についての考察を行う。まず先行研究では (3-35) のように、語根 pikir を基準として語基 pikir と語基 pikirkan の両方に接頭辞 ter-を付加できることが指摘されている。

- (3-35) a. *ter-pikir-kan*
TER-think-KAN
「考えられる (考えることができる)」 [実現系可能]
- b. *ter-pikir*
TER-think
「ふと思いつく」 [自発]

他にも先行研究では以下のような例が挙げられている。以下はすべて Wolff (1986: 186) が挙げている例である。各語に与えられた英訳は、Wolff (1986: 186) からそのまま引用したものである。

- (3-36) a. *ter-sebut*
TER-say
‘above mentioned’
- b. *ter-sebut-kan*
TER-say-KAN
‘have been uttered’
- (3-37) a. *ter-hindar*
TER-avoid
‘avoid doing something’
- b. *ter-hindar-kan*
TER-avoid-CAUS
‘can be avoided’

最終閲覧日 2021/9/17

- (iii) *Dia men-calon-kan adik=nya.*
3SG AV-candidate-KAN younger.brother=3
「彼は弟を候補者にした」 (Sneddon et al. 2010: 82)

ただし上記の大きく二つの意味に当てはまらないものも存在する。そうした例に関しては現時点で統一的な説明は与えられていない (Kroeger 2007: 19; Sneddon et al. 2010: 82)。

- (iv) *Letusan gunung itu mem-bahaya-kan daerah sekitar=nya.*
eruption mountain that AV-danger-KAN region neighborhood=3
「その火山の噴火は周辺の地域を危険にさらした」 (Sneddon et al. 2010: 83)

- (3-38) a. *ter-bayang*
 TER-image
 ‘have an image come to one’
- b. *ter-bayang-kan*
 TER-image-KAN
 ‘can be imaged’
- (3-39) a. *ter-bayar*
 TER-pay
 ‘can be paid’
- b. *ter-bayar-kan*
 TER-pay-KAN
 ‘can be given out in payment’

以上のような語基に接尾辞を含むものと含まないものの両方が存在する場合、多くは (3-37) や (3-38) のように、基本的な意味に違いがないものの、接頭辞 *ter-* が付与している意味が異なる。上述の (3-35) を例にとると、*ter-* 派生動詞には *terpikirkan* と *terpikir* という場合がある。両方とも「考える」という意味が基になっているものの、*terpikirkan* は実現系可能、*terpikir* は自発の意味を帯びやすいことが指摘されている (Sneddon et al. 2010: 123)。

先行研究では、これらの意味の差は接尾辞の有無に起因するものであるとされる (Sneddon et al. 2010: 123; Wolff 1986: 185)。しかし、なぜ接尾辞の有無が意味に影響を与えるかの分析までは行っていない。そこで本節では 3 章で扱った事象構造の点から考えることで、接尾辞が *ter-* 派生動詞の意味に与える影響を明らかにすることを目的とする。なお、ここでの考察の対象は *terhindar(-kan)*、*terpikir(-kan)*、*terbayang(-kan)*、*terbayar(-kan)* とする。これは Wolff (1986) で挙げられているもののうち、*tersebutkan* は国定辞書 KBI の最新の版で認められていないためである⁴⁷。

3.5.2 接尾辞の有無による意味表出の違い

本節では上記の先行研究で挙げられていた接尾辞の有無に関する *ter-* 派生動詞のペアについて、意味の差が生じる要因を考える。結果として接尾辞-*kan* の有無で語基の事象構造が変化し、異なる合成過程を経るためであることを示す。まず *terhindar* と *terhindarkan* のペアから考える (cf. (3-37))。具体的には以下の例を用いる。

- (3-40) *Dia ter-hindar dari hukuman yang lebih keras.*
 3SG TER-avoid from punishment REL more hard
 「彼はより重い刑罰から逃れられた」 [CNBC Indonesia]

⁴⁷*terbayarkan* は KBI 第 4 版 (2008) では認められていないが、第 5 版 (2016) では記載されている。

(3-41) *Kontak senjata ter-hindar-kan.*
 contact weapon TER-avoid-CAUS

「武力衝突は避けられた」 [VIVA]

まず *hindar* と *hindarkan* という語基の意味の違いについて、国定辞書 *KBBI* では *hindar* は自動詞的、*hindarkan* は他動詞的意味を持つものとして定義されている。ここでの接尾辞 *-kan* は使役標識として機能していると考えられる。

(3-42) *hindar*: ‘*pergi menjauhkan diri dari*’ 「(自身を)～から遠ざける」

Ia sering meng-hindar dari teman-teman=nya.

3SG frequently AV-avoid from friend-RED=3

「彼はよく友達たちから逃げている」 [KBBI]

(3-43) *hindarkan*: ‘*menyingkirkan*’ 「～を退ける」

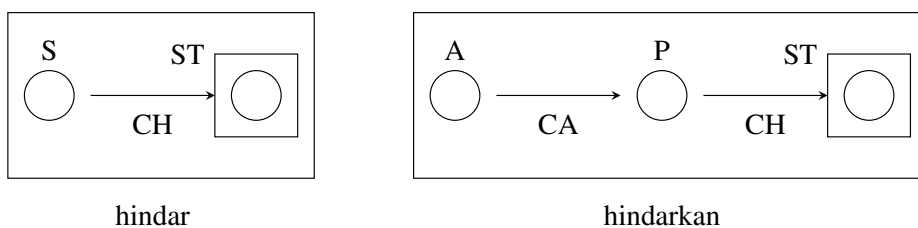
Siapa=kah yang meng-hindar-kan kita dari malapetaka?

who=Q REL AV-avoid-CAUS 1PL.INC from misfortune

「誰が、私たちが災厄から遠ざけてくれたのですか」

<http://albertgavin.blogspot.com/>

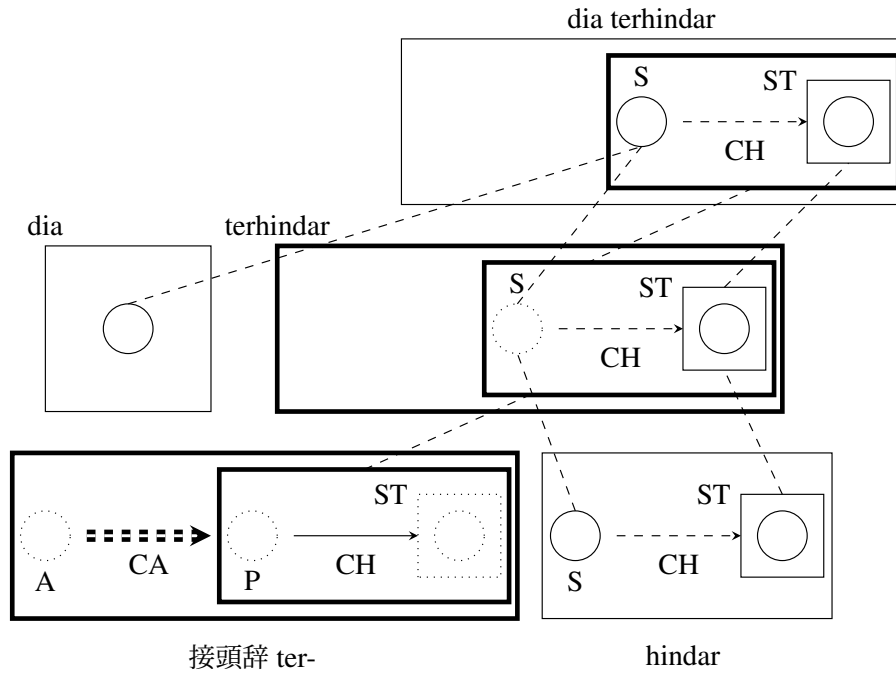
この差異を反映する形で事象構造を行為連鎖モデルを用いて図示すると以下のようになる。図 3.39 の左は *hindar* の事象構造である。*hindar* は自動詞であり、避けるという動作する人が、動作によって元居た場所から別の位置に変化したことを表わしている。一方で *hindarkan* では「～を退ける」という意味である。これは動作主が動作対象へ働きかけを行い、動作対象が結果として移動をすることを含意する。そのため事象構造は図 3.39 の右のようになる。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, S(Subject): 単一項, ST(State): 結果状態
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ

図 3.39 *hindar*(左) と *hindarkan*(右) の事象構造

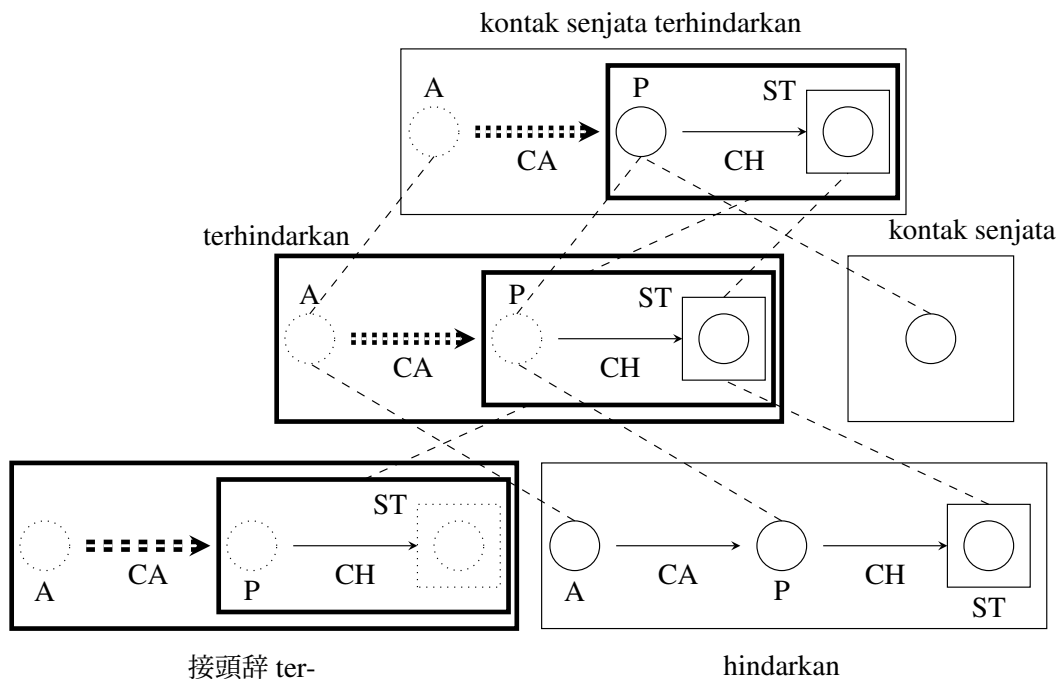
まず *terhindar* の事象構造の合成を例 (3-40) を基にして考えると、*hindar* と接頭辞 *ter-*の合成は次の図 3.40 のようになる。*hindar* は自動詞であるため接頭辞 *ter-*との合成が行われる際に、*hindar* の動作主は接頭辞 *ter-*の動作主分節ではなく、事態成立局面の枠内の中に合成される。その後 *dia* 「彼」が合成され、最終的に *dia terhindar* という文が完成する。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, S(Subject): 単一項, ST(State): 結果状態
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ

図 3.40 ter+hindar の合成 (例 (3-40))

次に (3-41) を基にした hindarkan と接頭辞 ter-の合成は以下のようなになる。前述の hindar とは対象に影響を与えてその結果対象の位置が変化するという概念を含意している点で異なる。このように hindarkan は対象への働きかけを含意するため、hindarkan 内の動作主の分節、動作対象の分節はそれぞれ接頭辞 ter-の事象構造内の動作主分節、事態成立局面と合成され、結果として図 3.41 の二段目の合成結果が生じる。三段目は kontak senjata 「武力衝突」という名詞により動作対象の分節が精緻化されたことを示している。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, ST(State): 結果状態
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ

図 3.41 terhindarkan の合成 (例 (3-41))

以上より、接尾辞-kan が付くことによって語基の事象構造に変化が生じ、結果として接頭辞 ter-との合成方法が変化し、取り得る意味が異なると分析出来る。先行研究では、terhindar は「何かを避ける」、terhindarkan は「避けることができた」という訳をそれぞれにあてており、接尾辞-kan が付いた場合に可能の意味を帯びやすくなると説明されていた。この傾向は上で示した事象構造の合成を基にすると次のように説明可能である。接頭辞 ter+hindarkan の場合は、避ける人が事態成立局面の認知的際立ちを表す太枠内に入っている。さらに、接頭辞 ter-の事象構造に含まれる動作主の分節は合成される精緻化サイトがないため、最終的に働きかけを表す矢印と共に消失する。結果として、実現系可能の解釈がしにくくなる (cf. 図 3.27)。一方で、接頭辞 ter+hindarkan の場合は動作主の分節が事象構造内に残るので、動作主の非意図性が含意され、実現系可能の解釈ができることになる⁴⁸。

以上より hindar と hindarkan のペアにおいて、接尾辞の有無が直接意味表出に影響を与えているように見える現象は、3.3 節までで示した自動詞・他動詞語基の問題と同列に扱うことができると言える。

次に、terpikir と terpikirkan のペアを考える。まず pikir と pikirkan は基本的に次のように使用される。(3-44)にあるように、pikir はそのまま使用可能であるものの、通常は接頭辞 ber-を伴った berpikir という形で現れる。この時、(ber-)pikir は目的語を伴わない自動詞であ

⁴⁸ただし terhindarkan が専ら否定文を伴って不可能の意味として用いられる理由については、この事象構造からは説明できず、今後の課題とする。

る。一方、(meN-)pikirkan は他動詞である。(3-45) では目的語 nasib 「運命」を伴っている。

(3-44) *Lama ia berpikir sebelum men-jawab pertanyaan itu.*
long 3SG think before AV-answer question that
「その質問に答える前に、彼はしばらく考えていた」 [KBBI]

(3-45) *Maka itu Pemda wajib memikir-kan nasib mereka yang ada diluar Lingga.*
then that local.government responsible AV.think-KAN fate 3PL REL exist
outside Lingga.
「そのため、地方政府は Lingga の外に住んでいるものの運命を考える義務がある」
[Kumparan.com]

これら pikir と pikirkan に接頭辞 ter-が付いた場合は (3-46)、(3-47) のような文が形成される。

(3-46) (...) *Denny meng-aku masih belum ter-pikir.*
Denny AV-admit still yet TER-think
「Denny は未だにまだ考えていないことを認めた」 [detiknews]

(3-47) *Kota baru itu letak=nya tak ter-pikir-kan oleh orang biasa.*
town new that position=3 NEG TER-think-KAN by people normal
「その新しい街の場所は普通の人には考え付かない」 [CNBC Indonesia]

これらを比べてみると、(3-46) では ter-pikir が自発の意味を、(3-47) では ter-pikirkan が可能の意味を持っている。前述のようにこれまではこうした意味の差は接尾辞の有無に起因するとされてきた。対して本稿では接尾辞の有無が接頭辞 ter-に直接作用しているというよりも、接尾辞-kan を伴うことで語基のふるまいが変化し、その変化が意味表出の差を生んでいることを確認する。

まず pikir と pikirkan の事象構造の設定を行う。pikir は 3 章で説明を行った認識・感情動詞の一部であると考えられる。一方で pikirkan は KBBI に以下のように記述されている。ここから pikir 「考える」よりも「熟考する」や「重要視するなど」思考対象に対して強い影響を与えるニュアンスを帯びていることが伺える。これは 3.5.1 節で説明したように、統語的变化を引き起こさない接尾辞-kan のうちの一部は他動性を強める標識として機能するとされており (cf. Hopper & Thompson 1980)、pikirkan にもその機能が反映されているためと考える。

memikirkan /me-mi-kir-kan/ v

1 mencari upaya untuk menyelesaikan sesuatu dengan menggunakan akal budi; memper-timbangkan; merenungkan

「知恵を使ってあるものを解決するために努力する; 考慮する; 熟考する」

2 mengingat akan; mengenangkan

「思い出す: 物思いにふける」

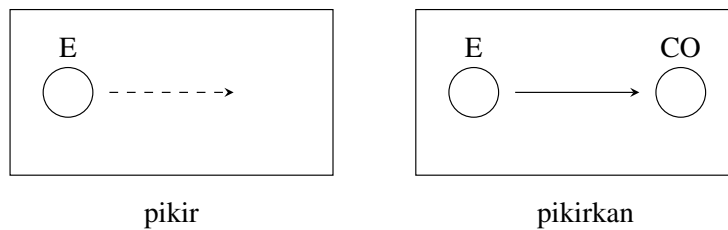
3 mementingkan (diri dan sebagainya); mengutamakan (diri dan sebagainya)

「重要視する; 最優先する」

4 memperhatikan; mempedulikan; mengindahkan

「注意する; 関心を払う; 尊重する」

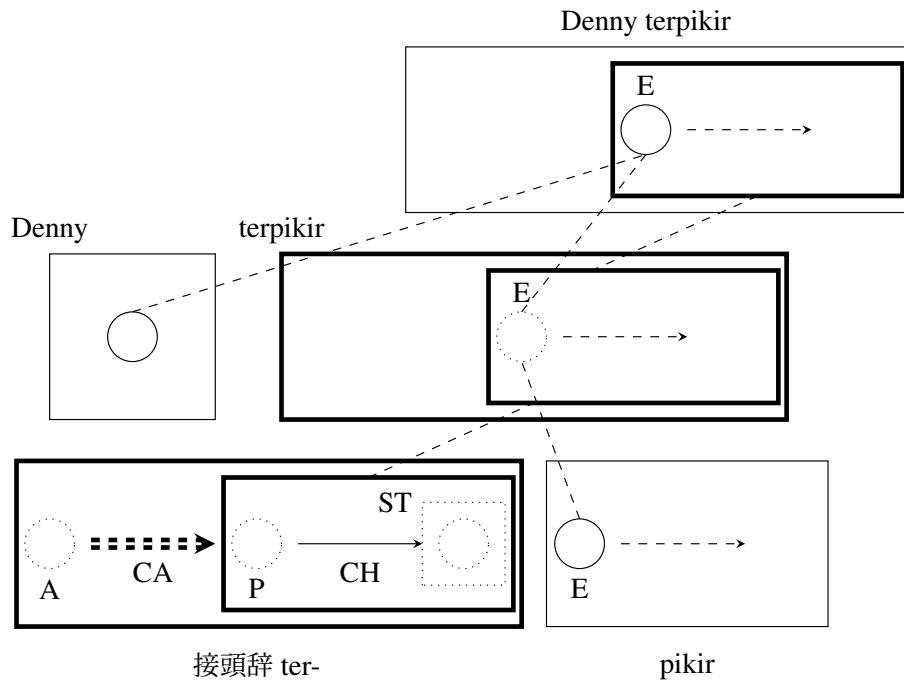
pikir と pikirkan のふるまいの差を踏まえてそれぞれの事象構造を図示すると図 3.42 になる。左の pikir では心的操作を表す矢印が破線矢印で表されている。加えて、状態変化を表さない自動詞なので、矢印の先にはデフォルトの状態では分節が存在しない。一方、右の pikirkan では前述の働きかけの強さを表現するために、矢印が実線となっている。ただし典型的他動詞とは異なり、思考によって対象が変化するわけではないため結果状態の分節は描かれない。



E(Experiencer): 経験者, CO(content): 思考内容

図 3.42 pikir(左) と pikirkan(右) の事象構造

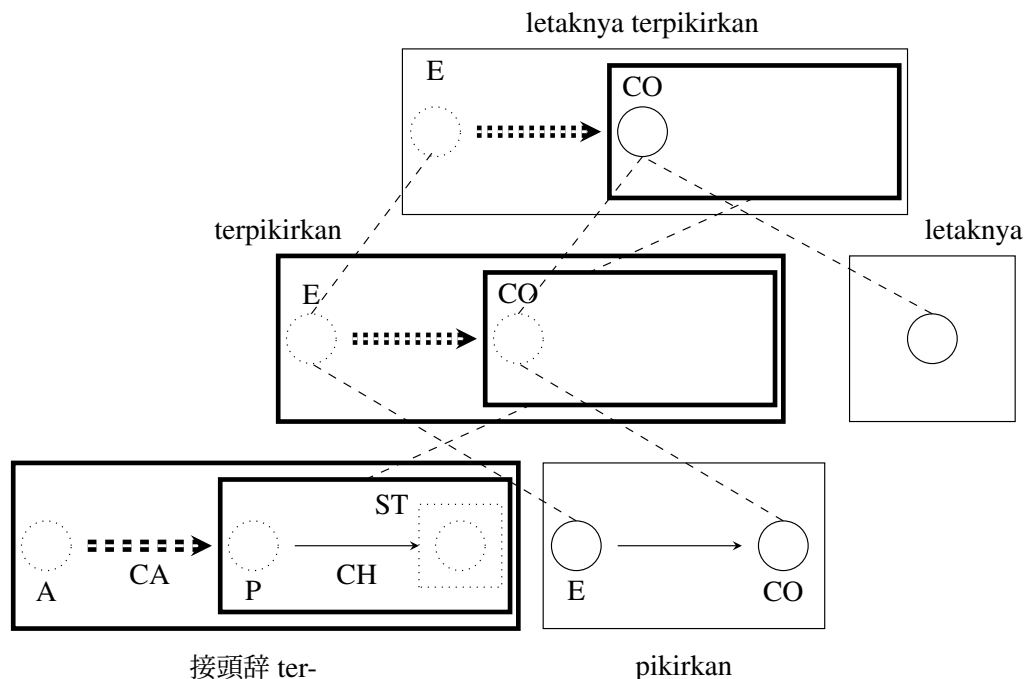
この事象構造を基に、まず ter「ふと考える」について (3-46) を参考に事象構造の合成を考える。合成過程は図 3.43 として表される。pikir は自動詞なので、pikir の思考者は事態成立局面の枠内に合成される。結果として、働きかけの矢印が消失し、実現系可能の意味は生じなくなり自発の意味、本稿の定義では結果状態ないしは偶発の意味が表出する。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, ST(State): 結果状態
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ, E(Experiencer): 経験者

図 3.43 ter+pikir の合成 (例 (3-46))

次に terpikirkan 「考えられる」 の場合を考える。図 3.44 は例 (3-47) を基にした接頭辞 ter- と語基 pikirkan の合成を描いている。pikir と比較して pikirkan は対象への働きかけが強くみられるため、その思考者は接頭辞 ter- の事象構造の動作主の分節と合成が行われる。結果として最終的な合成結果では非意図性の矢印が残存し、それが実現系可能の意味の表出に繋がっている。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, ST(State): 結果状態
 CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ, E(Experiencer): 経験者, CO(content): 思考内容

図 3.44 ter+pikirkan の合成 (例 (3-47))

以上、*pikir* と *pikirkan* という語基に接頭辞 *ter-*がついた場合の意味表出の違いを事象構造の合成という点から示した。ただし、*pikir* 「考える」は次のように補文節を伴う場合がある。

(3-48) *Dia pikir bulutangkis adalah pilihan yang tepat.*
 3SG think badminton COP choice REL appropriate
 「彼はバドミントンが正しい選択であると考えた」 [iNews.id]

基本的に「～について考える」という場合には *tentang* 「～について」という前置詞を伴うことが普通であり、ここまで分析をしてきたように *pikir* は典型的には自動詞であると言える。しかし補文節を伴うことは頻度も高く、こうした例も説明できる必要がある。(3-48) のような補文節をとる *pikir* に対する *terpikir* には以下のような例がある。

(3-49) *Saya ter-pikir bikin website tentang fauna dan flora khas Sulawesi.*
 1SG TER-think make website about fauna and flora unique.to Sulawesi
 「私はスラウェシ固有の動植物についてのウェブサイトを作ることを思いついた」 [Kompas.id]

(3-49) のように補文節を伴う場合でも、*terpikir* は「ふと思いついた」という意味を表す。本稿ではこうした例は *pikir* が *pikirkan* に比べて働きかけという意味が弱いと認識され、表 3.1 で挙げた動詞と同じように自動詞と同じ扱いを受けるためであると考えられる。つまり自動詞と同じように、思考者が接頭辞 *ter-*の動作主の分節ではなく、事態成立局面に合成されるため動作

主からの CUASE の矢印が消え、実現系可能の意味を帯びにくくなっており、偶発的意味になるというのが本稿の主張である (cf. 3.3.2.3 節)。

terbayang「ふと思ひ浮かぶ」と terbayarkan「想像できる」のペアについても terpicik/terpicikkan のペアと同様の説明が可能である。(meN-)bayang、(meN-)bayangkan は KBBI ではそれぞれ以下のように定義されている。

membayang /mem·ba·yang/ v

1 kelihatan seperti bayang-bayang; kelihatan samar-samar

「影のように現れる; うっすらと見える」

2 dapat dilihat; dapat ditangkap; tergambar

「見つけられる; 捕まえられる; 図解可能である」

membayangkan /mem·ba·yang·kan/ v

1 mengadakan bayang-bayang pada

「～に影を映す」

2 menggambarkan dalam pikiran

「頭の中で描く」

3 mengemukakan pendapat (usul dan sebagainya) tidak dengan terus terang

「明示的ではないやり方で、意見 (提案など) を表明する」

つまり terbayang と対応する (meN-)bayang は「～が現れる」という自動詞的意味を持っているのに対し、terbayangkan と対応する (meN-)bayangkan は目的語を取り、それを表明されている状態にするなど、目的語の変化を促す働きかけが読み取れる。これより、terbayang は bayang という語基が自動詞で使用されるものであるため、接頭辞 ter-が付いた際には図 3.40 と同じ合成が行われる。結果として、結果状態ないしは偶発の意味が生じる。これが先行研究で terbayang の意味が ‘have an image come to one’ などとされてきた理由であると考え。一方で terbayangkan は、bayangkan が対象への働きかけが認められる他動詞であるので、buka「開ける」、pikirkan「考える」などの動詞と同じ合成過程を経ると見做すことができる。そのため、最終的な合成結果の中に動作主とその働きかけが残存し、実現系可能読みが許容される (cf. 図 3.41)。以上、terbayang/terbayangkan においても、接尾辞-kan の有無によって異なる合成過程を経るために帯びやすい意味の違いが生じることを示した。

最後に terbayar と terbayarkan の違いについて考える。この組についても先行研究では意味の違いを指摘しているが、他の組とは違い ‘can be paid’ と ‘can be given out in payment’ と両者とも可能の意味で訳出が行われている。先行研究では、接尾辞-kan が付くと可能の意味になりやすいという分析を行っているために、なぜ語基が bayar の場合だけ他の語基ほど意味に差が出ないかの説明ができない。しかし本稿の事象構造の考え方をいれば、bayar と bayarkan が共に他動詞であるという点で差がなく、接頭辞 ter-に対して同じ合成過程を経るためであると説明できる。以下は KBBI における membayar と membayarkan の例である。

membayar/mem·ba·yar/ v

1 memberikan uang (untuk mengganti harga barang yang diterima, melunasi utang, dan sebagainya)

「お金を与える (受け取った貴重品の替わり、借金の返済などのために)」

2 memenuhi; menunaikan (janji, nazar, hajat, dan sebagainya)

「～を満たす;～を果たす (約束、誓い、目的やその他)」

membayarkan/mem·ba·yar·kan/ v

1 memberikan uang dan sebagainya untuk membayar

「支払うためにお金などを与える」

2 membayar atas suruhan (permintaan, perintah, dan sebagainya) orang lain

「他の人の指示 (要求、命令など) を受けて支払う」

両者は支払うという意味でほぼ同じように用いることができる。違いは *membayarkan* の場合は誰かのために立て替えるというニュアンスを帯びている点である。具体的には以下の (3-50)、(3-51) のように用いられる。

(3-50) *Dia mem-bayar biaya perkuliahan dari hasil memeras keringat.*

3SG AV-pay fee course from result AV.wring perspiration

「彼は汗を絞り出して (働いた) 成果から講義の費用を払った」

[Jawapos]

(3-51) *Orang kaya itu mem-bayar-kan semua biaya pesta.*

person rich that AV-pay-KAN all fee party

「その金持ちはパーティ代金を全額払ってあげた」

[PROG]

しかしこのように多少の意味の差異はあるが、*membayar* も *membayarkan* も費用などを目的語にとる点では等しい。そのため、動作主から動作対象への働きかけという点でも等しく、事象構造の合成過程が同じであるため両方とも可能の意味が表出しやすいと説明できる。

以上から接頭辞 *ter-*と共起する接尾辞 *-kan* に関して、先行研究では接尾辞 *-kan* は特殊な事例として扱われてきたが、これまで議論してきた語基の意味の問題に帰着すると言える。

3.6 3章のまとめと今後の課題

本章では事象構造を用いることで、接頭辞 *ter-*に関する意味的・統語的ふるまいを統一的に説明できることを主張した。3.3節では「なる」的表現を作るというスキーマを接頭辞 *ter-*に認め、2章で提示した意味やその表出の制約が、語基が持つ事象構造との合成を仮定することで説明できることを示した。

3.3.1節では接頭辞 *ter-*に関する先行研究を概観し、従来から接頭辞 *ter-*は「なる」的スキーマによって捉えられてきたものの、語基によって意味表出の傾向や制約が異なる理由については明らかになっていないことを指摘した。3.3.2節では事象構造の考え方を利用することで、先行研究の不足点を補えることを示した。具体的には接頭辞 *ter-*に図 3.12 のような事象構造のモ

デルを設定し、語基の事象構造との合成過程を考える。そして合成の際に、語基の事象構造内の動作主が接頭辞 *ter-*の事象構造内の事態成立局面内に合成される場合は結果状態、偶発の意味が表出できる。一方で語基の事象構造内の動作主が接頭辞 *ter-*の事象構造内の動作主と合成される場合は結果状態、偶発に加えて実現系可能、非意図の意味が表出できる。この合成の違いは、主に語基が他動詞であるか自動詞であるかによる。さらに語基が持つ動作主から動作対象への働きかけの強さも影響する。典型的な他動詞のように働きかけが認められる場合は動作主同士の合成が行われる。一方自動詞語基や働きかけが弱い他動詞の場合は語基の事象構造がすべて事態成立局面の中に入る。以上は表 3.3 のようにまとめられる。

表 3.3 接頭辞 *ter-*によって表出する意味の違いとその要因

語基の種類	表出可能な意味
他動詞・働きかけ有	結果状態・偶発・実現系可能・非意図
自動詞・働きかけ無	結果状態・偶発

加えて、主語が総称的である場合または語基が知覚動詞である場合は潜在系可能ないしは判断の意味が表出する。これは、そうした場合には動作対象の性質に認知的際立ちが与えられるためである。主語が総称的である場合は、「集合全体の観念を想起させる」(正保 1990: 155) ために対象の属性や性質に注目することになり、潜在系可能の意味が表出する。知覚動詞であれば補語句を伴うことによって、知覚対象が補語句の表す尺度上に位置付けられることで、判断の意味が出る。

今後の課題は語基の意味のより詳細な検討である。本章では語基を区別するうえで、接頭辞 *ter-*の意味表出に関わらない事象構造の違いについては深く触れなかった (cf. 注 30)。しかし、意味の差で付加が制限される場合がある。*buka*「開ける」に接頭辞がついた *terbuka* は *sulit*「難しい」と共起できるが、*sepak*「蹴る」、*bawa*「持つ」に接頭辞 *ter-*が付いた *tersepak*、*terbawa* は共起できない。

(3-52) *Pintu itu sulit ter-buka.*
 door that difficult TER-open
 「そのドアは開けるのが難しかった」 (作例)

(3-53) * *Bola itu sulit ter-sepak.*
 ball that difficult TER-kick
 「(意図した意味) そのボールは蹴るのが難しかった」 (作例)

(3-54) * *Kopor itu sulit ter-bawa.*
 suitcase that difficult TER-take
 「(意図した意味) そのスーツケースは持っていくのが難しかった」 (作例)

この差は現段階では、語基の事象構造の中に結果状態の分節が含まれているか否かに起因すると考えられる。つまり接頭辞 *ter-*は事態の成立局面に認知的際立ちがあるため、語基に結果状態の分節が含まれない場合は *sulit*「難しい」の意味によって結果に到達する解釈がしにくく

なり、容認度が下がる。これは同じ動詞でも解釈を変えることによって容認度が上がることもわかる。(3-55a)にあるように、主語が洗うという行為を行うだけで、綺麗になるという状態までは必ずしも含意しない場合は容認度が下がる。一方(3-55b)の「きれいにする」というように結果状態を含めた解釈を行えば容認される。

(3-55) a. * *Pakaian itu sulit ter-cuci.*
clothes that difficult TER-wash
「(意図した意味) その服は洗うのが難しかった」 (作例)

b. *Noda itu sulit ter-cuci.*
stain that difficult TER-wash
「その汚れはきれいにするのが難しかった」 (作例)

以上より結果状態の分節があれば、ある結果状態に達するのが難しかったという解釈、つまり完了の解釈が可能であるが、そうでなければ潜在系可能の解釈しか残されておらず、総称の力を借りない限りは非文になるといえる。しかし、包括的な調査には現段階で至っておらず、接頭辞 *ter-*による意味表出以外は本稿の範囲を超えたものであるので、今後の課題とすることにする。

次に、3.4 節では接頭辞 *ter-*が付加された際の構造変化について事象構造の点から考察を行った。要点は以下のようまとめられる。本稿が依拠する認知言語学の枠組みに則れば、構造変化は認知的際立ちの変化として捉えられる。つまり接頭辞 *ter-*が付加されたことによって、そうでない場合と比べて認知的際立ちの位置が変化すれば、それが構造変化となって現れる。語基が自動詞の場合は、接頭辞 *ter-*によって認知的際立ちの位置は変化しない。そのため構造変化は生じない。一方で他動詞の場合は接頭辞 *ter-*によって認知的際立ちが事態成立局面の中にある動作対象に置かれるため、接頭辞 *ter-*が付いていない場合と比べると (cf. 図 3.35、図 3.36)、接頭辞 *ter-*によって認知的際立ちが変化したことになる。こうした認知的際立ちの変化が構造変化として現れることになる。こうした構造変化の有無は基本的には自動詞と他動詞の違いに帰着できるが、厳密には「働きかけ」という意味の違いに起因すると考えられる。Nomoto & Kartini (2011) はインドネシア語において接頭辞 *ter-*が構造変化を引き起こさない他動詞語基を提示した。これを受けて本稿では構造変化は語基によって容認度の差があり、働きかけが認められない語基ほど能動文の容認度が高くなることを示した。

最後に 3.5 節では、3.3 節と 3.4 節で扱った事象構造の考え方をうければ、これまで周辺的な事例とされてきた接尾辞 *-kan* との関係をも統一的に説明できることを示した。先行研究では、特定の語根に関して接尾辞 *-kan* を伴う場合と伴わない場合とで接頭辞 *ter-*によって表出する意味が異なると分析されてきた。しかし本稿では接尾辞 *-kan* によって語基の意味に差が生じ、結果として接頭辞 *ter-*の意味が変化していると考えられる。具体的には *terhindar* 「避ける」と *terhindarkan* 「避けられる」で考えれば、(meN-) *hindar* は「避ける」という自動詞であり、接頭辞 *ter-*によって主に偶発や結果状態の意味が出るのに対し、*hindarkan* 「退ける」は接尾辞 *-kan* によって他動詞になっているため、接頭辞 *ter-*によって実現系可能の意味も付与される。特に *terbayar* と *terbayarkan* は共に「払うことができる」という意味で、接尾辞 *-kan* を伴うにも関わらず意味の差が生じないことが問題となった。しかし語基の事象構造の点から考えれば、接

尾辞-kan によって自動詞から他動詞への変化、ないしは働きかけの強さが変化しないため、接頭辞 ter-による意味表出も変化しないと考えることができる。

4 動作主の標示

4.1 はじめに

本章では、接頭辞 *ter-*受身文における動作主の標示について考察を行う。まず 4.1 節では先行研究の概観を行う。1.3.1 節ですでに述べたところであるが、インドネシア語では受身文の動作主を標示する方法の一つとして *oleh* 「～によって」という前置詞を用いるものがある。(4-1) は (1-17) の再掲である。(4-1a) では主語の位置に置かれていた動作主 *mereka* は、(4-1b) では *oleh* によって斜格で標示されていることが確認できる。

- (4-1) a. *Mereka sudah men-jemput Tomo.*
3PL already AV-pick.up Tomo
「彼らはもう Tomo を迎えに来た」 (=(1-17a))
- b. *Tomo sudah di-jemput oleh mereka.*
Tomo already UV-pick.up by 3PL
「Tomo は彼にもう迎えられた」 (=(1-17b))

このような受身文における前置詞 *oleh* は (4-2) や (4-3) のように特定の条件下で省略可能であることが指摘されている (Jeoung & Biggs 2017; Jeoung 2020; Sneddon et al. 2010: 257)。

- (4-2) *Saya di-jemput (oleh) dia.*
1SG UV-pick.up by 3SG
「私は彼に迎えられた」 (Sneddon et al. 2010: 257)
- (4-3) *Buku ini di-baca (oleh) adik.*
book this UV-read by younger.siblings
「この本は弟によって読まれた」 (Jeoung & Biggs 2017: 83)

この条件とは、具体的には *oleh* 項の意味役割が “Initiator” であること、そして *oleh* 項が動詞の直後に置かれることである。

第一に、*oleh* 項の意味役割の条件からみる。“Initiator” とは *agent*、*experiencer*、*causer*、*instrumental-causer* といったある事態が生じる始点となるような意味役割を包括する概念である (Croft 1991: 166–167)。例えば (4-3) における *adik* 「弟」は意味役割的には *agent* とされる。そのため *Initiator* に分類できることから、*oleh* の省略の条件を満たしていると言える⁴⁹

⁴⁹本章で扱う *oleh* は *Initiator* を表す項を導くため、Jeoung & Biggs (2017) の立場であればすべて省略可能である。Jeoung & Biggs (2017) は前置詞 *oleh* の他に前置詞 *dengan* 「～と、～で」も扱っており、*Initiator* でない意味役割が生じるのはこの前置詞 *dengan* の場合である。以下の場合には意味役割は *pure instrumental*(純粋な道具) であり、ある事態が生じる始点とは考えられないため、前置詞 *dengan* は省略できない。

- Nasi boleh di-makan *(dengan) tangan.*
rice may UV-eat with hand
「ご飯は手で食べてもよい」 (Jeoung & Biggs 2017: 84)

しかし前置詞 *dengan* は本章では扱わないため、意味役割の条件は実際は問題とならない。

第二に、前置詞 *oleh* と動詞の隣接性について、(4-4) のように *oleh* 句が情報構造上の理由などで前置されたり、動詞と *oleh* の間に目的語 (4-5) や副詞 (4-6) などが挿入された場合に、*oleh* が省略できなくなる (Jeoung & Biggs 2017: 86; Jeoung 2020: 33–44; Sneddon et al. 2010: 268)。

(4-4) **(Oleh) Pak Rudyanto buku itu di-tulis pada tahun 2001.*
by Mr Rubiyanto book that UV-write at year 2001
「Rudyanto さんによって、この本は 2001 年に書かれた」 (Jeoung & Biggs 2017: 86)

(4-5) *Semua anak di-jahit-kan baju *(oleh) Ibu Mindy.*
all child UV-sew-BEN shirt by Ms Mindy
「すべての子供は Mindy さんにシャツを編んでもらった」 (Jeoung & Biggs 2017: 86)

(4-6) *Kami di-bawa ke bioskop *(oleh) ayah.*
IPL.EXCL UV-take to theater by father
「私たちはお父さんに映画館に連れて行ってもらった」 (Sneddon et al. 2010: 268)

以上の観察を基に、Jeoung (2020) は Merchant (2001) の分析を受け、“elements that are deleted under specific circumstances” 「前置詞 *oleh* は特定の条件下で削除可能な要素」(筆者訳) と結論付けている。加えて、以上の条件を満たしている限り、*oleh* がある場合と省略された場合とでは、意味的・統語的な違いは見られず、自由に交替可能であると主張する。

以上、インドネシア語の受身の中でも接頭辞 *di-* を用いたものについての先行研究を見た。しかしこうした研究に対し、本稿のテーマである接頭辞 *ter-* による受身文における動作主標示については先行研究が少ない。前述の先行研究内では、*oleh* の省略が起こるのは接頭辞 *di-* のみで、接頭辞 *ter-* による受身文の場合は省略が容認されないと述べられている (Jeoung & Biggs 2017: 85; Jeoung 2020: 31)。

(4-7) *Pintu itu ter-buka *(oleh) angin.*
door that TER-open by wind
「そのドアは風で開いた」 (= (1-3))

確かに、(4-7) は *oleh* を省略することが一般的でない文の一つである。しかし用例を観察すると、接頭辞 *ter-* が用いられている場合でも *oleh* が省略されているものが多く見つかる。ここから接頭辞 *ter-* の受身文では必ずしも *oleh* の省略を容認しないわけではないことが分かる。

(4-8) *Se-banyak 198 anak di Jawa Barat ter-infeksi Covid-19.*
one-many 198 child in Jawa west TER-infect Covid-19
「西ジャワの 198 人もの子供がコロナウィルスに感染した」 (= (1-16))

以上より接頭辞 *ter-* の受身文に関しては詳細な記述を行い、*oleh* とその省略の関係性、より具体的には接頭辞 *di-* と同じように両標示の関係性を捉える事ができるかどうかを明らかにする必要があると言える。この点を明らかにするため、本章ではコーパスを基に定量的な調査を行った。結果として、少なくとも接頭辞 *ter-* に関しては、*oleh* の標示とその省略 (以下 zero 標

示と呼ぶ)は様々な要因によって使い分けが行われており、zero 標示の場合でも oleh 標示と比べて意味が保持されるという接頭辞 di-に対する分析をそのまま適用するよりも、oleh 標示と zero 標示が異なる機能を持つと捉えるべきであることを主張する。

本章は大きく二つの節で構成される。前半の 4.2 節は本稿のテーマである語基の意味と接頭辞 ter-の関係に注目して、語基の動詞の意味によって動作主標示の傾向が変化することを明らかにする。後半の 4.3 節は、前半の調査を受けて動詞の意味だけでは説明できない部分を補うことを目的とする。4.4 節は本章のまとめと今後の課題である。

次節の構成は以下の通りである。4.2.1 節では調査方法について述べる。その中で、4.2.1.1 節では本研究で扱うデータの詳細について述べ、4.2.1.2 節と 4.2.1.3 節では動詞の意味に焦点を当てる動機と、実際にどのように動詞の意味を定義するかという問題に取り組む。4.2.2 節ではその結果を提示する。4.2.3 節は結果を基に接頭辞 ter-受身文における動作主標示の交替要因について考察を行う。具体的には 4.2.3.1 節でクラスター分析を基に動詞の分類を行った後、4.2.3.2 節でそれぞれの動詞タイプについて、動作主標示の傾向が現れる理由を考察する。

4.2 動詞の意味と動作主標示

4.2.1 調査方法

4.2.1.1 データ

本節では調査方法の説明を行う。使用したコーパスは Leipzig Corpora Collection(Goldhahn, Eckart & Quasthoff 2012) 内にあるインドネシア語サブコーパス (mixed_tufs4, web_tufs13, wikipedia_tufs14) である⁵⁰。まず、テキストファイルから“ter”という文字列を含むものを検索し、209,676 件が得られた。しかし形態素解析がなされていないため、これらの語には terus「続く」、terminal「ターミナル」といった接頭辞 ter-が付接を受けていない形式が含まれてしまっており、手作業で取り除く必要がある。この作業により接頭辞 ter-を含む語を抽出した後、動詞的用法、最上級用法、その他の非生産的用法⁵¹の 3 つのタグを付与し、分類を行った (cf. 1.1 節)⁵²。

このうち動詞的用法に分類されたものが本章に関わる部分となる。分類の結果は表 4.1 のようにまとめられる。

⁵⁰検索結果件数が MALINDO Conc のダウンロード数の制限を超えたため、Leipzig Corpora Collection 内の元データを使用した (cf. 1.2 節)

⁵¹語基が表す動作の結果状態に由来する形容詞派生及び程度の基だしさを表す形容詞派生、名詞的用法がここに含まれる。

⁵²ここでの分類は基本的手作業で行っているが、一部は機械的なソートを使用している。例えば terbuka[TER-open]の場合、secara「～の方法で」という語に続く場合は secara terbuka「開放的な」という形容詞的用法として専ら用いられる。そのため、secara に続くものは機械的にイディオムの用法に分類している。

表 4.1 接頭辞 ter-の動詞的用法の総数

	動詞的用法	その他の用法	非接頭辞 ter-	計
Type size	2,095	154	1,045	3,294
Token size	102,642	162,282	25,752	209,676

動詞的用法に含まれる 2,095 件のうち、35 個の動詞を今回の調査対象とする。この調査対象の語は oleh と共起する件数が多い順に選出している。このように基準を oleh との共起数に求めるのは、もし動詞の純粋な頻度を用いてしまうと、動作主が現れない受身文の例が多く含まれてしまい、動作主の標示の調査という本章の目的とのずれが生じてしまうためである。例えば、terdiri 「成り立つ」は 4878 件見つかるが、そのうち oleh が標示されているものは 3 件のみ (0.06%) であるため、調査対象からは外している。調査対象語の決定後、それぞれの動詞について oleh によって動作主が表示されているものと、zero 標示であるものの数を手作業で数えた。

表 4.2 は対象となる 35 語を示したものである⁵³。

⁵³tercatat は次のようなコーパスの種類に依存する特殊な用法が多いため対象から除外した。以下の文の数字部分のみ異なる文が 9098 件ヒットする。

Eksentrisitas orbit objek ini ter-catat se-besar 0.291, sementara magnitudo mutlak=nya adalah
eccentricity orbit thing this TER-note one-big 0.291 while magnitude absolute=3 COP

7.1.

7.1

「軌道離心率は 0.291 と計測され、マグニチュードは 7.1 であった」

[http://id.wikipedia.org/wiki/\(119473\)_2001_U018](http://id.wikipedia.org/wiki/(119473)_2001_U018)

表 4.2 接頭辞 ter-受身文における動作主標示の頻度

Word	oleh	zero	other	Total
terpengaruh 「影響をうける」	109	65	152	326
terinspirasi 「感化される」	108	17	120	245
terlihat 「見られる」	81	12	4,413	4,506
terganggu 「邪魔される」	72	18	583	673
tertutup 「閉まる」	58	119	742	920
tertangkap 「捕まる」	48	27	280	355
terbunuh 「殺される」	45	4	508	557
terikat 「結ばれる」	45	66	426	537
terdengar 「聞かれる」	40	6	1,357	1,403
tersentuh 「触れられる」	40	47	93	180
terbentuk 「形成される」	34	3	1,842	1,879
terancam 「脅される」	29	48	371	448
terjangkau 「差し伸べられる」	28	19	169	216
terdorong 「押される」	27	5	171	203
tertarik 「惹かれる」	24	13	1,175	1,212
terinfeksi 「感染する」	20	68	190	278
terbawa 「持っていかれる」	20	85	89	194
terasa 「感じられる」	19	0	2,692	2,711
terpisah 「分けられる」	19	10	1,202	1,231
terdesak 「詰められる」	19	4	140	163
terkesan 「感銘を受ける、感じられる」	18	1	582	601
terhambat 「妨げられる」	18	6	132	156
terbatas 「制限される」	15	8	2,053	2,076
terbakar 「燃やされる」	15	22	485	522
tertekan 「抑圧される」	15	3	150	168
terjebak 「罠にかけられる」	13	37	277	327
terhubung 「関係づけられる」	12	0	364	376
tergantung 「吊られる」	11	0	2,227	2,238
terluka 「傷つけられる」	11	5	707	723
terpilih 「選ばれる」	9	8	1,354	1,371
tersusun 「積まれる」	9	0	311	320
tercemar 「汚される」	9	31	121	161
tercatat 「記録される」	-	-	-	10,123
terbuka 「開かれる」	6	0	2,708	2714
terbukti 「証明される」	6	0	1,245	1251

4.2.1.2 動詞の意味

本節では動作主標示の交替の要因について、動詞の意味に焦点を当てて定量的調査を行う。

こうした動詞の種類と動作主標示の関係については日本語の研究が示唆的である。日本語の受身文においては、動詞の種類が動作主標示の交替を容認するかどうかに影響する。Oshima (2003: 258) は日本語の間接受身文において「に」と「によって」は他動性 (cf. Hopper & Thompson 1980) の高い動詞の場合に交替が可能になることを指摘した⁵⁴。(4-9) では「破壊する」「買い占める」という他動性の高い動詞が使われており、「に」と「によって」が自由に交替可能である。その一方で、(4-10) では、「尊敬する」「触る」というような (4-9) と比較して他動性の低い動詞が使われているために、「によって」の形式が容認されない。

- (4-9) a. Batman が Joker{に/によって}町を壊された。 (Oshima 2003: 258)
b. Max は Pat{に/によって}オレンジを買い占められた。 (Oshima 2003: 258)
- (4-10) a. Max は Pat{に/*によって}尊敬されている。 (Oshima 2003: 258)
b. Alice は Pat{に/??によって}髪を触られた。 (Oshima 2003: 258)

同様にインドネシア語でも、3章で述べたように動詞の意味が接頭辞 *ter-*の付与する意味に影響を与えることが確認されている。そのため本章でも、標示の交替要因として動詞の種類を考慮することとする。

4.2.1.3 意味分類の手法⁵⁵

本節では動詞の意味と動作主標示の関係性を調査するために、Collostructional analysis という手法、その中でも Distinct collexeme analysis (Gries & Stefanowitsch 2004; Stefanowitsch & Gries 2009) を用いる。Collostructional analysis とは Stefanowitsch & Gries (2003) に代表される、構文と語の結びつきの強さを図る手法の一つである。いくつかの種類があるが、まず最も単純な Collexeme analysis を用いて説明する。ここでは以下のような *as-predicate* 文を例にとる。

- (4-11) He regarded him as stupid. (Gries, Hampe & Schönefeld 2005: 636)

ここでいう *as-predicate* 文とは [主語 + 動詞 + 目的語 1+as+ 目的語 2] という形式をとる文を指す。重要な点はこの動詞のロットには様々な語を入れることができ、例にある *regard* の他にも *define*, *describe*, *see* などが挙げられる。このうち *see* は *as-predicate* 文に現れる頻度が最も高い動詞である。

- (4-12) Uhm, does everyone see it as just being involved in dance?
(Gries, Hampe & Schönefeld 2005: 638)

⁵⁴以下の Oshima (2003) の引用に関して、原文ではローマ字表記で書かれている文に対してグロスと英語訳が書かれているが、原文を日本語表記する形で引用している。

⁵⁵本節で説明する手法は佐近 (2021) に基づいている。

そのため、粗頻度からみれば see が as-predicate 構文と最も強く結びついている構文であると言える。しかし、see は as-predicate 文以外でも頻繁に使用される語でもある。

(4-13) I can't see other people's point of view. (Gries, Hampe & Schönefeld 2005: 650)

そのため、see が日常生活において頻繁に使用される語であるために、その使用頻度の高さが as-predicate 文にも反映されているだけである可能性を否定できない。つまり語と構文の結びつきを正確に捉えることができないという問題がある。collostructional analysis は統計的検定を用いることでこうした問題を解決することを目的としている。実際に Gries, Hampe & Schönefeld (2005: 650–651) は collostructional analysis を用いて see は必ずしも as-predicate 文と最も強く結びつく動詞ではないことを指摘した。

調査の手順は以下の通りである。まず a から d の数値が入った 2×2 の表を利用して、そこからカイ二乗検定やフィッシャーの正確確率検定といった統計的な検定によって処理を行う。

表 4.3 Collexeme analysis に用いる分布表

	構文 A	非構文 A	合計
語 X	a	b	a+b = 語 X の総数
非語 X	c	d	c+d
合計	a+c=構文 A の総数	b+d	a+b+c+d

上の表 4.3 において、合計の列をみると、語 X の割合は $\frac{a+b}{a+b+c+d}$ である。そのため、語 X かつ構文の A の期待値は $(a+c) \times \frac{a+b}{a+b+c+d}$ となる。そして実際の数値がこの期待値を上回っているか、そしてそれが統計的に有意かどうかを検定を使って示す。結果は p 値という値によって算出され、この数値が 0.05 以下であれば通常ある構文 A とある語 X は結びつきが強いと判断される。これを as-predicate 文に当てはまると粗頻度では最も結びつきが強いとされていた see は第三位となり、代わりに regard が最も結びつきの強い動詞となる。この結果は母語話者による文産出実験 (Gries, Hampe & Schönefeld 2005: 654–663) によっても支持され、統計的手法が粗頻度よりも話者の知識を正確に反映したものであると結論付けられている。

こうした collexeme analysis を発展させたものが Distinct collexeme analysis である。Distinct collexeme analysis が異なる点は、ある語が入り得る 2 つの構文を対照することで、その動詞がどちらの構文と結びつきやすいかを示すことができる点である。2 つの構文の対照を行うことから 2×2 のクロス表は以下の表 4.4 のようになる。

表 4.4 Distinct collexeme analysis に用いる分布表

	構文 A	構文 B	合計
語 X	a	b	a+b
非語 X	c	d	c+d
合計	a+c	b+d	a+b+c+d

具体的な研究として二重目的語構文と to-dative との比較が挙げられる。(4-14) は両構文の

例を示している。両構文はどちらもある物体の移動ないしは授与を表すが、二重目的語構文とは(4-14a)のような目的語を二つ取るのに対し、to-dative とは移動物を目的語にとり、着点・受益者は前置詞句によって表される。

(4-14) a. John sent Mary the book.

b. John sent the book to Mary. (Gries & Stefanowitsch 2004: 104)

これら二つの構文について、ある動詞がどちらの構文に現れやすいかを調べることが目的となる。動詞 give について具体的数値を入力したものが表 4.5 である。

表 4.5 Distinct collexeme analysis(Stefanowitsch & Gries (2009: 944-945) を基に筆者が作成)

	ditransitive	to-dative	合計
give	461(213)	146(394)	607
非 give	574(822)	1773(1525)	1919
合計	1035	2347	2954

これを基にカイ二乗検定を行うと p 値は 1.84E-120 となり、give と両構文には統計的に有意な関係があると言える。p 値の標示には指数表記を用いている。E-02 は 0.1 を 2 回かけることを意味し、1.81E-02 は 0.0181 を表す。しかし、この数値は give がどちらの構文と有意に結びついているかまで示すものではない。そこで期待値を考慮する。下部の合計の行において、ditransitive の動詞の割合は $1035 \div 2954 = 0.35$ であるから、give が二重目的語構文に現れる期待値は $1035 \div 2954 \times 607 = 212.68$ (213) となる。実際に give が二重目的語構文に現れた数は 461 件であるため、期待値を大きく上回っている。同様に計算した to-dative の方は、期待値が 394 に対して実際の数が 146 であるため、期待値に到達していない。以上より、give は二重目的語と統計的に有意に結びついていると結論付けられる。

Gries & Stefanowitsch (2004) 及び Stefanowitsch & Gries (2009) では、このような作業を多くの動詞に行い、二重目的語構文・to-dative と動詞の結びつきについて以下のようにまとめた。

Ditransitive (n = 1,035)		To-dative (n = 1,919)	
Word	p	Word	p
<i>give</i> (461:146)	1.84E-120	<i>bring</i> (7:82)	1.47E-09
<i>tell</i> (128:2)	8.77E-58	<i>play</i> (1:37)	1.46E-06
<i>show</i> (49:15)	8.32E-12	<i>take</i> (12:63)	2.00E-04
<i>offer</i> (43:15)	9.95E-10	<i>pass</i> (2:29)	2.00E-04
<i>cost</i> (20:1)	9.71E-09	<i>make</i> (3:23)	6.80E-03
<i>teach</i> (15:1)	1.49E-06	<i>sell</i> (1:14)	1.39E-02
<i>wish</i> (9:1)	5.00E-04	<i>do</i> (10:40)	1.51E-02
<i>ask</i> (12:4)	1.30E-03	<i>supply</i> (1:12)	2.91E-02
<i>promise</i> (7:1)	3.60E-03		
<i>deny</i> (8:3)	1.22E-02		
<i>award</i> (7:3)	2.60E-02		

図 4.1 二重目的語構文と to-dative における Distinct collexeme analysis(Stefanowitsch & Gries 2009: 45)

この表より、*tell*, *teach*, *ask* のようなコミュニケーションの動詞、*show* のような「知覚することは受け取ることである」のメタファーが読み取れる動詞、*offer*, *promise* のように提示を行う動詞、*deny* のように受け取ることを否定する動詞が二重目的語構文と結びつきやすいとまとめられる。反対に to-dative では“(continuously) caused (accompanied) motion” に合致する動詞が表示されている。このように統計的検定を複数の動詞で行い、その動詞に共通する意味を設定することで、各構文が一般的に持つ性質を浮かび上がらせることが最終的な目標となる。なお、本章では検定にフィッシャーの正確確率検定を用いている。計算は石川慎一郎氏が Web サイト内⁵⁶で提供している「コーパス研究のための計量用 Excel テンプレート (ベータ版)」を使用した。数理的には総数を N とし、以下の計算式の結果を基に実測値とそれ以下の数値の確率を足し合わせたものを p 値とする。

$$P(X_a = x_a) = \frac{a+cC_a \times b+dC_b}{NC_{a+b}}$$

ただし本章で行うような定量的なコーパス調査を行う場合に問題となるのは、できるだけ内省のような主観的情報を排除することが求められる点である (Stefanowitsch & Gries 2009: 948)。つまり前述のようにコーパスデータを基に二つの構文と動詞の関係を統計的手法を用いて計算しても、最終的な意味の分類の判断が内省によって行われてしまうと、結果の客観性が損なわれることが危惧される。このような問題を解決するために、意味の近接性を図る考え方の一つである Distributional Semantic Modeling (Landauer & Dumais 1997) がよく用いられる。このモデルは似た意味を持つ単語は似たような環境で表れるであろうという仮説に基づくものである (cf. Denistia, Shafaei-Bajestan & Baayen 2021: 3)。そしてこのような仮説を基に行う分

⁵⁶<http://language.sakura.ne.jp/s/stat.html>

類手法が階層的クラスター分析と呼ばれる。

階層的クラスター分析とは「(変数に対する反応が) 類似している個体どうしをクラスター(グループ)にまとめ上げていき、個体間の類似関係(質的遠近関係)視覚化する方法」(田畑 2004: 7)であり、結果として以下のような図 4.2 (デンドログラム) が得られる。これは Gries & Stefanowitsch (2010) による、into-causative 構文に現れやすい動詞の近さを示したものである。この図から、coerce や pressure、embarrass や shame などがそれぞれ同じクラスターに属している、つまり類似性の高い語であることがわかる。

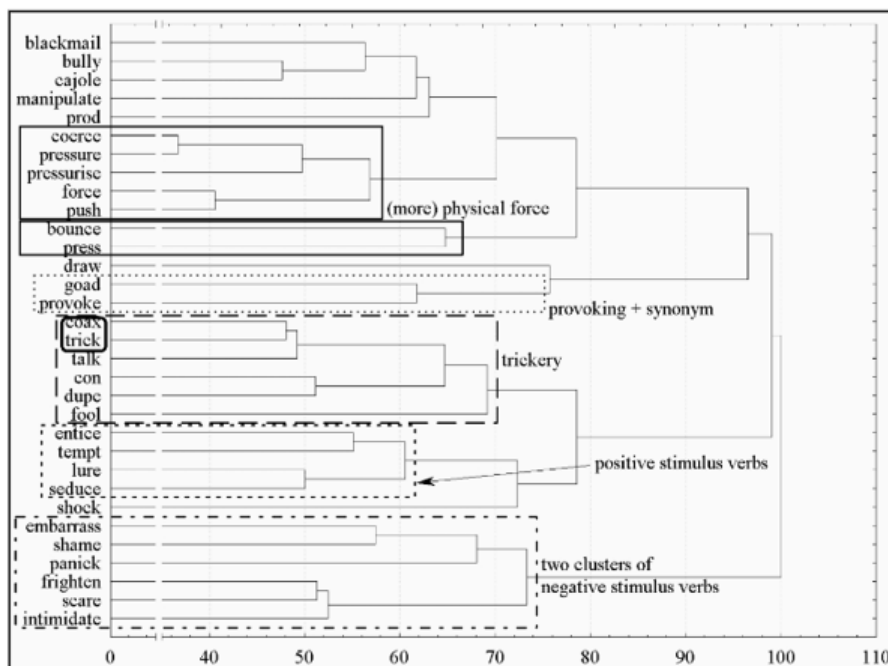


図 4.2 into-causative 構文における頻度上位動詞のデンドログラム (Gries & Stefanowitsch 2010: 84)

今回のようにコーパスのテキストを用いた単語の類似度調査の場合、変数とは共起語を指し、共起語が似ている語をまとめ上げクラスターを作成することになる。クラスター化の準備として、まず共起語をベクトル化(数値化)する必要がある。今回は word2vec を用いてベクトル化を行う。word2vec とは Tomas Mikolov ら (Mikolov et al. 2013a,b; Mikolov, Yih & Zweig 2013) によって提案された、ニューラルネットワークのオープンソース実装である (西尾 2014: iii)。これにより、各単語が数百次元程のベクトルで表され、単語の類似度を計算で扱うことが出来るようになる。こうして word2vec で得られたベクトルを基に、各個体間の距離(非類似度)を求める。この測定にはいくつかの方法があるが、ユークリッド距離が最も基本的な手法とされる (石川・前田・山崎 2010: 169; 石井 2017: 140)。これは 2 次元で考えた場合、二点間の距離を直角三角形の斜辺に見立て、その長さを計算する手法である。例えば、図 4.3 のような分布を考えたとき、生徒 DC の距離は次のように計算できる。

$$\sqrt{(\text{国語の成績の差})^2 + (\text{英語の成績の差})^2} = \sqrt{(5 - 4)^2 + (2 - 1)^2} = 1.1$$

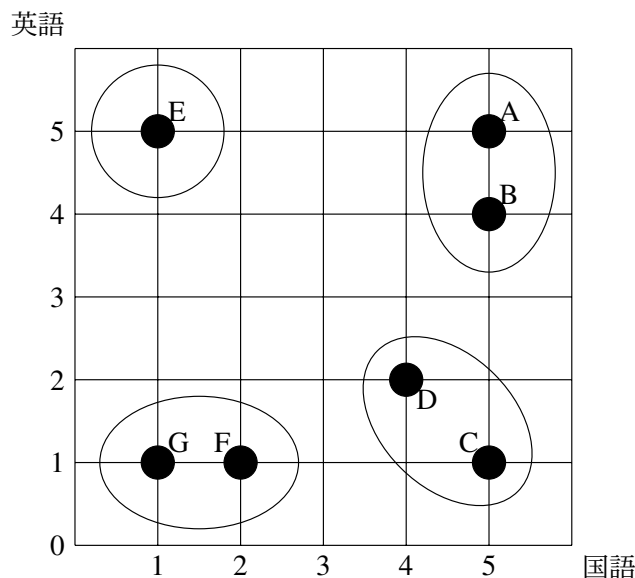


図 4.3 生徒の国語と英語の成績の分布 (吉原・平蔵 (2014: 11) を基に筆者が作成)

個体間非類似度計算がすべての個体について行われると、その結果を基にクラスターが作成され、次にそのクラスター間の非類似度計算を行うことになる。個体間計算同様、クラスター間計算にも多くの手法が存在するが、様々な対象に広く適用可能な手法として Ward 法 (ウォード法) がある (石川・前田・山崎 2010: 172; Gries 2013: 347)。Ward 法は「クラスター内の各個体データからクラスターの重心までの距離に注目し、その距離の平方和ができるだけ増えないように次に融合するクラスターを探してゆく」(石川・前田・山崎 2010: 172) 手法である。ここでも図 4.3 を例にとる。例えばクラスター AB とクラスター CD の非類似度を計算したいとき、その重心 (平均座標) は以下のように計算される (cf. 吉原・平蔵 2014: 13)。

$$(X_{AVE}, Y_{AVE}) = \left(\frac{X_A + X_B + X_C + X_D}{4}, \frac{Y_A + Y_B + Y_C + Y_D}{4} \right)$$

次に各点とこの重心との距離を計算し、前述のようにその和が増えないように融合するクラスターを探していくことになる。例えば図 4.3 においてクラスター AB とクラスター GF を融合しようとするれば、重心がずれると共に距離の和も増加する。そのため、クラスター AB はクラスター GF よりも先にクラスター CD と融合すると判断される。なお実際には当該のクラスター以外のすべてのクラスターに対し距離の評価を行ったうえで、その距離が小さいものから融合していくことになる (石川・前田・山崎 2010: 172)。これを基に上の図 4.2 を解釈すると、coerce と pressure は最も左寄りの位置で結合していることがわかる。このことは他のどの組み合わせよりも、coerce と pressure の結びつきが強い、つまり似たような環境で現れることを示している。そして次に pressurise が結合してより大きなまとまりを、そこから force と push のまとまりが合流し、さらに大きいまとまりを形成するという仕組みで、クラスターが形成されていく。

次節ではここまで説明した手法を用いて表 4.2 にある動詞の分類を行う。なお、本章で用い

た word2vec の設定は以下の通りである⁵⁷。

- sg = 1 [学習のモデルとして Skip-gram を使う]
- size = 200 [ベクトルの次元は 200 次元とする]
- min_count = 10 [10 回以上登場する語のみをカウントする]
- window = 5 [前後 5 語を計測する]
- iter = 3 [学習の繰り返し回数は 3 回]

個体間距離計算にはユークリッド距離、クラスター形成には Ward 法を指定した。また以上の試行は、プログラミング言語 Python (version 3.8.3) を用いて行った。

4.2.2 調査結果

Distinct collexeme analysis の分析結果を以下の表 4.6、表 4.7 に示す⁵⁸。表 4.6 は oleh 標示と結びつきやすいという結果が得られた動詞、表 4.7 は zero 標示と結びつきやすいという結果が得られた動詞である。

⁵⁷Skip-gram については以下の説明を参照: “The skip-gram method attempts to learn the context words of a given target word and to “maximize classification of a word based on another word in the same sentence” (Mikolov et al. 2013b: 4). The other training algorithm of word2vec is continuous bag of words (CBOW), which attempts to learn the target word given its context words.” (Rajeg, Denistia & Musgrave 2019: 47)

⁵⁸OR はオッズ比 (Odds Ratio) の略である。オッズ比とは今回の例で表せば「構文 A における語 X の頻度と非語 X の頻度の割合」を「非構文 A における語 X 頻度と非語 X の頻度の割合」で割ったものを指す。たとえばオッズ比が 2 であれば構文 A で語 X が使われる割合は非構文 A で語 X が使われる割合の 2 倍であることと同値である。p 値を用いた検定ではデータ量が大きくなればその分 p 値が小さくなってしまい、正しい結果が出ないという欠点があり、データ量に拠らない効果量の提示が求められる (水本・竹内 2010; 小林 2014)。オッズ比はその一つであり、本節ではその 95% 信頼区間を提示している。ただし比率であるため、セルの一つに 0 が現れる場合はオッズ比も 0 となる。その場合は“-”を入力している。

表 4.6 oleh と結びつきやすい動詞

動詞	p 値	OR
terbunuh 「殺される」	1.80E-07	(3.037, 23.689)
terinspirasi 「感化される」	1.68E-12	(2.986, 8.454)
terlihat 「見られる」	8.90E-10	(2.828, 9.650)
terbentuk 「形成される」	5.90E-06	(2.590, 27.660)
terdengar 「聞かれる」	2.67E-05	(2.104, 11.827)
terkesan 「感じられる」	3.60E-04	(1.872, 104.950)
terganggu 「邪魔される」	1.29E-05	(1.771, 5.071)
terdorong 「押される」	2.87E-03	(1.469, 10.053)
terdesak 「詰められる」	1.81E-02	(1.183, 10.303)
tertekan 「抑圧される」	3.08E-02	(1.057, 12.705)
terasa 「感じられる」	5.23E-05	-
terhubung 「関係づけられる」	1.91E-03	-
tergantung 「吊られる」	3.56E-03	-
tersusun 「積まれる」	1.27E-02	-
terbukti 「証明される」	4.31E-02	-

表 4.7 zero と結びつきやすい動詞

動詞	p 値	OR
tertutup 「閉められる」	1.26E-12	(0.227, 0.439)
terjebak 「罠にかけられる」	6.56E-06	(0.130, 0.465)
terinfeksi 「感染する」	8.82E-12	(0.119, 0.329)
tercemar 「汚される」	5.45E-06	(0.096, 0.431)
terbawa 「持っていかれる」	5.39E-17	(0.094, 0.254)
tersentuh 「触れられる」	2.55E-02	(0.391, 0.928)
terikat 「結ばれる」	1.04E-04	(0.314, 0.685)
terancam 「脅される」	3.40E-04	(0.264, 0.676)
terbakar 「燃やされる」	4.21E-02	(0.251, 0.946)

次にこの結果を基に、クラスター分析を行った結果が図 4.4 と図 4.5 である。図 4.4 は oleh 標示と結びつきやすい動詞のクラスター分析の結果、図 4.5 は zero 標示と結びつきやすい動詞のクラスター分析の結果である。

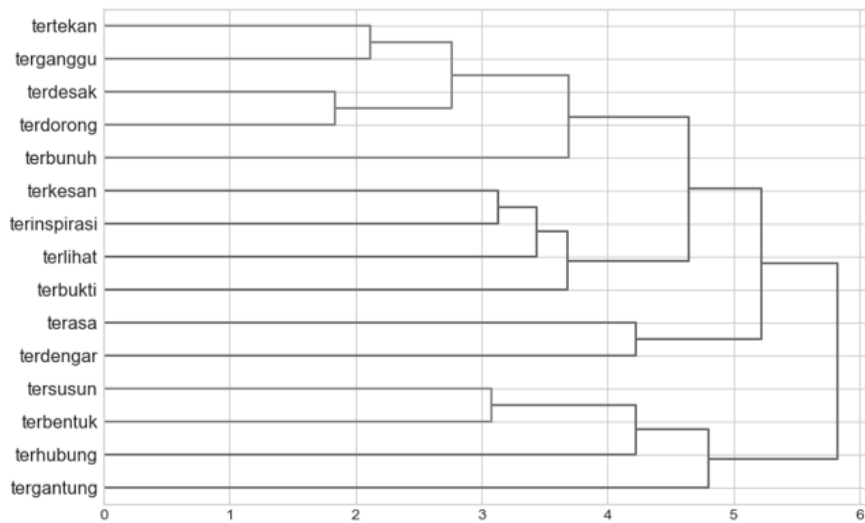


図 4.4 oleh と結びつく動詞のクラスター分析

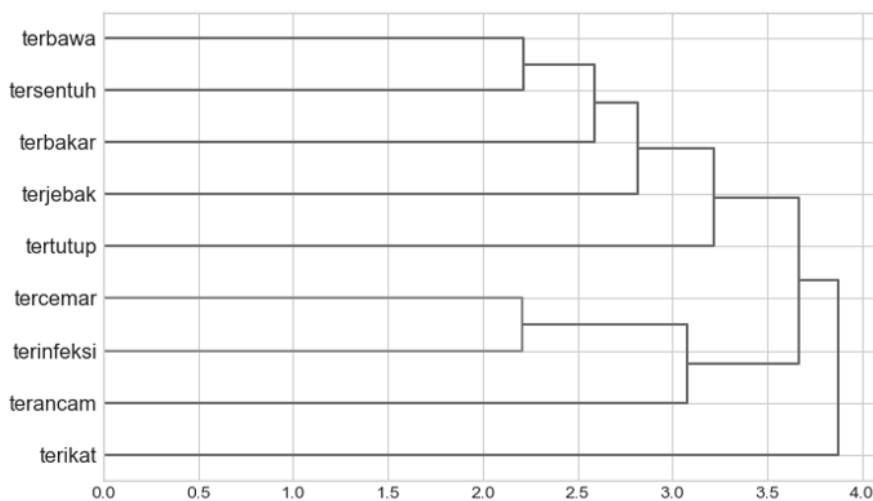


図 4.5 zero と結びつく動詞のクラスター分析

図 4.4 ではグループ 1 として tertekan 「抑圧される」、terganggu 「邪魔される」、terdesak 「詰められる」、terdorong 「推される」、terbunuh 「殺される」、グループ 2 として terkesan 「感銘を受ける、感じられる」、terinspirasi 「感化される」、terlihat 「見られる」、terbukti 「証明される」、グループ 3 として terasa 「感じられる」、terdengar 「聞かれる」、グループ 4 として tersusun 「積まれる」、terbentuk 「形成される」、terhubung 「関係づけられる」、tergantung 「吊られる」が認められる。

図 4.5 では terbawa 「持っていかれる」、tersentuh 「触れられる」及び tercemar 「汚される」、terinfeksi 「感染する」のグループが見られるが、鎖状効果が働いている。鎖状効果とは「ある併合に対象が一つずつ併合される状況」(川端・岩間・鈴木 2018: 306)であり、どこで分類しようとしても、意味のある解釈が難しくなる現象である。こうした事態は最短距離法によって個体間非類似度を計算する場合によく起こる現象であるが(川端・岩間・鈴木 2018: 306)、今回は Ward 法を用いているため、こうした現象は手法ではなくデータに起因するといえる。そこで本章では zero 標示を取りやすい動詞に関しては意味的なグループが形成されないと見做す。暫定的に以上の分類をまとめると、表 4.8 のようになる。

表 4.8 階層的クラスター分析に基づく動詞の分類

動作主標示の傾向	動詞タイプ	動詞	動詞
oleh	type1	tertekan 「抑圧される」	terganggu 「邪魔される」
		terdesak 「詰められる」	terdorong 「押される」
		terbunuh 「殺される」	
	type2	terkesan 「感じられる」	terinspirasi 「感化される」
		terlihat 「見られる」	terbukti 「証明される」
	type3	terasa 「感じられる」	terdengar 「聞かれる」
	type4	tersusun 「積まれる」	terbentuk 「形成される」
		terhubung 「関係づけられる」	tergantung 「吊られる」
zero		terbawa 「持っていかれる」	tersentuh 「触れられる」
		terbakar 「燃やされる」	terjebak 「罠にかけられる」
		tertutup 「閉められる」	tercemar 「汚される」
		terinfeksi 「感染する」	terancam 「脅される」
		terikat 「縛られる」	

4.2.3 考察

ここでは前節の結果の解釈を行う。動詞の種類について、最初にクラスター分析の結果認められた各グループを構成する動詞にどのような共通の性質を見出すことができるかを考える。そして設定した性質を基に、各分類の語が一方の動作主標示と結びつきやすい理由を考察する。

4.2.3.1 クラスター分析の解釈

まず oleh を取りやすい動詞のグループについて見ていく。グループ 1 に属する動詞の共通の性質を抽出すると、動作対象に対する働きかけが大きい動詞であるとまとめることができる。次の例は tertekan 「抑圧される」と terganggu 「邪魔される」の例である。

(4-15) *Biarpun kolese itu tidak me-wajib-kan siswa=nya men-jadi orang*
though college that NEG AV-obligatory-KAN student=3 MEN-become people
Katolik, Soegija me-rasa ter-tekan oleh teman-teman=nya.

Catholic Soegija AV-feel TER-press by friend-RED=3

「その大学は学生にカトリックになることを義務付けなかったものの、Soegija は友達たちから圧迫されている気がした」

http://id.wikipedia.org/wiki/Albertus_Soegijapranata

(4-16) *Namun layanan kembali ter-ganggu oleh pembangunan Tembok Berlin.*

but service again TER-disturb by construction wall Berlin

「しかしサービスはベルリンの壁の建築に再び妨げられた」

http://id.wikipedia.org/wiki/Berlin_U-Bahn

次にグループ 2 は心理的な刺激を表す動詞と知覚動詞に分けることができる。まず心理的な刺激を表す動詞に関して、*terinspirasi* 「感化される」は (4-17) のようにある事物から主語項に置かれている被刺激物が、物理的ではなく、心理ないしは概念的な影響を受けていることを表す。

(4-17) *Drama ini ter-inspirasi oleh sebuah foto pejuang perempuan dan kisah*
drama this TER-inspire by CLF photo fighter woman and tale
mereka untuk bertahan hidup.

3PL to withstand live.

「このドラマは女闘士たちのある写真と、彼女らが生き抜いた物語にインスピレーションをうけている」

http://id.wikipedia.org/wiki/Danai_Gurira

(4-18) *Ia bertemu dengan Aloysius yang ber-usia 12 tahun dan sangat*
3SG meet with Aloysius REL POSS-age 12 year and very
ter-kesan oleh anak itu.

TER-impress by child that

「彼は 12 歳の Aloysius と会い、その子供に非常に感銘を受けた」

http://id.wikipedia.org/wiki/Aloysius_Gonzaga

次に知覚動詞は以下の (4-19) に代表される。

(4-19) *Ukuran tubuh mereka kecil dan kadangkala tidak ter-lihat oleh mata manusia.*
size body 3PL small and sometimes NEG TER-see by eye human

「彼らの体のサイズは小さく、時には人間の目には見えない」

<http://id.wikipedia.org/wiki/Goblin>

またこうした動詞の大きな特徴として、補語的要素を伴うことができることが挙げられる (cf. 2.6 節)。

(4-20) *Dia ter-lihat habis dari Hawaii.*

3SG TER-see finish from Hawaii.

「彼はハワイから帰ってきたように見える」

(=(2-71))

このような補語的要素は *terbukti* 「証明される」にも表れる。*terbukti* は意味的に厳密な知覚動詞とは言えないが、補語的要素を伴うことが出来るという点で *terlihat* 「見える」と似た性質を持っていると言える。

(4-21) *Ternyata, dia ter-bukti salah.*

in.fact 3SG TER-prove false

「実際には、彼は間違っていることが証明された」

<http://angelsunited.blogspot.com/>

さらに、*terkesan* 「感銘を受ける」も「感じられる」という意味であれば補語的要素を伴うことができる。

(4-22) *Sayangnya, kondisi bangunan tua ini ter-kesan kurang te-rawat.*

sadly condition building old this TER-impress less TER-treat

「残念なことに、この古い建物の状態は手入れされていないように感じる」

http://antontopos.blogspot.com/2008_06_01_archive.html

以上のように、グループ 2 はすべてに共通する意味を設定することができないものの、心理的影響と知覚という二つの意味を認めることができる。

次にグループ 3 に含まれている動詞はすべて知覚動詞と言える。(4-23) は *terasa* 「感じられる」の例である。

(4-23) *Sungguh nikmat=nya makanan akan te-rasa saat kita lapar.*

really pleasant=NMLZ food will TER-feel when 1PL.INC hungry

「お腹がすいているときに、本当に食べ物の恩恵を感じるだろう」

<http://ainuamri.blogspot.com/>

次の (4-24) や (4-25) にあるように、グループ 3 の動詞は補語句を伴うことが出来るという点で *terlihat* と同じふるまいを見せる。

(4-24) *Jawaban itu ter-dengar aneh di telinga Nyi Yatni.*

answer that TER-hear strange in ear Nyi Yatni

「その回答は Nyi Yatni の耳には変に聞こえた」

<http://adbmcadangan.wordpress.com/buku-IV-15/index.html>

(4-25) *Tapi tas besar dan berat ini te-rasa meng-ganggu sekali.*

but bag big and heavy this TER-feel AV-disturb very

「しかしこの大きくて重いカバンはとても邪魔に感じられた」

<http://angelianovincy.wordpress.com/>

グループ4は動詞すべてに共通する性質を見出すことは難しい。しかし tersusun 「積まれる」と terbentuk 「形成される」に注目すると、両者は作成動詞と言える。(4-26)における faktor 「要因」及び(4-27)の unsur-unsur 「要素」が作成の原因や要因となっている。

(4-26) *Hal ini ter-bentuk oleh faktor keluarga, lingkungan, dan kedua-dua=nya*
thing this TER-form by factor family environment and second-two=3
sekaligus.

once

「このことは家族と環境、そしてその両方の要因によって形成される」

<http://agdwiyanto.wordpress.com/>

(4-27) *Masyarakat di-bayang-kan sebagai struktur yang ter-susun oleh unsur-unsur*
public UV-image-KAN as structure REL TER-pile by element-RED
yang berupa keluarga-keluarga.

REL shape family-RED

「社会とは家族の形をした要素によって積み重ねられた構造として想定される」

<http://antropo106i.blogspot.com/>

一方で terhubung 「関係づけられる」と tergantung 「吊られる」は意味的な共通点は見られない。この点については次節で考える。

zero 標示を取りやすい動詞については、前述のように zero を取りやすい動詞に関してはクラスターを見出すことが難しかった。本章ではこうした動詞は意味的なまとまりというよりも、動詞に応じて別個の理由が存在していると考えられる。この点についても次節で詳しく触れる。

最後に、本節での議論は以下のようにまとめられる。

表 4.9 クラスターの意味的傾向

動作主標示の傾向	動詞タイプ	動詞	動詞タイプ名称		
oleh	type1	tertekan 「抑圧される」	terganggu 「邪魔される」	働きかけ高	
		terdesak 「詰められる」	terdorong 「押される」		
		terbunuh 「殺される」			
		terkesan 「感じられる」	terinspirasi 「感化される」		心理的影響
		terlihat 「見られる」	terbukti 「証明される」		知覚動詞
type3	terasa 「感じられる」	terdengar 「聞かれる」	知覚動詞		
type4-1	tersusun 「積まれる」	terbentuk 「形成される」	作成動詞		
type4-2	terhubung 「関係づけられる」	tergantung 「吊られる」			
zero		terbawa 「持っていかれる」	tersentuh 「触れられる」		
		terbakar 「燃やされる」	terjebak 「罠にかけられる」		
		tertutup 「閉められる」	tercemar 「汚される」		
		terinfeksi 「感染する」	terancam 「脅される」		
		terikat 「縛られる」			

4.2.3.2 動作主標示の選択要因

本節ではそれぞれの分類が一方の動作主標示方法と結びつきやすい理由を考える。前節では oleh を取りやすい中でも、最も大きいグループを成しているグループ 1 ほどの動詞も動作対象への働きかけが認められるという点でまとめられることを確認した。ここから、動作対象への働きかけが強ければ oleh、反対に弱ければ zero を取りやすくなると仮定できる。同じように心理的影響を表すと考えられるグループについては、(4-28) では foto 「写真」と kisah 「物語」

が drama に心理的な働きかけを与えていると考えられる。(4-29) では anak itu 「その子供」が ia 「彼」に心理的な働きかけを与えている。

(4-28) *Drama ini ter-inspirasi oleh sebuah foto pejuang perempuan dan kisah*
drama this TER-inspire by CLF photo fighter woman and tale
mereka untuk bertahan hidup.

3PL to withstand live.

「このドラマは女闘士たちのある写真と、彼らが生き抜いた物語にインスピレーションをうけている」
(=(4-17))

(4-29) *Ia bertemu dengan Aloysius yang berusia 12 tahun dan sangat*
3SG meet with Aloysius REL POSS-age 12 year and very
ter-kesan oleh anak itu.

TER-impress by child that

「彼は12歳のAloysiusと会い、その子供に非常に感銘を受けた」
(=(4-18))

他にも意味的な共通点を見出すのが難しかったグループ4の動詞は、上記のグループ1の動詞と比べれば明瞭には認められにくいだが、動作対象への働きかけという観点から説明できる。まず tergantung 「吊られる」、terhubung 「関係づけられる」を考えると、(4-30)では keputusan 「決定」が waktu 「時間」と kemampuan 「能力」につられている状態が、物理的から概念的な影響に転化され、「左右される」という意味が生じている。そのため、oleh を取る名詞句から主語への働きかけが感じられる。(4-31)でも実際に物理的な結合が存在するわけではないが、lagu 「曲」が dua orang 「二人」を結びつけた状態にしているという点で、主語である動作対象への働きかけを含意すると言える。以上の理由でこれらの2つの動詞は oleh を取りやすくなっていると考えられる。

(4-30) *Keputusan ekonomi investor bisa ter-gantung oleh waktu dan kemampuan*
decision economy investor can TER-hang by time and ability
(kecanggihan) investor itu sendiri.

sophistication investor that REFL

「投資家の経済的決定は時間と、その投資家自身の能力に左右されうる」

<http://adln.lib.unair.ac.id/goed0e-2.html>

(4-31) *Dua orang di dua jaman ter-hubung oleh sebuah lagu.*

two people in two era TER-relate by CLF song

「二つの時代の二人は一つの曲によって結びつけられた」

http://ahmad-hambali.blogspot.com/2007_11_18_archive.html

次に同じグループに含まれていた tersusun 「積まれる」と terbentuk 「形成される」といった作成動詞であるが、この動詞群は通常作りだされた結果として生じる事物は最初からその場に存在したものではないという点で、典型的な他動詞とは異なるエネルギーの伝達図式を持つ

(谷口 2005: 82–83)。しかしそれでもなお、表す事態は状態変化動詞と同じとして扱われることが多い。例えば、由本 (2011) は作成動詞 *build* の語彙概念構造を以下のように規定している。

(4-32) *build*: [x CAUSE [BECOME [y] BE [AT z]]] (由本 2011: 175)

これは動作対象の変化を含意する *kill* などの状態変化動詞と同じ構造である。つまりこの図式は、エネルギーの伝達先が最初から存在しているかどうかという違いがあるもの、主語 *x* から目的語 *y* に向けてエネルギーが向けられているという点では、作成動詞と状態変化動詞は等しいということを示している (cf. 高木 2018: 135)。ここから作成動詞 *terbentuk* 「形成される」や *tersusun* 「積まれる」も動作対象への働きかけを含意するという点で、*oleh* を取りやすいと分析することができる。(4-33) では *gempa bumi* 「地震」が地層などに影響を与え、その結果として *retakan* 「亀裂」が生じたと解釈すれば、上記の働きかけの高さという点が認められる。同じように (4-34) の場合にも、*polisakarida dan sitoplasma* 「多糖と細胞質」から「細胞壁」への働きかけを認めることができる。

(4-33) *Ini me-rupa-kan retakan ter-besar yang pernah ter-bentuk oleh gempa*
this AV-shape-CAUS crack TER-big REL once TER-form by quake
bumi.

earth

「これは地震によって形成された最も大きい亀裂です」

http://id.wikipedia.org/wiki/Gempa_bumi_dan_tsunami_Samudra_Hindia_2004

(4-34) *Dinding sel tersusun oleh polisakarida dan sitoplasma=nya mengandung*
wall cell TER-pile by polycarbohydrates and cytoplasm=3 AV.include
glikogen.

glycogen

「細胞壁は多糖とグリコーゲンを含む細胞質から成っている」

<http://ainuttijar.blogspot.com/2009/11/pemanfaatan-tumbuhan-obat-tradisional.html>

zero 標示を取りやすい一部の動詞はこうした働きかけの点から説明可能である。これには *terinfeksi*, *tercemar* が当てはまる。これらはそれぞれ「感染する」「汚染する」という文脈で使用される。

(4-35) *Binatang yang biasanya ter-infeksi penyakit ini termasuk: anjing, rubah, dan*
animal REL usually TER-infect disease this including dog fox and
serigala.

wolf

「普通この病気に感染するのは、犬・キツネ・オオカミが含まれる」

<http://id.wikipedia.org/wiki/Echinococcosis>

(4-36) *Ternyata ke-tiganya, termasuk air dari sumber air minum di*
in.fact all-3 including water from source water drink in

sekolah=nya, telah ter-cemar antibiotik.

school=3 already TER-dirty antibiotic

「実際、その三つ(の川)は、学校で飲まれる水も含めて、抗生物質に汚染されている」

<http://bahayaobat.blogspot.com/>

つまり *terinfeksi* や *tercemar* は専らウィルスや汚染物質が原因項となる。しかしこれはウィルスや汚染物質から対象への働きかけがあるわけではなく、「何に感染しているか」といういわば汚染の属性を表している。その点で働きかけが強いとは言えない。ここからこれらの動詞では zero 標示が現れやすくなっていると推測できる⁵⁹。

さらにこの主張は同じ動詞でもその意味によって動作主標示の傾向が変化する事実にも裏付けられる。*tertutup* を例にとると、能動文形式である *menutup[meN+tutup]* は「閉める」という意味(4-37)と「覆う」という意味(4-38)がある。

(4-37) *Siapa yang menutup pintu itu?*

who REL AV.close door that

「誰がそのドアを閉めたのですか？」

<http://antoniuswiwankoban.blogspot.com/>

(4-38) *Pada 122 Sebelum Masehi, erupsi letusan menutup sinar matahari selama*

on 122 before A.D. eruption explosion AV.close lay sun for

beberapa hari dan me-muntah-kan begitu banyak abu ke Kota Catania.

several day and AV-vomit-CAUS so many ash to town Catania

「紀元前 122 年に、噴火が太陽を数日間覆い隠し、大量の灰を Catania の街に吐き出した」

<http://id.wikipedia.org/wiki/Etna>

コンサルタント調査によれば *tertutup* の使われ方によって標示形式の容認度が変化する。「覆う」という意味で使われている(4-39a)では zero 標示しか容認されない一方で、「閉める」という意味で使われている(4-39b)では、*oleh* が用いられるようになる⁶⁰。

(4-39) a. *Matahari ter-tutup {?oleh / ∅} awan.*

sun TER-close by / ∅ cloud

「太陽は雲に隠れた」

(作例)

⁵⁹補足として、これらの動詞について、こうした働きかけのなさは動詞の意味自体の性質というよりも、原因項に無生物が来やすいためと言う反論が考えられる。しかし、前述の働きかけが強い動詞においては主語が無生物であっても *oleh* を取りやすくなる。例えば *terganggu* 「邪魔する」では無生物のうち *oleh* を取るものが 78.4%、*terdorong* 「押される」では 83.3% と、*terinfeksi* の 22.7%、*tercemar* の 23.1% と比べて割合が高い。ここから無生物であることに加えて、動詞の意味ないしは動詞の表す事態も動作主標示において重要であると結論付けることができる。こうした他の要因の影響を取り除いた場合の各要因の詳しい考察は次節も参照されたい。

⁶⁰今回のコンサルタント調査では「覆う」の場合の *oleh* 標示、「閉める」の場合の zero 標示の容認度は低いという結果が得られた。しかしコーパス調査においてそうした例が現れていることを踏まえると、これはあくまで傾向であり、今後より大規模なアンケート調査などによって容認度の差の検証を行う必要がある。

b. *Pintu itu ter-tutup oleh / ?∅} angin.*

door that TER-close by / ∅ wind

「そのドアは風で閉まった」

(作例)

両者の意味を比較すると、「覆う」の意味では動作対象に対する直接の影響は少ない一方で、「閉まる」の意味ではドアに対して状態変化を引き起こす働きかけの力が強く認められる。以上から動詞が表す意味によって標示の容認度の差が生じていると考えられる⁶¹。

なお, *tertutup* は前節で *zero* 標示と結びつきやすいという結果が得られた。MALINDO Conc コーパスを用いて *tertutup* がどのような意味で用いられているかを調査すると、表のように「覆う」の意味が卓越する。

表 4.10 MALINDO Conc における *tertutup* の意味

	「覆う」	「閉める」
<i>oleh</i>	54	4
<i>zero</i>	116	2

本章では、こうした意味の偏りが *zero* を取りやすいという結果につながったと考える。

同様の議論が *tersentuh* 「触られる」にも当てはまる。*tersentuh* に意味的に対応する能動文形式は *menyentuh* 「触る」である。もちろん *X menyentuh Y* という形をとり「X が Y を触る」という能動的動作を表す場合があるが、もう一つの解釈として (4-40) のように「X が Y に触れている」という意志性を含意しない場合がある (cf. 3.4 節; Malchukov 2006)。

(4-40) *Panas matahari tidak lagi menyentuh tubuh mereka karena daun pepohonan*
 heat sun NEG again AV.touch body 3PL because leaf trees
yang lebat dan rimbun.
 REL dense and leafy

「木々の葉っぱが密集して生い茂っているので、太陽の熱はもう彼らに触れることはない」

<http://adbmcadangan.wordpress.com/buku-16/9/index.html>

こうした意味で解釈される場合、動作主の意志性も見られず、対象への影響も含意しないため、*menyentuh* は働きかけが弱いと見做すことができる。次の (4-41) のように *zero* 標示が多くなる理由は、このように「触れている」という意味での働きかけが弱いためと言える。

(4-41) (...), *ruangan2 bawah tanah tersebut* (...) *tidak pernah ter-sentuh*
 room.RED under land aforementioned NEG once TER-touch

⁶¹(4-7) において *oleh* が省略されることが一般的でないのは、本稿の主張に基づけば (4-39b) と同じように *buka* 「開ける」という動詞が *pintu itu* 「そのドア」に対しての働きかけを含意するためであると考えられる。

cahaya matahari.

light sun

「前述の地下室は未だかつて光に触れたことはない」

<http://aksesdunia.com/2012/01/15/17-tempat-paling-seram-dan-berhantu-di-dunia/>

以上の二つの意味を考えると、有生物の動作主を取る場合には意図的に触るという文脈である場合が多いため、oleh を取ることが増えると予想される。しかし触れるものが有生物であってもその意志性が含意されなければ次のように zero を取りやすくなる⁶²。

(4-42) *Apakah bola di-anggap gol apabila itu terjadi dari tendangan out secara*
Q ball UV-regard goal when that happen from kick out mannar
langsung tanpa ter-sentuh salah satu pemain?
directly without TER-touch one.of one player

「プレーヤーに触れずに外部からのキックから直接それ (=ゴール) が起こった時、そのボールはゴールと認められますか」

<http://artikelbiboer.blogspot.com/2009/05/peraturan-bermain-futsal.html>

以上、動詞の意味の面で働きかけが強い場合に oleh が用いられやすくなること、反対に働きかけが弱い場合には zero が用いられやすくなることを確認した。

一方で、動詞のグループは認められるものの「働きかけの強さ」という意味的要因には還元が難しいものも存在する。知覚動詞は強い働き掛けを含意する動詞とは言えないため、前述の動詞の意味に関する説明を適用すれば zero 標示に偏るはずである。しかし実際には oleh の使用が多かった。第一の可能性として、知覚動詞であることから知覚者は有性物であり、そのために oleh の使用が増えているというような有生性による影響が挙げられる。しかし例えば lihat において無生物が知覚物の場合でも oleh が 18 件、zero が 6 件であることを踏まえると、動作主の有生性ではなく、動詞自体に原因があると考えの方が妥当である。そこで動詞の性質に注目すると、これらの動詞の共通点は後ろに補語的要素を取ることができるといえる点であることがわかる (cf. 2.6 節、4.2.3.1 節)。

⁶²3.4 節で述べたようにこのような tersentuh は能動文である可能性がある。これは Nomoto & Kartini (2011) が指摘しているところである。インドネシア語では基本的に語基が他動詞の場合は文法役割の交替が義務的に起こるが、交替が起こらない場合がある。つまり語基が接触を表すような動詞の場合以下のように能動文と見做すことのできる例が存在する。

(...) *baju kesayangan anda (...) ter-kena air saat minum segera bersih-kan pakaian*
clothes favorite 2SG TER-hit water when drink immediately clean-CAUS clothes
dari noda tersebut...
from stain aforementioned

「飲み物を飲んでいるときに、あなたのお気に入りの服が水に当たったら、すぐにその汚れを落としなさい」
(Nomoto & Kartini 2011: 123)

そのため、本文で挙げた tersentuh の例も能動文と解釈される場合もある。しかしこの場合の態の判断は話者によって揺れがあり一概に決定できるものではないため、本稿では便宜上、受身文と見做す。

(4-43) *Suara saya ter-dengar kucing.*

voice 1SG TER-hear cat.

「私の声は猫のように聞こえる」

(作例)

そのため例えば(4-43)において「猫に聞かれた」という文を作る場合、意味の曖昧性を排除するために、(4-44)のように *oleh* の標示が義務的となる。

(4-44) *Suara saya ter-dengar ?(oleh) kucing.*

voice 1SG TER-hear by cat.

「私の声は猫に聞かれた」

(作例)

以上から知覚動詞においては、他構文との意味の曖昧性を排除するために、*oleh* が用いられやすいと考えられる。

4.2.4 問題点

前節では動詞の意味が動作主を標示する前置詞 *oleh* の有無に影響を与えていることを明らかにした。しかし解決していない問題が残されている。それは働きかけが認められる動詞にもかかわらず、zero 標示と結びついている動詞がある点である。4.2.2 節で見た中で、*terbawa* 「持っていかれる」、*terbakar* 「燃やされる」、*terancam* 「脅かされる」、*terikat* 「結ばれる」は動作対象への働きかけが強い動詞と見做すことができる。しかし調査の結果、zero 標示と有意に結びつくことが明らかになった。加えて、*oleh* と zero どちらにも有意な結びつきが見られなかった動詞に関する両形式の使い分けや、*oleh* を取りやすい動詞が zero を取る場合の要因などが明らかになっていない。以上より、動詞の意味以外に別の要因が存在すると考えられる。この点を踏まえて次節では以下の問題を考える。

- 動詞の意味以外で、動作主標示の選択に寄与している要因は何か
- 一部の働きかけの意味が認められる動詞が zero と結びつくのはなぜか

4.3 動詞の意味以外の要因の検討

本節では前節で挙げた二つの問題に対して、動詞の意味以外の要因も考慮した定量的分析を行うことを目的とする。4.3.1 節では使用するデータと統計的手法の提示を行う。4.3.2 節で結果を示し、本稿の主張を提示する。

4.3.1 調査方法

4.3.1.1 データ

調査には 4.2.1.1 節で示したデータと同じものを使用する。ただし、本節でのテーマは動詞が持つ「働きかけの意味」と他の要因との関連であるので、前節で見たような意味以外の個別要因が認められるものについては対象外とする。つまり、*terlihat* 「見られる」、*terdengar* 「聞かれる」、*terkesan* 「感じられる」、*terasa* 「感じられる」、*terbukti* 「証明される」のように、構

造上の曖昧性を排除するために *oleh* の選択が行われる動詞を除いた 1617 例が本節での調査対象となる。

4.3.1.2 要因

ここでは選択に影響する可能性がある要因として、働きかけの有無以外に動作主および動作対象の有生性と、動作主の語数をとりあげる。まず通言語的に、動作主標示の交替はしばしば動作主の有生性に応じて起こることが観察されている。例えば *Vangunu*(オーストロネシア語族・ソロモン諸島)では動作主性の高い有性物には *teia* という形式が、無生物には *zero* 標示が用いられる (Zúñiga & Kittilä 2019: 94)。

(4-45) *Ta-va-opo teia tinoni pia ia mola.*
PV-CAUS-capsize AGT man this ART.SG canoe
「このカヌーはこの男によって転覆させられた」 (Zúñiga & Kittilä 2019: 94)

(4-46) *Ta-va-opo bolusu ria mola.*
PV-CAUS-capsize big.wave ART.PL canoe
「このカヌーは大きな波で転覆した」 (Zúñiga & Kittilä 2019: 94)

以上より、動作主標示の変数の一つとして動作主の有生性を仮定する。実際のタグ付けの差異は有性物に 1、無生物に 0 のタグを与える。

加えて日本語などでは 4.2.1.2 節で述べたように、「に」と「によって」という受身文における動作主標示法があるが、このうち「に」は *Empathy Hierarchy* (Kuno 2004: 226) の制約を受けることが指摘されている (久野 1986; Imamura 2022)。 *Empathy Hierarchy* とは人、人以外の有生物、無生物という順で話者の共感度が高く、主語は非主語項よりも共感度が高くなければいけないとする階層である。(4-47a)は「に」による受身文であるが、「に」項は「王」という人間であるのに対し、主語がボールという無生物であるため階層に反する。そのため非文である。一方で(4-47b)の「によって」は *Empathy Hierarchy* の影響を受けないので、容認される。

(4-47) a. * 白いボールが王に打ち上げられた。
b. 白いボールが王によって打ち上げられた。 (久野 1986: 79)

以上より、動作主の有生性に加えて主語に置かれている動作対象の有生性に関してもタグ付けを行う。

次に動作主の長さを考慮に入れる。Nomoto (2021) はインドネシア語の接頭辞 *ter-*以外による受身文に関して、サイズが関係する可能性を指摘している。1.3.1 節で触れたようにインドネシア語には受身文を形成する手段として接頭辞 *di-*があるが、その他に *bare passive* と呼ばれる形式が存在する。これは主に動作主が代名詞である場合に用いられ、[動作対象+ (助動詞)+ 動作主+ 動詞の無接辞形] という特殊な形をとる。しかし代名詞が用いられる場合であっても並列されるなどして動作主句が長くなってしまふ場合は容認度が下がる。

(4-48) *Mobil itu sudah saya cuci.*
 car that already 1SG wash
 「この車はもう私が洗った」 (Moeliono et al. 2017: 471)

(4-49) *?Tugas itu harus kamu dan saya selesaikan.*
 work that should 2SG and 1SG finish
 「その仕事は君と私が終わらせなければいけない」 (Moeliono et al. 2017: 470)

なぜこのようなサイズによる影響が生じるかの分析は進んでいないものの (Nomoto 2021: 13)、インドネシア語の受身文において動作主のサイズが影響を持つという事実に基づき、本章でも要因となる可能性のある指標の一つとして考慮することとする。なおこの「サイズ」の定義については先行研究においては音節的な長さであるのか、字数であるのかなどの詳しい検討はなされていないため、本章では語数を考えることとする。このとき統語的構造の違いは考慮に入れず、関係詞が伴っていたり、並列されているものも一つの句とみなし、計測を行った。最も単純な形では、(4-50) は *oleh* の後に *sinar matahari* が置かれていることから、語数は 2 となる。一方で (4-51) の場合 *sebuah foto pejuang perempuan* と *kisah mereka untuk bertahan hidup* の両方が *oleh* 句を取っていると考え、語数は 10 となる。

(4-50) *Hal ini memacu Wannian untuk men-cipta-kan suatu alat yang tidak ter-gantung oleh sinar matahari.*
 thing this AV.trigger Wannian to AV-create-CAUS something device REL
 NEG TER-hang by ray sun
 「このことは Wannian が太陽光に左右されない器具を生み出す引き金となった」
<http://aksesdunia.com/2012/01/18/asal-mula-perayaan-tahun-baru-imlek/>

(4-51) *Drama ini ter-inspirasi oleh sebuah foto pejuang perempuan dan kisah mereka untuk bertahan hidup.*
 drama this TER-inspire by CLF photo fighter woman and tale
 3PL to hold live
 「このドラマは女性の闘士たちの一枚の写真と彼女らが生き延びた物語にインスピレーションをうけている」
http://id.wikipedia.org/wiki/Danai_Gurira

なお動詞の働きかけの意味に関しては、各例文において動作対象への働きかけが認められれば 1、認められなければ 0 とタグ付けする。このタグ付けは 4.2.3.1 節で行ったクラスター分析にに基づいた分類とは独立したものである。動詞によって共通のタグが付与されるわけではなく、例えば (4-39) のように意味が異なるのであれば、(4-39a) は 0、(4-39b) は 1 と異なるタグが与えられる。

本章で使用する説明変数は以下のようにまとめられる。

表 4.11 動作主標示の説明変数

説明変数	ラベル	先行研究
動詞の意味 (働きかけ)	働きかけあり [1]/なし [0]	Oshima (2003) など
動作主の有生性	有生物 [1]/無生物 [0]	Zúñiga & Kittilä (2019) など
動作対象の有生性	有生物 [1]/無生物 [0]	久野 (1986) など
動作主の語数	語数 (数値)	Moeliono et al. (2017) など

4.3.1.3 分析手法

本節での分析に当たっては、一般化線形混合モデルによるロジスティック回帰を用いる。最初に一般化線形混合モデルの説明のために、その基盤となる線形モデルによる回帰分析について説明を行う。まず回帰分析とは、説明したい分析対象となる従属変数が、要因となる独立変数によってどの様に説明可能であるかを $y=ax+b$ のような式の形で表現する手法である。a は直線の傾きであり、b は切片を表す。そして x に独立変数の数値を入力することによって、求めたい y の従属変数の数値が出力される。これに関して複数の独立変数を基に従属変数の値を求める場合の線形モデルを例にとる。ここでは川端・岩間・鈴木 (2018) の例を使用する。川端・岩間・鈴木 (2018: 69) では、あるフィットネスチェーン店の顧客数を推定するために、立地満足度、設備満足度、店舗面積満足度、トレーナー満足度を基にモデルを設定している。このモデルは次のように表すことができる。

$$\text{顧客数} = -35.204 + 29.105 \times \text{立地満足度} + 21.640 \times \text{設備満足度} + 23.803 \times \text{店舗面積満足度} + 32.421 \times \text{トレーナー満足度}$$

この式からは立地満足度を 1 増加させると、顧客数が 29.105 人の増加が見込まれることが分かる。同じように、設備満足度を 1 増加させた場合は顧客数は 21.640 人増える。ここまでの線形モデルの基本的な考え方である。なお、この線形モデルは正規分布を仮定したモデルであり、従属変数は連続的な量的変数に限られる。そこで正規分布以外の場合のモデル化を可能にするのが一般化線形モデルであり、その中で従属変数が 2 値の質的変数の場合をロジスティック回帰分析という。

このような一般化線形モデルを発展させ、個体差を考慮したモデルを一般化線形混合モデルという。例えば Gries (2015) の提示する次のようなデータを考える。

Data set 3: A linear model w/out adjustments for speakers

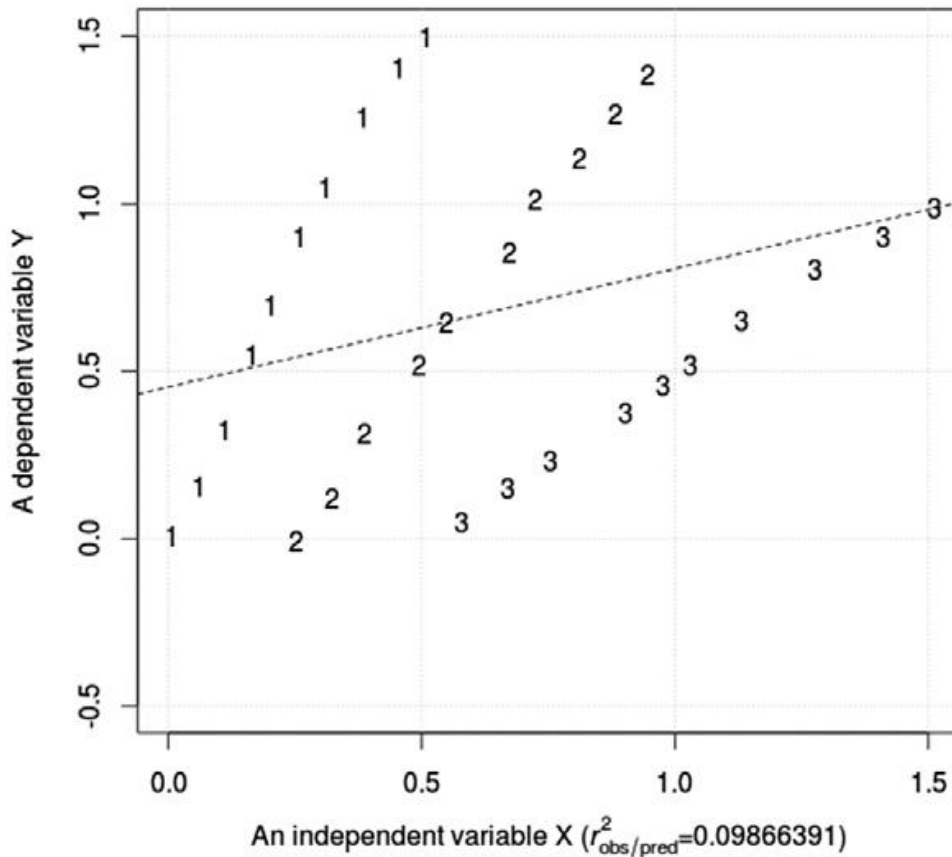


図 4.6 線形モデル (個体差を考慮しないモデル) の例 (Gries 2015: 108)

図 4.6 は架空のデータであり、30 のサンプルについて独立変数 x がどのように従属変数 y を説明するかを線形モデルを用いて表した図である。30 のサンプルは 3 人の異なる話者から抽出したと設定されており、それぞれ 1 から 3 の数字が与えられている。この時、こうした話者の個体差を考慮しない場合、図の点線のような回帰直線が引かれる。ここから、変数 x の値が増えるに従って、 y の値も増加することが読み取れる。しかし、それぞれのグループに注目してみると、回帰直線よりも切片は小さく、傾きは大きいことが読み取れる。つまりグループ間の傾向を反映した説明がうまく行えていないことが伺える。実際に算出された自由度調整済み決定係数⁶³は約 0.098 と低く、結果として x の値と y の値は関係しないと結論付けることになる (Gries 2015: 108)。しかし、個人のプロットを見てみると、明らかに個人内では正の相関がみられる。つまり、個人差を考慮しない線形モデルでは結果が歪んでしまう可能性がある。

そこでこうした個体差を考慮するために用いられるのが一般化線形混合モデルである。このモデルでは図 4.7 のようにそれぞれの個体に個別に回帰直線を設定し計算を行う。

⁶³この値が 1 に近いほど当てはまりがよいと言える。

**Data set 3: A linear mixed-effects model
w/ random slopes and intercepts**

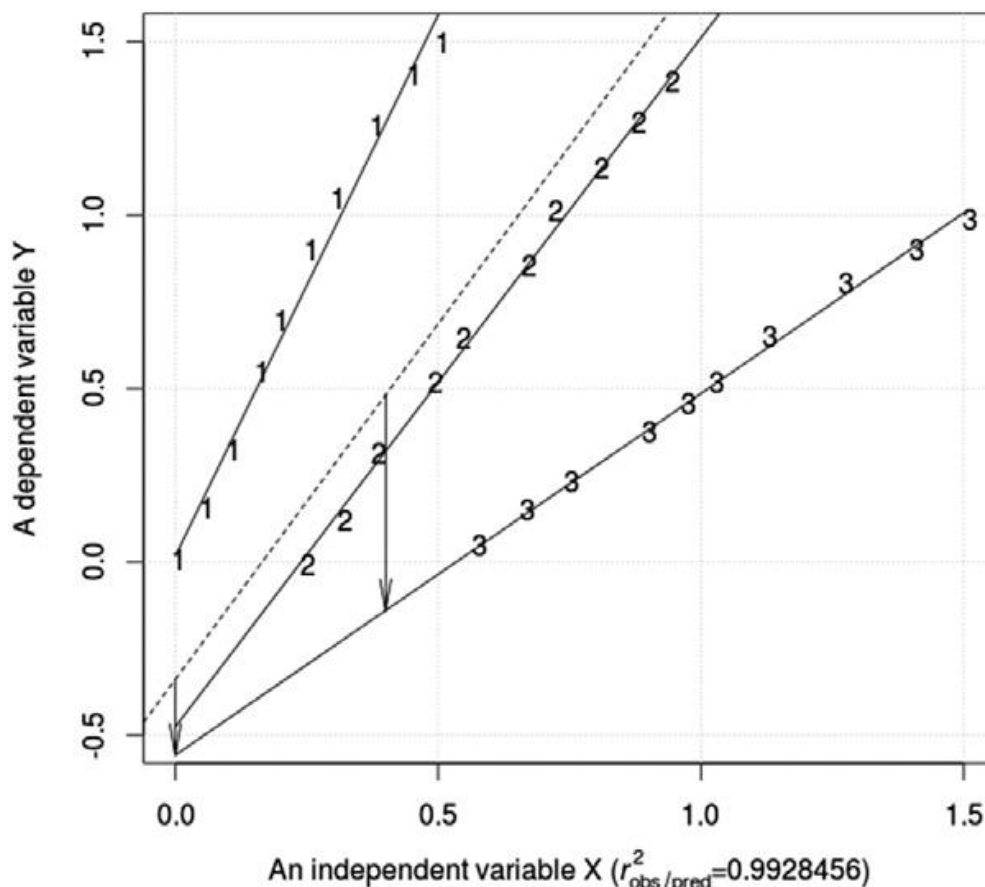


図 4.7 一般化線形混合モデル (個体差を考慮するモデル) の例 (Gries 2015: 109)

図 4.7 はそれぞれのグループの切片と傾きが異なることから⁶⁴、全体の回帰直線と、グループ毎の回帰直線を出している。例えばグループ 3 に含まれる個体の推定を行う場合は、図の矢印のように全体の回帰直線からグループ 3 の回帰直線に読み替えて、切片と傾きを変化させる。このように個体差を考慮することによって、当てはまりの良さが増加する。自由度調整済み決定係数も約 0.992 と大幅に増加しており、回帰直線がデータをうまく説明できていることが伺える。

最後に用語について、従属変数 y への影響を調べたい独立変数 x を固定効果、上記のグループや個体などの変数をランダム効果という。本節を改めて確認すると、oleh と zero の交替が動作主の有生性・動作対象の有生性・動作主の語数・動詞が持つ働きかけの意味の有無によってどのように説明可能であるかを示すことである。このときこれらの変数は固定効果である。一方で、今回は動詞の種類によって動作主の有生性の傾向が変化するという予測から、動詞のタイプをランダム効果とし、異なる切片と傾きを考慮する。以下の図表の作成と解析は R(4.0.5)

⁶⁴個体差について、個体によって切片が異なるランダム切片モデルと、個体によって傾きがことなるランダム傾きモデルがある (川端・岩間・鈴木 2018: 116–128)。

を用いて行った。使用したコードは巻末の付録に示す。

4.3.2 調査結果

本節では最初に各固定効果毎の結果を示す。その後、すべての要因を考慮した一般化線形混合モデルの結果を提示する。

4.3.2.1 個々の要因の検討

表 4.12 と図 4.8 は動作主の有生性に関する結果である。有生物 (animate) と無生物 (inanimate) の行を比べると、有生物の場合はおよそ 81% が oleh で標示されているのに対し、無生物の場合は約 51% に留まる。

表 4.12 動作主標示と動作主の有生性の関係

	zero	oleh	total
animate	35	149	184
inanimate	702	731	1433
total	737	880	1617

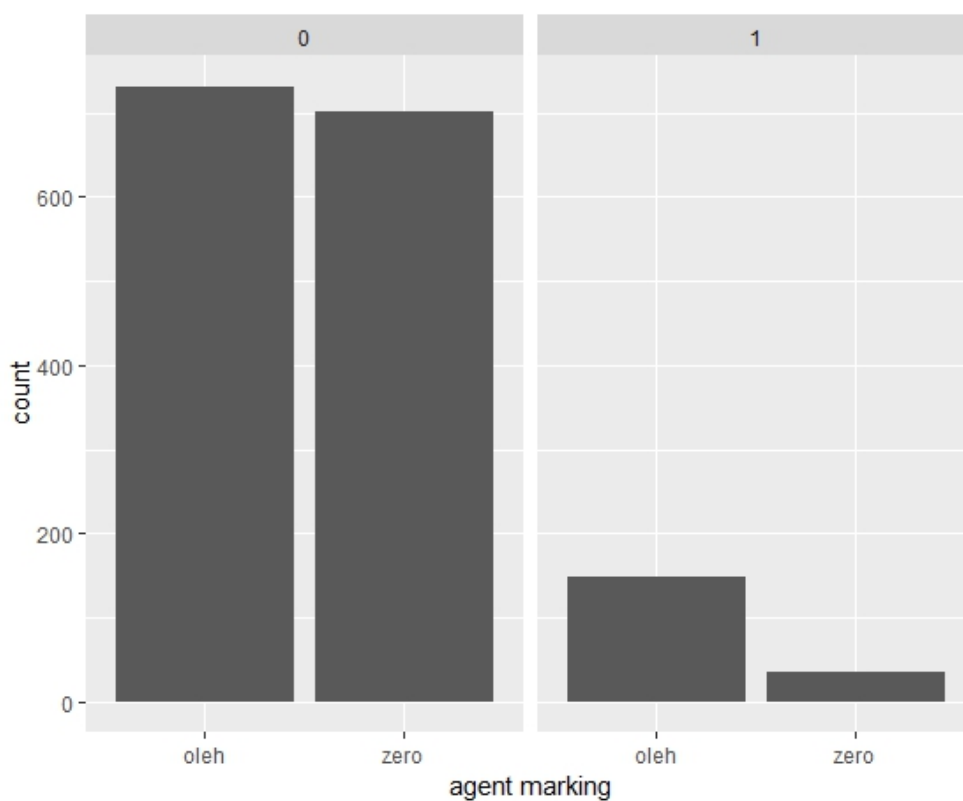


図 4.8 動作主標示と動作主の有生性の関係

一方で、表 4.13 と図 4.9 は動作対象の有生性に関する結果である。動作主の有生性の場合と同じように有生物と無生物の oleh の割合を比べてみると、それぞれ oleh の割合が約 53% と 55% とあまり差がないことがわかる。

表 4.13 動作主標示と動作対象の有生性の関係

	zero	oleh	total
animate	334	380	714
inanimate	403	500	903
total	737	880	1617

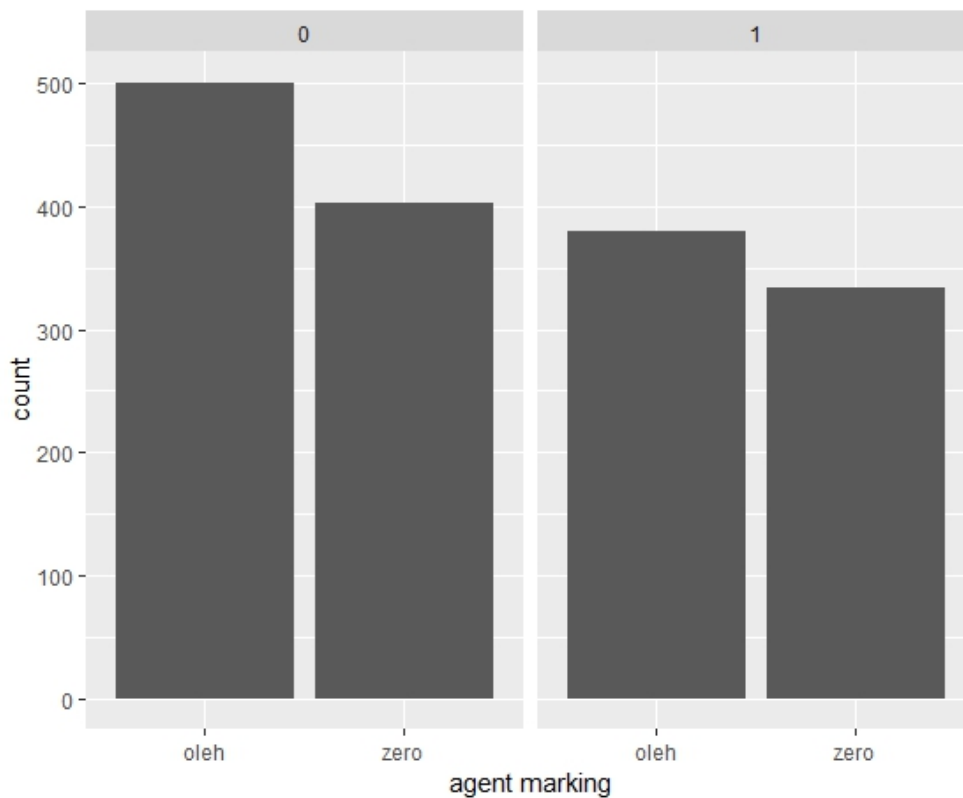


図 4.9 動作主標示と動作対象の有生性の関係

図 4.10 は動作主の有生性と動作対象の有生性を合わせた結果である。横軸の 0 と 1 はそれぞれ動作対象が無生物である場合と有生物である場合を表し、縦軸の 0 と 1 は動作主が無生物である場合と有生物である場合を表している。この図からはわずかではあるが動作主が無生物で動作対象が有生物の場合に zero 標示が多くなる傾向があることが分かる。

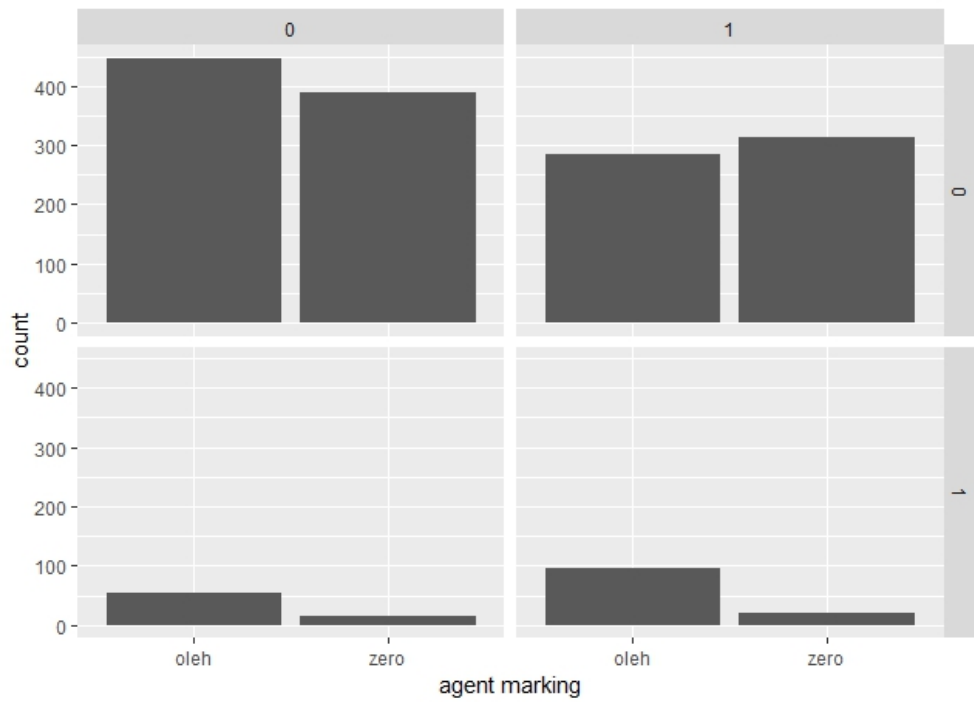


図 4.10 動作主標示と動作主及び動作対象の有生性の関係

次に、図 4.11 は動作主の語数に関する結果である。ここからは oleh のときの方が語数が多い傾向にあることが分かる。

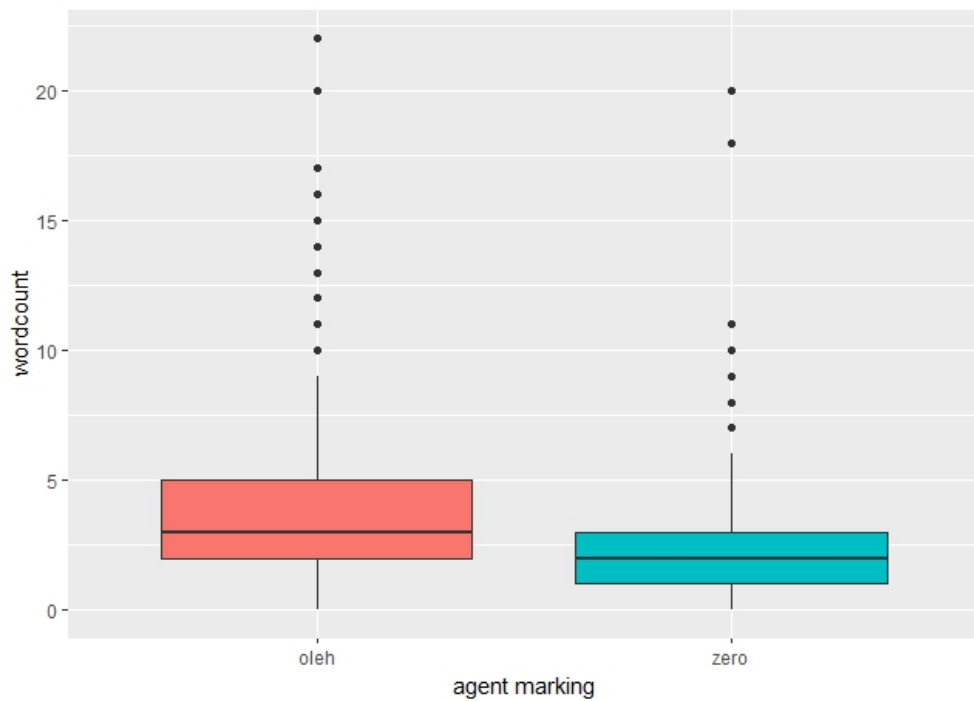


図 4.11 動作主標示と動作主の語数の関係

最後に、表 4.14 と図 4.12 は動詞の働きかけの有無に関する結果である。動詞が働きかけの

意味を持っている場合は約 63%、持っていない場合は 32% が oleh を選択する。

表 4.14 動作主標示と動詞の持つ働きかけの関係

	zero	oleh	total
働きかけあり	444	744	1188
働きかけなし	293	136	429
total	737	880	1617

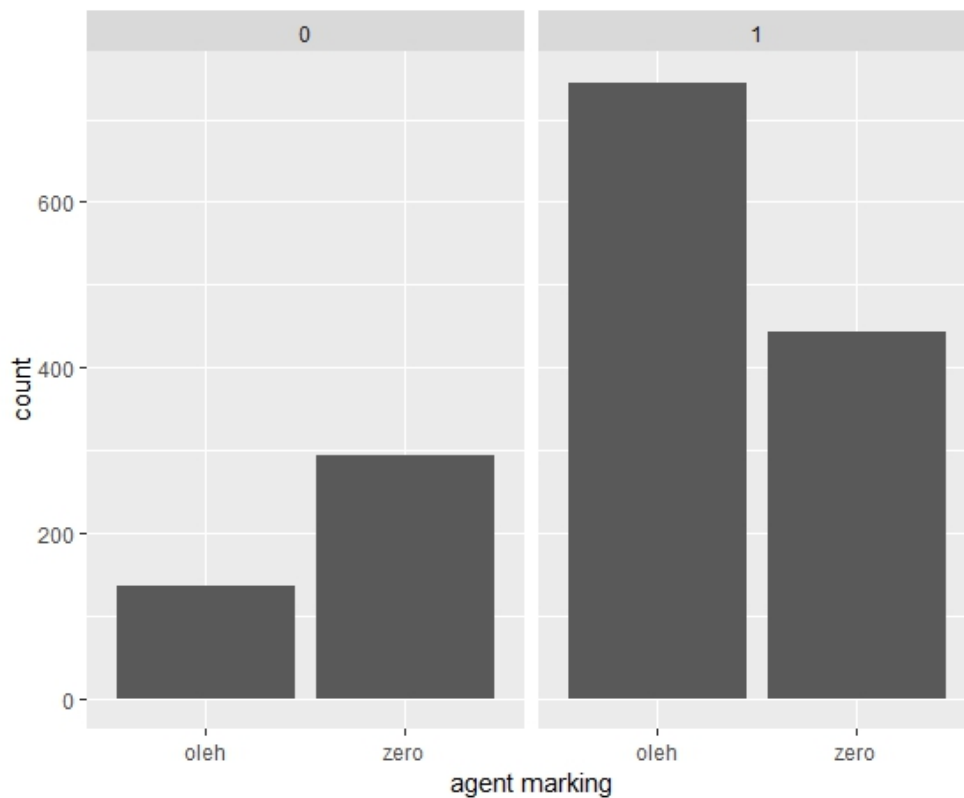


図 4.12 動作主標示と動詞の持つ働きかけの関係

以上、各要因毎に動作主標示との関係を見たが、本節で問題とするのはすべての要因を考慮した際に、どのような選択の予測が成り立つかという点である。動詞毎の差異を考慮したモデルを構築するため次節では 4.3.1.3 節で述べた一般化線形混合モデルに基づいたロジスティック回帰モデルによる分析を行う。

4.3.2.2 ロジスティック回帰分析

本節では一般化線形混合モデルによるロジスティック回帰分析の結果を示す。最初に、表 4.15 は今回考慮したすべての要因を考慮したモデルの結果である。

表 4.15 ロジスティック回帰分析の結果 1

Random effects:				
Groups	Name	Variance	Std.Dev.	Corr
verb	(Intercept)	1.085	1.042	
	動作主の有生性	1.607	1.268	-0.91

Fixed effects:					
	Estimate	Std. Error	z value	Pr(> z)	
(Intercept)	-1.34859	0.31555	-4.274	1.92e-05	***
動作主の有生性	1.11435	0.47813	2.331	0.0198	*
動作主の語数	0.16904	0.02658	6.359	2.03e-10	***
働きかけ	1.90932	0.28146	6.784	1.17e-11	***
動作対象の有生性	-0.30621	0.14135	-2.166	0.0303	*
動作主:動作対象の有生性	0.27325	0.50361	0.543	0.5874	

上部はランダム効果、下部は固定効果の結果を表わしている。ランダム効果の部分には動詞の種類によって切片と動作主の有生性に対する傾きにどの程度ばらつきがあったかを示している。この点については 4.3.2.3 節で後述する。固定効果の部分では Estimate を見るとそれぞれの説明変数の動作主標示に対する影響を判断することが出来る。Estimate が正の値になっているものに関しては 2 値変数の場合は 0 より 1 の方が、連続的変数の場合は数が大きいほうが oleh 標示を取りやすくなることを表わす。つまり動作主の有生性に関しては無生物より有生物の方が oleh を取りやすくなることが分かる。同じように動作主の語数が多いほど oleh を取りやすくなる。働きかけに関しても、動作の意味に働きかけが認められる方が oleh を取りやすい。反対に動作対象の有生性では値が負のため、無生物より有性物の方が zero を取りやすいといえる。ただしこれらの結果が統計的に有意な結果であると判断するためには Pr>|z|(p 値) の値を確認する必要がある。本稿の場合は基準を 0.05 に設定しておりそれを下回る値であれば、すべての変数を考慮した差異にも、各要因が動作主標示の選択に統計的に有意に寄与していることを示す。表内では 0.05 を下回る場合は一つ、0.01 を下回る場合は二つ、0.001 を下回る場合は三つのアスタリスクを表示している。この p 値を見ると、多くは統計的に有意と見做されるが、動作主の有生性と動作対象の有生性の交互作用だけは p 値が大きく動作主標示の選択と有意な関係がないことがわかる。そこで、よりよいモデルを選択するために、交互作用を抜いた分析を行う。結果は表 4.16 にまとめられる

表 4.16 ロジスティック回帰分析の結果 2

Random effects:				
Groups	Name	Variance	Std.Dev.	Corr
verb	(Intercept)	1.112	1.054	
	動作主の有生性	1.685	1.298	-0.92
Fixed effects:				
	Estimate	Std. Error	z value	Pr(> z)
(Intercept)	-1.3881	0.3158	-4.395	1.11e-05 ***
動作主の有生性	1.2762	0.3868	3.299	0.00097 ***
動作主の語数	0.1689	0.0266	6.349	2.16e-10 ***
動作対象の有生性	-0.2722	0.1359	-2.003	0.04523 *
働きかけ	1.9481	0.2824	6.898	5.29e-12 ***

改めて結果を確認すると、依然として動作主の有生性、動作主の語数、動作対象の有生性、動詞の働きかけの意味のすべての要因が 0.05 を下回っている。次に Estimate の列を見ると、動作主の有生性、動作主の語数、動詞の働きかけの意味が正の値、動作対象の有生性が負の値になっている。

表 4.15 と表 4.16 の結果は AIC (Akaike's Information Criterion: 赤池情報量規準) によって比較できる。これは相対的な指標であり、値が少ない方がより当てはまりがよいとされる (川端・岩間・鈴木 2018: 85)。両モデルを比較するとモデル 1 は 1806.6、モデル 2 は 1804.9 であるモデル 2 の方がわずかではあるが当てはまりがいいと言える⁶⁵。

ここで、多重共線性の確認を行う。これは独立変数同士に強い相関がある場合、計算が不安定になり、標準誤差の推定が正しく推定できない場合があるためである (川端・岩間・鈴木 2018: 72)。今回の場合であれば、動詞が持つ働きかけの強さと動作主の有生性は相関がある可能性がある。つまり人間が行うような行為は自然と働きかけが強くなり、そうした関係が反映されている恐れがある。そこで VIF (variance inflation factor: 分散拡大要因) という指標を用いて判断する (川端・岩間・鈴木 2018: 73)。通常この値が 2 以下であれば問題なく、10 以上であると多重共線性が認められ、相関する変数のうちの一つを選択し他は取り除く必要がある。今回 4 変数で VIF を計算した結果は以下の通りである。この結果どの値も 2 を下回っているため、今回のモデルでは多重共線性については問題がないと結論付けられる。

⁶⁵実際の計算は anova() 関数を用いて行った。結果は以下の通りである。なお、AIC はモデル 1 の方が小さいが、右端の p 値を見ると p=0.5891 > 0.05 であるため統計的に有意な差とまでは言えない。

	npar	AIC	BIC	logLik	deviance	Chisq	Df	Pr(>Chisq)
ter.glmer	8	1804.9	1848.0	-894.45	1788.9			
ter.glmer4	9	1806.6	1855.1	-894.31	1788.6	0.2918	1	0.5891

表 4.17 VIF 値 (多重共線性の確認)

変数	動作主の有生性	動作主の語数	動作対象の有生性	働きかけ
VIF	1.009269	1.005388	1.013257	1.009170

以上を踏まえ、4.2.4 節で述べた問題点に答える形で本節での結果を示すと以下のようになる。

- 動詞の意味の他に、動作主の有生性・動作対象の有生性・動作主の語数が動作主標示の選択に寄与している。
- 他の要因を考慮した場合でも、動詞の意味は有意に動作主標示の選択に寄与する。

次節では残された問題である、動詞の意味に還元することのできなかった動詞について個別に考察を行う。

4.3.2.3 個別要因について

最後に動詞の個別要因について確認を行う。4.2.2 節で、いくつかの動詞は働きかけが認められるにも関わらず zero と結びついていたことを見た。これを受けて前節では他の要因について可能性を考慮した。その際、動詞によって動作主の有生性の傾向が偏ると考え、動作主の有生性に対して動詞の種類をランダム効果として設定した。ここでは、実際に動作主の有生性と個々の動詞の種類の関係性を考察する。表 4.18 から表 4.20 はそれぞれの動詞毎に動作主の有生性に関して回帰直線を設定した場合の切片と傾きの大きさである。表 4.18 は一般的傾向と言える正の値、表 4.19 は極端な正の値、表 4.20 は負の値を取るものをまとめている。これらの表を見ると、多くの動詞は表 4.18 に含まれる。これらの動詞の傾きは表 4.16 にある動作主の有生性に関する傾きと大きな差はないため、一般的傾向によって動作主の有生性と動作主表示の関係が説明可能な動詞群である。一方で *terancam* 「脅かされる」、*terbakar* 「燃やされる」、*terbawa* 「持っていかれる」、*terikat* 「結ばれる」、*terjebak* 「罠にかけられる」に関しては他と比べると傾きが大きい。つまりこれらの動詞は動作主標示に関する動作主の有生性の影響が他より大きい。対して、*terbentuk* 「形成される」、*terjangkau* 「差し伸べられる」、*tertangkap* 「捕まる」では値がマイナスになっている。このことはこの3つの動詞が動作主が有生物の場合に zero を取りやすくなるという他の動詞とは逆の性質を持っていることを表す。

表 4.18 動作主の有生性の動作主標示に対する影響の傾き (正の値)

	(Intercept)	animate		(intercept)	animate
terbatas	-1.66955300	1.60705397	terinspirasi	-0.96195791	0.87972285
terbuka	-0.99888807	0.87717165	terluka	-1.44312851	1.39946724
terbunuh	-0.69541674	1.00895414	terpengaruh	-1.90208660	1.67576110
tercemar	-1.66064818	1.47326679	terpilih	-0.68832682	0.70527670
terdesak	-0.97572974	0.88725088	terpisah	-1.78409149	1.79516755
terdorong	-0.97280231	0.88407496	tersentuh	-1.34733532	1.22302183
terganggu	-1.16150079	1.12576815	tersusun	-0.40538363	0.23126283
tergantung	-0.42244218	0.33746112	tertutup	-1.33361307	1.27232297
terhambat	-1.48446902	1.41310980	tertarik	-1.79311805	1.77908497
terhubung	-0.17260830	0.02206576	tertekan	-0.90448094	0.82346894
terinfeksi	-1.40131692	1.31513357			

表 4.19 動作主の有生性の動作主標示に対する影響の傾き (極端な正の値)

	(Intercept)	animate
terancam	-3.13347351	3.10944776
terbakar	-2.50958642	2.55631135
terbawa	-3.67986776	3.89247754
terikat	-2.57730799	2.40852676
terjebak	-3.24665474	3.39887190

表 4.20 動作主の有生性の動作主標示に対する影響の傾き (負の値)

	(Intercept)	animate
terbentuk	-0.30144124	-0.10981980
terjangkau	-0.04079342	-0.09293725
tertangkap	-0.60546173	-0.30788083

まず terancam「脅かされる」、terbakar「燃やされる」、terbawa「持っていかれる」、terikat「結ばれる」、terjebak「罠にかけられる」について、本稿では傾きが大きき要因を表現の複合語化が進んでいるためであると考え。以下では複合語化が進む名詞は主に無生物であることを見る。そうした無生物名詞が動作主項に現れる例が多くなると、無生物における zero の割合が増大し、結果として傾きが大きくなると主張する。

以下の表 4.21 は terancam の動作主項にある名詞句の主要部をまとめたものである。なお、3 回以上現れたもののみを載せている。zero 型ではおよそ半分を bahaya「危険」と hukuman

「刑」が占めており、語の偏りがみられる。一方で oleh の場合はすべて 2 件以下である。

表 4.21 terancam における動作主名詞の種類

zero を取る名詞	oleh を取る名詞	
bahaya 「危険」	14	3 回以上出現するものなし
hukuman 「刑」	8	
lumpur 「泥」	3	
krisis 「危機」	3	
punah 「絶滅」	3	
計 (2 件以下の語も含む)	48	計 (2 件以下の語も含む) 29

表 4.22 は terbakar と共起する語を示している。ここから terbakar は zero 標示のときに api 「火」や matahari 「太陽」と強い結びつきが認められる。

表 4.22 terbakar における動作主名詞の種類

zero を取る名詞	oleh を取る名詞	
api 「火」	6	kemarahan 「怒り」 3
matahari 「太陽」	5	
amarah 「怒り」	3	
計 (2 件以下の語も含む)	22	計 (2 件以下の語も含む) 15

表 4.23 は terbawa の動作主項にある名詞句の主要部をまとめたものである。

表 4.23 terbawa における動作主名詞の種類

zero を取る名詞	oleh を取る名詞	
arus 「流れ」	26	arus 「流れ」 3
suasana 「雰囲気」	7	
perasaan 「感情」	6	
angin 「風」	6	
air 「水」	5	
emosi 「感情」	4	
banjir 「洪水」	3	
ombak 「波」	3	
tanah 「地面 (土砂)」	3	
計 (2 件以下の語も含む)	85	計 (2 件以下の語も含む) 20

zero 標示の場合に arus「流れ」が 25 件と 29.8% を占める。さらに似た意味を持つ語や「水」の意味を持つ air「水」、banjir「洪水」、aliran「流れ」などの語を含めて考えると、terbawa+[流体]「[流体]に流されて持っていかれる」という言った強い結びつきが確認できる。

terikat の結果を表 4.24 に示す。terikat の zero 標示においても、他の動詞と同様 kontrak「契約」が 24.4% と大きい割合を示すことがわかる。さらにこの kontrak は oleh の場合には一件も現れていない。つまり話者は terikat kontrak という一つの固定化したフレーズとして認識していると考えられる。

表 4.24 terikat における動作主名詞の種類

zero を取る名詞		oleh を取る名詞	
kontrak「契約」	16	ruang「部屋」	4
waktu「時間」	5	waktu「時間」	4
perjanjian「約束」	5		
ruang「部屋」	3		
hubungan「関係」	3		
計 (2 件以下の語も含む)	66	計 (2 件以下の語も含む)	45

最後に terjebak「罨にはまる」の結果を示す。表 4.25 が示すように、terjebak は zero 標示において「渋滞にはまる」という場合に用いられる。

表 4.25 terjebak における動作主名詞の種類

zero を取る名詞		oleh を取る名詞	
macet「渋滞」	7	3 回以上出現するものなし	
kemacetan「渋滞」	6		
banjir「洪水」	3		
badai「台風」	3		
計 (2 件以下の語も含む)	37	計 (2 件以下の語も含む)	13

本稿では、以上のように特定の語と共起することが多くなった結果、動詞と特定の名詞との結びつきが強くなり、oleh が挿入されることが少なくなったと主張する。つまり terjebak macet「渋滞に捕まる」といったように一つのまとまりという複合語として認識されていると考える。

すべてのコンサルタントが許容するわけではないものの、terbawa (oleh) suasana というように suasana が原因として扱われていたが、oleh が省略される頻度が増えたことによって“terbawa suasana”とフレーズが一つのまとまりをなしているように見做され、結果として suasana とは別の動作主項を置くことができるようになっている場合もある。(4-52)であれば、lagu ini「この曲」が terbawa suasana「『雰囲気流され』する」の原因であると読みことができ

きる。

- (4-52) *Dari segi ritme memang ter-bilang mudah, namun konotasi lagu ini*
from side rhythm really TER-say easy but connotation song this
sangat dalam, dan tak jarang para pendengar ter-bawa suasana oleh
very profound and NEG rarely PL audience TER-take atmosphere by
lagu ini.
song this

「リズムの面からは単純だと言えるが、この曲の含蓄は非常に深遠で、聴衆がこの曲に流されてしまうのも少なくはない」 [VIVA.co.id]

考えられる反証として、oleh 句が suasana を修飾しているという可能性がある。しかし、仮にこの可能性が正しいとすれば (4-53) のように suasana oleh lagu ini 「この曲による雰囲気」という名詞句が他の環境でも容認されるはずであるが、実際には非文と判断される。

- (4-53) * *Suasana oleh lagu ini sangat meriah.*
atmosphere by song this very cheerful

「(意図した意味) この曲による雰囲気はとても陽気である」 (作例)

以上より、terbawa と suasana が一つの動詞句として結びついているという考え方が正しいといえる。こうした例には他に (4-54) のような例がある。表 4.23 にあるように、定着が進み terbawa arus で一つのフレーズであると認識されることで、さらに別の原因項が置かれるという現象が生じている。

- (4-54) *Sebagai investor yang men-dasar-kan pada rasionalitas, tentunya tidak akan*
as investor REL AV-base-CAUS on rationale naturally NEG will
mudah ter-bawa arus oleh isu-isu yang beredar.
easy TER-take flow by problem-RED REL circulate

「合理性に基づいている投資家として、当然出回る問題によって簡単に流されるようなことはない」 [Kompas.com]

以上、一部の動詞は特定の無生物名詞と結びつきやすく、その場合複合語的にみなされ oleh が挿入されにくいことを見た。ここからそうした動詞に関しては、zero 標示の場合の無生物の割合が他の動詞に比べて増加するため、動作主標示と動作主の有生性の関係を見た際に傾きが大きくなると主張する。

傾きがマイナスであった tertangkap 「捕まる」と terjangkau 「差し伸べられる」に関しても同じことが言える。これらの動詞は動作主の有生性の傾きがマイナス、つまり動作主が有性物である方が zero 標示を取りやすい。本節ではこの傾向も動作主の名詞に偏りがあるためであると考える。tertangkap 「捕まる」の動作主の名詞は以下のようにまとめられる。

表 4.26 tertangkap における動作主名詞の種類

zero を取る名詞	oleh を取る名詞	
kamera 「カメラ」	5	tim 「チーム」 3
polisi 「警官」	3	tentara 「軍隊」 3
musuh 「敵」	3	
計 (2 件以下の語も含む)	27	計 (2 件以下の語も含む) 48

terjangkau 「差し伸べられる」の動作主の名詞は以下の通りである。

表 4.27 terjangkau における動作主名詞の種類

zero を取る名詞	oleh を取る名詞	
masyarakat 「民衆」	4	3 回以上出現するものなし
計 (2 件以下の語も含む)	19	計 (2 件以下の語も含む) 28

以上より tertangkap 「捕まる」と terjangkau 「差し伸べられる」はそれぞれ polisi 「警察」や musuh 「敵」と masyarakat 「民衆」が動作主項に置かれやすく⁶⁶、有性物の名詞と結びつきが強くなっていることがわかる。そのため特定の有性物名詞と結びつきが強い動詞に関しては、zero 型の場合の有性物の割合が他の動詞に比べて増加するため、傾きがマイナスになると考えられる。ただし、正の傾きが大きい動詞に比べれば数は少なく、明白な影響があるとは言えない。表 4.20 を見ても傾きがマイナスの動詞は値が 0 に近く、データ数によっては正負が容易に変化してしまうことが予想される。最後に terbentuk 「形成される」は全体で 37 件のうち、動作主が有生物である例が 1 件でありその例が zero 標示であった。そのため terbentuk の傾きがマイナスであった、つまり有生物の場合に zero 標示を取りやすくなるという結果はこの例が強く影響を与えていると考える。これらの動詞に関しては今後データの数を増やし、動作主が有生物である場合を十分にデータに含めることで、より正確な予測を行うことが求められる。

以上、一部の動詞は特定の共起語との結びつきが強いため他より強く動作主の有生性の影響を受けることを見た。4.2.4 節の問題に立ち返れば、働きかけが認められるにもかかわらず、zero 標示と結びつく動詞があるのは動詞の意味や動作主の有生性という要因に加え、動詞個別の共起語に影響を受けていると結論付けられる。

4.4 4 章のまとめと今後の課題

本章では、接頭辞 ter-による受身文における動作主標示について考察を行った。先行研究では、インドネシア語の受身文における動作主標示の研究は接頭辞 di-に限られており、接頭辞

⁶⁶masyarakat はプログレッシブインドネシア語辞典(舟田・高殿・左藤 2018: 388)では 1. 社会・共同体、2. 民衆・大衆と定義されており、無生物にも捉えられる。その場合は zero の無生物の割合が減り、他の多数の動詞と同じように緩やかな正の傾きになる (cf. 表 4.18)。そのため、masyarakat の捉え方は本稿の主張に直接影響するものではない。

ter-に関する記述は進んでいなかった。そこで語基の動詞の意味に焦点を当てて調査を行った後、動詞の意味以外の要因も考慮した定量的分析を行うことで以下の点が明らかになった。

- 全体として、動詞が持つ「動作主から動作対象の働きかけ」が強ければ oleh を取りやすく、弱ければ zero を取りやすくなる (cf. 4.2 節)
- 動作主が有生物である場合、無生物の場合よりも oleh を取りやすい (cf. 4.2 節)
- 動作対象が有生物である場合、無生物の場合よりも zero を取りやすい (cf. 4.2 節)

意味面以外の要因としては、以下の点が明らかになった。

- 動作主の語数が多いほど、oleh を取りやすくなる (cf. 4.2 節)
- 他構文との意味的曖昧性を排除するために oleh と zero が使い分けられる場合がある (cf. 4.3 節)
- 動詞と共起する動作主項の名詞の種類の違いが選択に影響を与える (cf. 4.3 節)

これらの結果は、接頭辞 ter-による受身文において前置詞 oleh と zero 標示は自由に交替可能ではなく、意味的な使い分けが行われていることを示唆する。McGregor (2013) は通言語的に optional な形式は意味の表出の観点から 4 つに分類できると主張している (表 4.28)。

表 4.28 Optional な形式の 4 分類 (McGregor 2013: 1159)

	1	2	3	4
use	coded meaning +prominent	coded meaning +prominent	no coded meaning -prominent	no coded meaning -prominent
non-use	coded meaning +backgrounded	no coded meaning -backgrounded	coded meaning +backgrounded	no coded meaning -backgrounded

1 列目はある形式の使用と zero 標示が共にある意味を持つことを表す。ここでの +prominent とはその形式の使用によって何らかの意味が表出することを意味する。一方で +background とはある形式を使用した場合に出る意味とおおよそ反対の意味が表出することを表す。2 列目は無標の形式が zero 標示で、ある特定の意味を表す場合に有形の標示が現れる場合を指す。3 列目はその逆である。4 列目は使用も zero 標示も特定の意味を付与しない、文法的な標識であることを表す。従来のインドネシア語の接頭辞 di-受身文 (cf. 4.1 節) における動作主標示についての先行研究の考え方はこのうちの 4 つ目のパターンに当てはまる。つまり、前置詞 oleh も省略 (zero 標示) も受身文の動作主標示という機能を持っているのみで、標示の選択によって意味が追加されるわけではない。しかし接頭辞 ter-における前置詞 oleh と zero 標示は 1 のパターンに属すると考える。表 4.16 で明らかになったように、oleh は働きかけが強い動詞や有性物の動作主が用いられるときに表れやすい。反対に、zero 標示は働きかけが弱い動詞や無生物の動作主が用いられるときに表れやすい。つまり oleh の使用は働きかけを表す形式、そしてその不使用 (zero 標示) は働きかけのなさを表す形式であるといえる。

これは以下の例によっても裏付けられる。次の文は oleh を省略可能、つまり oleh 標示と

zero 標示の両方を取ることができる文である。しかしコンサルタントによれば、両者には伝達するニュアンスの違いが存在する。

- (4-55) *Penjahat itu te-rekam {oleh / Ø} mesin itu.*
rogue that TER-record by / Ø machine that
「その悪人は、その機械に撮影された」 (作例)

oleh がある場合はその機械はその悪人を撮影するために設置されたものであることを含意する。一方で zero 標示の場合は機械は必ずしも悪人を捉えることを意図せず設置されたのであり、当該の悪人が映ったのは偶然であるニュアンスを帯びる。つまり oleh の有無が、動作対象に働きかける強さに影響していると言える。

今後の課題として二点挙げられる。第一に、oleh 以外の前置詞の影響を考慮する必要がある。今回は oleh と zero との差異を分析したが、接頭辞 ter-派生動詞に後続する前置詞にはこの他にも多くのバリエーションが存在する。(4-56) は pada "on, at"、(4-57) は dengan "with"、(4-58) は dari "from" という前置詞が使われている例である。

- (4-56) *Berhasil tidak=nya suatu pendakian ter-gantung pada kekuatan fisik.*
success NEG=NMLZ some climbing TER-hang on strength physical
「登山が成功するかどうかは、肉体的な強さ次第である」
http://apvalentine.blogspot.com/2008_09_01_archive.html

- (4-57) *Deiksis di-definisi-kan sebagai ungkapan yang ter-ikat dengan konteks=nya.*
diectic UV-definition-CAUS as expression REL TER-tie with
konteks=nya
context=3
「ダイクシスはその文脈と結びついた表現として定義される」
http://andiadfl.blogspot.com/2010_06_01_archive.html

- (4-58) *Ternyata film tersebut ter-inspirasi dari se-orang tokoh misterius di in.fact film aforementioned TER-inspire from one-person figure mysterious in Perancis.*
France
「実際には、その映画はフランスの謎めいたとある人物からインスピレーションを受けている」
<http://argakencana.blogspot.com/2010/01/10-orang-paling-misterius-di-dunia.html>

こうしたバリエーションの存在のため、今後は oleh や zero 以外にも取り得る前置詞を整理し、今回のような横断的な調査に加え、それぞれの動詞についてどのように動作主標示の使い分けが行われているかという個別調査を行う必要がある。

第二に、今後統計的手法による正確な説明を目指すのであれば、さらに大規模なデータの使用が求められる。例えば 4.3.2.3 節で見たように、terbentuk 「形成される」は有生物が動作主の場合に oleh の使用が低下する結果が出ているが、これは有生物が動作主である事例が 1 件しか

なかったためである。このように事例数が十分ではない場合、標準誤差が大きくなってしまい統計的に妥当性のある検討が出来なくなる。表 4.2 を見るといくつかの動詞は zero の出現数が 0 であるものやそもそも動作主が表示されている件数が少ないものがあり、terbentuk と同様に動詞個別の統計的分析が難しいものがある。加えて、今後レジスターなどを考慮に入れるためにも、ニュースなどのフォーマルな文体のテキストや話し言葉のデータを導入する必要がある。

5 最上級用法について

5.1 はじめに

本章では接頭辞 *ter-* の最上級用法について考察を行う。前章までは主に接頭辞 *ter-* が動詞を形成する場合に焦点を当ててきた。しかし 1 章で述べたように、接頭辞 *ter-* は最上級表現を形成する機能も持つ。(5-1) は *terpanas* 「最も暑い」という語の例である。

(5-1) *Suhu ter-panas di Jakarta tahun ini 37°C.*
temperature TER-hot in Jakarta year this 37°C
「今年のジャカルタの最高気温は 37 度だ」 (=(1-10))

こうした最上級表現と *ter-* 派生動詞は共時的には全く異なるものであるように見える (cf. Wee 1995: 157–158)。そのため先行研究では主に通時的な派生により説明されてきた。しかし以下で見るように、十分な観察に基づいた記述がなされていない、そして類義表現である *paling* との差異が説明できないという問題が残っている。本章では 5.2 節で通時的分析の精緻化、5.3 節で *paling* との差異を扱う。

5.2 動詞を形成する接頭辞 *ter-* との関係

本節では最上級表現を形成する接頭辞 *ter-* と前節までで分析を行った動詞を派生する接頭辞 *ter-* との関係性について考察を行う。これまで、最上級を表す接頭辞 *ter-* は考察の中心となることは少なかった。Winstedt (1913) をはじめとし、いくつかの研究では言及が行われてきたが、どれも主な考察対象は動詞語基の場合であり、最上級用法に焦点を当てたものではない。ここでは Winstedt (1913) 及び、そこから派生した研究である Wee (1995)、Chung (2011) を取り上げて、どの程度分析が行われてきたかを確認する。

Winstedt (1913) は動詞を形成する接頭辞 *ter-* が表す「完了」及び「(不)可能」の意味から、「ある尺度上の限界点に達した」という意味が派生していると考え、ここから最上級の意味が生じたと主張する。Chung (2011) はこの Winstedt (1913) の考え方を基本的に踏襲するも、他の可能性にも言及している。Chung (2011) は 1808 年に書かれた *Sejarah Melayu* というテキストと、2005 年の新聞記事コーパスを用いてマレー語における接頭辞 *ter-* の通時的変化を分析したものである。結果、「完了」及び「(不)可能」からの派生の可能性の他に、Heine & Kuteva (2002) を参考に定性標識からの派生の可能性を上げている。これは通言語的に、しばしば定性標識の有無で比較級と最上級が表し分けられることがあり、ここから定性標識が最上級を表す機能を備えていると考えるものである。インドネシア語には接頭辞 *ter-* を用いた定性標識 *ter-sebut* 「その」があり、Chung (2011) はこの語との関連性を提案している。まとめると、Chung (2011) は以下の二つの派生関係を候補として挙げている。ただし候補を挙げるに留まり、どちらの分析を採用するかなどの主張はなされていない。

- Perfected, sudden acts » Ability (Perfected/Stative) » (Im)Possibility (Perfected/Stative) »

Superlative (Stative)

- Perfected, sudden acts » Definite/Adjectival participle (Perfected) » Superlative (Stative)

Wee (1995) も同様に基本的には「完了」の用法から最上級用法が派生したと考えているが、terlalu[ter+ 過ぎ去る]「～過ぎる」からという単語から生じたと主張する点で異なる。Wee (1995) は 18 世紀頃にかかれたと考えられている Hikayat Hang Tuah をデータとして調査を行っている。その中で接頭辞 ter-(terlalu を除く) は 213 件使用されているが、形容詞を語基とするものは 3 件であることを指摘した。一方で terlalu 「～過ぎる」は 153 件あるが、動詞と共起するものは 8 件で、残りは形容詞と共起する。つまり歴史的に接頭辞 ter-は最上級としての機能は主要なものではなく、terlalu が最上級の (Wee (1995) の用語では intensifier) な役割を担っていたと考えている。ただし、lalu は「過ぎ去る」の他にも英語の then に当たる様な、ある動作と動作の境界を表す用法もある。そこから terlalu は 'perfectivity' 「完了性」を表す接頭辞 ter-とある動作の終了地点を表わす lalu という冗長性のある表現であるとされ、現代では lalu が脱落する形で接頭辞 ter-に取って代わられたと主張する。

以上の先行研究から鑑みるに、接頭辞 ter-の「完了」を表す機能から最上級の用法が派生したという考えが共通見解であると言えるが、コーパスが限られていたり、具体例を用いた説明がなされていないなど明確な根拠を挙げた研究はなされていない。そこで次節ではまず 5.2.1.1 節でデータ探索的に通時コーパスを用いて、実際に最上級を表すような接頭辞 ter-がどのように用いられていたかを観察する。結果として、「語基の表す状態へ変化」を表す標識であったことを提示し、そうした意味を経由して最上級用法へと変化したことを主張する。さらにこの観察を基に、前章までで用いた事象構造の考え方を用いて、「語基の表す状態へ変化した」という意味が動詞語基の場合に見られる完了用法と同じ形で表出していることを示す。

5.2.1 調査

5.2.1.1 通時コーパスにおける接頭辞 ter-の特徴

本節では先行研究での通時的な最上級の接頭辞 ter-の分析をうけ、通時コーパスを用いて先行研究より年代を遡る形で観察を行う。調査に当たっては Malay Concordance Project コーパス (以下 MCP) を用いた⁶⁷。MCP は古典マレー語の散文や韻文を集めて記録したものであり、テキストの種類は 165 種類、580 万語からなる。年代としては 1300 年代から 1950 年代のものが含まれる。以下本章で用いる例文は別途記載がない限り MCP からの引用である。引用の際には例文ごとに引用したテキスト名と年代を記す。

まず調査対象を決定する。4.2.1.1 節で取得したデータを基に、MALINDO Conc 内のデータにおける最上級の用法の例を抜き出す。結果は表 5.1 にまとめられる。

⁶⁷<http://mcp.anu.edu.au/Q/mcp.html>

表 5.1 接頭辞 ter-の用法

	最上級用法	その他の機能を持つ接頭辞 ter-	非接頭辞 ter-	計
type size	107	2142	1045	3294
token size	19207	245717	25752	290676

この 107 種類のうち、頻度が上位 30 位以内であった語について⁶⁸、古典マレー語での頻度を調べた。表 5.2 は MCP での頻度順に並べたものである。

表 5.2 MALINDO Conc と MPC における出現数

語基	MALINDO	MCP	語基	MALINDO	MCP
baik 「良い」	3300	85	buruk 「悪い」	159	1
besar 「大きい」	2918	78	cepat 「早い」	153	1
banyak 「多い」	447	65	dalam 「深い」	104	1
tinggi 「高い」	1558	50	bawah 「下の」	62	1
tua 「年長の」	622	31	lama 「(期間が) 長い」	52	1
kecil 「小さい」	272	26	baru 「新しい」	882	0
kaya 「裕福な」	131	20	penting 「重要な」	676	0
indah 「きれいな」	86	13	atas 「上の」	199	0
jauh 「遠い」	52	13	muda 「若い」	176	0
akhir 「終わりの」	4791	8	kini 「現代的な」	158	0
berat 「重い」	53	6	depan 「前の」	110	0
dekat 「近い」	495	5	luar 「外の」	90	0
rendah 「低い」	273	5	luas 「広い」	76	0
belakang 「後ろの」	64	5	mahal 「高い」	58	0
kuat 「強い」	194	4	sukses 「成功した」	53	0
panjang 「長い」	124	2	hebat 「偉大な」	52	0

ここでは MCP において頻度が高いものから順に terbaik 「ter-良い」、terbesar 「ter+ 大きい」、terbanyak 「ter+ 大きい」の用例を調査する。

まず大きな特徴として、daripada 「～より」と共起する場合が非常に多いことがある。以下の (5-2) から (5-4) の例は terbaik、terbesar、terbanyak の例である。

(5-2) *Maka kaum Zabalang itu ter-baik daripada kaum Suran.*
 then community Zabalang that TER-good than community Suran
 「そしてその Zabalang たちは Suran たちより良い」 [Bustan al-Salatin: 1640s]

(5-3) *Katakan oleh=mu pada Raja Nusyirwan bahawa kerajaan=ku ter-besar*
 say by=2SG king on Nusyirwan that kingdom=1SG TER-big

⁶⁸第 30 位に当たる語が 3 つ存在するため、全部で 32 件になっている。

daripada kerajaan=nya.

than kingdom=3

「Nusyirwan 王に俺の王国の方が彼の王国より大きいと言いなさい」

[Bustan al-Salatin: 1640s]

(5-4) *Sebermula mereka itu ter-banyak daripada kaum yang lain (...)*

first 3PL that TER-many than community REL other

「最初、彼らは他の民族より多かった」

[Hikayat Iskandar Zulkarnain: 1570s]

年代ごとの使用法を数えると以下のようなになる。すべての場合に共通して、特に 1700 年代まで *daripada* と共に使われることが多かったことが分かる。

表 5.3 通時的な *terbaik* の使用法の推移

	<i>daripada</i>	その他	計
1300s	0	1	1
1400s	-	-	
1500s	1	1	1
1600s	12	7	19
1700s	2	2	4
1800s	1	12	13
1900s	0	6	6

表 5.4 通時的な *terbanyak* の使用法の推移

	<i>daripada</i>	その他	計
1300s	2	6	8
1400s	-	-	
1500s	2	7	9
1600s	9	15	24
1700s	0	13	13
1800s	0	4	4
1900s	0	6	6

表 5.5 通時的な terbesar の使用法の推移

	daripada	その他	計
1300s	2	3	5
1400s	-	-	
1500s	3	0	3
1600s	18	5	23
1700s	2	2	4
1800s	0	8	8
1900s	0	26	26

他の特徴として、daripada 「～より」に後続する名詞句が lainnya 「他の」や segala 「すべての」を伴うことが多いことが挙げられる。例えば (5-5) や (5-6) のような例である。

(5-5) *Siapa yang ter-baik daripada segala raja-raja itu?*
 who REL TER-good than all king-RED that
 「すべての王より良い者は誰ですか」 [Bustan al-Salatin: 1640s]

(5-6) *Maka di-ambil=nya se-bilah pedang yang ter-besar daripada lain=nya, dan sebuah perisai yang ter-besar daripada lain=nya.*
 then UV-take=3 one-lath sword REL TER-big than other=3 and
 CLF shield REL TER-big than other=3
 「それから彼は他のよりずっと大きい一本の剣と他のよりずっと大きい一つの盾を手
 に取った」 [Hikayat Raja Pasai: 1300s]

5.2.1.2 考察

前節では、形容詞的意味を持つ語基に接頭辞 ter-が付いた場合に、1700 年代までは daripada と使われることが多いこと、そして segala 「すべての」や lainnya 「他の」と共起することが多いことの 2 点を指摘した。本節ではこの結果を基に、通時的な接頭辞 ter-の用法の変化を考える。

まず、本稿では daripada 「～より」と共起することは従来形容詞的意味を持つ語基に付く接頭辞 ter-は最上級用法ではなかったことを示していると考え。上記の (5-2) から (5-4) の例は daripada 「～より」が共起し、「最も～である」という意味を表しているのではなく、一対一の比較をしていると考えられる。訳文で表しているように、(5-2) では Zabalang と Suran を、(5-3) では kerajaanku 「俺の王国」と kerajaannya 「彼の王国」を、(5-4) では mereka 「彼ら」と kaum yang lain 「他の民族」を比較している。

次にこうした接頭辞 ter-の具体的な機能の規定を試みる。上記の観察から接頭辞 ter-が比較を表す機能を持っていたとも考えられる。しかし本稿では、「語基が表す状態への変化」を表すと考える。これは daripada 「～より」が必ずしも比較の標識となるわけではなく、一義的に比

較であると断定できない点に加え⁶⁹、数は少ないが以下の様な ter+ 形容詞的意味と sedikit 「少し」が共起する例が見られるためである。

(5-7) (...) *tetapi di salah suatu bandar yang ter-besar sedikit semacam di*
but in one.of something town REL TER-big a.little like in
Gopeng, kerap kali penulis ter-dengar suara-suara dari orang ramai
Gopeng sometimes writer TER-hear voice-RED from person loud
menyebutkan Seri Panggung Gopeng (...)
AV.say Seri Panggung Gopeng

「しかし Gopeng のように少し大きい街では、しばしば筆者は Seri Panggung Gopeng を唱和する人たちの声を聞いた」 [Sejarah Melayu: 1600s]

他にも (5-8) のような例が見つかる。この例では *terjauh sedikit* 「少し遠い」と解釈できる。

(5-8) (...) *ada bejana minyak itu ter-jauh sedikit daripada tempat duduk=nya itu.*
exist canister oil that TER-far a.little than place sit=3 that

「油の缶は彼が座っていたところから少し遠いところにあった」

[Bustan al-Salatin: 1640s]

数が少なく必ずしも一般的な使い方ではないにしても、こうした *sedikit* 「少し」と共起することが出来る例は、*terbesar* や *terjauh* が最上級の意味としては用いられていなかったことを示唆する。(5-7) は文脈を踏まえると、大きくなるという程度が少しであることを表わしていると判断することが出来る。同じように (5-8) も、遠いという程度が少しであることを表わしている。ここからこれらの接頭辞 *ter-* 派生形容詞は「語基の表す状態への変化」と捉えられることを本稿では主張する。

次にこうした「語基の表す状態への変化」から現在のような最上級の意味を表すようになった過程について、本稿では「語基の表す状態への変化」において、*segala* 「すべての」*lainnya* 「他の」の比較に用いられることが多くなったために最終的に最上級の標識として定着したと考える。これらの語と共起する場合には、間接的に最上級の意味を表していると解釈することができる。(5-5) において、*segala tabi'in* 「すべての後継者」よりも大きいということは、他

⁶⁹例えば次の文の *daripada* は英語の *from* に相当する意味で、「～と違って」というフレーズとして用いられている。

Berbeda daripada tempat glamour camping (glamping) kebanyakan, konsep di Legok Kondang
different from place glomour camping (glamping) majority concept in Legok Kondang
bisa di-bilang unik (...)
can UV-say unique

「多くのグランピングの場所とは違って、Legok Kondang のコンセプトはユニークであると言える」

[Kompas.com]

<https://travel.kompas.com/read/2022/02/20/070700927/glamping-legok-kondang-ciwidey-tawarkan-wisata-alam-dengan-suasana-bali?page=all>

最終閲覧日 2022/8/26

他にも、(5-8) における *daripada* も同様に比較対象を標示しているわけではない。

の後継者と比べた際に最も大きいということを間接的に表している。(5-6)でも、lainnya「他の」と比較してそれより大きいと述べることで、最も大きい剣と盾であることを間接的に示している。以上より本稿では以下のような派生過程を想定する。

完了 » 語基が表す状態への変化 » 最上級

このように考える利点に、ここまで見たように先行研究の最上級という分析では捉えられないコーパス内の実例を反映できることに加え、3章で見た動詞語基の場合の接頭辞 ter-と最上級の接頭辞 ter-を同じ分析の枠組みで説明できるようになることが挙げられる。

3章では接頭辞 ter-の機能を以下のように設定した。

ある動作主が存在し、動作対象に働きかけを行い、その働きかけによって動作対象が何らかの状態に変化するという事態を基に、その動作対象に生じる事態つまり事態成立局面、または行為の非意図性が認知的際立ちを帯びる。

そしてこの概念を図 5.1 のように図式化した。

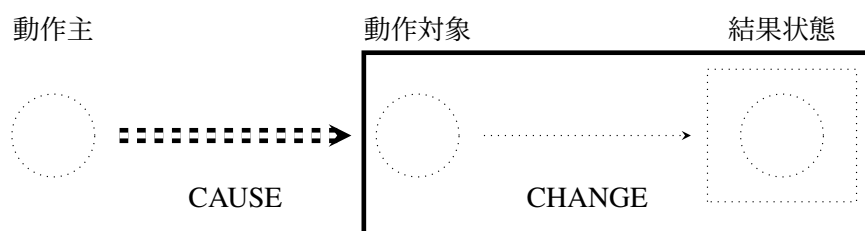
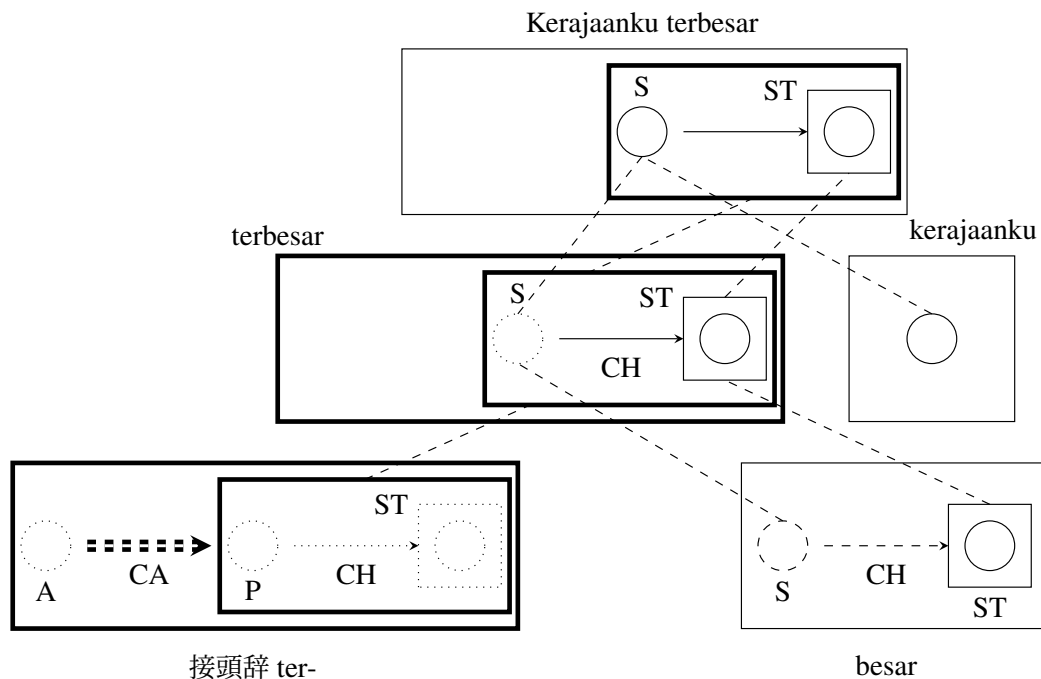


図 5.1 接頭辞 ter-の事象構造 (=図 3.12)

この図式を踏まえ、例えば ‘kerajaanku terbesar’ 「俺の王国は大きい (状態である)」 (cf. (5-3)) を考えると、接頭辞 ter-が「語基が表す状態への変化」を表していた時代の事象構造の合成は次の図 5.2 ように仮定できる。



A(Agent): 動作主, P(Patient): 動作対象, S(Subject): 単一項
 ST(State): 結果状態, CH(Change): 変化, CA(Cause): 働きかけ

図 5.2 ter-+besar の合成

ただし上の図では besar 「大きい」といった形容詞的意味を持つ語に関して、動词语基の場合に設定したような、参加者の分節と状態変化の矢印を事象構造に含めている。通常形容詞的意味を表す語は stative な性質を持っており、図式化の際は変化を表す矢印ではなく図 5.3 のように直線となる (cf. Langacker 2003: 14)。



図 5.3 形容詞の事象構造 (Langacker (2003: 14) を基に筆者が作成)

図 5.2 で矢印で表記する状態変化として示されているのは、「語基の表す状態への変化」の接頭辞 ter-が接続するのは変化を含意する局面形容詞に限られるという条件を反映している。局面形容詞という用語の「局面」とは Comrie (1976: 48) の “phase”⁷⁰に相当する (仲本 1999: 89)。例えば日本語の動詞であれば起動相などを表わす補助動詞を付けることによって主動詞が表すイベントの「局面」を切り取ることが出来る。

⁷⁰The term ‘phase’ will be used to refer to the situation at any given point of time in its duration. (Comrie 1976: 48)

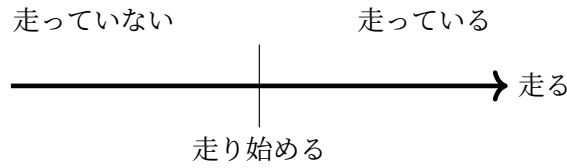


図 5.4 動詞の局面 (仲本 (1999: 89) を基に筆者が作成)

局面形容詞とは動詞の様な事態の進行のような概念を持ち、局面を切りとることが出来るものである。例えば「古い」と「新しい」は局面形容詞であり、以下のように定義される (仲本 1999: 90)。

- 古い: ものの状態として、事態がより推移した局面にあること
- 新しい: ものの状態として、事態があまり推移していない局面にあること

これを図示すると以下ようになる。

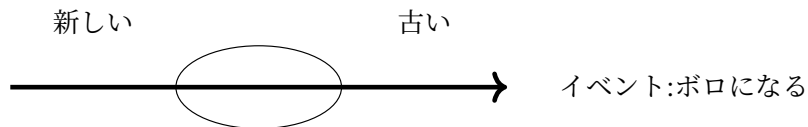


図 5.5 形容詞の局面 (仲本 (1999: 90) を基に筆者が作成)

つまり局面形容詞であるためには、時間軸に沿った連続的な状態変化が想定される必要がある。ここで表 5.2 の MCP の列を確認すると、多く用例が確認できる語は局面形容詞として解釈可能であることが分かる。例えば besar 「大きい」であれば、小さい状態から段々と大きくなるというイベントが想定できる。

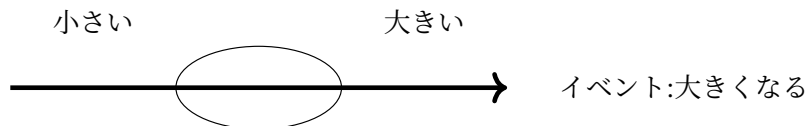


図 5.6 「大きくなる」のイベントとその局面

一方で出現数が少ないものは、局面形容詞として扱いにくいものが多い。例えば dalam 「中の」と luar 「外の」は内側と外側はある境界を境に相補的に存在するものであり、連続的な変化を設定できない。atas 「上の」と bawah 「下の」も同様である⁷¹。他にも muda 「若い」や baru 「新しい」も通常時間経過と共にその状態になることは通常想定しにくい。

以上の観察から、本節では状態変化の含意を表す標識として形容詞の意味を持つ語基の事象構造に破線矢印を追加した。この事象構造を基に接頭辞 ter-との合成が行われ、事態成立局面

⁷¹このような語は相補的対立語という (Cruse 1976; 鈴木 2005)。もちろんこうした定義は一对一で決まるものではない。dalam と luar で言えば、「内側の」と「外側の」と解釈することも可能でありその場合は連続的な変化を想定できるペアとして認められる。

が認知的に際立つことで動詞語基の場合の完了用法と同じように「語基の表す状態への変化」の意味が表出すると本稿では考える。

補足として、MALINDO Conc と MCP で件数が大きく違う語がある理由も、以上の議論から説明可能である。特に目立った差がみられるのは akhir 「終わりの」で MALINDO Conc では 4791 件あるにも関わらず、MCP では 8 件しか現れない。さらに年代をみると、すべて 1930 年代以降である。これは次のように推測できる。akhir は「終わりの」はそれ自体極値的な意味を含む特殊な語であり、少なくとも局面形容詞とはみなせない。語基の表す状態への変化を表す接頭辞 ter- は akhir にはつけることができないため、1900 年代以前は terakhir という語はあまり使われなかった。しかし他の語の影響で接頭辞 ter- に最上級の用法が生じてから大きく頻度が増えたと考えられる。同様に、baru も現在では頻度が高い単語の一つであるが、MCP では 0 件であるのは接頭辞 ter- の用法が変遷したためと言える⁷²。

5.3 接頭辞 ter- と paling の差異⁷³

前節では接頭辞 ter- が動詞を形成する場合との比較に焦点を当ててきたが、本章では最上級を表す接頭辞 ter- の類義形式である paling との差異について考察を行う。

5.3.1 先行研究

インドネシア語は最上級を形成する手段として paling と接頭辞 ter- という二つの形式を持つ。形式的には paling は英語の most のように副詞として後続する形容詞を修飾する一方で、接頭辞 ter- はここまでみてきたように拘束形態素であるという違いがある。

(5-9) *paling kaya / ter-kaya*
most rich / TER-rich
「最も裕福だ」

(Sneddon et al. 2010: 185)

両者について paling は形容詞に対して共起制限を持たないが、接頭辞 ter- は形式的制約が存在するとされる (Moeliono et al. 2017; Sneddon et al. 2010)。第一に最上級を表す接頭辞 ter- は基本的に二音節以上の語には付けることが出来ない場合が多い。(5-10a) は berani 「勇敢な」が三音節であるため接頭辞 ter- を使用することが出来ない。第二に、すでに接辞を伴っている語に接頭辞 ter- を付けることはできない⁷⁴。(5-10b) ではすでに ber という接辞を伴っているため接頭辞 ter- をさらに付加することが制限される。最後に、直接接続する語が二音節であっても全体で複合語的と認められる場合は接頭辞 ter- を用いることは出来ない。(5-10c) では、接頭辞 ter- が直接付与されている keras 「硬い」は音節数の面では問題がないものの、keras kepala と

⁷²akhir 「終わりの」がアラビア語からの借用であり、使用の浸透が他の語に比べて遅れたという可能性も考えられる。しかし同じように MCP で接頭辞 ter- との共起頻度が低い baru 「新しい」は Proto-Austronesian の *baqeRuh に由来する語であり (cf. Blust & Trussel 2013: <https://www.trussel2.com/ACD/introduction.htm>)、MCP においても記録されている中で最も古い年代である 1300 年代から使用が見られる。こうした語においても接頭辞 ter- との共起が見られないことから、本稿ではその理由に関して借用であることよりも意味的側面が大きいという立場をとる。

⁷³本節の一部は佐近 (2021) の内容に基づいている。

⁷⁴この制約も例外はあり、例えば termenarik [TER-MEN-引く] 「最も興味深い」のような例も存在する。

いう二語で「頑固な」という意味を形成する複合語としてみなされているため、接頭辞 *ter-*によって最上級表現を作ることができなくなっている。

- (5-10) a. *paling berani / *ter-berani*
 most brave / TER-brave
 「最も勇敢な」
- b. *paling ber-guna / *ter-ber-guna*
 most POSS-use / TER-POSS-use
 「最も有益な」
- c. *paling keras kepala / *ter-keras kepala*
 most hard head / TER-hard head
 「最も頑固な」 (Sneddon et al. 2010: 185)

このような形式的差異はあるものの、意味的には両形式は同一であるとされる。つまり(5-11)のように、形式的な制限がない場合は自由に交替が可能であると見做される。

- (5-11) a. *Tuti dan Budi memang tinggi, tetapi Edi yang ter-tinggi.*
 Tuti and Budi really tall but Edi REL TER-tall
 「Tuti と Budi は本当に背が高いが、Edi が最も高い」
- b. *Tuti dan Budi memang tinggi, tetapi Edi yang paling tinggi.*
 Tuti and Budi really tall but Edi REL most tall
 「Tuti と Budi は本当に背が高いが、Edi が最も高い」 (Tadmor 2018: 802)

しかし、音節の制限に違反しなければ両形式は等価であるという分析には問題点がある。本稿のテーマの一つである語基との関係という点から見ると、接頭辞 *ter-*の語基となる語と、*paling* と共起する語の傾向は大きく違うという点が指摘できる。5.2.1.1 節の表 5.1 をみると、接頭辞 *ter-*は MALINDO Conc において 107 種類の語との共起しか確認できない。つまり接頭辞 *ter-*は非常に使用が限られている形式ということが言える。一方で *paling* の共起語を検索すると以下の表 5.6 のようにまとめられる。表の作成にあっては *paling* を含む文を検索で抽出し、その後「最も」の意味にならないもの (*paling tidak* [most NEG] 「少なくとも」) や節を修飾するもの *paling saya suka-i* [most 1SG like-APPL] 「最も私が好きな」) を手作業で取り除いた。

表 5.6 *paling* の用法

	最上級用法	その他	計
type size	1286	17	1303
token size	10325	580	10905

ここから *paling* は 1286 種類の語と共起することが分かる。これは接頭辞 *ter-*の 107 件と比べると非常に多い数であり、より制限の少ない形式であると言える。さらに hapax(コーパス内に一度しか現れない語) を調べ、以下の計算式を用いることで、その文法形式がどの程度自由に使用できるかを測ることができる (Baayen & Lieber 1991: 809)。

$$pro = \frac{n_1}{N}$$

n_1 はコーパス内で一度しか現れない語の種類の数、 N はある構文の総数を表している。つまりある構文に含まれる語のうち、一度しか現れない語の割合を計算することによってどの程度新しい、非典型的な用法が見られるかを表している。接頭辞 *ter-* と *paling* の生産性の計算結果は以下のようにまとめられる。

表 5.7 接頭辞 *ter-* と *paling* の生産性

	総数	Hapax	生産性 (pro)
接頭辞 <i>ter-</i>	19207	22	0.0011
<i>paling</i>	10325	650	0.0629

表からわかるように、接頭辞 *ter-* は *paling* に比べて大きく使用が限られる最上級形式であると言える。しかし、先行研究の接頭辞 *ter-* と *paling* が意味的にも統語的にも等価であるという分析は、このような頻度の差が生じる理由を説明できない。そこでその差の要因を明らかにするため、本節では最上級形式と共起する語にどのような関係があるかについて、コーパスを用いた定量的調査を行う。5.3.2 節では、まず使用するデータと手法を提示し、その後各語が接頭辞 *ter-* と *paling* のどちらと結びつきやすいかについて調査結果を述べる。5.3.3 節ではこの結びつきやすさは前節で述べた歴史的背景が大きな要因の一つになっていることを主張する。

5.3.2 調査

本節では、接頭辞 *ter-* 及び *paling* と共起する語にどのような傾向がみられるかを調査する。以下では Distinct collexeme Analysis (cf. 4.2.1.3 節) を用いて、各語について接頭辞 *ter-* と *paling* のどちらと結びつきやすいかという基準によって分類を行う。その後、その分類の要因を検討する。調査対象は頻度を基に選出する。接頭辞 *ter-* は表 5.2 にある上位 30 語、*paling* も同じく MALINDO Conc 内で頻度順に上位 30 語を選出した (表 5.8、表 5.9⁷⁵)。

⁷⁵第 30 位に当たる語が 2 つ存在するため、全部で 31 件になっている。

表 5.8 接頭辞 ter-と共起する形容詞 (表 5.2 から MCP の数を除いたもの)

形容詞	出現数	形容詞	出現数
akhir 「終わりの」	5003	cepat 「早い」	153
baik 「良い」	3318	kaya 「裕福な」	131
besar 「大きい」	2924	panjang 「長い」	124
tinggi 「高い」	1558	depan 「前の」	110
baru 「新しい」	885	dalam 「深い」	104
penting 「重要な」	676	luar 「外の」	90
tua 「年長の」	622	indah 「きれいな」	86
dekat 「近い」	498	luas 「広い」	76
banyak 「多い」	447	belakang 「後ろの」	64
kecil 「小さい」	273	bawah 「下の」	62
rendah 「低い」	273	mahal 「高価な」	58
atas 「上の」	200	berat 「重い」	54
kuat 「強い」	196	sukses 「成功した」	53
muda 「若い」	176	lama 「(期間が) 長い」	52
buruk 「悪い」	159	jauh 「遠い」	52
kini 「現代的な」	158	hebat 「偉大な」	52

表 5.9 paling と共起する形容詞

形容詞	出現数	形容詞	出現数
banyak 「多い」	649	mudah 「簡単な」	109
penting 「重要な」	366	efektif 「効果的な」	102
sering 「頻繁に」	340	awal 「初めの」	101
terkenal 「有名な」	299	menonjol 「卓越した」	92
besar 「大きい」	242	sederhana 「単純な」	90
baik 「良い」	237	benar 「正しい」	85
umum 「一般的な」	236	rendah 「低い」	84
tinggi 「高い」	181	atas 「上の」	76
populer 「人気のある」	175	sukses 「成功した」	76
sedikit 「少しの」	166	depan 「前の」	70
utama 「中心の」	145	cepat 「早い」	67
kuat 「強い」	126	dalam 「深い」	65
lama 「(期間が) 長い」	123	lambat 「遅れて」	64
berpengaruh 「影響力のある」	116	parah 「(被害などが) 深刻な」	63
tepat 「適切な」	113	indah 「きれいな」	63
dekat 「近い」	111		

以上の語に対して、Distinct collexeme analysis を行い、それぞれの語が接頭辞 ter-と paling のどちらと結びつきやすいかを調査した。結果は以下のようにまとめられる⁷⁶。表 5.10 は接頭辞 ter-と結びつきやすい語、表 5.11 は paling と結びつきやすい語である。

表 5.10 接頭辞 ter-と結びつきやすい語

	p 値	OR
akhir 「終わりの」	0	(0.010, 0.018)
baik 「良い」	0	(0.099, 0.130)
besar 「大きい」	0	(0.117, 0.153)
tinggi 「高い」	1.23E-13	(0.173, 0.236)
baru 「新しい」	1.96E-13	(0.029, 0.068)
tua 「年長の」	1.18E-68	(0.094, 0.174)
dekat 「近い」	8.91E-20	(0.334, 0.505)
kecil 「小さい」	1.88E-11	(0.313, 0.547)
rendah 「低い」	3.22E-06	(0.445, 0.727)
atas 「上の」	1.09E-20	(0.543, 0.924)
muda 「若い」	5.38E-13	(0.173, 0.399)
buruk 「悪い」	2.94E-06	(0.320, 0.645)
kini 「現代的な」	3.18E-30	-
kaya 「裕福な」	1.88E-07	(0.230, 0.542)
panjang 「長い」	1.84E-08	(0.186, 0.479)
dalam 「深い」	1.85E-08	(0.186, 0.479)
luar 「外の」	7.21E-05	(0.239, 0.643)

⁷⁶この時、形態的理由で接頭辞 ter-と結びつかない terkenal, berpengaruh, menonjol は除外している。

表 5.11 paling と結びつきやすい語

	p 値	OR
banyak 「多い」	2.55E-62	(2.489, 3.183)
bawah 「下の」	3.75E-30	(1.195, 2.458)
sukses 「成功した」	4.23E-08	(1.886, 3.809)
lama 「(期間が) 長い」	1.79E-21	(3.209, 6.147)
populer 「人気のある」	3.51E-45	(5.984, 12.000)
parah 「(被害などが) 深刻な」	1.09E-09	(2.339, 5.439)
mudah 「簡単な」	1.09E-21	(3.635, 7.565)
sering 「頻繁に」	1.56E-12	(17.393, 39.245)
awal 「初めの」	7.58E-26	(5.056, 12.331)
umum 「一般的な」	3.33E-11	-
sedikit 「少しの」	4.37E-73	(38.908, 632.773)
tepat 「適切な」	1.79E-52	-
efektif 「効果的な」	2.02E-47	-
sederhana 「単純な」	3.89E-40	(23.529, 1212.239)
benar 「正しい」	1.28E-39	-

次節ではこのような分類からどのような傾向が見出されるかを検討する。

5.3.3 考察

本節では前節の Distinct collexeme analysis の結果を受け、接頭辞 ter-及び paling と結びつく語の特徴の考察を行う。5.2 節では通時的な観点から、動詞を形成する接頭辞 ter-と最上級を表す接頭辞 ter-の関係を考察した。ここでは最上級の接頭辞 ter-は完了を表す動詞派生の接頭辞 ter-から「語基の表す状態への変化」を表す用法を経て成立したと分析した。このような分析に基づくと、現在においても最上級を表す接頭辞 ter-と結びつきやすい語に関しては、「語基の状態への変化」を表していた通時的経緯が反映されているという仮説を立てることができる。そこで本節では現代インドネシア語における状態変化の接頭辞 meN-を付けられるか否かが、その語が接頭辞 ter-と結びつきやすいかどうかと対応すると考え、調査を行う。

インドネシア語の接頭辞 meN-は 1 章で説明した能動文標識として機能するほかに、形容詞的意味を表す語基に接続して状態変化を表すことができる。インドネシア語では Sneddon et al. (2010) が言及を行っているが、接続制限があるという事実の指摘に留まっており、具体的な分析や事例が挙げられていないため、マレー語の研究である Soh & Nomoto (2015: 158) を参考にする。例えば kuning 「黄色い」に接頭辞 meN-が付いた場合には「黄色くなる」という意味を表わす。

- (5-12) a. *Kertas ini kuning.*
 paper this yellow
 「この紙は黄色い」 (Soh & Nomoto 2015: 158)
- b. *Kertas ini menguning.*
 paper this MEN.yellow
 「この紙は黄色くなった」 (Soh & Nomoto 2015: 158)

このように状態変化の meN-を付けられる条件について、Soh & Nomoto (2015: 158) は段階的な変化⁷⁷を含意することをあげている。次の (5-13) のような例においては接頭辞 meN-を付加することはできない。これは信号機が変化するのが段階的ではなく瞬間的であり、接頭辞 meN-が表す段階的な変化という概念にそぐわないためである⁷⁸。

- (5-13) a. *Lampu isyarat hijau.*
 light traffic green
 「信号は緑です」 (Soh & Nomoto 2015: 158)
- b. **Lampu isyarat meng-hijau.*
 light traffic MEN-green
 「(意図した意味) 信号が緑になった」 (Soh & Nomoto 2015: 158)

このことは、状態変化を含意しない動詞に接頭辞 meN-を付けることができないことからわかる。(5-14) は *sampai* 「到達する」は変化を表さない到達動詞として捉えられるため接頭辞 meN-を付加できないことを表している。

- (5-14) a. *Bas sampai pada pukul 8.15 pagi.*
 bus arrive at o'clock 8:15 morning
 「バスは 8 時 15 分に到着した」 (Soh & Nomoto 2015: 165)
- b. **Bas menyampai pada pukul 8.15 pagi.*
 bus MEN-arrive at o'clock 8:15 morning
 「(意図した意味) バスは 8 時 15 分に到着した」 (Soh & Nomoto 2015: 166)

以上より、接頭辞 meN-の接続可否は語基の意味に関わると言うことが出来る。具体的には形容詞的な意味を持つ語基が段階的な変化を表す余地があるかどうかで、接頭辞 meN-の容認度が増減すると考えられる。ここで古典マレー語の接頭辞 *ter-*が「語基の表す状態への変化」と見做すことが出来、局面形容詞と結びつきやすいという前節の分析を踏まえると、現代マ

⁷⁷より正確には “meN- is compatible only with the non-minimal event interpretation of the degree achievement sentence.” (Soh & Nomoto 2015: 157) と述べる。

⁷⁸(5-13b) の場合、*menjadi* 「～になる」を用いれば容認可能である。

Lampu isyarat men-jadi hijau.
 light traffic MEN-become green
 「信号が緑になった」 (Soh & Nomoto 2015: 158)

これは *menjadi* 「～になる」が必ずしも段階的な変化を条件としないためである。

レー・インドネシア語における接頭辞 meN-とは古典マレー語における接頭辞 ter-と類似点があるといえる。つまり、最上級の接頭辞 ter-に古典マレー語の影響が反映されているとすれば、現代インドネシア語において接頭辞 meN-の付接可否と最上級の接頭辞 ter-に対する結びつきやすさは何らかの対応関係にあると予測される。より具体的には接頭辞 meN-を付加できるような語は優先的に接頭辞 ter-と結びつくため、接頭辞 ter-の場合は接頭辞 meN-を付加できる語、paling と結びつきやすい語は接頭辞 meN-を付加できない語が多くなると考えられる。

以下では実際に調査の過程を述べる。判断の際には KBBI の記述を参照し、記載がないもの及び KBBI の記述で状態変化として定義されていないものは状態変化の接頭辞 meN-を付加できないとする。以下の表では接頭辞 meN-を付けた形が容認されるかを meN-の列に示し、認められるものについてはその意味を記す。そして接頭辞 meN-が付いた形が存在し、かつ意味が状態変化を表すものには最終列に ‘yes’ を追加する。辞書に接頭辞 meN-が付いた形の記載がないもの、そして記載があった場合でも状態変化の意味ではないものには ‘no’ を追加する。

結果は表 5.12 と表 5.13 にまとめられる。2つの表を比較すると、接頭辞 ter-と結びつきやすい語は接頭辞 meN-によって状態変化を表わす語が形成されやすい一方で、paling と結びつきやすい語は接頭辞 meN-を付加しにくいことが分かる。

表 5.12 接頭辞 ter-と結びつきやすい語と接頭辞 meN-

語基	meN-	意味	
akhir 「終わりの」	*mengakhir	-	no
baik 「良い」	membaik	「良くなる」	yes
besar 「大きい」	membesar	「大きくなる」	yes
tinggi 「高い」	meninggi	「高くなる」	yes
baru 「新しい」	membaru	「再び現れる」	no
tua 「年長の」	menua	「年を取る」	yes
dekat 「近い」	mendekat	「近くなる」	yes
kecil 「小さい」	mengecil	「小さくなる」	yes
rendah 「低い」	merendah	「低くなる」	yes
atas 「上の」	mengatas	「上になる (上がる)」	yes
muda 「若い」	*memuda	-	no
buruk 「悪い」	memburuk	「悪くなる」	yes
kini 「現代的な」	*mengini	-	no
kaya 「裕福な」	*mengaya	-	no
panjang 「長い」	memanjang	「長くなる」	yes
dalam 「深い」	mendalam	「深くなる (潜る)」	yes
luar 「外の」	meluar	「外になる (飛び出る)」	yes

表 5.13 paling と結びつきやすい語と接頭辞 meN-

語基	meN-	意味	
banyak 「多い」	membanyak	「多くなる」	yes
bawah 「下の」	*membawah	-	no
sukses 「成功した」	*menyukses	-	no
lama 「(期間が) 長い」	*melama	-	no
populer 「人気のある」	*mempopuler	-	no
parah 「(被害などが) 深刻な」	*memarah	-	no
mudah 「簡単な」	*memudah	-	no
sering 「頻繁な」	menyering	「きつく結ぶ」	no
awal 「初めの」	*mengawal	-	no
umum 「一般的な」	*mengumum	-	no
sedikit 「少しの」	menyedikit	「少なくなる」	yes
tepat 「適切な」	menepat	「進む」	no
efektif 「効果的な」	*mengefektif	-	no
sederhana 「単純な」	*menyederhana	-	no
benar 「正しい」	membenar	「正直に言う」	no

なお、この結果は接頭辞 ter-は語基の意味に明確な特徴があるが、paling は意味的に中立な最上級形式であることを表している。接頭辞 ter-に関して、Distinct collexeme analysis によって結びつきやすいと判断された語は接頭辞 ter-との共起頻度の面でも上位に来るものが多い。一方で paling の方では結びつきやすいと判断された語は必ずしも paling の共起語として頻度が上位なわけではない。paling との共起頻度が高い語の中には、接頭辞 ter-と結びつきやすいと判断される語も含まれる。このことは「状態変化」の意味を含む語は優先的に接頭辞 ter-と結びつき、それ以外の語が paling と結びついているということの意味する。以上より本稿では、paling は状態変化を表さない語と結びつきやすいというよりは、状態変化を表す語でなくとも共起することが出来るという制限の少ない最上級形式であると考えられる。

最後に以下では一般的な傾向と合わないものについて考える。接頭辞 ter-の方では、akhir、baru、muda、kini、kaya が状態変化の接頭辞 meN-を付けることが出来ないと判断された。一方で、paling の方では banyak と sedikit が接頭辞 meN-を付けることが出来ると判断された。

まず接頭辞 ter-と結びつきやすい語について、その中で baru 「新しい」と muda 「若い」について考える。これらに接頭辞 meN-がつけられないと判断された理由は、今回根拠として規範的辞書を用いたためであると考えられる。つまり規範では段々と若くなったり、段々と新しくなることは意味的に想定できないため、辞書に記載されていないと言える。そのため、すべての人が容認するわけではないが、文脈を整えれば以下のように文を作ることが可能である。

- (5-15) *Dan rata-rata usia pasien semakin me-muda.*
 and flat-RED age patient increasingly MEN-young
 「そして、患者の平均年齢はますます若くなっている」 [Kompas]
- (5-16) *Selamat tahun baru semoga semua semakin mem-baru dan mem-baik.*
 safe year new hope all increasingly MEN-new and MEN-good
 「新年あけましておめでとうございます。みなさんがより新しく、より良くなりますように」 [Twitter]

ただし、akhir「終わりの」、kini「現代的な」、kaya「裕福な」の検討については今後の課題とする。akhir「終わりの」と kini「現代的な」については古典マレー語においてはそれぞれ8件と0件とほとんど用いられていなかったにも関わらず、現代インドネシア語では4791件と158件と非常に使用が増えている。つまり本稿の分析に則れば、接頭辞 ter-が最上級用法として用いられるようになってから何らかの理由で使用が増えたことになる。これらは akhir「終わり」や kini「今」と名詞的に使われることもあり、イディオム的に使われている可能性も高い。そのため今後はこれらの語についてイディオム研究的地からの詳細な検討が求められる (cf. Hilpert 2014)。次に kaya「裕福な」は古典マレー語において接頭辞 ter-が観察されるにも関わらず、現代インドネシア語の接頭辞 meN-が付いた形式は認められない。現段階では kaya「裕福な」が局面形容詞とは異なる評価形容詞であるためと考えている。例えば mudah「簡単な」などは簡単から難しくなるというように、イベント上に位置付けられ、段階的な状態変化を表すと考えることもできる。しかし「簡単な」という形容詞は一般的に主観的な判断に基づく評価形容詞と呼ばれる。「大きい」と「小さい」が前者を無標の形式として「大きさ」という一つ軸に位置付けられるのに対し、評価形容詞は有標無標によって区別されず「簡単な」と「難しい」が別の軸として存在すると分析される (波多野 2016)。加えてこうした評価形容詞は Langacker (2003: 15) が「賢い」という例を用いて説明しているように、イベントの進行の概念がないと指摘している。しかし評価形容詞として捉えるためには、同等比較や程度疑問文でのテストをネイティブスピーカーによるコンサルタント調査によって行う必要があり、今後の課題とする⁷⁹。

次に paling における banyak「多い」と sedikit「少ない」について考える。これらの語を見る前に、paling と結びつく語の頻度の表 5.9 を見ると、sering「頻繁に」など副詞が存在することが分かる。一方で接頭辞 ter-は基本的に形容詞として用いられる語である。ここから最上

⁷⁹Web 上では以下のような例も見つかるが、言葉遊び的な側面が強い。muda「若い」や baru「新しい」と比べても用例は著しく少なく、接頭辞 meN-の付加には明確な制限があることが窺える。

Semakin tua aku semakin ingin men-cari cara mengaya. bukan bergaya (...)
 increasingly old 1SG increasingly want AV-seeK method MEN.wealth NEG strengthen
 「年を取るにつれて、ますますお金持ちになる方法を探したくなる。力強くなるためじゃなくてね」

([Twitter POST] @NavitaUrliyati (2020 January 18, 9:56PM) 'Semakin tua aku semakin ingin mencari cara mengaya.bukan bergaya Pngen kayaaa pokoknya pngen banyak duit [emoji]'
 Retrieved from <https://twitter.com/NavitaUrliyati/status/1273600578807947264>

級表現を副詞的に使用する場合は *paling* を取りやすくなると考えられる。そこで *sering* 「頻繁に」の用例を見ると、*paling* の場合は「最も頻繁に」という副詞としての用法が主であることがわかる (5-17)。しかし接頭辞 *ter-* の場合は副詞的な用法も見られるものの、多くは形容詞的の用法である (5-18)⁸⁰。

(5-17) *Difusi yang paling sering terjadi adalah difusi molekuler.*
 diffusion REL most frequently happen COP diffusion molecule
 「もっと頻繁に起こる拡散は分子拡散である」
<http://amintabin.blogspot.com/2010/05/difusi-osmosis-imbibisi-dan.html>

(5-18) *Penyakit batuk ter-sering adalah infeksi oleh berbagai virus*
 disease cough TER-frequently COP infection by several virus
misalnya virus salesma (...)
 for.example virus common.cold
 「咳の最も頻繁にみられる原因は種々のウイルス、例えば一般的な風邪による感染である」
<http://artikel-kesehatan-arafat.blogspot.com/>

ここから、本節では接頭辞 *ter-* は主に使用が名詞修飾に限定される一方で、*paling* は副詞的の用法も可能であると考えられる。*banyak* 「多い」と *sedikit* 「少ない」の議論に戻れば、これらの語は意味的には接頭辞 *ter-* と結びつきやすいと予測されるが、今回用いたコーパスで副詞として使われることが多かったため *paling* と結びつくという結果が得られたと考えられる。

banyak 「多い」と *sedikit* 「少ない」の用法ごとの頻度は表 5.14 としてまとめられる。

表 5.14 形容詞的用法と副詞的用法の頻度

	ter-		paling	
	形容詞的用法	副詞用法	形容詞的用法	副詞用法
<i>banyak</i> 「多い」	422	23	139	510
<i>sedikit</i> 「少しの」	2	0	26	140

表 5.14 を見ると、*sedikit* は副詞的用法で用いることが多く、*paling* の使用率が高い。*banyak* は接頭辞 *ter-* も *paling* も多く出現しているが、形容詞的用法は接頭辞 *ter-*、副詞的用法は *paling* と使い分けが行われている。以下はその用例である。

⁸⁰形容詞の用法として名詞修飾的用法の他に限定用法が考えられるが、ここでは名詞修飾的用法に限った議論を行っている。これは使用したデータ内の最上級の叙述用法の頻度が著しく低かったためである。例えば *awal* 「初めの」の最上級形式が叙述用法で使用されているものは接頭辞 *ter-* では 0 件、*paling* でも 1 件であった。そのため本章では名詞修飾的用法のみに注目することとした。名詞修飾的用法と叙述用法の差異、そして叙述用法がコーパスに現れる頻度が少ない理由については今後の課題とする。

(5-19) *Inzaghi juga adalah pencetak gol ter-banyak ke#enam untuk Italia dengan 25*
Inzaghi also COP scorer goal TER-many sixth to Italia with 25
gol=nya.

goal=3

「Inzaghi もまた 25 ゴールでイタリア代表として 6 番目に多い得点をした選手です」

http://id.wikipedia.org/wiki/Filippo_Inzaghi

(5-20) *Kata yang paling banyak di-cari di Kamus Online Merriam-Webster pada*
word REL most many UV-seeK in dictionary online Merriam-Webster on
tahun itu adalah integritas.

year that COP integrity

「その年オンライン版 Merriam-Webster の辞書で最も多く検索された語は “integrity”
である」

<http://alkitab.sabda.org/illustration.php?topic=35>

(5-21) *Golf adalah permainan luar ruang (...) yang berlomba me-masukkan bola*
Golf COP game outside room REL compete AV-put.into ball
ke dalam lubang-lubang yang ada di lapangan dengan jumlah pukulan

to inside hole-RED REL exist in field with amount stroke

ter-sedikit mungkin.

TER-a.little maybe

「ゴルフは可能な限り最も少ない打数でフィールドにある穴にボールを入れるのを競
う屋外競技です」

<http://id.wikipedia.org/wiki/Golf>

(5-22) *Ia ber-usia paling sedikit 7 tahun lebih muda daripada Yusuf.*

3SG POSS-age most a.little 7 year more young than Yusuf

「彼は少なくとも Yusuf より 7 歳は若い」

<http://id.wikipedia.org/wiki/Benyamin>

以上より、意味的には接頭辞 *ter-*と結びつきやすいと予測されるにも関わらず、*paling* と結
びつきやすいという結果が出た語に関しては、副詞的に用いられる場合が多いため、その分
paling の頻度が増えたことにより統計的結びつきが増加したと結論付けられる。

5.4 5 章のまとめと今後の課題

本章では、接頭辞 *ter-*の最上級用法について考察を行った。

5.2 節では、最上級の接頭辞 *ter-*と動詞を派生する接頭辞 *ter-*との関係を見た。これまで最上
級の接頭辞 *ter-*は、接頭辞 *ter-*が動詞語基に付いた場合に生じる完了の意味からの類推で生じ
たとされてきた。しかしこの分析は調査対象となる資料に限られており、具体的な事例が少な
いという問題点があった。そこで通時コーパスである MCP を用いて、通時的に接頭辞 *ter-*の

用法変化を捉えることを試みた。要点は次の2点である。まず1700年代までは接頭辞 *ter-*が形容詞の意味を持つ語基に付いた場合は「語基が表す状態への変化」を表す標識であり、最上級の用法が卓越するのは1800年代以降であることを明らかにした。第二に、一点目の発見から、接頭辞 *ter-*は「完了」語基の表す状態への変化「最上級」という変化を経たことを主張した。具体的には、古典マレー語に関して図5.2のように形容詞の意味を持つ語基の事象構造を設定し、動詞語基の場合と同じように合成が行われていたと仮定する。これにより、動詞語基の場合に完了の意味が出るのと同じような形で、語基の表す状態への変化の意味が表出したと考える。そしてこの用法の接頭辞 *ter-*の多くが *segala*「すべて」、*lain*「他の」などと間接的に最上級の意味を表す形で用いられたため、結果として最上級を表す形式として定着したと主張した。

5.3節では最上級を表す接頭辞 *ter-*と類義形式である *paling* の差異を考えた。先行研究では、接頭辞 *ter-*と *paling* は音韻的制限の他には差異がないとされてきた。しかしコーパスデータを参照すると両者は語基の種類や出現頻度という点で大きく異なる。そこで接頭辞 *ter-*と *paling* がどのような語と結びつきやすいかを分類し、そうした分類ができる要因を通時的变化の側面から考察した。具体的には5.2.1.1節で主張した「語基の表す状態への変化」が影響していると想定し、それと似た状態変化を表す機能を持つ現代インドネシア語における接頭辞 *meN-*の接続可否との対応関係を調査した。結果として、接頭辞 *meN-*を付けられる語基は *paling* ではなく、接頭辞 *ter-*と結びつきやすくなることが分かった。この結果は現代インドネシア語における最上級の接頭辞 *ter-*は、段階的な状態変化を表す語と結びつきやすくなることを意味する。以上から接頭辞 *ter-*と語基の結びつきやすさには古典マレー語における「語基の表す状態への変化」という用法が影響していることが示唆された。

今後の課題は3点ある。第一に、本章では古典マレー語における接頭辞 *ter-*の事象構造を現代インドネシア語の接頭辞 *ter-*を借用して説明した。この分析は動詞語基における接頭辞 *ter-*に関して、古典マレー語と現代インドネシア語では認められる意味に大きな差がないと観察されることから (cf. Chung 2011)、概ね妥当な分析と考えられる。しかし用法の頻度や、マレー語には接頭辞 *ter-*が能動文の形成が生産的であるという統語的な違いも存在するため、今後は古典マレー語における接頭辞 *ter-*のスキーマを設定することで、より正確な分析になると考えられる。

第二に、接頭辞 *meN-*の研究が必要になる。特に古典マレー語に関して、状態変化の接頭辞 *meN-*と語基の表す状態への変化を表す接頭辞 *ter-*の差異が問題となる。古典マレー語においても、状態変化を表す接頭辞 *meN-*は生産的に使われているため、本稿の分析に基づけば似たような意味を表す接辞が二つ存在することになる。そのため、その差異を明らかにする必要がある。現段階では本章の分析に則れば、接頭辞 *ter-*は語基の表す状態への変化の結果を、接頭辞 *meN-*はその変化のプロセスを表すと区別されていると考えている (cf. Soh & Nomoto 2015)。

第三に、複合的な要因を考慮する必要がある。本章では語基の意味と用法にのみ注目したが、他にも頻度などが影響する可能性がある。例えば英語の比較級について、*more* と *-er* のどちらの形式も取ることが出来る形容詞は頻度が高いほど *more* よりも形態的な *-er* を使うことが多くなることが指摘されている (Cheung & Zhang 2016: 566; Hilpert 2008: 402; Quirk et al. 1985:

463)。例えば *easy* は頻度が高く、*-er* という形態的操作によって比較級が形成されることが多いが、*choosy* という形容詞は頻度が低く *more* が選択されることが多い。さらに、Hilpert (2008: 397) は *more* と *-er* の使い分けには非比較級用法との相対的頻度が影響すると主張している。これは非比較級と比べた際に比較級の相対的頻度が高い形容詞は比較級との結びつきが強いと考えられるため、比較級を作るときに *-er* の方が用いられやすくなるという予測を行うものである。例えば、*able* は全体の頻度としては 30,434 と大きいのが、比較級での頻度は 176 であり、相対的頻度は 0.0058 となる。一方、*humble* は全体の頻度は 806 と少ないものの、比較級での頻度は 92 であり、相対的頻度は 0.1141 となる。実際に比較用法全体における *-er* 比較級の割合を見てみると、*able* では 2.8%、*humble* では 72.8% となる。ここから比較級の相対的生起頻度が高ければ形態的操作による比較級表現である *-er* の選択が多くなると言える。このように最上級表現の選択に寄与すると考えられる要因は多くある。例えば Hilpert (2008) は、例えば以下の (5-23) について表 5.15 のようなタグ付けを行い、ロジスティック回帰分析を用いて英語の比較級形式である *more* と *-er* の選択要因を調査している。

(5-23) *That's far more likely now.* (Hilpert 2008: 404)

表 5.15 英語の比較級形式選択におけるタグ付けの一例 (Hilpert 2008: 404)

Category periphrastic	Number of syllables	2
Final element(s)		/li/
Final stress		no
Initial stress of right collocate		yes
Number of Morphemes		1
to-infinitive complementation		no
Attributive or predicative usage		predicative
A following <i>than</i>		no
Premodification		yes
Positive frequency		23,667
Comparative/positive ratio		0.137

しかし現時点ではインドネシア語の最上級表現にこの手法を適用することが難しい。これはタグ付けにおける技術的な問題があるためである。Hilpert (2008) の調査では BNC コーパスが使用されている。このコーパスは品詞や文法的特徴のタグで検索することが可能になっており、半自動で調査データにタグを付与することが出来る。しかしインドネシア語においてはタグ付けコーパスが整備されていないため、手作業で行う必要がある。そのため今後は代表性を損なわないように使用コーパスの範囲を狭め、タグ付けをすることで様々な要因を考慮した分析を行うことが求められる。

同じ様に *Distinct collexeme analysis* の際にもより精緻な分析のためには技術的な問題がある。例えば *terutama* という語は「特に」という非最上級表現として用いられることが多いイディオムの表現として捉えられることが多い一方で、「最も中心的な」という最上級用法も存

在する。本来であれば后者の最上級用法は調査対象に含めるべきである。しかし今回の調査では非最上級用法が主要な用法であり、すべてを対象外としても調査結果に大きな変化は出ないと判断し、対象から除外した。しかし、より正確な結果を出すためには *terutama* をはじめとする多義語の分類を手作業で行い、最上級用法のみを調査対象に含める必要がある。

6 結論

本稿では2章から5章の分析・主張をまとめ、全体の結果を踏まえた示唆を述べる。そのうえで今後の展望を示す。

6.1 各章のまとめ

2章では接頭辞 ter-が付与する意味の整理を行った。従来より接頭辞 ter-が付与する意味については様々な分類が行われてきたが、明確な定義を行わないまま分類がなされることが多かった。そこで本稿では各先行研究を整理し、分類上の問題点を指摘した。そしてコーパスの実例を検討することで認知的際立ちの位置を基準に分類を行い(表 6.1)、その下位により詳細な意味を設定することで図 6.1 のような体系を主張した。

表 6.1 接頭辞 ter-の各意味とその性質 (=表 2.7)

認知的際立ちの位置	
完了	事態
非意図	非意図性
潜在系可能	動作対象
判断	動作対象 (動詞の制約あり)

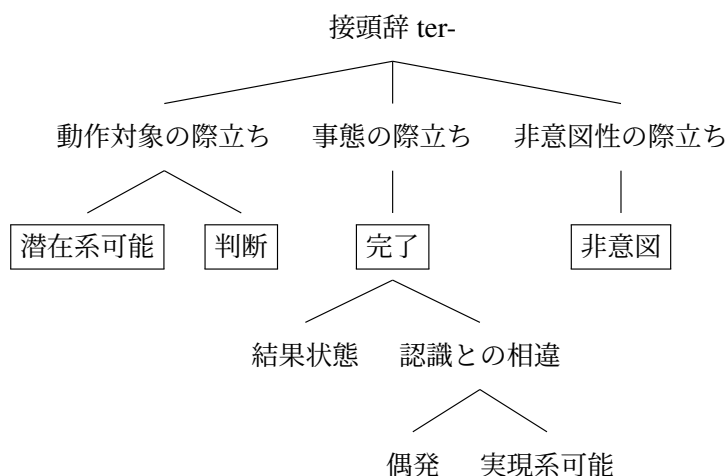


図 6.1 接頭辞 ter-の用法の体系 (=図 2.3)

こうした分類により、先行研究で明確な分類をすることができていなかった用例に対して、例外的な定義の拡張などを行うことなく説明を与えることができるようになった。特筆すべきは以下の2点である。まず認識との相違用法を新たに設定し完了の下位に位置付け、動作の非意図性を表す「非意図」の用法と明確に区別した。これにより従来の定義では非意図用法に分

類されてしまうが、必ずしも動作の非意図性を表しているわけでは無い例を説明できるようになった。第二に、多くの先行研究では可能用法とは動作主がある行為を遂行する能力の有無について述べるものと記述されていた。しかし例文を観察することで、このような潜在的能力を表わすのは否定文と総称文に限られ、多くの場合は困難を伴って意図に沿った事態が成立したという実現系可能であることを明らかにした。

3章では、2章で設定した分類を基にそれぞれの意味がどのような過程で表出しているか(3.3節)、構造変化の有無の要因(3.4節)、接尾辞-kanとの関係(3.5節)の3点を明らかにした。議論の前提として、3.2節では接頭辞 ter-が「なる」的表現であるという先行研究の分析を基に以下のように定義し、事象構造の面から図 6.2 のようにモデル化した。

ある動作主が存在し、動作対象に働きかけを行い、その働きかけによって動作対象が何らかの状態に変化するという事態を基に、その動作対象に生じる事態つまり事態成立局面、または行為の非意図性が認知的際立ちを帯びる。

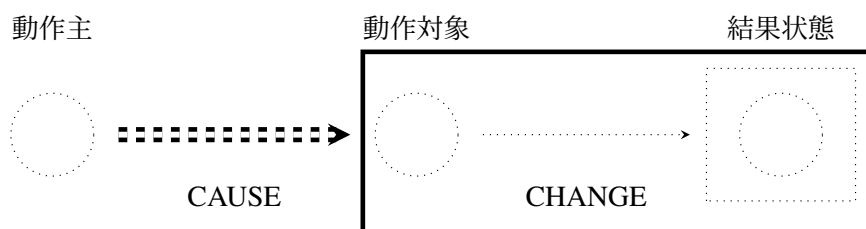


図 6.2 接頭辞 ter-の事象構造 (=図 3.12)

そして 3.3 節ではこの事象構造が語基の持つ事象構造と合成され、その合成過程や認知的際立ちの変化によって表出する意味が変化すると主張した。このように事象構造を用いて説明する利点として、複数の解釈が可能である場合の理由や自動詞語基において意味表出が限定される理由を説明できる(3.3.2.3節)。例えば多くの文では動作主が非意図的な動作をしたという解釈と、必ずしも非意図的ではない解釈の両方が可能である。

(6-1) *Kaki=nya ter-injak oleh Sato.*

foot=3 TER-step by Sato

「彼の足を Sato は間違っって踏んでしまった(彼の足は Sato によって踏まれた)」

(=(3-10))

本稿ではこの(6-1)のような例においては接頭辞 ter-が「動作の非意図性」か「事態成立局面」のどちらかに認知的際立ちを与える機能を持ち、文脈によってその際立ちが変化するために解釈も変化すると述べた。認知的際立ちが動作の非意図性に置かれる場合は非意図用法、事態成立局面に与えられる場合は、動作の非意図性の読み込みが義務的ではない認識との相違用法となる。次に自動詞語基の意味の制限に関して、自動詞語基では参加者が動作対象へ働きかけを行うような動作主ではないため、接頭辞 ter-との合成の際には事態成立局面の中に合成される。そのため動作主の非意図性の概念は最終的な合成結果に反映されない。結果として動作主の非意図性の読み込みが必要な意図成就用法には解釈できず、完了用法の中でも結果状態及

び偶発の意味のみが表出すると主張した。3.4 節では、構造変化についても事象構造の考え方をを用いることで統一的な説明が可能であることを示した。具体的には、他動詞語基の場合は基本的に認知的際立ちの位置が変化し、結果として構造変化が起こる。一方で自動詞語基や一部の働きかけが認められにくい他動詞語基は認知的際立ちの変化が起こらず、構造変化が起こらないと主張した。これにより従来語彙依存で特殊例と捉えられてきた構造変化を引き起こさない語基の場合を事象構造の考え方をを用いた一般的規則により説明できることを示した。3.5 節でも同様に事象構造の考え方が接尾辞-kan との関係性を捉えるうえで有益であることを主張した。つまり接尾辞-kan の有無を比較した場合、接尾辞-kan によって他動詞化や働きかけの意味が追加される場合は構造変化を引き起こし、項構造や意味に影響を与えない場合は構造変化を引き起こさない。以上より 3 章では総じて、事象構造の考え方を設定することでこれまで例外的に考えられてきた現象を統一的に説明できることを示した点が特徴である。

4 章では、接頭辞 ter-受身文における動作主標示方法について考察を行った。インドネシア語の受身文において、動作主は主に英語の前置詞 by に当たる oleh か、それが省略された形である zero 標示によって導かれる。ただし先行研究ではこうした選択があるのはもう一つの受身接辞である接頭辞 di-の場合に限られ、接頭辞 ter-の場合は省略できない、つまり oleh 標示しか使うことが出来ないと分析されてきた。しかし実際の用例を観察すると、接頭辞 ter-の場合でも zero 標示を取るものが多く見られる。ここから本章では実際にどの程度 oleh 標示と zero 標示が使用されているかを記述するとともに、様々な要因を考慮して、一般化線形混合モデルによって分析を行った。考慮した変数は参加者の有生性・動作主/動作対象の語数・動詞が持つ働きかけの意味であり、分析の結果以下のことを主張した。

- 全体として、動詞が持つ「動作主から動作対象への働きかけ」が強ければ oleh を取りやすく、弱ければ zero を取りやすくなる。
- 動作主が有生物である場合、無生物の場合よりも oleh を取りやすい。
- 動作対象が有生物である場合、無生物の場合よりも zero を取りやすい。
- 他構文との意味的曖昧性を排除するために oleh と zero が使い分けられる場合がある。
- 動作主の語数が多いほど、oleh を取りやすくなる。
- 動詞と共起する動作主項の名詞の種類への偏りが選択に影響を与える。

この結果は少なくとも接頭辞 ter-による受身文では、oleh 標示と zero 標示は自由に交替できる形式ではなく、それぞれが意味を持った異なる標示であることを示している。

最後に 5 章では最上級を表す接頭辞 ter-について考察を行った。先行研究では最上級の接頭辞 ter-は動詞語基の場合に生じる完了の意味からの類推で生じたとされてきた。しかしこの分析は調査対象となる資料に限られており、具体的な事例が少ないという問題点があった。そこで通時コーパスを用いて用例を検討することで、1700 年代までは接頭辞 ter-が形容詞的意味を持つ語基に付いた場合は「語基が表す状態への変化」を表す標識として機能し、最上級の用法が卓越するのは 1800 年代以降であることを明らかにした。加えて接頭辞 ter-派生形容詞が segala 「すべての」や lainnya 「他の」などを伴う名詞句との比較の文脈で現れやすいことを指摘した。こうした発見から、接頭辞 ter-は「完了」語基の表す状態への変化「最上級」という

変化を経たことを提案した。つまり元来接頭辞 *ter-*は「語基の表す状態への変化」という意味であったが、「すべての」や「他の」という意味を表す語と共に「すべてのものより～である」という実質的な最上級の意味で使われることが多くなった結果、現在の最上級の用法としての用法が定着したという主張である。この分析の提案の利点は二つある。一つは語基の表す状態への変化という意味と考えることで、動詞語基に付いた場合の完了と同じように意味表出を考えることが出来るようになる点である。もう一つは類義形式である *paling* との差異を説明できる点である。先行研究では、接頭辞 *ter-*と *paling* は音韻的制限の他には差異がないとされてきた。しかしコーパスデータを参照すると両者は語基の種類や出現頻度という点で大きく異なる。本稿では、その理由を 5.2.1.1 節で主張した「語基の表す状態への変化」が影響していると主張した。これは古典マレー語に認めた「語基の表す状態への変化」と似た機能を持つ接頭辞 *meN-*の付接可否と接頭辞 *ter-*との結びつきやすさに対応がみられるためである。具体的には接頭辞 *meN-*を付けられる語基は *paling* ではなく、接頭辞 *ter-*と結びつきやすくなることが分かった。この結果は接頭辞 *ter-*と語基の結びつきやすさには古典マレー語における「語基の表す状態への変化」という用法が影響し、接続する語基の種類が狭まったことを示唆すると考える。

6.2 本研究の意義と今後の展望

ここまで各章の結果を個別にまとめたが、全体として本稿は以下の点で意義があると考えられる。第一に、これまで記述の少なかったインドネシア語の接頭辞 *ter-*について、事例に基づいた分析を行った点である。これにより、例えば非意図的行為とは解釈できない自動詞語基についた接頭辞 *ter-*文の存在や、動作主を導く前置詞 *oleh* が省略される例といったこれまで見逃されてきた接頭辞 *ter-*に関する現象が明らかになった。

第二に、抽象的スキーマを設定するとともに語基といった細部の独自の性質を認めることで、これまで独立した説明が与えられてきた現象を統一的に説明可能にした点が挙げられる。接頭辞 *ter-*には本稿で言及したように様々な機能がある。先行研究では動詞語基に付く場合の複数の意味について「なる」的表現の形成といった説明によって一般化が図られてきたが、本稿ではある接辞を使用するためにはそうした抽象的なスキーマのような概念を設定するだけでは不十分であり、より詳細な知識を想定する必要があるという点を主張した。こうした考え方は用法基盤モデルを基にした多義語研究で盛んに議論がなされている。用法基盤モデルではルールとリストの共存を許すという説明がなされる(平沢 2019: 40–44)。これは言語知識は実際の用例からボトムアップ的に積み上げられていくものであり、その過程で抽象的なルールのようなものが形成され、語や文法標識のスキーマとして意識される場合でも、個々の事例の知識は残存し続けるという考え方である。例えば3章では「なる」的表現の形成というスキーマに加え、語基が他動詞であるかどうか、働きかけが含意されるかどうかという語基個別の情報を考慮することで、意味表出や構造変化の傾向や条件を説明できることを示した。5章ではこうしたスキーマと語基との関係で接頭辞 *ter-*を捉えるという分析が、独立した機能として扱われてきた最上級用法にも一貫した説明を与えることが出来ることを示した。さらに4章の動作主標示においてもこうしたルールとリストの共存という考え方が反映されている。上で述べた

動作主標示に影響を与える要因のうち、動詞の働きかけの含意、動作主/動作対象の有生性、動作主の語数といった要因はいわば接頭辞 *ter-*の受身文における動作主の標示の一般的な傾向である。対して動作主の名詞の種類や他構文との曖昧性解消といった要因は語基となる動詞固有の細部の知識であり、動作主標示においても抽象的知識と具体的知識の両方が重要であることがわかる。インドネシア語には被害受身及び名詞化の機能を持つ *ke-an* といった多義的接辞が多く存在するため、本稿で用いたアプローチを応用することでインドネシア語の接辞研究が発展することが見込まれる。

第三に、語基の意味を恣意的に定めることがかえってインドネシア語の接頭辞 *ter-*の分析をする際に有効であることを示唆する点が挙げられる。つまり本稿では話者のその語に対する知識・経験や印象によって使用が変化すると考える。例えば、3.5 節で触れた *terpikirkan* 「考えられる」という語は多くが受身文となるが、(6-2) のように能動文で使用されている例も多い。

(6-2) *Di mimpi=nya, dia ter-pikir-kan pula alur wisata=nya harus di-mulai*
in drean=3 3SG TER-think-KAN also channel tour=3 should UV-start
dari mana dan berakhir di tempat mana.
 from where and end in place where

「夢の中で、彼は旅行の工程はどこから始まりどこで終わるべきかをふと考えた」

[detiknews]

3.4 節や 3.5.1.2 節では、語基が動作主から動作対象への働きかけを含意するような他動詞語基の場合に構造変化が起き、そうでない自動詞語基などでは構造変化が起これないと述べた。この分析に則ると *terpikirkan* の語基 *pikirkan* は他動詞であるため、基本的に構造変化が起これると予測される。しかし上のような思考者を主語にもつ構造変化が起これない例もある。本稿ではこうした逸脱について、動詞が二つ意味を持っているといった二つの派生に対して別の説明を与えるのではなく、語根が潜在的に持つ意味のうち、話者がどの側面を重視するかによって派生が変化すると考える。つまり話者が *pikirkan* を典型的な他動詞であると考えているならば構造変化が起きる。一方で、(3-28) など他動詞でも働きかけが低いと考えられるものと同じ様に、話者が *pikirkan* が他動詞であるにも関わらず動作対象への働きかけが低いと感じていれば、構造変化が起これないと言える。このように考えることで、図 3.1 のような容認度の階層の理解も容易になる。例えば *bunuh* 「殺す」はどんな話者でも明確に動作主から動作対象への働きかけを感じられるため構造変化がほぼすべての場合で起きる。一方で接触動詞や上述の *pikirkan* などの思考動詞は捉え方が話者によって変動する可能性が大きく、結果として構造変化の有無に揺れが生じる。以上より、本稿では語基の意味は語基が潜在的に有するある程度広がりのある意味の中から、当該の派生において話者が恣意的に決めるものであると考える。

今後の展望としては、各章のまとめの節で述べた問題を踏まえると大きく以下の 3 点にまとめられる。第一に、本稿で示した結果の検証を行うことが求められる。5 章では接頭辞 *meN-*と接頭辞 *ter-*の語基に対するふるまいの対応関係を示したが、実際に接頭辞 *meN-*を付加できることが接頭辞 *ter-*との結びつきやすさに影響を与えているかどうかを調べるためには実験などを行う必要がある。例えば、ある存在しない語を複数設定し 2 つのグループに分け、グループ A の語は接頭辞 *meN-*を付けて状態変化を表す例として提示し、グループ B の語は接頭辞

meN-を付けない形で提示する。その後接頭辞 ter-と paling がどちらでも使えるような文章を作り、どちらの最上級表現を産出するか調べることで、本稿の提案を検証することができる。

第二に本稿は「接頭辞 ter-を付けることができない語基」の分析を行うことができなかった。コーパスを基にした実例ベースでの分析という研究手法に依るものである。本稿ではコーパスにある実例を根拠に意味分類や傾向の分析などを行い、コンサルタントによる容認度調査は補助的にしか用いなかった。そのためどのような文が不適格かについては分析することが難しい。例えば接頭辞 ter-は特に自動詞語基や接尾辞を伴う場合に付けることができない場合が多い。自動詞においては例えば datang 「来る」や pergi 「行く」のような動詞は接頭辞 ter-を付けることができないことがわかっている (Tampubolon 1983)。他にも tenggelam 「沈む」や tiba 「到着する」のような単語にも接頭辞 ter-の付加に制限がある。こうした接頭辞 ter-を付けることができない語基の特徴は何か、そしてなぜ付加することができないかの考察が今後の課題となる。同じように接尾辞-kan を伴った jatuhkan 「落とす」は意味的には接頭辞 ter が付加できると予測されるものの、実際には付けることができない。今後はこのような接頭辞 ter-を付加できない単語に注目し、そのような予測を可能にする分析へと発展させていく。

第三に、本稿では特に動詞語基の場合に関して他の接頭辞との比較や関係の検討は行わなかった。5章で触れた状態変化を表す接頭辞 meN-はその一例である。本稿では現代インドネシア語における状態変化を表す接頭辞 meN-を扱ったが、この接頭辞は古典マレー語にも存在する。そのため古典マレー語において状態変化の接頭辞 meN-と語基の表す状態への変化の接頭辞 ter-がどのように区別されていたかを明らかにする必要がある。他にも接頭辞 di-や接辞 ke-an の研究への示唆される点がある。4章で接頭辞 ter-による受身文では oleh と zero 型が異なる意味を表すことを明らかにした。これは接頭辞 di-の場合にも同じような区別が存在する可能性を示唆する。先行研究では主に統語的特徴から接頭辞 di-の受身文における oleh と zero 型が特定の条件下で自由交代可能な形式であるとされているが、本稿のような意味やその他複合的な要因を考慮した場合には異なる結果が得られる可能性がある。接辞 ke-an は被害受身を形成する機能を持つ。そのため接頭辞 ter-とは基本的に区別される接辞である。しかし接辞 ke-an は知覚動詞について2章で述べたような判断用法の文を作る。この時、接頭辞 ter-による判断用法との差異はこれまで検討されていない。今後はこのような対照研究を行うことで他の接辞の分析はもちろん、相対的に接頭辞 ter-の特徴を記述することが求められる。

使用コード

4 章

Python によるデンドログラムの作成

```
1  #必要なツールのインストール
2  from gensim.models import word2vec
3  from gensim.models import KeyedVectors
4  import pandas as pd
5  from matplotlib import pyplot as plt
6  import matplotlib.cm as cm
7  from matplotlib.font_manager import FontProperties
8  from scipy.spatial.distance import pdist
9  from scipy.cluster.hierarchy import linkage, dendrogram
10 plt.style.use('seaborn-whitegrid')
11 #XXX というファイル名で保存したテキストデータをロード
12 docs=word2vec.LineSentence("XXX.txt")
13 model=word2vec.Word2Vec(docs,
14     size=200,
15     min_count=3,
16     window=5,
17     iter=3)
18 #YYY という名前でベクトル数値を保存。次章ではこのモデルをロードする。
19 model.save("YYY.model")
20 #対象とする語の指定  [#] が付いているものが zero と結びつくもの
21 #zero と結びつくものについて調査する場合は#の有無を反転させる。
22 def draw_similar_word_dendrogram():
23 words = ["terinspirasi","terlihat","terganggu","terbunuh",
24     "terdengar","terbentuk","terdorong","terasa",
25     "terdesak","terkesan","tertekan","terhubung",
26     "tergantung","tersusun","terbukti"]
27 #words = ["terpengaruh","tertutup","tertangkap","terikat",
28     "tersentuh","terancam","terjangkau","tertarik",
29     "terinfeksi","terbawa","terpisah","terhambat",
30     "terbatas","terbakar","terjebak","terluka",
31     "terpilih","tercemar","tercatat","terbuka"]
32 vectors= model.wv[words]
```



```

33 df=pd.DataFrame(vectors, index=words)
34 row_clusters=linkage(pdist(df,metric='euclidean')
35     ,method='ward')
36 dendrogram(row_clusters, labels=words, orientation='right')
37 plt.show()
38 draw_similar_word_dendrogram()

```

Rによる一般化線形混合モデル

```

1  #ファイルの読み込み
2  ter=read.delim(file.choose(), row.names=NULL)
3  #ダミー変数に変更
4  ter$agent=ifelse(ter$agent=="oleh", 1, 0)
5  #表 4.15 の計算
6  ter.glmer1 <- glmer(agent~animate+wordcount+work+object+
7      animate*object+ (1+animate|verb),
8      data = ter, family = binomial)
9  #表 4.15 の出力
10 summary(ter.glmer1)
11 #表 4.16 の計算
12 ter.glmer2 <- glmer(agent~animate+wordcount+object+
13     work+ (1+animate|verb), data = ter, family = binomial)
14 #表 4.16 の出力
15 summary(ter.glmer2)
16 #AIC によるモデルの比較
17 anova(ter.glmer1,ter.glmer2)
18 #多重共線性の確認
19 car::vif(ter.glmer2)
20 #動詞毎の切片と係数の産出
21 coef=coef(ter.glmer2)

```

出典一覧

1 章

(1-16) ‘198 Anak di Jabar Terinfeksi Covid-19, Mayoritas Tertular dari Orangtua’

<https://www.kompas.id/baca/nusantara/2020/07/07/198-anak-di-jabar-terinfeksi-covid-19-mayoritas-tertular-dari-orangtua/>

最終閲覧日 2021/10/1

2 章

(2-19) ‘Pembahasan One Piece 1009: Satu Yonko Tersingkir dari Pertempuran!’

<https://duniaku.idntimes.com/anime-manga/one-piece/fudo/pembahasan-one-piece-1009-satu-yonko-tersingkir-dari-pertempuran>

最終閲覧日 2021/9/9

(2-21) [Brainly Post]

<https://brainly.co.id/tugas/1897136>

最終閲覧日 2021/7/30

(2-27) ‘Kepakkanlah Sayap-sayapmu’

<http://sipisangkuning.blogspot.com/2013/05/normal-0-false-false-false-en-us-x-none.html>

最終閲覧日 2021/8/3

(2-28) ‘Mantan Penyerang Chelsea Bandingkan Aksi Diving Salah dengan Ronaldo’

<https://bola.okezone.com/read/2019/01/21/45/2007516/mantan-penyerang-chelsea-bandingkan-aksi-diving-salah-dengan-ronaldo>

最終閲覧日 2021/8/2

(2-32) ‘Jarvis Soal Rossi: Kecelakaan Tak Bisa Dihindari di Motocross’

<https://www.cnnindonesia.com/olahraga/20170909175009-156-240634/jarvis-soal-rossi-kecelakaan-tak-bisa-dihindari-di-motocross>

最終閲覧日 2020/8/26

(2-49) ‘Akun IG John Lennon Unggah Lirik Lagu ‘Imagine’ dalam Bahasa Indonesia dan Jawa, Netizen: Bahasa Sunda brow’

<https://jurnalsoreang.pikiran-rakyat.com/hiburan/pr-1012580785/akun-ig-john-lennon-unggah-lirik-lagu-imagine-dalam-bahasa-indonesia-dan-jawa-netizen-bahasa-sunda-brow>

最終閲覧日 2022/6/11

(2-51b) ‘Sergio Pellissier akan Gantung Sepatu pada Akhir Musim’

<https://www.republika.co.id/berita/prh198438/sergio-pellissier-akan-gantung-sepatu-pada-akhir-musim>

最終閲覧日 2021/7/13

(2-55) '17 Manfaat blueberry untuk kesehatan dan kecantikan'

<https://www.brilio.net/kesehatan/17-manfaat-blueberry-untuk-kesehatan-dan-kecantikan-2107278.html>

最終閲覧日 2021/7/30

3 章

(3-32a) 'Dianggap Sakral dan Erat dengan Mitologi Yunani, Inilah Bunga Myrtle yang Selalu Ada di Royal Wedding'

<https://www.grid.id/read/04956352/dianggap-sakral-dan-erat-dengan-mitologi-yunani-inilah-bunga-myrtle-yang-selalu-ada-di-royal-wedding?page=all>

最終閲覧日 2021/8/10

(3-32b) 'Ultah Ke-18, Alcaraz Jumpa Nadal di Madrid Terbuka'

<https://sport.bisnis.com/read/20210504/60/1390234/ultah-ke-18-alcaraz-jumpa-nadal-di-madrid-terbuka>.

最終閲覧日 2021/8/10

(3-40) 'Heboh, Tentara Kim Jong Un Ditangkap Gegara Menari Ala BTS!'

<https://www.cnbcindonesia.com/lifestyle/20211130105334-33-295418/heboh-tentara-kim-jong-un-ditangkap-gegara-menari-ala-bts>

最終閲覧日 2022/3/9

(3-41) 'TPNPB-OPM Ngaku Tembak Mati dan Tebas Wajah Prajurit TNI Pakai Parang'

<https://www.viva.co.id/militer/militer-indonesia/1303441-tpnpb-opm-ngaku-tembak-mati-dan-tebas-wajah-prajurit-tni-pakai-parang>

最終閲覧日 2022/3/9

(3-45) 'Sui Hiok Minta Pemda Bantu Kebutuhan Warga Lingga di Perantauan'

<https://kumparan.com/batamnews/sui-hiok-minta-pemda-bantu-kebutuhan-warga-lingga-di-perantauan-1tK7PLFoYdE/full>

最終閲覧日 2020/5/8

(3-46) '20 Artis Ikut Ramaikan Bazaar Rakernas PAN'

<https://news.detik.com/berita/d-575694/20-artis-ikut-ramaikan-bazaar-rakernas-pan>

最終閲覧日 2022/8/24

(3-47) 'Jadi Pengamat Saham, Dahlan Iskan Analisis IPO Aramco'

<https://www.cnbcindonesia.com/market/20191107194259-17-113605/jadi-pengamat-saham-dahlan-iskan-analisis-ipo-aramco/2>

最終閲覧日 2020/5/8

(3-48) '5 Fakta Menarik Jonatan Christie Pernah Disorot Media Asal China'

<https://www.inews.id/sport/all-sport/5-fakta-menarik-jonatan-christie-pernah-disorot-media-asal->

china

最終閲覧日 2020/5/15

(3-49) ‘Warisan Wallace yang Mencerahkan Anak Muda’

<https://kompas.id/baca/utama/2019/11/27/warisan-wallace-yang-mencerahkan-anak-muda/>

最終閲覧日 2020/5/1

(3-50) ‘Ria Ricis Akhirnya Lulus Kuliah Setelah 7 Tahun Berjuang’

<https://www.jawapos.com/entertainment/infotainment/28/11/2020/ria-ricis-akhirnya-lulus-kuliah-setelah-7-tahun-berjuang/>

最終閲覧日 2022/3/29

4 章

(4-52) ‘6 Lagu Pamungkas Terpopuler Sepanjang Masa, Ada To The Bone dan Sorry’

<https://www.viva.co.id/showbiz/musik/1411049-6-lagu-pamungkas-terpopuler-sepanjang-masa-ada-to-the-bone-dan-sorry>

最終閲覧日 2021/10/12

(4-54) ‘Lakukan Ini untuk Hindari Kerugian Saat Main Saham’

<https://money.kompas.com/read/2019/04/29/105312926/lakukan-ini-untuk-hindari-kerugian-saat-main-saham?page=all>

最終閲覧日 2022/8/30

5 章

(5-15) ‘Hobi Makan "Junk Food" di Usia Remaja Berisiko Batu Empedu’

[https://health.kompas.com/read/2016/12/29/140700523/hobi.makan.junk.food.di.usia.remaja.berisiko.batu.empedu.](https://health.kompas.com/read/2016/12/29/140700523/hobi.makan.junk.food.di.usia.remaja.berisiko.batu.empedu)

最終閲覧日 2022/6/17

(5-16) [Twitter Post] @renosk8punk (1:19AM, 2 January, 2017) ‘Selamat tahun baru semoga semua semakin mem-baru dan mem-baik.’

Retrieved from <https://twitter.com/renosk8punk/status/815593177298022400>

最終閲覧日 2022/6/17

6 章

(6-2) ‘Risma Akan Jadikan Rumah Kelahiran Bung Karno Jadi Museum’

[https://news.detik.com/berita-jawa-timur/d-5137360/risma-akan-jadikan-rumah-kelahiran-bung-karno-jadi-museum.](https://news.detik.com/berita-jawa-timur/d-5137360/risma-akan-jadikan-rumah-kelahiran-bung-karno-jadi-museum)

最終閲覧日 2022/6/18

参考文献

- Alexiadou, Artemis & Elena Anagnostopoulou (2008) "Structuring participles." in Chang, Charles B & Hannah J Haynie eds. *Proceedings of the 26th West Coast Conference on Formal Linguistics*. pp. 33–41.
- Arka, I Wayan & Christopher D Manning (1998) "Voice and grammatical relations in Indonesian: A new perspective." in *Proceedings of the LFG98 Conference*.
- Arka, I Wayan & Malcolm Ross eds. (2005) *The many faces of Austronesian voice systems: Some new empirical studies*. Canberra. Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- Arka, I Wayan, Mary Dalrymple, Meladel Mistica, Suriel Mofu, Avery Andrews, Jane Simpson, Miriam Butt, & Tracy Holloway King (2009) "A linguistic and computational morphosyntactic analysis for the applicative-*i* in Indonesian." in *Proceedings of the LFG 2009 conference*. pp. 85–105.
- Baayen, Harald & Rochelle Lieber (1991) "Productivity and English derivation: A corpus-based study." *Linguistics*. 29 (5). pp. 801–844.
- Blust, Robert & Stephen Trussel (2013) "The Austronesian comparative dictionary: a work in progress." *Oceanic Linguistics*. 52 (2). pp. 493–523.
- Cheung, Lawrence & Longtu Zhang (2016) "Determinants of the synthetic–analytic variation across English comparatives and superlatives." 20 (3). pp. 559–583.
- Chung, Siaw-Fong (2011) "Uses of *ter-* in Malay: A corpus-based study." *Journal of Pragmatics*. 43 (3). pp. 799–813.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon, & Yanti (2008) "Voice in Malay/Indonesian." *Lingua*. 118 (10). pp. 1500–1553.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge. Cambridge university press.
- Croft, William (1991) *Syntactic categories and grammatical relations: The cognitive organization of information*. Chicago. University of Chicago Press.
- Cruse, D Alan (1976) "Three classes of antonym in English." *Lingua*. 38 (3-4). pp. 281–292.
- Denistia, Karlina, Elnaz Shafaei-Bajestan, & R Harald Baayen (2021) "Exploring semantic differences between the Indonesian prefixes PE- and PEN- using a vector space model." *Corpus Linguistics and Linguistic Theory*.
- Dixon, Robert MW & Alexandra Y Aikhenvald (2000) *Changing valency: Case studies in transitivity*. Cambridge. Cambridge University Press Cambridge.
- Embick, David (2004) "On the structure of resultative participles in English." *Linguistic Inquiry*. 35 (3). pp. 355–392.
- Goddard, Cliff (2003) "Dynamic *ter-* in Malay (Bahasa Melayu): A study in grammatical poly-

- semy.” *Studies in Language*. 27 (2). pp. 287–322.
- Goldhahn, Dirk, Thomas Eckart, & Uwe Quasthoff (2012) “Building large monolingual dictionaries at the Leipzig Corpora Collection: From 100 to 200 languages.” in *LREC*. 29. pp. 31–43.
- Grangé, Philippe (2013) “Aspect in Indonesian: free markers versus bound markers.” *NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia*. 55. pp. 57–79.
- Gries, Stefan Th (2013) *Statistics for Linguistics with R second edition*. Berlin / New York. De Gruyter Mouton.
- (2015) “The most under-used statistical method in corpus linguistics: multi-level (and mixed-effects) models.” *Corpora*. 10 (1). pp. 95–125.
- Gries, Stefan Th, Beate Hampe, & Doris Schönefeld (2005) “Converging evidence: Bringing together experimental and corpus data on the association of verbs and constructions.” *Cognitive Linguistics*. 16 (4). pp. 635–676.
- Gries, Stefan Th & Anatol Stefanowitsch (2004) “Extending collocation analysis A corpus-based perspective on ‘alternations’.” *International Journal of Corpus Linguistics*. 9 (1). pp. 97–129.
- (2010) “Cluster Analysis and the Identification of Collexeme Classes.” in Rice, Sally & John Newman eds. *Empirical and experimental methods in cognitive/functional research*. pp. 73–90. Stanford. CSLI Publications.
- 原真由子・森山幹弘・降幡正志 (2017) 「インドネシア語基本文法の記述: 教材作成のための共同研究からの報告」『インドネシア言語と文化』 23. pp.7–30.
- 長谷川明香・西村義樹 (2019) 「再帰と受身の有標性」森雄一・西村義樹・長谷川明香 (編)『認知言語学を紡ぐ』. pp.275–298. 東京: くろしお出版.
- 波多野満雄 (2016) 「比較表現における形容詞について」『白山英米文学』 (41). pp.21–35.
- Heine, Bernd & Tania Kuteva (2002) *World lexicon of grammaticalization*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Hilpert, Martin (2008) “The English comparative – language structure and language use1.” *English Language & Linguistics*. 12 (3). pp. 395–417.
- (2014) *Construction grammar and its application to English*. Edinburgh. Edinburgh University Press.
- Himmelman, Nikolaus P (2006) “How to miss a paradigm or two: Multifunctional *ma-* in Tagalog.” in Ameka, Felix K, Alan Dench, & Nicholas Evans eds. *Catching language: The standing challenge of grammar writing*. pp. 487–526. Berlin/NewYork. De Gruyter Mouton.
- 平沢慎也 (2019) 『前置詞 *by* の意味を知っているとは何を知っていることなのか: 多義論から多使用論へ』. 東京: くろしお出版.
- Hopper, Paul J & Sandra A Thompson (1980) “Transitivity in grammar and discourse.” *Language*. 56 (2). pp. 251–299.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』. 東京: 大修館書店.
- Imamura, Satoshi (2022) “A corpus analysis of two *by*-passives in Japanese from the viewpoint of

- information structure.” *Lingua*. 272.
- 石井基広 (2017) 『Rによるテキストマイニング入門 第2版』. 東京: 森北出版株式会社.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (2010) 『言語研究のための統計入門』. 東京: くろしお出版.
- 鄭宇鎮 (2020) 「韓国語-eci 構文における可能用法の意味記述-その使役的性質の観点から-」『東京大学言語学論集』 42. pp.87-104.
- Jeoung, Helen (2020) “P-drop across languages of Java: A field report.” *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia*. 69. pp. 27-41.
- Jeoung, Helen & Alison Biggs (2017) “Variants of Indonesian prepositions as intra-speaker variability at PF.” *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*. 23 (1). pp. 83-92.
- Kaswanti Purwo, Bambang (1988) “Voice in Indonesian: A discourse study.” in Shibatani, Masayoshi ed. *Passive and voice*. 16. pp. 195-241. Amsterdam. John Benjamins.
- 川端一光・岩間徳兼・鈴木雅之 (2018) 『Rによる多変量解析入門データ分析の実践と理論』. 東京: オーム社.
- 川村大 (2012) 『ラル形述語文の研究』. 東京: くろしお出版.
- 小林雄一郎 (2014) 「コーパス言語学研究における頻度差の検定と効果量」『外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会報告論集』 6. pp.85-95.
- 河野亘 (2013) 「英語知覚動詞構文の証拠性用法に関する認知文法的考察」『言語科学論集』 19. pp.27-49.
- Krafft, Jennifer (2010) “Multiple *ter-* prefixes in Malay.” in *Proceedings of the 14th International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics*. pp. 1-2.
- Kratzer, Angelika (2000) “Building statives.” in *Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 26. pp. 385-399.
- Kridalaksana, Harimurti (1989) *Pembentukan kata dalam bahasa Indonesia*. Jakarta. Gramedia.
- Kroeger, Paul (2007) “Morphosyntactic vs. morphosemantic functions of Indonesian *-kan*.” in Zaenen, Annie, Jane Simpson, Tracy Holloway King, Jane Grimshaw, Joan Maling, & Chris Manning eds. *Architectures, rules, and preferences: Variations on themes of Joan Bresnan*. pp. 229-251. Stanford. CSLI Publications.
- 久野暉 (1986) 「受身文の意味-黒田説の再批判-」『日本語学』 2. pp.70-87.
- Kuno, Susumu (2004) “14 Empathy and direct discourse perspectives.” in Horn, Laurence R & Gregory Ward eds. *The handbook of pragmatics*. pp. 315-343. Hoboken. Wiley-Blackwell.
- 舟田京子・高殿良博・左藤正範 (編) (2018) 『プログレッシブインドネシア語辞典』. 東京: 小学館.
- Lakoff, George (2008) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago. University of Chicago press.
- Landauer, Thomas K & Susan T Dumais (1997) “A solution to Plato’s problem: The latent semantic analysis theory of acquisition, induction, and representation of knowledge.” *Psychological Review*. 104 (2). pp. 211-240.
- Langacker, Ronald W (1990) *Concept, image and symbol. The cognitive basis of grammar*.

- Berlin/New York. Walter de Gruyter.
- (2003) “Constructions in cognitive grammar.” *English Linguistics*. 20 (1). pp. 41–83.
- Leech, Geoffrey N (2014) *Meaning and the English verb*. London. Routledge.
- Leow, Yoon Chin (2001) 「マレーシア語の TER-受身構文に見られる間接受身性: 日本語との対照を通して」『広島大学大学院教育学研究科紀要』 50. pp.291–299.
- 町田章・木原恵美子・小熊猛・井筒勝信 (2022) 『認知日本語学第 3 巻 認知統語論』. 東京: くろしお出版.
- Malchukov, Andrej (2006) “Transitivity parameters and transitivity alternations.” in Kulikov, Leonid, Andrej Malchukov, & Peter de Swart eds. *Case, valency and transitivity*. pp. 329–357. Amsterdam. John Benjamins.
- McGregor, William B (2013) “Optionality in grammar and language use.” *Linguistics*. 51 (6). pp. 1147–1204.
- Merchant, Jason (2001) *The syntax of silence: Sluicing, islands, and the theory of ellipsis*. Oxford: Oxford University Press.
- Mikolov, Tomáš, Wen-tau Yih, & Geoffrey Zweig (2013) “Linguistic regularities in continuous space word representations.” in *Proceedings of the 2013 conference of the north American chapter of the association for computational linguistics: Human language technologies*. pp. 746–751.
- Mikolov, Tomas, Ilya Sutskever, Kai Chen, Greg S Corrado, & Jeff Dean (2013a) “Distributed representations of words and phrases and their compositionality.” in *Advances in neural information processing systems*. pp. 3111–3119.
- Mikolov, Tomas, Kai Chen, Greg Corrado, & Jeffrey Dean (2013b) “Efficient estimation of word representations in vector space.” *arXiv preprint arXiv:1301.3781*.
- 水本篤・竹内理 (2010) 「効果量と検定力分析入門-統計的検定を正しく使うために-」『より良い外国語教育研究のための方法外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会 2010 年度報告論集』. pp.43–73.
- Moeliono, Anton M, Hans Lapoliwa, Hasan Alwi, Sry Sattya Tjatur, Wisnu Sasangka, & Sugiyono (2017) *Tata bahasa baku Bahasa Indonesia edisi keempat*. Jakarta. Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa.
- 森雄一 (1997) 「受動文の動作主マーカーとして用いられるカラについて」『茨城大学人文学部紀要人文学科論集』 30. pp.83–99.
- 守田貴弘 (2013) 「意味的分類の科学的妥当性」『言語研究』 144. pp.29–53.
- 長屋尚典 (2019) 「意図と知識」森雄一・西村義樹・長谷川明香 (編) 『認知言語学を拓く』. pp.23–43. 東京: くろしお出版.
- 仲本康一郎 (1999) 「時間認知を反映する形容詞-形容詞の局面的解釈をめぐって-」『言語科学論集』 5. pp.89–99.
- 中野景介 (1997) 「知覚動詞の意味拡大について」『近代英語研究』 13. pp.37–50.
- 西尾泰和 (2014) 『word2vec による自然言語処理』. 東京: オライリー・ジャパン.

- 野元裕樹 (2011) 「マレーシア語のモダリティの概要」『語学研究所論集』 16. pp.158–178.
- Nomoto, Hiroki (2021) “Bare passive agent hierarchy.” in *The Proceedings of AFLA 27*. pp. 57–70.
- Nomoto, Hiroki, Shiro Akasegawa, & Asako Shiohara (2018) “Reclassification of the Leipzig Corpora Collection for Malay and Indonesian.” *NUSA*. 65. pp. 47–66.
- Nomoto, Hiroki & Abd Wahab Kartini (2011) “Konstruksi pasif *kena* dalam Bahasa Indonesia: Perbandingan dengan Bahasa Melayu.” *Linguistik Indonesia*. 29 (2). pp. 111–131.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』. 東京: 東京大学出版会.
- 尾上圭介 (2003) 「ラレル文の多義性と主語 (特集ヴォイスを捉える視点-照らし合う意味と統語)」『言語』 32(4). pp.34–41.
- Oshima, David Y (2003) “Out of control: A unified analysis of Japanese passive constructions.” in *The Proceedings of the Ninth International Conference on HPSG*. pp. 245–265.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, & Jan Svartvik (1985) *A comprehensive English grammar*. London/New York. Longman.
- Rajeg, Gede Primahadi Wijaya, Karlina Denistia, & Simon Musgrave (2019) “Vector Space Models and the usage patterns of Indonesian denominal verbs: A case study of verbs with *meN-*, *meN-/i-kan*, and *meN-/i* affixes.” *NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia*. 67 (1). pp. 35–76.
- Rizki, Andini (2014) 「事態連鎖から見たインドネシア語における *ter-*構文の働き-受動から外れる「結果状態」を表す *ter-*構文」博士論文. 名古屋大学大学院.
- ルシアナワティ (1998) 「インドネシア語における種々の受身構文について-日本語とインドネシア語の対照研究-」『STUDIUM』 25. pp.91–109.
- 佐近優太 (2019) 「インドネシア語の接頭辞 *ter+* 知覚動詞 *terlihat* について-機能の記述と認知的アプローチによる連続性の考察-」. 修士論文. 東京外国語大学大学院.
- (2020a) 「インドネシア語における接頭辞 *ter-*と共起する接尾辞-*kan* について」『日本言語学会第 160 回大会予稿集』. pp.272–278.
- (2020b) 「インドネシア語における非意図性を表す「接頭辞 *ter+* 自動詞」」『インドネシア言語と文化』 26. pp.57–74.
- (2020c) 「事態認知モデルを用いたインドネシア語の接頭辞 *ter-*派生動詞の考察」『日本認知言語学会論文集 Papers from the National Conference of the Japanese Cognitive Linguistics Association』 20. pp.31–43.
- (2021) 「インドネシア語の最上級について」『インドネシア言語と文化』 27. pp.1–17.
- 佐々木重次 (1982) 「インドネシア語における態の問題」『講座日本語学 10 外国語との対照 1』. pp.292–304. 東京: 明治書院.
- シャイク オマー モハメッド・山崎あずさ (1997) 『オマー・アズーのマレー語講座』. 東京: めこん.
- 志波彩子 (2020) 「受身・可能とその周辺構文によるヴォイス体系の対照言語学的考察—古代日本語と現代スペイン語—」『言語研究』 158. pp.91–116.

- Shibatani, Masayoshi (1985) “Passives and related constructions: A prototype analysis.” *Language*. 61 (4). pp. 821–848.
- Shiohara, Asako (2012) “Applicatives in Standard Indonesian.” *Senri Ethnological Studies*. 77. pp. 59–76.
- Shiohara, Asako, Yuta Sakon, & Hiroki Nomoto (2019) “Discourse functions of the two non-active voices in Indonesian: Based on the web corpus data in MALINDO Conc.” *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia*. 67. pp. 67–101.
- 志澤剛 (2016) 「英語の Mirativity: get 受動文の考察」『群馬県立女子大学紀要』 37. pp.19–30.
- 正保勇 (1990) 「インドネシア語の定名詞句と不定名詞句: 日本語との比較を通して観た」『研究報告集= Occasional Papers』 11. pp.131–168.
- Sneddon, James Neil, K Alexander Adelaar, Dwi Djenar, & Michael Ewing (2010) *Indonesian: A comprehensive grammar 2nd edition*. London. Routledge.
- Soh, Hooi Ling (1994) “External arguments and *ter-* in Malay.” in Koskinen, P ed. *Proceeding of the 1994 Annual Conference of the Canadian Linguistic Association*. pp. 39–50.
- (2009) “Speaker presupposition and Mandarin Chinese sentence-final *-le*: A unified analysis of the “change of state” and the “contrary to expectation” reading.” *Natural Language & Linguistic Theory*. 27 (3). pp. 623–657.
- Soh, Hooi Ling & Hiroki Nomoto (2015) “Degree achievements, telicity and the verbal prefix *meN-* in Malay.” *Journal of Linguistics*. 51 (1). pp. 147–183.
- Stefanowitsch, Anatol & Stefan Th Gries (2003) “Collostructions: Investigating the interaction of words and constructions.” *International Journal of Corpus Linguistics*. 8 (2). pp. 209–243.
- (2009) “Corpora and grammar.” in Lüdeling, Anke & Merja Kytö eds. *Corpus Linguistics: An International Handbook*. pp. 933–952. Berlin/New York. De Gruyter Mouton.
- 鈴木亨 (2005) 「結果構文における推移と境界性の起源」『山形大学人文学部研究年報』 2. pp.1–29.
- 田畑智司 (2004) 「コーパス言語学のための多変量解析入門」『英語コーパス学会第 24 回大会ワークショップ配布資料』.
- Tadmor, Uri (2018) “Malay-Indonesian 1.” in *The world’s major languages*. pp. 809–837. London. Routledge.
- 高木睦美 (2018) 「作成動詞の意味分析」『東京女子大学言語文化研究 (Studies in Language and Culture)』 27. pp.114–136.
- Tampubolon, D P (1983) *Verbal affixations in Indonesian: A semantic exploration*. Canberra. Dept. of Linguistics, Research School of Pacific Studies, Australian National University.
- 谷口一美 (1994) 「中間構文の認知的分析」『Osaka Literary Review』 33. pp.1–16.
- (2004) 「行為連鎖と構文 I」中村芳久 (編)『認知文法論 II シリーズ認知言語学入門第 5 巻』. pp.53–87. 東京: 大修館書店.
- (2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』. 東京: ひつじ書房.
- テイラージョン R・瀬戸賢一 (2008) 『認知文法のエッセンス』. 東京: 大修館書店.

- Valenzuela, Elena, Michael Iverson, Jason Rothman, Kristina Borg, Diego Pascual y Cabo, & Manuela Pinto (2015) “Eventive and stative passives and copula selection in Canadian and American Heritage Speaker Spanish.” *New Perspectives on the Study of Ser and Estar*. pp. 267–292.
- Verhaar, John W M (1984) “Affixation in contemporary Indonesian.” *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia*. 18. pp. 1–26.
- 巨理陽一 (2003) 「英語の「否定」の意味体系の指導に向けて: いわゆる「否定辞繰り上げ」の取り扱い」『教授学の探究』 20. pp.109–117.
- Wee, Hock Ann Lionel (1995) “Cognition in grammar: The problem of verbal prefixation in Malay.” Ph.D. dissertation. University of California at Berkeley.
- Winstedt, Richard Olof (1913) *Malay grammar*. Oxford. Clarendon Press.
- Wolff, John U (1986) *Formal Indonesian*. New York. Cornell University Press.
- Wouk, Fay (1980) “The *ter*-prefix in Indonesian: A semantic analysis.” in *Austronesian studies: Papers from the second Eastern Conference on Austronesian Languages*. pp. 81–87.
- 吉原一紘・平蔵徳高 (2014) 「クラスター分析の概要」『Journal of Surface Analysis』 21(1). pp.10–17.
- 湯浅章子 (2002) 「日本語、インドネシア語における態と他動性」. 博士論文. 神戸大学.
- 由本陽子 (2011) 『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』. 東京: 開拓社.
- Zúñiga, Fernando & Seppo Kittilä (2019) *Grammatical voice*. Cambridge. Cambridge University Press.

謝辞

本稿の執筆にあたり、多くの方々からのご助言、ご協力を賜りました。心よりお礼申し上げます。

主任指導教員である降幡正志先生には、大変長い間様々な場面でお世話になりました。現在の私のインドネシア語の文法に関する知識はすべて先生のご指導の上に成り立つものです。学部時代の授業に始まり、学部のゼミ時代から毎週必ずインドネシア語の興味深い表現について議論したことが、博士論文の完成に繋がっています。

副指導教員である塩原朝子先生には主に博士課程からお世話になりましたが、本当にたくさんのご指導頂きました。特に、要旨の書き方や章立ての考え方など、博士課程1年次にも関わらず十分な知識がなかった私に辛抱強く教えて頂きました。加えて、研究そのものの他にも色々気にかけてくださり、学会や研究会などに積極的に誘っていただいたおかげで、たくさん経験を積むことができました。同じく副指導教員である大谷直輝先生からは認知言語学について多くのことを学びました。インドネシア語はご専門でないにも関わらず、修士課程の頃より細かな研究のご相談にのって頂いたこと、改めて感謝申し上げます。

また、博士論文の審査を引き受けていただいた野元裕樹先生には指導教員でないにも関わらず、細部のインドネシア語のご指摘から、大きな章ごとの展開に至るまで毎週欠かさず原稿にコメントを頂きました。博士論文が無事完成に至ったのは、先生のご尽力によるところが非常に大きいです。同じく審査を引き受けていただいた東京大学の長屋尚典先生には、本稿の一部をゼミで発表する機会を設けて頂いたり、勉強会の情報を頂いたりとお世話になりました。学部時代に言語学のおもしろさを学んだ先生に、このような形でお力を貸して頂いたこと、大変嬉しく思います。

最後に本研究はコーパスに基づいた研究ではありますが、一部は作例を用いたり、容認性判断に基づく分析を行っています。その際にはインドネシア語ネイティブの多くの方にご協力頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。

なお、本研究は一部 JSPS 科研費 21J12422 の助成を受けたものです。